巻頭図版１　馬場南遺跡第２次

調査地遠景（北東から）

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
平成20年度発掘調査報告

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、昭和59年度から住宅･都市整備公団（昭和59～平成11年度）、都市基盤整備公団（平成12～15年度）、独立行政法人都市再生機構（平成16～20年度）の各機関の依頼を受けて継続して実施している。平成20年度は、馬場南遺跡、鹿背山瓦窯跡、木津城山遺跡･木津城跡の３地点、４遺跡について実施した。なお、平成20年度をもって、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査をすべて終了した。

馬場南遺跡は、京都府木津川市大字木津小字糠田に所在する。遺物散布地として周知されていたため、平成19年度に試掘調査（第１次調査）を実施したところ、奈良時代中期から後期にかけての遺構・遺物を検出した。(注1) この結果を受けて、平成20年度に本調査（第２次調査）を実施し、後述するように、多大な成果を得ることができた。調査期間は、平成20年４月21日から平成21年２月19日までである。調査成果が多岐にわたるため、出土遺物についての記者発表を平成20年10月22日に行い、現地説明会は平成21年１月17日に実施した。調査面積は2,000㎡である。

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市大字鹿背山小字須原に所在する。平成18年度に試掘調査（第１次調査）を実施し、その結果を受けて平成19年度に本調査（第２次調査）を実施した。(注2) 平成20年度は、第２次調査の成果に伴う現地説明会を実施するとともに、第２次調査で検出した古墓ＳＸ18の完掘作業を行った。調査期間は、平成20年11月21日から平成21年１月28日までで、期間中の平成20年12月21日に現地説明会を実施した。

木津城山遺跡・木津城跡は、京都府木津川市大字木津小字片山に所在する。木津城山遺跡はこれまで５次に及ぶ調査を実施しており、(注3) 今回の調査が第６次調査に当たる。調査は平成９・11年度の試掘調査で弥生時代後期の集落跡や墳墓が確認された地点を中心に調査を実施した。木津城山遺跡と重複する木津城跡の調査は今回がはじめてである。調査期間は、平成20年５月１日から平成21年２月28日までである。現地説明会は調査の進捗状況に応じて、平成20年10月16日と平成21年２月13日の２回実施した。調査面積は4,000㎡である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第２課課長補佐兼調査第３係長石井清司、調査第３係次席総括調査員伊野近富、調査第２係主任調査員戸原和人、調査第１係主任調査員竹原一彦、調査第２係専門調査員岡﨑研一、調査第３係調査員筒井崇史・村田和弘・松尾史子が担当した。また、発掘調査と整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた。(注4) 本報告の執筆は、

伊野、竹原、筒井、松尾のほか、丸山香代(近畿大学大学院生)、永惠裕和(京都大学大学院生)が分担した。文責は各項の末尾に記した。本報告に掲載した写真のうち、遺構は各担当者のほか、調査第１課資料係主任調査員田中彰が撮影し、遺物は田中が撮影した。なお、本報告で用いた国土座標系は、世界測地系を使用した。

調査期間中は、文化庁・京都府教育委員会・木津川市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所などの関係諸機関、東野治之、高橋照彦、巽淳一郎、毛利正守、上野誠、栄原永遠男、井上喜久雄、坪井清足、島田俊男、増淵徹、藪中五百樹、森谷英俊、菱田哲郎、櫛木謙周、箱崎和久、渡辺晃宏、馬場基、山本崇、弓場紀知、吉川真司、寺崎保広、犬飼隆、和田萃、千田嘉博、濱田延充、若林邦彦、伊藤淳史(順不同・敬称省略)からご教示・ご協力をいただいた。また、当調査研究センター理事長上田正昭はじめ、上原真人、井上満郎、高橋誠一をはじめとする各理事の先生方から折々に貴重な意見を伺った。

なお、調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。

(伊野近富・筒井崇史)

位置と環境

１)地理的環境

今回報告する馬場南遺跡、鹿背山瓦窯跡、木津城山遺跡・木津城跡の各遺跡の所在する木津川市は、平成19年に木津町・山城町・加茂町の３町が合併して成立したもので、いずれの遺跡も旧木津町に属する。木津川市は京都府の最南端に位置し、地理的にも京都盆地の南端に位置する。京都盆地は干拓によって消滅した巨椋池を境に北山城地域と南山城地域に区分でき、南山城地域の平野部は、木津川とそれに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成された河谷地形で、南北14km、東西２～３kmの狭長な地形を呈する。木津川は奈良・三重両県に水源を発し、旧木津町付近までは東から西に流れ、ここでその流れを大きく北に変える。旧木津町は北を木津川によって画され、東・南・西の三方を丘陵に取り囲まれていた。これらの丘陵部から発する小河川の堆積によって、旧町域中央の平野部が形成される。また、小河川の一部は天井川と化している。

今回報告する各遺跡は、旧木津町を取り囲む丘陵のうち、東部に位置する丘陵上とその周辺に分布する。まず、馬場南遺跡は東部丘陵の南端、井関川によって形成された谷地形に面したところに位置する。鹿背山瓦窯跡は馬場南遺跡から北東約２kmの、大井手川によって形成された谷地形に面した丘陵斜面に位置する。木津城・木津城山遺跡は、馬場南遺跡から北東約600mの丘陵上に位置する。遺跡の東側に南北方向の谷地形があるため、周辺では最も高い地点に立地し、旧町域中央の平野部から京都盆地にかけて見渡すことができる。

２)歴史的環境

今回報告する各遺跡は、弥生時代から中世までの各時代におよぶ。ここでは発掘調査によって明らかになった遺跡を中心に、旧木津町周辺の歴史的環境について概観する。(注5)

第１図　調査地位置図および周辺主要遺跡分布図（国土地理院1/50,000　奈良）

１.馬場南遺跡　２.鹿背山瓦窯跡　３.木津城山遺跡・木津城跡　４.岡田国遺跡　５.燈籠寺遺跡
６.片山遺跡　７.内田山遺跡　８.瓦谷遺跡・瓦谷古墳群　９.大畠遺跡　10.畑ノ前遺跡
11.赤ヶ平遺跡　12.上人ヶ平遺跡・上人ヶ平古墳群・上人ヶ平埴輪窯跡　13.樋ノ口遺跡
14.西山遺跡　15.作り道遺跡　16.西山塚古墳　17.椿井大塚山古墳　18.高麗寺跡
19.泉橋寺跡　20.弓田遺跡　21.燈籠寺廃寺　22.上津遺跡　23.木津遺跡
24.五領池東瓦窯跡　25.市坂瓦窯跡　26.瀬後谷瓦窯跡　27.山陵瓦窯跡
28.歌姫瓦窯跡　29.梅谷瓦窯跡　30.歌姫西瓦窯跡　31.音如ヶ谷瓦窯跡　32.内田山古墳群

今回の調査では旧石器時代から弥生時代前期にかけての遺構・遺物はほとんど確認されなかったが、旧木津町内では岡田国遺跡・燈籠寺遺跡・赤ヶ平遺跡などが知られている。

馬場南遺跡では弥生時代中期の土器が出土したが、旧木津町内の西部に扁平鈕式銅鐸が出土した相楽山遺跡と、その母村と考えられる大畠遺跡が存在する。東部では燈籠寺遺跡で方形周溝墓が検出されている。木津城山遺跡はこれまでの調査で、弥生時代後期前半の高地性集落であることが明らかになっているが、当該期の遺跡は京都府のみならず近畿地方全体を見渡しても前後の時期にくらべて遺跡数が大幅に減少する時期とされ、その存在意義は重要である。木津城山遺跡に継続する遺跡として、周辺では燈籠寺遺跡・内田山遺跡・片山遺跡などがある。

古墳時代になると、木津川市山城町に30面以上の三角縁神獣鏡が出土した椿井大塚山古墳が築造される。これに対して旧木津町内に大型古墳はほとんど存在しないが、中・小型古墳が多く分布する。木津城山遺跡周辺では内田山古墳群・片山古墳群がある。前者は一辺10～18mの小型の方墳を主体とし、古墳時代中期に位置づけられる。後者は横穴式石室を内部主体とし、飛鳥時代後半に位置づけられる。旧木津町南部には瓦谷古墳群や上人ヶ平古墳群、西山塚古墳などがある。また、埴輪生産跡である瓦谷埴輪窯や上人ヶ平埴輪窯、多数の埴輪が出土した弓田遺跡なども知られている。旧木津町西部の土師七ツ塚古墳群とともに、これらは古墳時代前期後半から後期初めに営まれたものである。古墳時代後期の古墳としては、旧木津町西部に横穴式石室を内部主体とする音乗谷古墳や坊谷古墳がある。古墳時代の集落はほとんど確認されていないが、上人ヶ平遺跡や弓田遺跡で竪穴式住居跡が検出されている。最も新しい古墳としては、奈良県との境に位置するカザハヒ(石のカラト)古墳がある。出土した土器から飛鳥時代末ないし奈良時代初めの築造と考えられる。

奈良時代になると、平城京との関わりで多くの遺跡が分布する。東部でも木津川に近いところでは上津遺跡・燈籠寺廃寺・釜ヶ谷遺跡などがある。上津遺跡は平城京の外港である泉津に設営された公的な施設と考えられる。燈籠寺廃寺は山城国分尼寺の可能性も指摘されているが、詳細は不明である。隣接する旧河道の調査で奈良時代の遺物が多数出土した。この旧河道の上流にあたる釜ヶ谷遺跡では、墨書人面土器や土馬、斎串などの祭祀遺物が多数出土している。また、具体的な遺構は未検出であるが、いわゆる「作り道」や「賀世山西道」といった奈良時代の道路の存在が考えられている。「賀世山西道」は恭仁京に密接に関わる道路であるが、木津川市加茂町に所在する恭仁宮以外に京域を具体的に示す遺構はこれまでに検出されていない。

一方、奈良県との境をなす平城山丘陵には平城宮や興福寺に供給するための瓦を生産していた瓦窯群として、市坂瓦窯・梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯・五領池東瓦窯・音如ヶ谷瓦窯などがある。市坂瓦窯に隣接する上人ヶ平遺跡では、瓦生産に伴う工房跡が確認されている。また、大畠遺跡や樋ノ口遺跡では、掘立柱建物跡などが検出されている。特に樋ノ口遺跡では、平城宮式軒瓦や二彩・三彩陶器や羊頭硯などが出土しており、奈良時代中・後期の離宮跡もしくは寺院跡の可能性が高いと考えられている。

平安時代以降の遺跡はそれほど多くないが、木津城跡・菰池遺跡などがある。木津城跡は、現

在も城郭遺構が良好に遺存しており、中世後半の山城と考えられている。今回の調査でも遺存状態の良好な堀を２条検出した。

（筒井崇史）

３）馬場南遺跡の背景

和銅３（710）年に平城京に都が遷されると、馬場南遺跡の所在する木津川市（特に旧木津町域）は平城山丘陵のすぐ北側の地であることから、いわば、都の北の玄関口ともいえる位置を占めることになる。そして、木津川が北へ大きく屈曲する場所には、泉津が設置され、全国からの物資は、ここを経由して平城京へ運ばれたと考えられる。この泉津の近くに東大寺や興福寺などの有力寺院の木屋所が設置されていた。上津遺跡はその１つと考えられる。また、平城宮に供給する瓦の生産地が平城山丘陵に多数営まれたのは上述の通りである。

天平12（740）年12月に恭仁宮へ遷都される。この結果、平城京から北東方向に新しい道路が敷設された。この遷都には当時右大臣であった橘諸兄の強い勧めがあったようである。諸兄は南山城に井手寺を持ち、恭仁宮のある御香原（旧加茂町）は勢力範囲であった。馬場南遺跡の西方には北陸へ続く幹線道路があり、恭仁宮造営段階には「賀世山西道」を境として左京と右京とに分けている。馬場南遺跡は右京の東南隅にあったと推定される。すなわち、馬場南遺跡は古代の幹線道路沿いであるとともに、恭仁京右京の一画を占めていた可能性がある。

奈良時代後期になると、天平宝字元（757）年に橘奈良麻呂の乱がおこり、橘氏に代わって藤原仲麻呂が勢力を伸ばす。しかし、天平宝字８（764）年に仲麻呂も乱を起こして没落していく。かわって、道鏡が力を持つが、宝亀元（770）年、称徳天皇が崩御すると、失脚する。この時期に上述の樋ノ口遺跡がある。恭仁宮造営前後に始まり、奈良時代後期に大きく改修された。これは、天平宝字６（762）年の山背国行幸記事に対応し、離宮と考えられている。

宝亀元（770）年、光仁天皇は御鹿原に行幸している。同年藤原永手に山背国相楽郡出水郷の山200町を賜っている。場所は馬場南遺跡のある丘陵地帯近辺と考えられる。このように、相楽郡も藤原氏との関連が深くなるが、その一方で橘奈良麻呂の子である清友は延暦８（789）年に亡くなっている。宝亀８（777）年に渤海使の接待役をし、相楽郡加勢山墓に葬られたとされるので、橘氏が奈良時代後期でもある程度、この地域で勢力を保っていたことが窺われる。

延暦３（784）年に長岡に都が遷されると、南山城地域の様相も大きく変化する。平城山瓦窯群は衰退し、新たに長岡京周辺に瓦窯は経営される。延暦10（791）年に山背国管内の諸寺の塔は相当年月を経て、破損した箇所が多くなったとして、修理させたとの記録が残るが、平城京と深いつながりを持っていた馬場南遺跡周辺は歴史の表舞台から遠ざかっていったと想像される。

なお、万葉集には平城山を越えた泉川（現木津川）や恭仁宮造営前後の鹿背山、恭仁宮などを題材にした歌が多く収録されている。特に天平10（738）年10月に催された奈良麻呂の宴では、平城山を越え、秋萩の頃に橘諸兄の旧宅へ向かう情景が歌われており、馬場南遺跡周辺の風景を髣髴とすることができる。

（伊野近富）

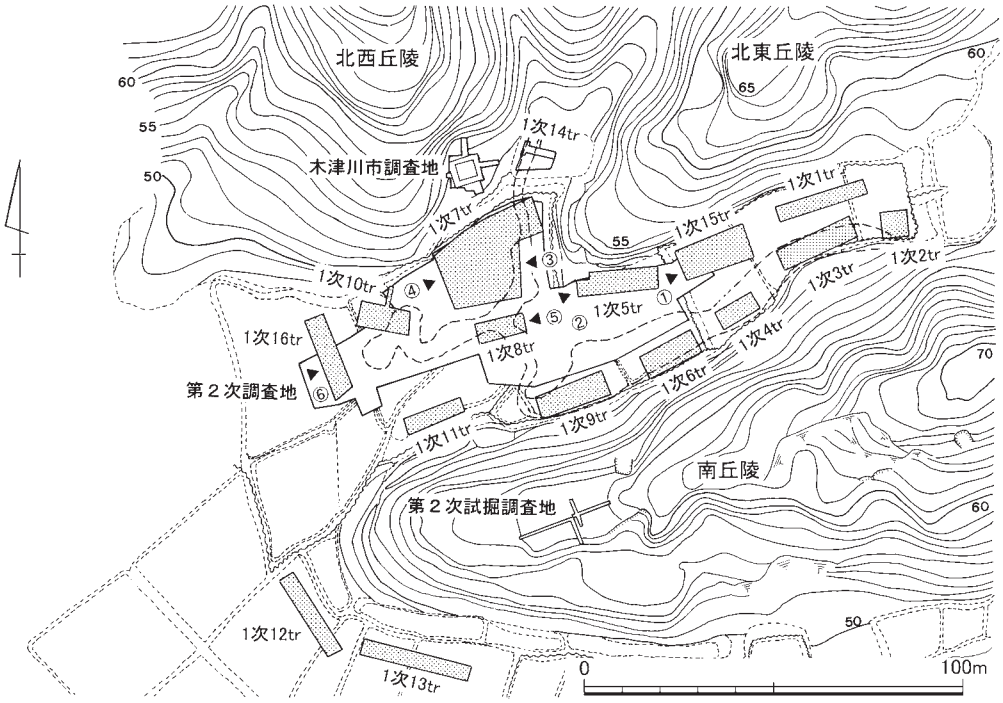
(1)馬場南遺跡第２次

１．遺跡の立地

馬場南遺跡は、平城京の北側に広がる平城山丘陵の一画に位置しており、西側には平野部が広がる。また、南側には木津川に流れ込む井関川によって形成されたやや広い谷が東に向かって延びている。この谷を東へ行くと恭仁宮のある盆地につながる。

馬場南遺跡は、天神山の南麓、西南西に開く谷部に立地しており、もともとは水田であったが、近年は休耕地となっていた。また、西側に文廻池という溜め池がある。谷部は文廻池に向かって北東から南西方向に、つまり西に向かって南に20°ほど振れて開口している。この谷部の幅は西部で45～55m、東部で20～30mである。谷部の中央から北に向かって小規模な谷部が分岐しており、全体としては「Y」字状を呈する。北へ延びる谷部の幅は20mほどである。調査の結果、この北へ延びる谷部には湧水等による自然流路が、遺跡成立以前から形成されていたことが明らかとなった。この流路は南下し、遺跡内で西に向きを変えて、文廻池に至ると考えられる。ただ、文廻池がいつ造成されたのかは不明で、近世以降の可能性が高い。この流路が馬場南遺跡において重要な役割を果たしていたのは後述のとおりである。「Y」字状の谷地形の南側にも丘陵があり遺跡は外界から遮断され、丘陵地帯に隠れたような景観である。なお、以下の記述では「Y」字状の谷地形に合わせて周辺の丘陵を「南丘陵」、「北東丘陵」、「北西丘陵」と呼ぶことにする。

（伊野近富）



第２図　第１・２次調査トレンチ配置図

２．第１次調査の成果

馬場南遺跡は関西文化学術研究都市の造成工事に先立って昭和56年に実施した分布調査[注6]で、文廻池の周辺から奈良時代の須恵器が採集されたことから、窯跡の存在が予想されていた。第１次調査は、窯跡の存在を想定して、遺構や遺物の状況を把握し、遺跡の性格や範囲を確認することを目的として実施したものである。調査期間は平成19年10月９日から平成20年２月22日までである。調査面積は1,800㎡である。現地調査は当調査研究センター調査第２課第３係長石井清司、同主任調査員竹原一彦、同主査調査員柴暁彦が担当した(所属は平成19年度)。

第１次調査では、上記の目的に沿って、丘陵の裾部を中心として16か所のトレンチを設定した。

南丘陵の南西側に２か所のトレンチを設定した(12・13トレンチ)が、耕作土を除去すると、砂層が厚く堆積している状況を確認したにとどまる。井関川の氾濫源と推定される。

南丘陵の北側には６か所のトレンチを設定した(２～４・６・９・11トレンチ)。東西方向に延びる谷部の南側に相当するが、11トレンチを除いて、粘質土や砂層が厚く堆積している状況を確認した。いずれのトレンチでも遺物は出土しなかった。なお、第２次調査に当たって、２～４・６・９トレンチの堆積状況を再検討した結果、幅３～５ｍほどの自然流路であると判断した。この自然流路は谷部の広がる中央部で、北に方向を変え、第２次調査で検出した溝ＳD2054につながると考えられる。丘陵西端近くの11トレンチでは弥生時代の溝を検出した。

谷部の北側、北東丘陵の南裾に３か所のトレンチを設定した(１・５・15トレンチ)。最も東に位置する１トレンチは谷部南側の２～４トレンチなどと同じような状況であった。15トレンチでは西端部でわずかな遺物包含層と柱穴１基を確認した。５トレンチでは井戸ＳＥ01と柱穴数基を検出した。

これらのトレンチの西側、北西丘陵の南側にも４か所のトレンチを設定した(７・８・10・16トレンチ)。７トレンチでは掘立柱建物跡ＳＢ01と川跡ＳＲ01[注7]を部分的に検出したので、ＳＢ01の全容と周辺遺構の確認を目的に調査区の拡張を行った。しかし、小規模な柱穴や溝を検出したのみで、全体として遺構密度は低い。８トレンチは谷部の中央に設定したトレンチで、７トレンチから続くＳＲ01を検出するとともに、多数の土師器皿が出土した。これらは灯明器として使用されたもので、ＳＲ01に廃棄されたものと考えられた。10トレンチでもＳＲ01の北岸を検出し、須恵器や土師器、三彩陶器などが出土した。最も西側の16トレンチでも、東から延びてくるＳＲ01を確認し、川底まで完掘した。その結果、ＳＲ01の規模は幅５ｍ、検出面からの深さ２ｍであることを確認した。断面形は深い「Ｕ」字形を呈する。粗砂や砂、シルト、有機物層などが互層に堆積していた。上層に近い有機物層からは土師器灯明皿や三彩陶器、墨書土器が多数出土した。墨書土器には「神」、「寺」、「神寺」、「山寺」などと記したものがみられた。

北へ延びる小規模な谷部にも１か所のトレンチを設定した(14トレンチ)。14トレンチでは近年まで小規模な溜め池が存在し、７トレンチとの間に堰堤が築かれている。ＳＲ01の北への延長部を検出し、土師器・須恵器などが出土した。

５・７・８・10・14・16トレンチで確認した遺構は、出土遺物からおおむね奈良時代に属する

ものであることが明らかになった。また、出土した遺物には上記の墨書土器のほか、全国的にみても珍しい彩釉山水陶器や、三彩陶器、木簡などがあり、馬場南遺跡が単なる集落遺跡などではなく、墨書土器の内容から寺院関連の遺跡である可能性が大いに高まった。

以上のような調査成果については、その一部をすでに報告済みである(注8)。しかし、試掘調査とはいえ、大量かつ重要な遺物が出土したことから、今回は報告済の遺物を再掲載するとともに、新たに実測した遺物を追加報告することとした(第８項)。

(伊野近富・筒井崇史)

３．調査の経過

第２次調査では、掘立柱建物跡や井戸、大量の遺物を包含する川跡などを検出した５・７・８・10・14・16の各トレンチを取り込むように調査区を設定した。調査は平成20年４月21日から開始した。まず、重機を使用して表土や堆積層の掘削を行い、その後、遺構面の精査や遺構の掘削を人力で行った。

７トレンチの東側では、川跡ＳＲ01とそれよりも新しい溝ＳＤ2002を新たに検出した。ＳＲ01は掘立柱建物跡ＳＢ01の位置する平坦地の周囲をめぐり、さらに西へ流れていくことが明らかになった。この西へ流れを変える屈曲部を中心に30ｍほどの範囲にわたってＳＲ01の北岸から大量に廃棄された土師器灯明専用皿(皿Ｃ)をはじめとする土器群を検出した。これらの土器群については、できる限り出土位置の記録を行いながら調査を進めた。これよりも西では、６月６日に逆「Ｓ」字状の屈曲部を確認し、６月11日には流れをせき止めるための堤ＳＸ2053を検出した。また、６月27日にはＳＲ01西端に近い地点で、今回の重要な調査成果である万葉歌木簡が出土した。なお、調査が進むにしたがって、ＳＤ2002とＳＲ01がほぼ同一の流路を取ることが判明した。

一方、井戸ＳＥ01を検出した５トレンチの南西側では多数の柱穴を検出し、さらに南側に遺構が広がることが確認できたため、その全容を明らかにするために、７月24日より調査区の拡張を行った。その結果、掘立柱建物跡ＳＢ02・03、柵ＳＡ01・02などを検出した。以上の本調査における調査面積は1,970㎡である(第１次調査に伴う各トレンチの調査面積は除く)。

ところで、第２次調査では、遺構番号を第１次調査と区別するために、３桁の遺構番号の頭に「２」をつけて「2○○○」と表すことにした。遺構番号は、通し番号とし、遺構の性格を表す略号を付けた。また、柱穴などがまとまって建物や柵になる場合、別に番号をつけた。その場合、遺構番号は「○○」と２桁で表した。使用した略号は、柵：ＳＡ、掘立柱建物跡：ＳＢ、川跡：ＳＲ、溝：ＳＤ、井戸：ＳＥ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、不明遺構・その他：ＳＸである。

さて、遺構や遺物の検出、掘削を終えると、必要に応じて1/10または1/20の平面図や断面図の作成と写真撮影を行った。また、遺構の検出がおおむね終了した平成20年８月８日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

調査の進展に伴って、遺跡の範囲を確認する必要が生じたため、南丘陵上で試掘調査を実施した。調査期間は平成20年10月３日から10月30日までである。調査面積は30㎡である。検出遺構・

出土遺物ともにごくわずかで、奈良時代には南丘陵上での土地利用はなかったと判断した。本調査と試掘調査を合わせた最終的な調査面積は2,000㎡である。

なお、当調査研究センターの一連の調査成果を受けて、木津川市教育委員会では、遺跡の重要性を鑑み、事業対象地外における遺跡の範囲確認のための調査を実施した(第３次調査)。調査地は北西および北東丘陵を対象とし、その結果、当調査研究センターが検出した掘立柱建物跡ＳＢ01の北側で礎石建物跡を検出した。

調査成果が多岐にわたるため、出土遺物については万葉歌木簡や彩釉山水陶器を中心として、平成20年10月22日に記者発表を行った。現地説明会は木津川市教育委員会の調査成果が明らかになるのを待って、平成21年１月17日に合同で実施し、1,300人あまりの参加があった。

現地説明会終了後、最終的な調査と埋め戻しを行って平成21年２月19日にはすべての作業を終え、調査を終了した。

（伊野近富・筒井崇史）

４．調査の概要

１）基本的な層序

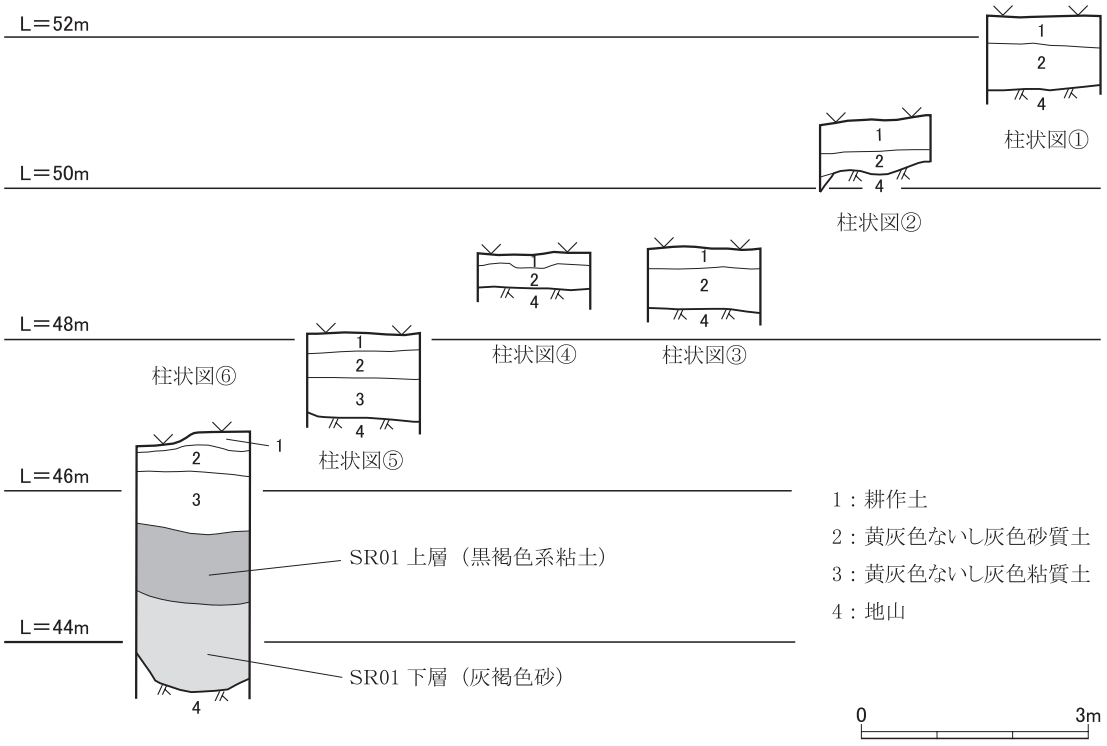
調査地は谷地形を呈し、全体として東から西に向かって傾斜している。東端の遺構検出面で標高50.5m、西端の遺構検出面で標高45.5mと、約５mの比高差がある。第１次調査の成果にもとづく基本的な層序を示すと以下の通りである(柱状図の位置は第２図参照)。

調査地である谷部全体がもともと水田であったことから、柱状図①～⑥のいずれにおいても、30～40cm程度の耕作土（１層）が認められる。耕作土の下は、柱状図①～④の地点については40～60cm程度の砂質土を主体とする堆積層（２層）が認められた。２層はおおむね水平に堆積しているが、遺物はごくわずかしか含まず、明瞭な遺物包含層は形成しない。２層の堆積時期は明らかでないが、調査地の西半部では中世の堆積層が存在するので、それ以降の堆積と考えられる。この下層に灰色あるいは黄灰色の粘質土もしくはシルト層があり、遺構面（４層）となる。なお、柱状図①・②は平坦面２、柱状図③・④は平坦面１の状況を示す。

柱状図⑤はＳＲ01の東端に近い地点にあたる。上から耕作土（１層、30cm程度)、近世以降の堆積層（２層、30cm程度)、平安時代から中世にかけての堆積層（３層、40cm程度)、遺構面（４層）である。柱状図⑤のすぐ西側にＳＲ01の落ち込みの始まりがある。第２次調査では、中世の遺物包含層を確認しているが、３層がそれに当たると考えられる。また、柱状図⑤よりも西の地点では、中世の遺物包含層（３層）の直下がＳＲ01の埋土であることが多かった。

柱状図⑥は、ＳＲ01の西端に近い地点に当たり、ＳＲ01の埋土を柱状図に取り込んだものである。上から耕作土（１層、30cm程度)、近世以降の堆積層（２層、20～30cm程度)、平安時代から中世にかけての堆積層（３層、40～80cm程度)、ＳＲ01の埋土（上層：黒褐色系粘土、下層：灰褐色砂、合計２m程度)、地山面（４層）である。

以上、簡単であるが、調査地の基本的な層序についてみてきた。平坦面１や平坦面２付近では



第３図　土層柱状図

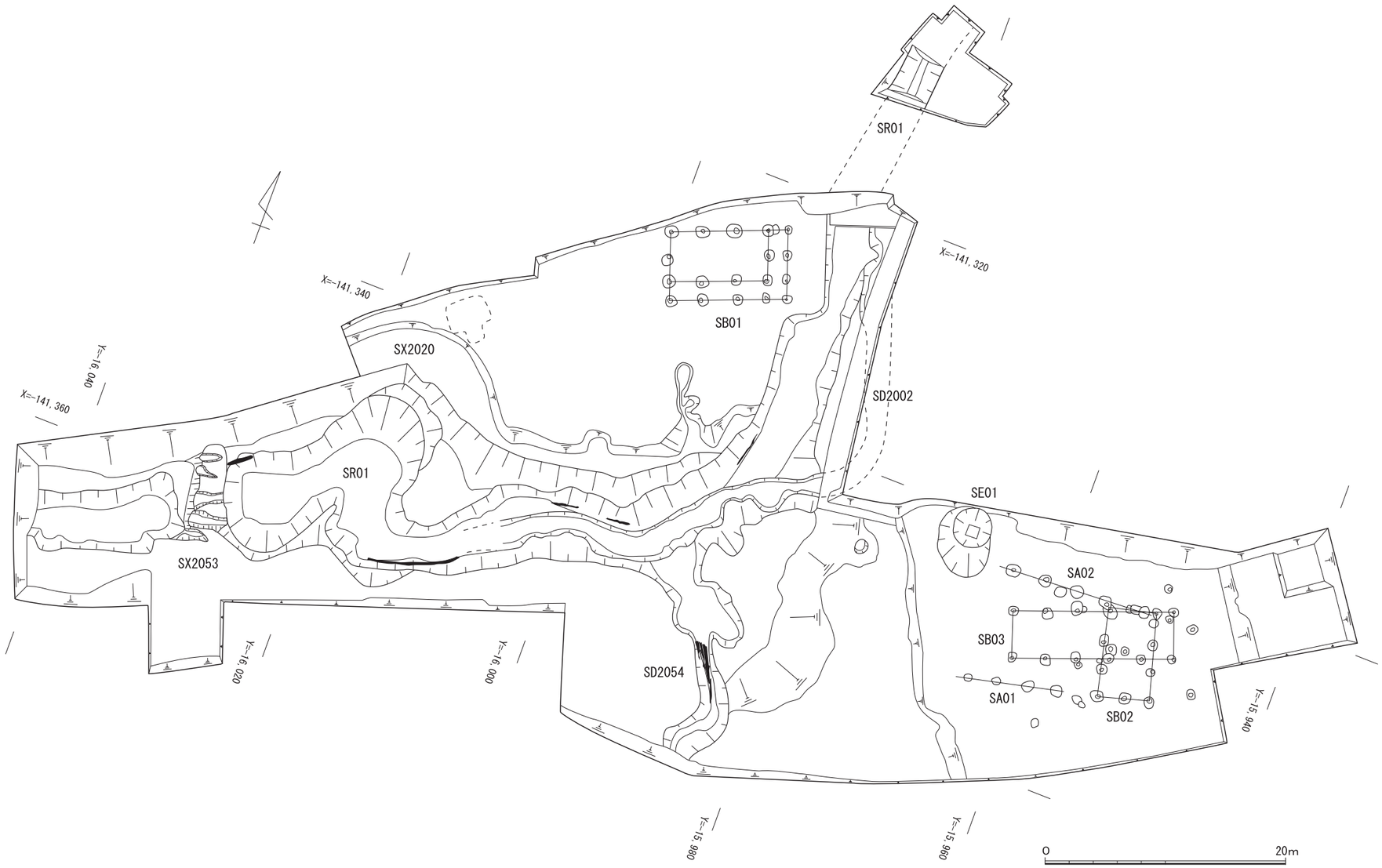
遺物包含層がほとんど形成されず、ＳＲ01がある程度埋没した後に、その凹地に中世を中心とする遺物包含層が形成されたようである。さらに近世以降、調査地全体が数10cmの堆積をし、調査前の水田の景観に至ると考えられる。

（筒井崇史）

２）遺構の概要

第１次、第２次調査合わせて、平坦面２か所とその周辺から、奈良時代の遺構として掘立柱建物跡３棟、柵２条、井戸１基、川跡１条、溝２条、柱穴20基以上を検出した。このほか、弥生時代の土器棺墓１基、中世の溝状遺構５条を検出したのみで、土地の利用度は高くない。

第２次調査の結果、第１次調査７トレンチを設定していた地点は、北側から延びる丘陵の先端にあたり、ここを東西25m、南北20mほどの範囲で平坦に削り出していた。これを平坦面１（標高48.2～48.8m）と呼称する。平坦面１の北東部で掘立柱建物跡ＳＢ01を検出した。平坦面１の西半部に顕著な遺構は認められず、広い空閑地であったと考えられる。平坦面１の西端には長軸2.0m、短軸1.5mのほどの範囲に集石がみられたが、出土遺物がなく、時期は不明である。ただし、集石のベース層から彩釉山水陶器片が出土したので、奈良時代よりは新しいと考えられる。平坦面１の周囲には川跡ＳＲ01がめぐり、平坦面１の南西隅で逆「Ｓ」字状に屈曲して、さらに西に向かって流れる。ＳＲ01の西部では水量を調整するための堤ＳＸ2053を検出した。また、ＳＲ01とほぼ同じ性格を有すると考えられる溝ＳＤ2002を検出した。ＳＤ2002はＳＲ01よりも新しく、大部分はＳＲ01と重複しており、流路が異なるのはＳＢ01の東側、北東丘陵の西裾を流れる部分のみである。ＳＲ01の土層観察などから、ＳＲ01が埋没する過程で、護岸施設の設置などの改修


SR01
X=-141.320
X=-141.340
SB01
SX2020
Y=-16.040
X=-141.360
SD2002
SR01
SE01
SX2053
SA02
SB03
Y=-16.020
Y=-16.000
SD2054
SA01
SB02
Y=-15.940
Y=-15.980
Y=-15.980
0
20m

第４図　検出遺構配置図

が行われ、その後にＳＤ2002として機能していることが判明した。

これらＳＲ01やＳＤ2002からは、２時期で5,000点を超える土師器皿Ｃをはじめとする大量の土器群が出土した。また、三彩陶器や彩釉山水陶器、墨書土器、万葉歌木簡など、遺跡の性格を考える上で重要な遺物が出土した。

谷部の東部には、平坦面１より一段高い平坦な地形（標高50.0～50.5m）が広がる。これを平坦面２と呼称する。平坦面２は東西25m、南北20mで、ほぼ平坦面１と同じ広さをもつ。平坦面２の北西部で井戸ＳＥ01を検出した。また、平坦面２の中央部で掘立柱建物跡ＳＢ02・03や柵ＳＡ01・02を検出した。これらの南側には第１次調査で確認した自然流路が存在する。この自然流路からＳＲ01、もしくはＳＤ2002に流れ込む溝ＳＤ2054を検出した。

弥生時代の遺構として、土器棺墓ＳＸ2015を平坦面１と平坦面２の間のベース層上面で検出した。また、ＳＲ01の埋土や遺物包含層などから弥生土器や石器などが少量出土した。

中世の遺構としては、堤ＳＸ2053の上面で溝状遺構５条を検出した。このうちの２か所で暗渠と思われる木樋を確認した。

（伊野近富・筒井崇史）

３）遺構の相対的変遷

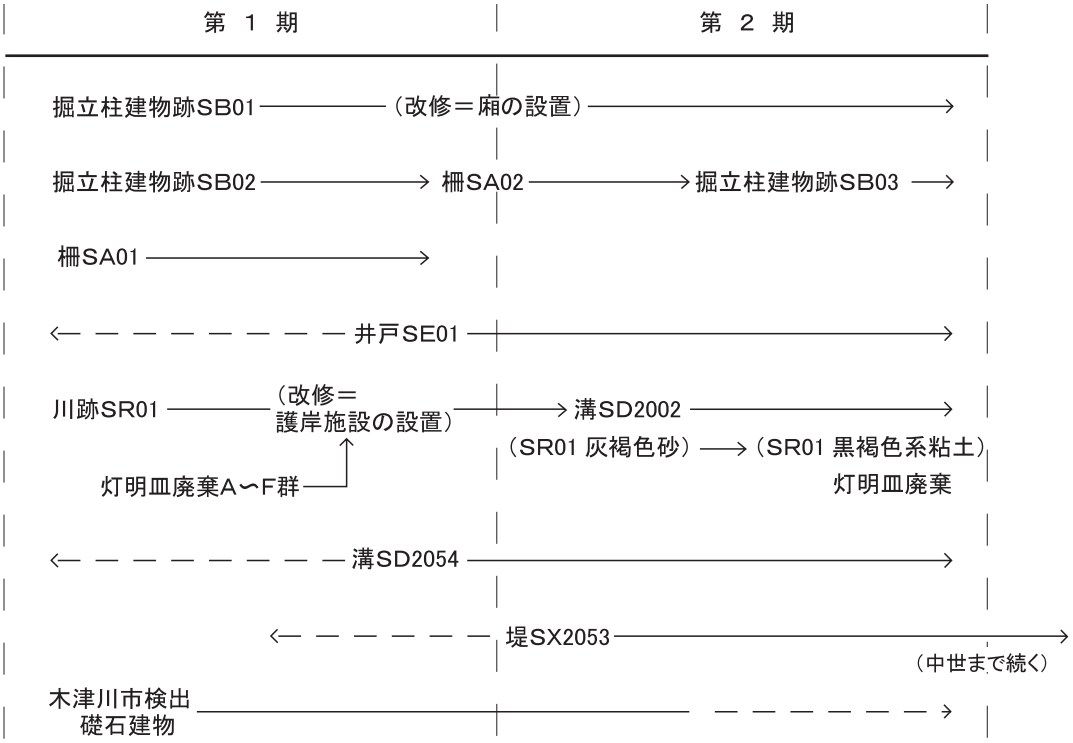
馬場南遺跡で検出した遺構は、上述のように、決して多くはない。しかし、遺構の先後関係や土層の堆積関係、出土遺物などから奈良時代の遺構を大きく２時期に区分できると考えた。ただし、個々の遺構において、存続の時間幅が不明であることが多く、例えば、第２期に属するものが、第２期に成立したのか、第１期から継続するのか、明確でない。以下では、この点をふまえて、遺構の相対的な時期について述べることにする（付表１）。

まず、掘立柱建物跡ＳＢ01は遺跡における立地などから、木津川市の調査で確認された礎石建物とともに、馬場南遺跡における中心的な建物の１つであると考えられる。ＳＢ01は廂をもつが、廂の設置に先立って川跡ＳＲ01の一部を埋め立ていることが確実である。このＳＢ01とＳＲ01が同時に存在する段階を第１期とする。その後、ＳＢ01の東側に位置するＳＲ01が埋没し、新たに溝ＳＤ2002が掘削されて、流路が一部変更されている。この段階を第２期とする。

平坦面２の掘立柱建物跡ＳＢ02・03、柵ＳＡ02については柱穴の切り合いなどから、ＳＢ02→ＳＡ02→ＳＢ03の順に建て替えられた。それぞれの遺構の時期を決定するための遺物はほとんどないが、ＳＢ03の柱穴掘形から第１期に位置づけられる軒丸瓦が出土しているので、ＳＢ03を第２期、それに先行するＳＢ02を第１期とした。また、柵ＳＡ01はＳＢ02とほぼ同じ方位であることから、同時期に営まれたと考えられる。一方、井戸ＳＥ01はほかの遺構と重複関係にないが、第１期に遡る可能性もある。

ＳＲ01は、もともと存在した自然流路を人為的に改変して成立したと考えられる。第１期では土師器皿Ｃの大量廃棄がみられた。廃棄された土師器皿Ｃは3,000点以上と推定される。この廃棄後に流路がある程度埋没した段階で、護岸施設の設置や新しい流路である溝ＳＤ2002の掘削などが行われる。これ以降が第２期である。第２期のＳＲ01は、護岸施設の内側にあたり、土層の

付表１　遺構相互関係表



堆積状況を見ると、下層に灰褐色砂、上層に黒褐色系粘土の堆積が認められる。したがって、第２期のＳＲ01は土層から少なくとも２時期に分けられる可能性がある。また、第２期でも土師器皿Ｃの廃棄が行われているが、第１期に比べるとその点数が大幅に減少する。

ＳＲ01の西部には堤ＳＸ2053が存在する。ＳＸ2053は第２期に存在していたのは確実であるが、第１期まで遡るかどうか不明である。なお、ＳＸ2053は、中世の暗渠の存在から、少なくとも中世まで機能していたと考えられる。同じくＳＲ01に南から合流する溝ＳＤ2054も、第２期に存在するのは確実であるが、第１期まで遡るかどうかは明らかでない。ただ、ＳＤ2054は途中で暗渠の設置が行われていると考えられるので、第１期まで遡る可能性が高い。

木津川市教育委員会の調査で検出された礎石建物は、ＳＢ01と主軸がほぼ一致することや出土瓦の年代観などから第１期には存在したと考えられる。その後、礎石建物は焼失したことが焼土や瓦の状態から分かるが、それがどの段階であったかは不明である。

以上、簡単に各遺構の時期と、その変遷について述べた。検出遺構の概要と出土遺物の内容、ならびに時期比定の根拠については、以下で詳しく報告する。また、遺跡の性格や年代、各遺構の関係、出土遺物の検討などについては第９項にまとめた。

（伊野近富・筒井崇史・松尾史子）

５．検出遺構

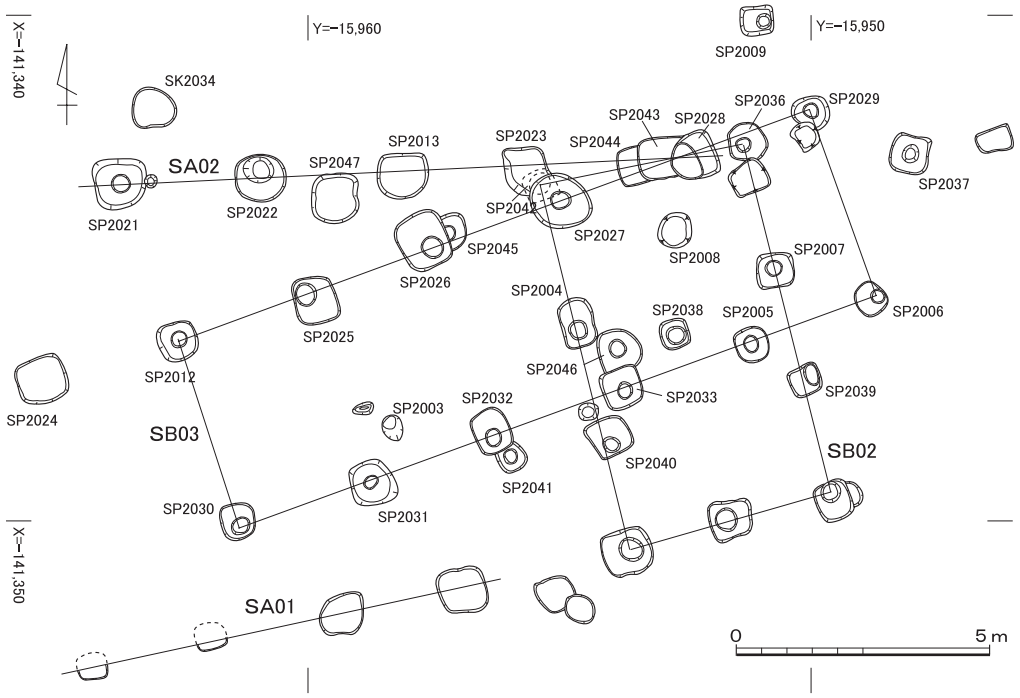
１）奈良時代の遺構

平坦面２か所、掘立柱建物跡３棟、柵２条、井戸１基、川跡１条、溝２条などを検出した。掘

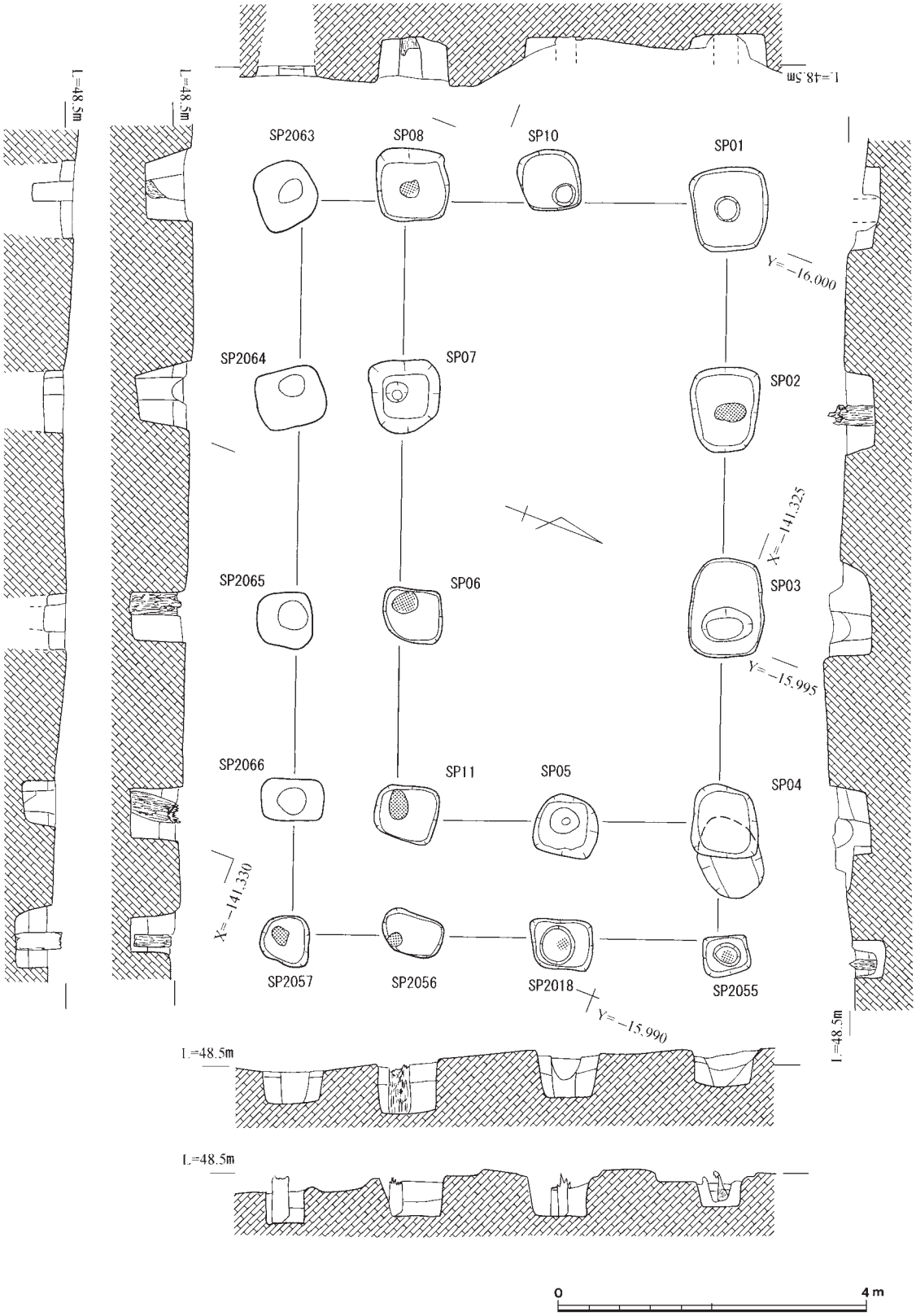
立柱建物跡はいずれも正方位を指向しないが、これは地形に制約されていたためと考えられる。また、掘立柱建物跡や井戸、川跡については、馬場南遺跡の重要性を鑑みて、一部調査を進めることなく埋め戻し作業を実施したため、最底部までの調査には至っていない。なお、以下の記述に当たって、軒瓦や土師器・須恵器の型式名・器種名は平城宮・京の調査報告に準じることとする。(注9)

①**平坦面１**　調査区の中央、北半部で検出したもので、第１次調査の７トレンチの大半がこの平坦面に相当していた。平坦面１は北西丘陵の先端にあたり、東西25m、南北20mほどの範囲を平坦に削り出している。標高は48.2～48.8mで、調査区の南西からの比高差2.5～3.1mである。

②**掘立柱建物跡ＳＢ01**（第６図）　平坦面１の北東部、地山である黄褐色土上面で検出した東西棟建物である。身舎は桁行３間（8.1m）、梁行２間（4.2m）で南と東の２面に廂を設けている。柱間は桁行が2.7mで、梁行は2.1mである。南廂の出は1.4m、東廂の出は1.5mである。全体の規模は東西9.6m、南北5.7mである。建物の方位は北に対して20°西に傾いている。東廂は川跡ＳＲ01の西肩を埋めて設けられている（第12図ｂ－ｂ’１・３・４層など）。身舎の柱穴は、平面が方形で、一辺0.7～1.3mである。断面はおおむね逆台形で、深さ0.4～0.8mである。柱材は直径約30cmで、１尺のものと考えられる。断面は円形で、下部は面取りされており、多角形を呈する。ＳＰ06の柱材は長さ0.7mまで遺存していた。廂の柱穴は少し小さい。平面は方形で、一辺0.5～0.9mである。断面はおおむね逆台形で、深さ0.4～0.5mである。残存していた柱材は直径20cm前後で、身舎の柱材よりも細い。身舎と廂合わせて18基の柱穴のうち、９基の柱穴で柱材が遺存していた。(注10) 身舎の柱材のうち、５本について年輪年代測定を行った。(注11) このうち１本は伐採年代が670年代以降であることがわかった。他の４本ついては不明である。また、身舎北東隅の柱穴Ｓ



第５図　平坦面２検出遺構配置図

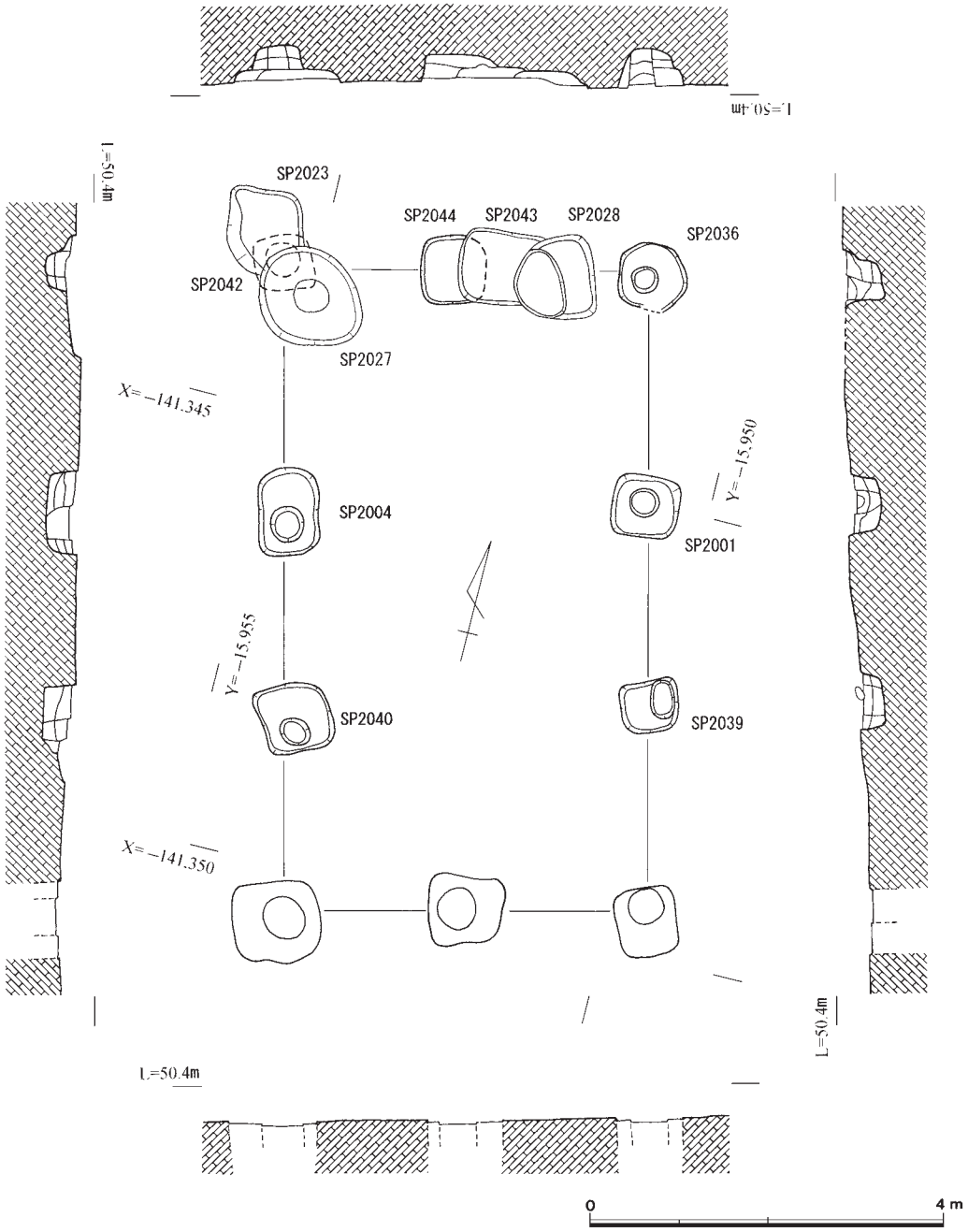


第６図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

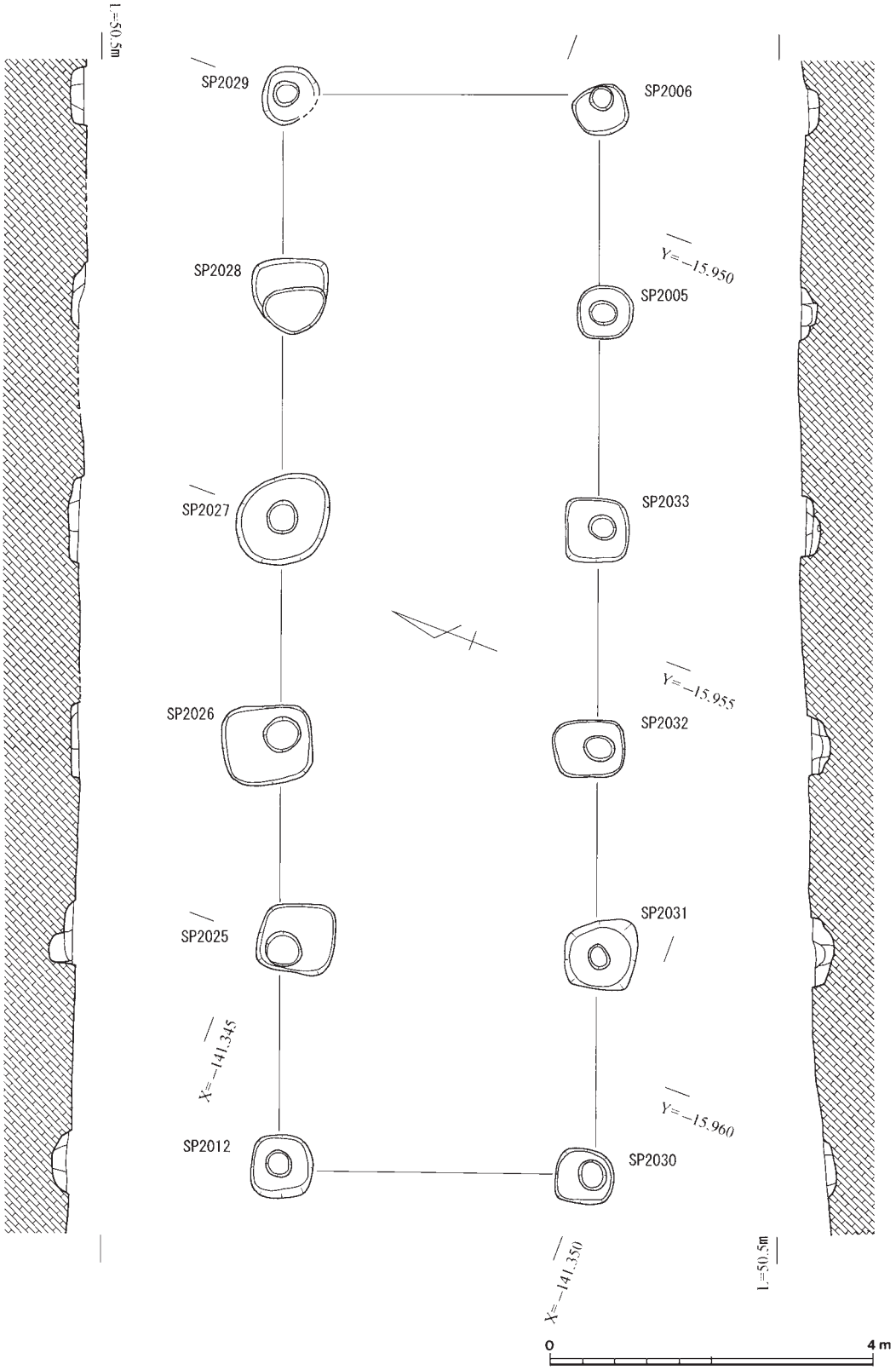
Ｐ04の柱材は抜き取られていた。抜き取り穴からは摩滅した瓦や土器片が出土した。なお、廂の柱穴は東側のみ完掘した。柱穴の掘形から土器や瓦が出土したが、細片が多く図示できるものはない。

③平坦面２（第５図）　調査区の東部で検出したもので、第１次調査の５トレンチは平坦面２の北西部に相当する。平坦面１より１ｍ余り高く、標高50.0～50.5ｍである。平坦面２は東西25ｍ、南北20ｍと、ほぼ平坦面１と同じ広さである。

④掘立柱建物跡ＳＢ02（第７図）　平坦面２で検出した南北棟建物である。桁行３間（7.2ｍ）、梁行２間（4.2ｍ）で、廂はない。柱間はばらつきがあり、桁行が2.1～3.0ｍ、梁行が2.1ｍである。



第７図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図



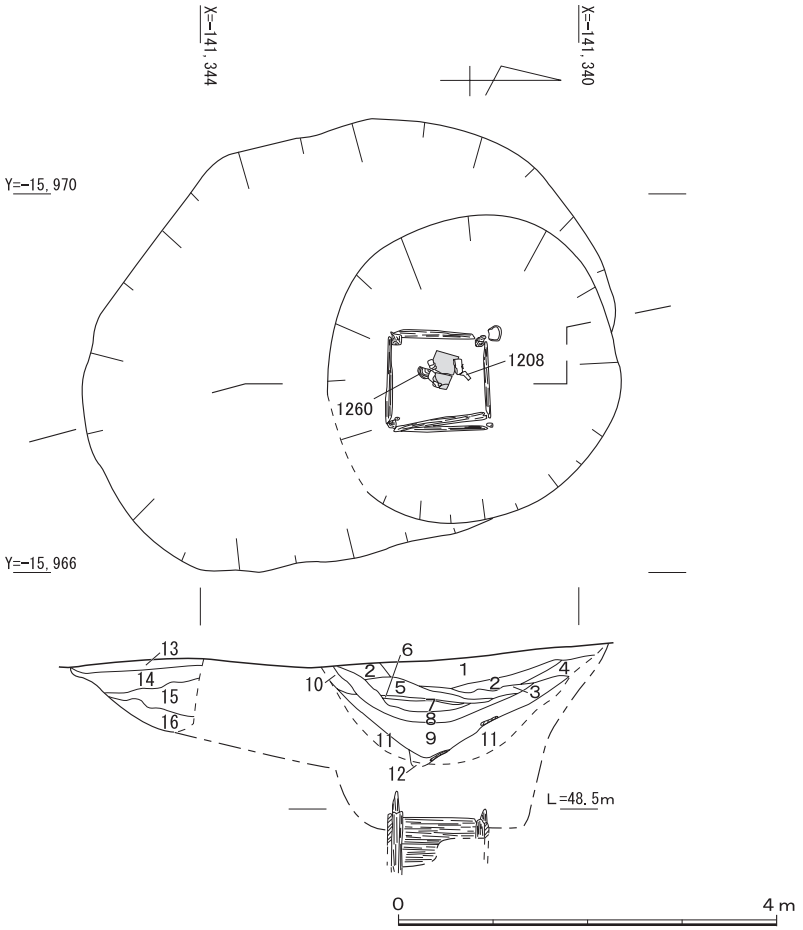
第８図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図

建物の方位は北に対して14°西に傾いている。身舎の柱穴は、平面が方形で、一辺0.8～1.0mである。断面はおおむね逆台形で、深さ0.3～0.4mである。柱痕は直径30～40cmである。柵ＳＡ02や掘立柱建物跡ＳＢ03と重複関係にあり、ＳＢ02が最も古い(柱穴ＳＰ2042・2044)。出土遺物としては土器の細片が出土したのみである。

⑤**掘立柱建物跡ＳＢ03**(第８図)　平坦面２で検出した東西棟建物である。桁行５間(13.5m)、梁行１間(3.9m)で、廂はない。柱間は桁行が2.7m、梁行が3.9mである。建物の方位は北に対して20°西に傾いている。身舎の柱穴は、平面が方形で、一辺0.7～1.0mである。断面は逆台形のものが多く、深さは掘立柱建物跡ＳＢ02よりも浅く、0.2m前後である。柱痕は直径30～40cmである。柱穴ＳＰ2027・2028がＳＢ02の柱穴ＳＰ2042・2044や柵ＳＡ02の柱穴ＳＰ2023・2043を切っていることからＳＢ03が最も新しい。１間の幅が広い割に柱は細いので、簡単な構造の建物であったと考えられる。柱穴ＳＰ2031掘形から平城宮式軒丸瓦(6012B型式)１点が出土した。ほかには土師器細片や須恵器が出土している(第48図665・666・671)。

⑥**柵ＳＡ01**(第５図)

平坦面２で検出した東西方向の柵である。３間分(7.5m)を確認した。柱間は2.5mである。柱穴は、一辺0.6～１mの方形で、完掘していないため深さは不明である。出土遺物はない。柵の方位は東に対して13°北に傾いており、掘立柱建物跡ＳＢ02の南側の柱列とほぼ柱筋を揃えているので、同時期に存在した可能性が高い。なお、平坦面２の西側は中世に若干削平されているため、西側の柱穴２基は東側の２基に比べ一回り小さい。



1　淡茶灰色砂質土（黄褐色酸化鉄分含む）
2　黄灰色・白灰色・暗灰色砂質土が
　　ブロック状に混じる
3　灰色砂質土
4　暗灰色・黄灰色砂質土が
　　ブロック状に混じる
5　淡灰色砂質土に黄褐色酸化鉄分を含む
6　黄灰色砂
7　淡灰色細砂
8　暗灰色粘質微砂
9　黒灰色シルト
10　暗茶灰色砂質土（酸化鉄分を含む）
11　淡灰色粘質砂（砂粒は粗い）
12　黒色灰層
13　橙灰褐色砂質粘土
14　黄色粘土ブロック混橙色粘土
15　青灰色粘土ブロック混灰黄色粘土
16　灰色砂層

第９図　井戸ＳＥ01実測図

⑦**柵ＳＡ02**（第５図）　平坦面２で検出した。柱穴ＳＰ2023と掘立柱建物跡ＳＢ02の柱穴ＳＰ2042の切り合い関係からＳＡ02の方が新しい。掘形の平面は方形で、一辺１ｍ前後である。４間（11.2ｍ）分を確認した。柱間は2.5～2.7ｍである。柵の方位は東に対して２°北に傾いており、ほぼ東西方向である。出土遺物としては土師器や須恵器の細片がある。また、ＳＰ2021の掘形から弥生土器が出土したが、混入品であろう。

⑧**井戸ＳＥ01**（第９図）　平坦面２で検出した。掘形は東西4.4m、南北5.8mの楕円形を呈する。検出面から1.7mの深さで井戸枠を確認した。井戸枠の位置は掘形の中央よりやや北に寄る。平面図にみえる一回り小さい掘形は井戸枠の抜き取り穴の可能性もある。井戸枠は一辺１ｍの方形である。いわゆる井籠組で横板を組んで作られていた。井戸枠は高さ0.4～0.6m分を確認した。枠の各面の方位は東西南北に合わせている。深さ2.2ｍまで確認した。井戸の埋土から三彩壺頸部片（第79図1208）や軒丸瓦（第82図1260）が出土した。また、井戸枠の検出時に須恵器杯Ｂ（第48図674）が出土した。なお、調査を実施したのは断面図第９図に示した範囲までである。

⑨**川跡ＳＲ01**（第10図）　北へ延びる小規模な谷部の湧水等によって形成された自然流路を基本とするもので、掘立柱建物跡ＳＢ01が立地する平坦面１の東辺から南辺に沿って流れ、そのまま調査区西端まで至る。奈良時代になって遺跡としての利用が始まると、必要に応じて人為的な造作が加えられている。検出した総延長は約100ｍである。まず、北へ延びる小規模な谷部に設定した調査区でＳＲ01を確認したが、さらに丘陵に向かって延びるようである。ここから南に約40ｍのところで、大きく西へ流れを変える。この屈曲点には南から溝ＳＤ2054が合流している。合流地点から西に約30ｍのところ、平坦面１の南西角で逆「Ｓ」字状に屈曲し、張り出しを形成している。張り出しから西に約15ｍのところで堤ＳＸ2053を検出した。ＳＸ2053よりも西側は文廻池に向かって流れていく。

掘立柱建物跡ＳＢ01の南廂の東側で、一直線に並んだ状態の杭を４本検出した（図版第20-(3)）。この杭列より北側は埋め立てられており、ＳＢ01の廂の柱穴はこの埋め立て土に設けられていた。埋め立て土には遺物がなく時期は不明である。第２期になると、掘立柱建物跡ＳＢ01の東側の南流する約40ｍ分は完全に埋没してしまったようで、新たに溝ＳＤ2002が掘削される。

地区割りと断ち割り　調査では、土層観察用の断ち割りなどをもとに１区から11区までの地区割りを設定した（第11図）。断ち割りはＳＲ01の深度などを確認するためのものも含めて19か所に設定した。断ち割りからＳＲ01の規模をみると、断ち割り１で幅6.0ｍ、深さ1.0ｍ、断ち割り５で幅7.0ｍ、深さ1.3ｍ（第12図ｆ－ｆ’）、断ち割り７で幅7.3ｍ、深さ1.7ｍ以上（第12図ｈ－ｈ’）、調査区西端で幅4.5ｍ、深さ0.6ｍ以上（第12図ｊ－ｊ’）である。断面形は断ち割り１・５・７では逆台形に近く、それよりも西側では「Ｕ」字形に近い。なお、遺物の取り上げもこの地区割りにもとづいて行った。

各地区の概要は以下の通りである。また、土層の堆積状況、護岸施設、遺物の出土状況についてはそれぞれ項を改めて後述する。

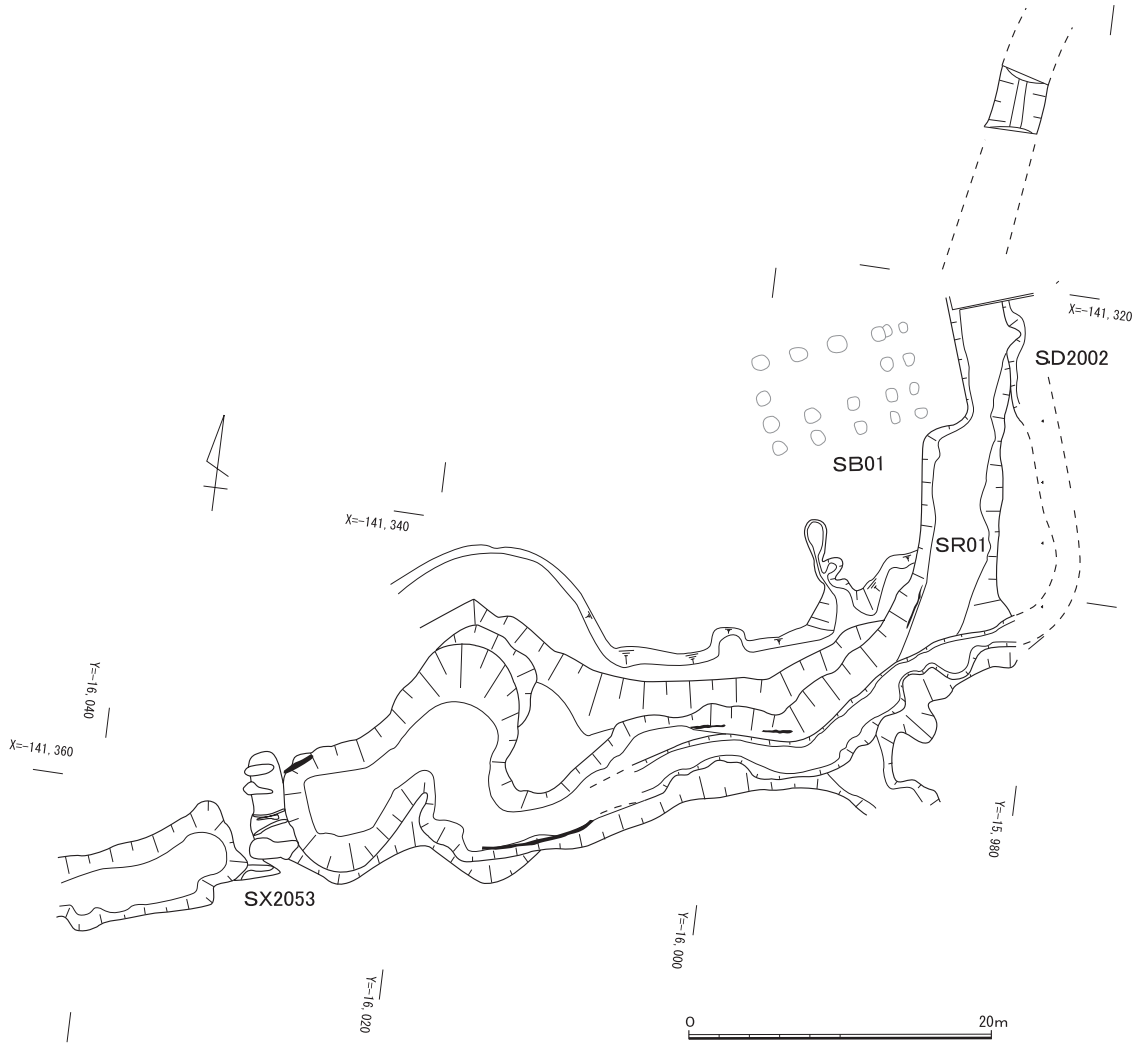
１区は、断ち割り１よりも北側の地区である。掘立柱建物跡ＳＢ01の東側と、第１次調査の14

トレンチを拡張した地点の２か所に分かれる。前者を１区南、後者を１区北と呼称する。１区北ではＳＲ01の南半をほぼ完掘した。１区北では第１期、第２期ともに同じところに流路があったと考えられる。１区南は、１区北との間に溜め池に伴う堰堤がある。この堰堤付近から南に第２期に新しい流路(溝ＳＤ2002)が掘削されており、１区南の北東隅を切っていることが確認された。

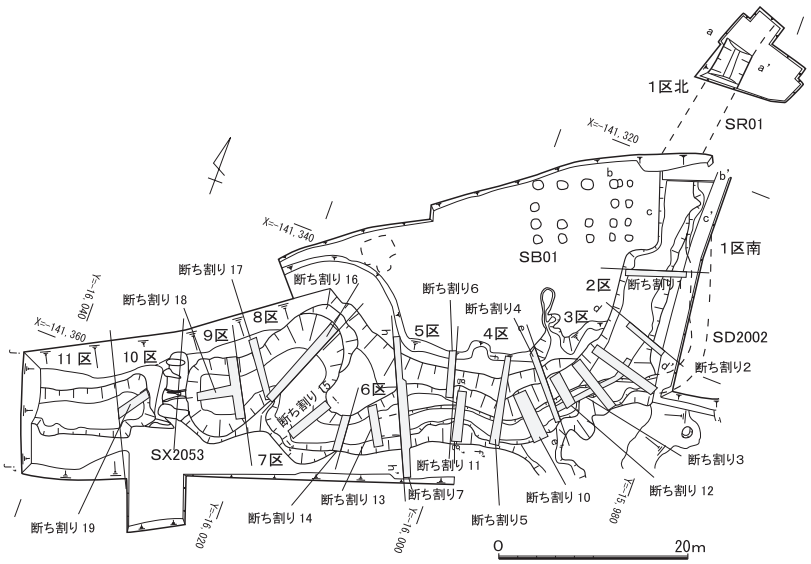
２区は、断ち割り１と断ち割り２に挟まれた地区である。他の調査区に比べ、範囲が狭いこともあり、出土遺物なども少ない。

３区は、断ち割り２と断ち割り４に挟まれた地区で、ＳＲ01がその流れを、南から西へと変える屈曲点に当たる。３区の北岸では平坦面１からＳＲ01に廃棄された大量の土器が出土した。また、３区の南東部には、第２期になると溝ＳＤ2002が合流し、ＳＲ01と重複して西へ流れていく。この地点よりも北側や２区などはＳＤ2002が掘削される前に埋没していたことが土層断面の観察から明らかになっている(第12図ｄ―ｄ')。

４区は、断ち割り４と断ち割り６・11に挟まれた地区である。３区同様、北岸には平坦面１からＳＲ01に廃棄された大量の土器が出土した。また、４区南東隅には南から流れてくる溝ＳＤ



第10図　川跡ＳＲ01平面図



第11図　川跡ＳＲ01地区割り図

2054が合流する。土層断面の観察（第12図ｆ―ｆ’）と遺物の出土状況から第１期のＳＲ01と第２期のＳＤ2002の区別が可能であることを確認した。なお、４区の南半部と３区南西部は、第１次調査の８トレンチが設定されていた地点で、北岸には及ばないものの、大量の土器が出土した。これらは３区や５区の状況から第２期の遺物である可能性が高い。

５区は、断ち割り６・11と断ち割り７に挟まれた地区である。３・４区同様、北岸には平坦面１からＳＲ01に廃棄された大量の土器が出土した。また、土層断面の観察（第12図h―ｈ’）と遺物の出土状況から、第１期のＳＲ01と第２期のＳＤ2002を区別することが可能である。

６区は、断ち割り７と断ち割り14に挟まれた地区である。６区よりも西側では５区までのような大量廃棄された土器群はみられない。また、ＳＲ01として調査や遺物の取り上げを行っているが、基本的に第２期の堆積層と考えられ、第１期の遺構は調査の及ばなかった下層にあると考えている。

７区は、断ち割り14と断ち割り16に挟まれた地区である。７区で流れを一旦北へ変える。北東側は平坦面１からの張り出し状を呈している。この張り出しが､自然流路の段階からあったのか、ＳＲ01として整備される中で人工的に設けられたのかは未確認である。出土遺物は３～５区に比べると著しく少ない。調査は第２期の堆積層まで実施した。

８区は、断ち割り16と断ち割り18に挟まれた地区である。張り出しの西側に当たり、北岸は第１次調査の10トレンチが設定されていた地点である。出土遺物は少ない。調査は第２期の堆積層まで実施した。

９区は、断ち割り18と堤ＳＸ2053に挟まれた地区である。出土遺物は少ない。調査は第２期の堆積層まで行った。

10区は､堤ＳＸ2053と第１次調査16トレンチに挟まれた地区である。多数の遺物が出土したが、これらは南岸から廃棄されたような状況で出土した。第２期の堆積層まで調査した。

11区は、第１次調査16トレンチと調査区西端に挟まれた地区である。10区と同様に、多数の遺物が南岸から廃棄されたような状況で出土した。調査は第２期の堆積層まで行った。

土層堆積状況について　上述の断ち割りもしくはセクションの土層断面図を第12・13図に示した。土層の観察は、19か所の断ち割りおよび調査区西端の壁面、１区南の北端壁面で実施した。

また、１区北でも、北壁とＳＲ01断面で土層の観察を行った。ここでは主な地点の土層を図示した。以下、地区毎に土層を概観していく。

１区北の北壁とＳＲ01断面（第13図ａ－ａ’）の１層は調査前にあった溜め池の堆積土である。１層の下にある第６層が遺構面であり、ＳＲ01はこの層に掘り込まれていた。第２・３層は緑灰色系の粘質土で、最上層からは第２期の遺物がまとまって出土した（第14図）。第４・５層は黒褐色系の粘質土で、ほとんど遺物は出土しなかった。

１区南の北端ではＳＲ01とＳＤ2002の切り合い関係を確認するための土層観察を行った（第12図ｂ－ｂ’）。１・３・４・６・７層はＳＲ01が掘削される以前の自然流路の埋土である。２層は掘立柱建物跡ＳＢ01の柱穴ＳＰ04の抜き取り穴であるが、自然流路とＳＰ04自体の切り合い関係は不明である。14層を除く８～16層はＳＲ01の埋土で、前述の自然流路の埋没後に堆積している。上層は黒灰色や灰褐色系の砂質粘土が主体で（８～13層）、下層は地山が流れこんだ黄白色系シルト粘土である（15・16層）。最下層については完掘していないため不明である。東肩についてはＳＤ2002（17層）に切られているため不明である。ＳＤ2002は調査地外へと続く。断面の西側で確認できたベースは黄白色シルト（５層）である。

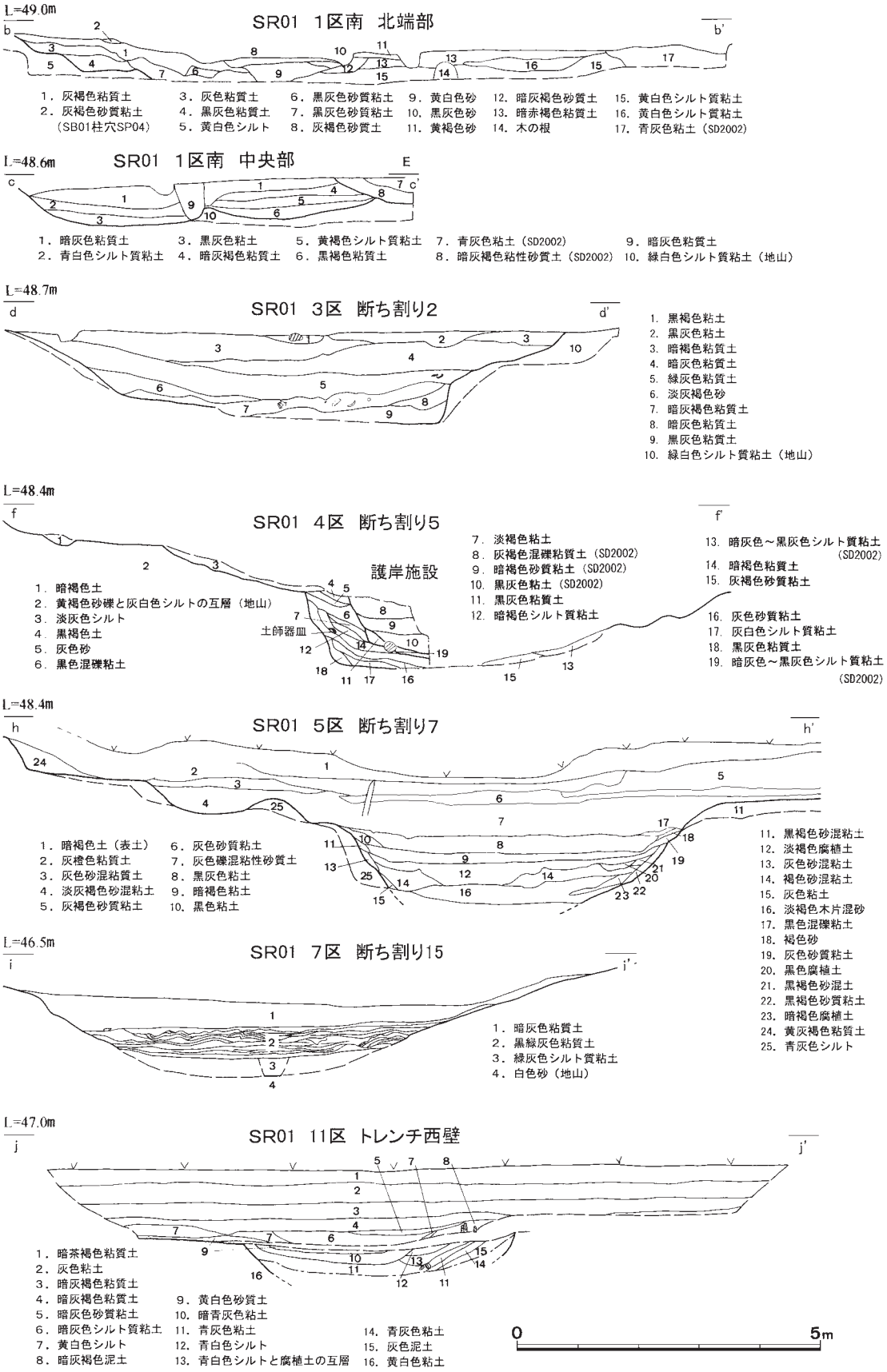
１区南中央部のセクション（第12図ｃ－ｃ’）では、ＳＲ01の埋土である１～６層を掘り込んでＳＤ2002の埋土である７・８層が堆積しており、ＳＤ2002がＳＲ01埋没後に掘削されたことがわかる。３層にはしがらみ状の木片が多量に含まれている。ＳＢ01の廂の設置に際して杭を打ってＳＲ01の北部を埋め立てているが、３層はこの埋め立てに伴う土層である可能性がある。４～６層は、埋め立て後に幅が狭くなった段階の埋土である。

３区の断ち割り２（第12図ｄ－ｄ’）では、上層から中層に黒褐色または黒灰色系の粘土や粘質土が堆積しており、下層の７層からは土師器皿Ｃがまとまって出土した（第15図Ａ群に相当）。この地点の出土遺物は、ＳＤ2002との重複関係がない唯一の地点であることから、第１期の時期を具体的に示す資料である。

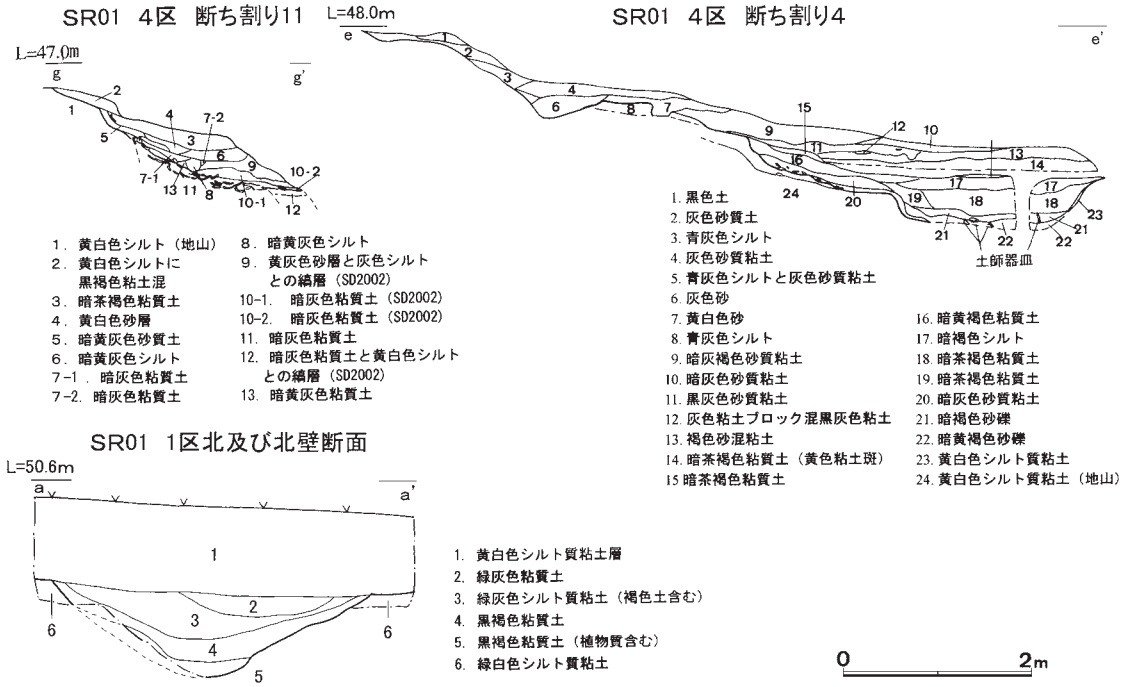
４区の断ち割り４（第13図ｅ－ｅ’）では、ＳＲ01とＳＤ2002の重複関係を確認した。20層はＳＲ01の埋土で、大量に廃棄された土師器皿Ｃを含む。17～19･21～23層はＳＤ2002の埋土である。この地点では、土器がまとまって出土している。22層以下は掘削していないため、本来の深さは不明である。

断ち割り５（第12図ｆ－ｆ’）では、大量に廃棄された土師器皿Ｃと護岸施設、ＳＤ2002の関係を確認することができた。14層から下が大量廃棄された土師器皿Ｃを含む黒灰色系の粘土である。その上に護岸施設の木材が置かれ、４～７層および11・12層が堆積した後にそれを掘り込んでＳＤ2002の埋土である８～10層が堆積する。なお、16～18層より下は掘削していないため本来の深さは不明であるが、土器を含む層が堆積している。

断ち割り11（第13図ｇ－ｇ’）では、大量に廃棄された土師器皿ＣとＳＤ2002の埋土の堆積状況を確認した。検出面から６層までは中世の堆積土である暗茶褐色や暗灰色系の粘土が堆積しており、ＳＤ2002の埋土である暗灰色粘質土や黄灰色砂層と灰色シルトの互層（９・10層）が大量の土



第12図　川跡ＳＲ01土層断面図(1)



第13図　川跡ＳＲ01土層断面図(2)

師器皿Ｃを覆うように堆積していた。この付近は護岸材がなく、浸食をうけやすかったと考えられる。灯明皿は、図化した分について取り上げ作業を実施したが、溝の底まで掘削していないため、さらに下層に埋没している可能性がある。

５区の断ち割り７（第12図ｈ－ｈ’）では、現代から古代までの土層の堆積状況を確認できた。地表から約１ｍ下までは中世以降の堆積土であった。１～５層は現代から近世までの耕作土および耕作に伴う区画溝の埋土である(基本層序１層に相当)。６・７層は中世から近世にかけての土層である(基本層序２・３層に相当)。７層からは瓦器片が出土した。12・14・16層は木屑や木の葉が大量に含まれ、特に14層は大量廃棄された灯明皿を含む。16層より下は掘削していないため、本来の深さは不明である。ベースは、川の北側が青灰色シルト(25層)、南側は黒褐色砂混粘土(11層)である。

７区の断ち割り15(第12図ｉ－ｉ’)では、ＳＲ01が逆「Ｓ」字状に屈曲する地点の堆積状況を確認した。６区より西側については、断ち割り７の断面観察により、ＳＲ01の上面まで重機で掘削した。この地点では２層まで掘削し、一部３層を掘り下げて0.3m下で地山と思われる白色砂(４層)を確認した。２層は木の葉と白色砂が縞状に堆積しており、ある程度の流水が想定される。1・２層からは土器がまとまって出土した。土層の堆積状況や出土した遺物から１・２層はＳＤ2002に伴う埋土と考えられる。

11区のトレンチ西壁では、堤の西側の堆積状況を確認した。１層は現代の耕作土で、地表から９層までは中世以降の土層である。ＳＲ01の埋土である暗灰色または青灰色系の粘土(10～15層)はＳＤ2002伴う堆積層で、多量の木屑とともに土器が出土した。また、万葉歌木簡が出土した土層に相当する。14・15層は南側から流れ込んだような堆積であり、土器の出土状況と一致する。

11層より下は掘削していないが、第１次調査16トレンチの調査成果からＳＲ01の底まで、さらに１ｍほどあると考えられる。今回の調査ではＳＤ2002に伴う土層を掘削した。ベースは黄白色粘土(16層)である。

護岸施設について　３区から８区にかけて、第１期のＳＲ01がある程度埋没した段階に木材で護岸をしている。３区では断ち割り２から断ち割り８にかけての西岸裾に幅10cm、長さ２ｍの板材を検出した。板材が検出された付近は溝ＳＤ2002が掘削される前に埋没していることから、この護岸はＳＤ2002の掘削前に設置されたものであることがわかる。

４・５区(断ち割り５・６)では、北岸に幅20～30cm、長さ２ｍの木材が２本並んだ状態で検出した。木材は流路に並行しており、２ｍの間隔が開いているが、出土標高がほぼ同じであることから、転落材や流木ではないと考えた。検出標高は46.1m前後である。木材は加工しているかどうかは不明である。また、付近に縦杭等は確認できなかった。４・５区は土師器灯明皿が大量に廃棄された地区であるが、木材は灯明皿の廃棄後に、それらがある程度埋没(４～６層)してから設置されている(第12図ｆ－ｆ')。また、木材より上位に堆積する８～10層はＳＤ2002の埋土である。以上のことから、灯明皿の大量廃棄の後しばらくして護岸施設がつくられ、さらにその後若干の時間をおいて、ＳＤ2002が掘削されたと考えられる。この付近は溝ＳＤ2054との合流点のすぐ西側にあたり、流水の影響を受けやすかったと考えられる。

６・７区では、南岸で幅20cm、長さ５ｍの木材と幅20cm、長さ３ｍの木材が２本並んだ状態で検出した。検出標高はほぼ同じで、45.9m前後である。ちょうど逆「Ｓ」字状に屈曲する地点に当たる。これらの木材検出時には須恵器や土師器が出土した。また、東側木材の東端南寄りには幅20cm、長さ１ｍの木材が２本出土しており、２本の木材に挟まれた状態で土器(第35図294～296)が出土した(第17図左下)。

８区では、北岸に幅10cm、厚さ３cm、長さ3.2mの板材を検出した。検出標高は45.6mである。逆「Ｓ」字状に屈曲して再び西に流れを変えるところにあたり、岸に水が直撃することを防ぐために護岸を行う必要があったと考えられる。

以上の護岸施設は検出状況から関連性が認められ、同時期に設置されたと考えられる。いずれも縦杭等の他の木材は確認できなかった。

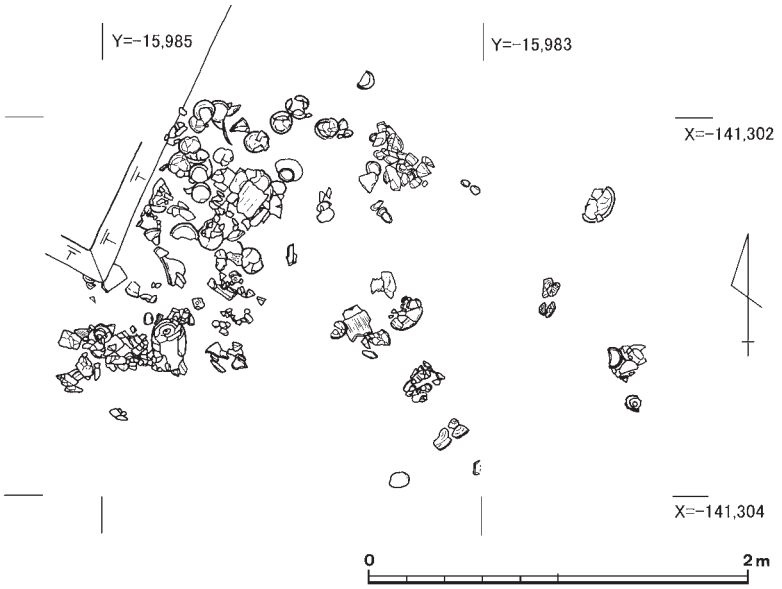
遺物の出土状況　地区割りにもとづいて概観する。

１区では、上述のように１区北と１区南に分かれる。１区北では、第１次調査で14トレンチを設定していた範囲についてＳＲ01を完掘したが、北半部では平面形の検出にとどまった。南半部では、ＳＲ01の堆積層から須恵器杯Ｂ・皿Ｃ・壺Ｍなど若干の遺物が出土した。また、北半部では、ＳＲ01の検出面で、土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・甕Ａ・甕Ｂや須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・杯Ｃ・鉢Ａ・平瓶、平城宮式軒丸瓦(6012Ｂ型式・6316Ｄｃ型式)・平城宮式軒平瓦(6572Ａ型式)、不明瓦質製品(第63図828～830)などがまとまって出土した(第14図)。これらは、出土状況から、木津川市教育委員会が調査した西側の礎石建物付近から廃棄されたと考えられ、第２期に属する。

１区南では、ＳＲ01の検出面や堆積層から土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｃ・甕Ａ、須恵器杯Ｂ・

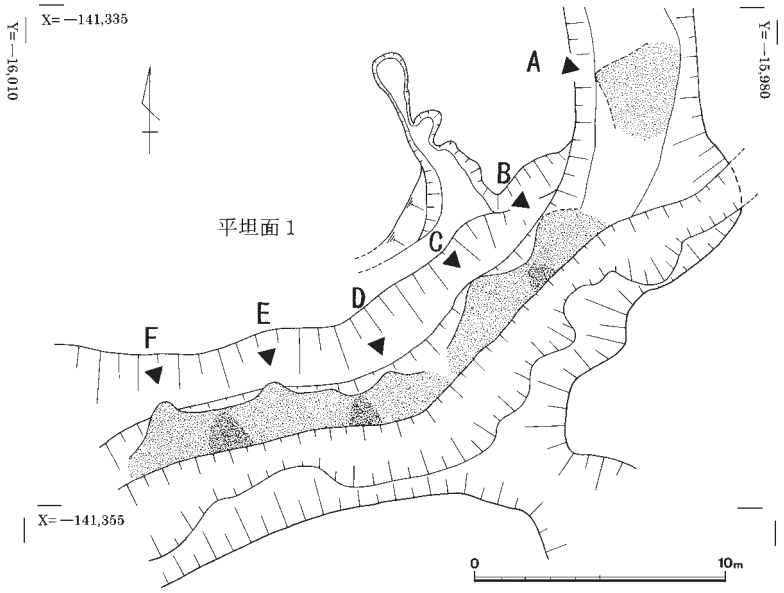
杯Ｂ蓋・鉢Ａ・壺Ｍなどが少量出土した。これらの遺物は、１区南の北東隅で重複関係にある溝ＳＤ2002が掘削される前に埋没していることが土層の観察から明らかになった。

２区でも、対象となる範囲が狭いこともあり、遺物はあまり出土していない。出土遺物としては、土師器皿Ａ、須恵器杯Ｂ蓋・皿Ｅ・壺Ｌ・壺Ｍなどがある。ところで、１区南と２区の出土遺物の中で注意を要するものとして須恵器壺Ｍがある。壺Ｍは可能性のあるものも含めると７点あるが、これらの多くは、ＳＤ2002の掘削前にＳＲ01が埋没した際の最終埋没層から出土している。壺Ｍは平城宮・京における土器研究によると、平城宮土器Ｖ以降に位置づけられており(注12)、ある程度時期を限定できる。したがって、ＳＲ01の最終埋没時期や、ＳＤ2002の掘削時期を検討する上で重要な資料となる。また、２区の南端には断ち割り２に伴うセクションが存在したが、その北側から土師器皿Ｃなどが10数点まとまって出土した。これらは次に述べる３区北端で出土した土器群と一体のものと考えられ、埋没状況などから第１期における平坦面１から投棄された一群と考えられる。



第14図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図(1)　１区北

３区から５区にかけては大量の土器群が、平坦面１からＳＲ01に向かって廃棄されたような状況で出土した。これらの大半が灯芯痕をもつ土師器皿Ｃであった。灯芯痕は１か所だけのものが多いことから、儀式などで一度限り使用されたものと考えられた。このような遺物の状態から、いわゆる燃灯供養に用いられたものと判断するに至った(注13)。これらは、検出状況から大きく６か所の廃棄のグループが抽出できた。これをＡ群～Ｆ群と呼ぶことに

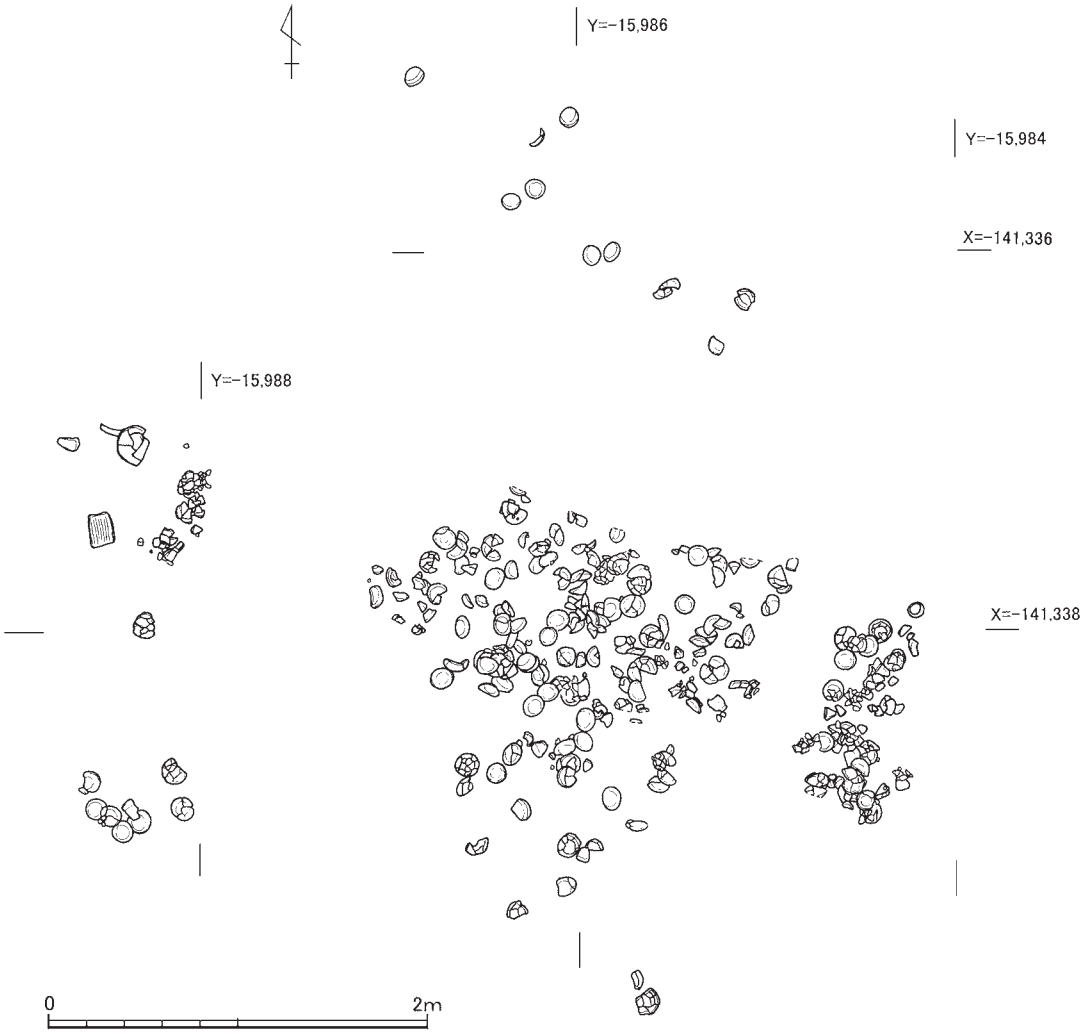


第15図　川跡ＳＲ01灯明皿集中出土か所全体図

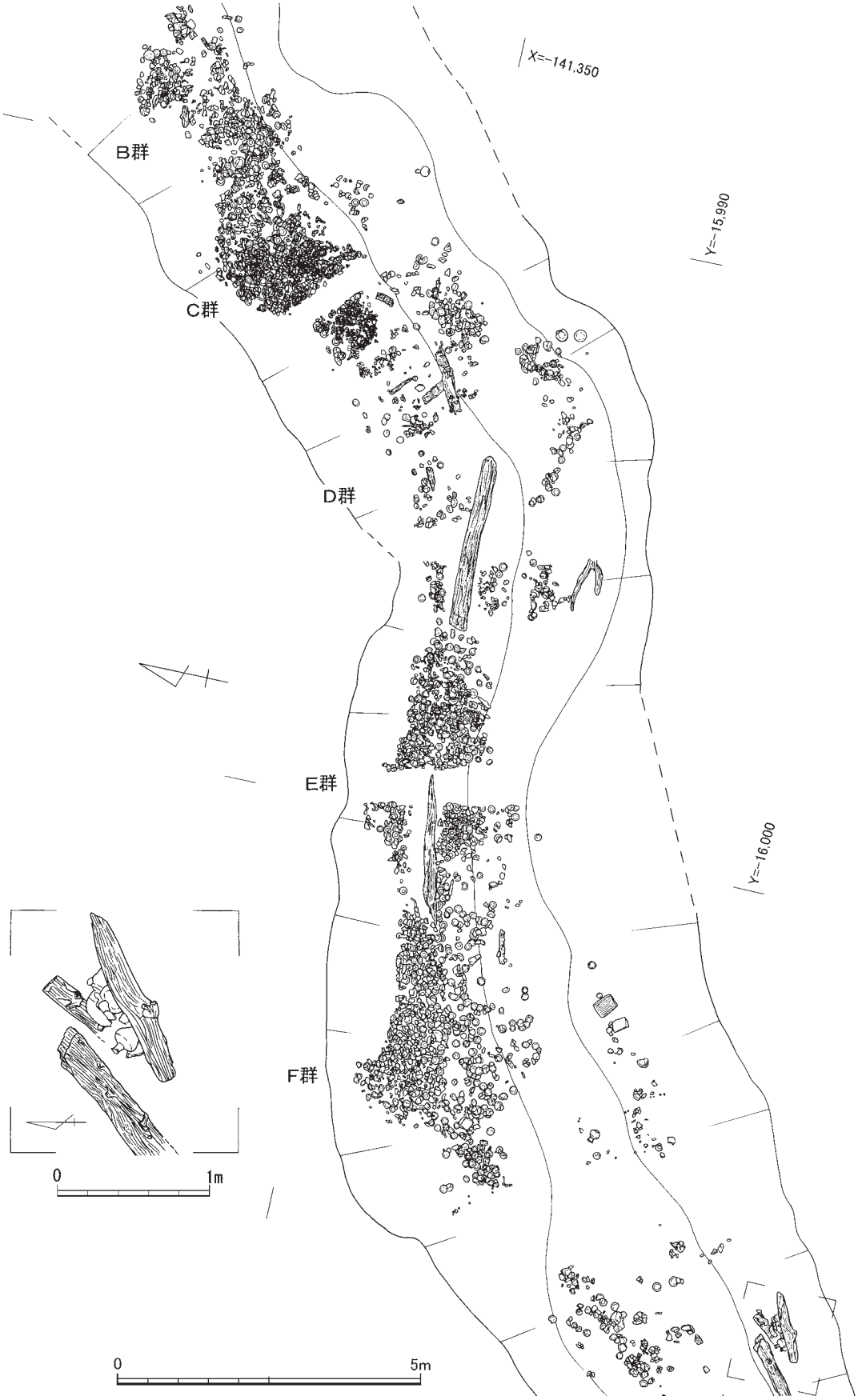
する（第15図）。３区では北半部でＡ群、中央部でＢ群、南半部から４区にかけてＣ群を検出した。Ａ群とＢ群の間には５ｍほどの空閑地がある。Ｂ群とＣ群は一部が重なり合っていた。

Ａ群の大半は断ち割り２で検出したほか、２区の南端部とＳＲ01の西肩からも若干の土器が出土した（第16図）。出土層位はＳＲ01下層の暗灰褐色粘質土層である（第12図ｄ－ｄ’７層）。ここからは土師器皿Ｃが160点ほど出土したが、他の器種としては、土師器椀Ｃ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ蓋・皿Ｅ・鉢Ａ・平瓶などが少量確認できる程度である。土師器椀Ｃや須恵器皿Ｅも灯明器として使用されたもので、器種構成に大きな偏りがある。Ａ群周辺は堆積状況からＳＤ2002が掘削された時点ではすでに埋没していた可能性が高い。したがって、Ａ群は平坦面１から廃棄された土器群としては唯一層位的に純粋な一群であり、第１期における燃灯供養の実態を示す可能性が高い。

Ｂ群はＡ群の南約５ｍで検出した（第17・18図）。土層観察用のセクション等を設けていなかったため詳細は不明であるが、遺物の出土状況や内容などから、Ｃ群よりもＢ群の方が上層に位置する可能性がある。ここからは土師器杯Ａ・皿Ａ・皿C・椀Ｃ・椀Ｘ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｍ・小型の平瓶・甕、丸瓦・平瓦などが出土した。このうち、須恵器の壺Ｍや小型の平瓶など



第16図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図(2)　廃棄Ａ群



第17図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図(3)　廃棄Ｂ～Ｆ群全体

第18図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図（４）　廃棄Ｂ・Ｃ群

はＢ群でも最上面で出土しており、第２期に伴うものである可能性が高い。土師器皿Ｃはおよそ120点出土しているが、土器の総量はほかの群に比べてやや少ない。また、丸瓦や平瓦の出土頻度が他の廃棄グループに比べ高い点は注意される。このような点は、先述のＡ群や後述するＣ・Ｅ・Ｆ群と比べてやや異った特徴を有する。以上の点を踏まえれば、Ｂ群は第１期における廃棄の最終段階の一群である可能性が高い。瓦類の廃棄も建物などの何らかの施設の放棄、廃絶を示す可能性もあろう。一方、土器群の集中的な分布は、南東部で突如として途切れたような状況を示す。これらはＢ群以西の廃棄グループのいずれにもみられるもので、この部分よりも南東側ないし南側がＳＤ2002の流路に該当することが、土層断面の観察などから明らかになっている。

Ｃ群の大半は３区に属するが、西端は４区まで延びる（第17・18図）。一方、東端は上述のように、Ｂ群の西端と重なり合う。比較的多数の土器がまとまって出土しており、土師器杯Ａ･杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｂ・椀Ｃ・椀Ｘ・甕、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯B蓋・杯Ｃ・皿Ｃ・皿Ｅなどが出土した。Ｃ群に伴う土師器皿Ｃは個体数を数えることができたものだけでも290点ほどあり、遺物の項で述べるように、重量計測分もあることから実数はもっと多かったと推定される。また、灯明器として使用された土師器杯Aや皿Ａも多数出土した。これらは多いもので４～６か所の灯芯痕を確認することができる。土師器皿Ｃと同時に使用されたのか､日常的に使用されていたものなのか、明らかでないが、出土状況からは前者である可能性は高い。これらの土器群は、断ち割り４に伴う東側のセクションから1.2mほどのところの、ＳＲ01の肩部を頂点として、ＳＲ01の斜面を下方に向かって扇状に開いたように分布していた。そして、この土器群も南東部で突如として途切れたような状況を示す。ＳＤ2002の流路を示すのであろう。

以上のＡ群～Ｃ群までの廃棄グループとは別にＳＲ01の中央部でも多数の遺物が出土した（第17図）。これらは土層の堆積状況の項でも述べたように、第２期のＳＤ2002に伴う遺物群と考えられる。ただし、調査中はＳＲ01の３区として遺物を取り上げている。出土した遺物としては土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・高杯・甕、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・鉢Ａ・壺Ｌ・壺Ｍなどがある。なお、この遺物群には本来、第１期に伴うものも含まれていると考えられる。

４区では上述の廃棄グループのうち､Ｄ群とＥ群を検出した。Ｄ群は４区の東半部に当たるが、他の群ほど明瞭なまとまりを確認することができなかった（第17・19図）。また、全体の出土量も少なく、土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・甕、須恵器杯Ｂ・鉢Ａなどが出土したに過ぎない。この付近ではＳＲ01の中央部に流出した遺物が多い上、第１次調査の８トレンチが設定され、多数の遺物が出土していることから、相当量が第２期に流出したと考えられる。

Ｅ群の大半は４区に属するが、西端は５区まで延びると考えられる（第17・19図）。また、東端も上述のＤ群と部分的に重なり合うと考えられる。ただし、両端とも護岸材が土器群の上層で検出されたため、詳細は不明である。出土した遺物としては土師器杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ、須恵器壺Ｌ・壺Ｍなどがある。量的には土師器皿Ｃが圧倒的に多く、他の器種は点数でみると、５％以下である。Ｅ群に伴う土師器皿Ｃは個体数を数えることができたものだけでも330点ほどあり、Ｃ群同様、実数はもっと多かったと推定される。なお、Ｅ群に伴う須恵器はほとんどなく、わずかに出土した土師器供膳具も灯芯痕が多数みられることから、Ｅ群の実態としては燃灯供養に使用した灯明器のみを何回にもわたって廃棄されたものが蓄積されたものと考えることができよう。これらは断ち割り５に伴う西側セクションのすぐ西側を頂点として扇状に廃棄されたと考えられる。このほか、Ｅ群の土器群とともに、和同開珎（第68図892～896）やガラス製細管状製品（第68図900～906）などが出土したが、法会との関係は不明である。和同開珎（初鋳年708年）は第１期の年代を考える上で、参考になる資料である。

このほか、流路の中央部でも多数の遺物が出土した。これらには土師器杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・椀Ｃ・甕、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｂ・皿Ｃ・杯Ｂ蓋・皿Ｂ蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・平瓶など

がある。いずれも第２期の層位から出土したもので、一部に第１期の遺物が含まれていると考えられる。

５区では上述の廃棄グループのうち、Ｆ群を検出した。Ｆ群の東端はＥ群と重なっており、区別は困難である。また、西端はおおむね断ち割り７付近で途切れる。出土した遺物としては、土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ｃ・甕、須恵器杯Ａ・皿Ｃ・杯Ｂ蓋・壺Ｍなどがある。Ｅ群と同様に、土師器皿Ｃの出土量が多く、個体数を数えることができたものだけでも400点に達し、やはり実数はもっと多かったと考えられる。他の器種はやはり５％程度にとどまり、土師器供膳具に灯芯痕がみられるなど、全体の傾向としてはＥ群に近い。

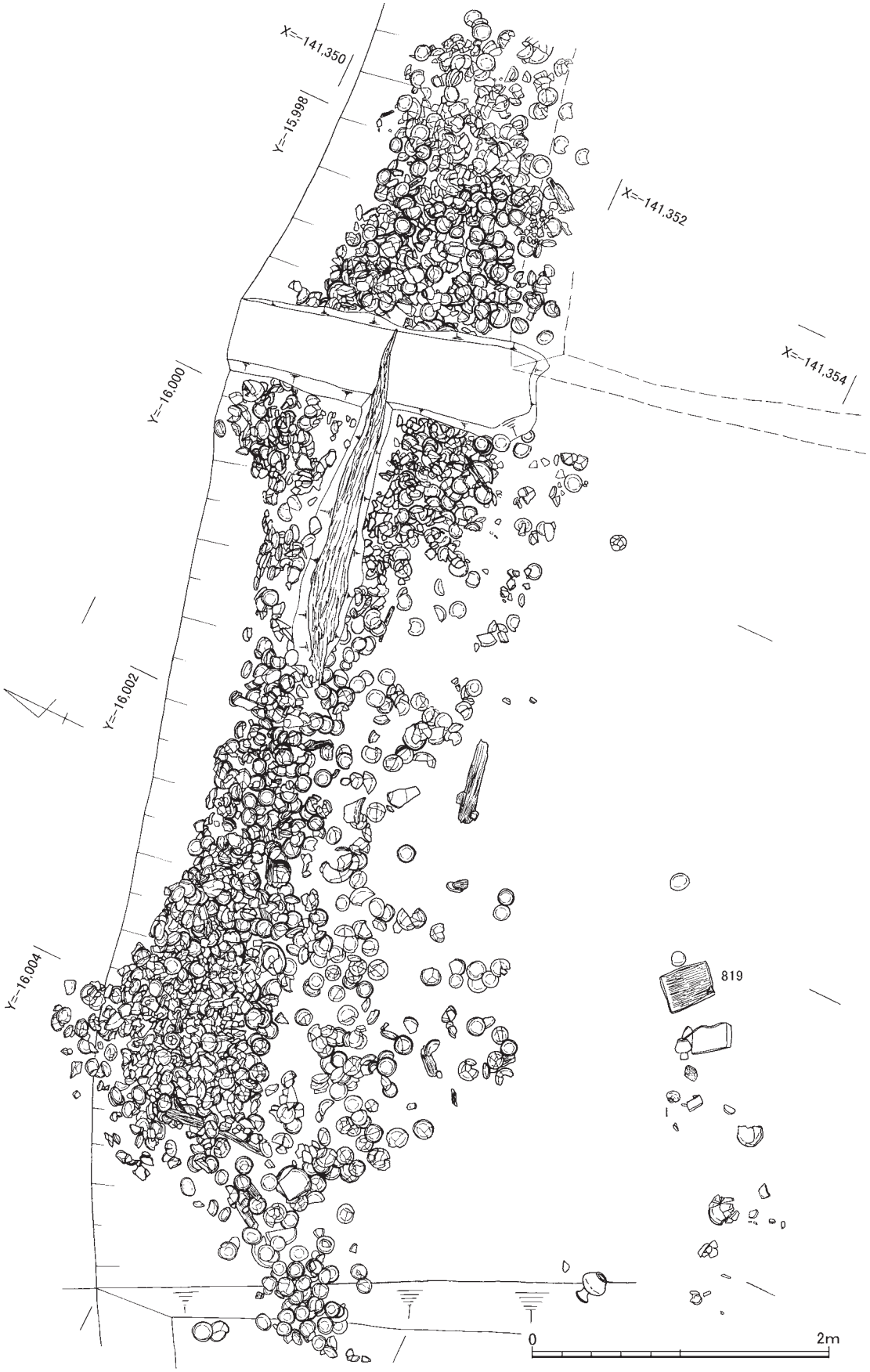
さて、Ｅ群やＦ群では、多数の土師器皿Ｃがみられるが、これらをどの程度の単位で廃棄したのかは、調査の中では確認できなかった。各廃棄グループごとに皿Ｃの出土量が大きく異なるので、燃灯供養における使用単位のようなものが存在し、それを何回、あるいは十何回と繰り返し廃棄することで、出土状況のような状態に至ったものと考えられる。この使用単位を明らかにすることはできなかったが、Ａ群で皿Ｃが約160点出土しており、後述するＳＲ01の10・11区の合計が約170点であることから、150～180点ほどを１つの単位としていた可能性を考えたい。また、量的に多数の皿Ｃが出土したＥ群やＦ群では、おおむね倍数にあたる点数が出土していると考えられる。

また、流路中央部でも多くの遺物が出土した。これらには土師器杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ｃ・壺Ｂ・甕、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺Ｌ・壺Ｍなどがある。いずれも第２期の層位から出土したもので、一部に第１期の遺物が含まれていると考えられる。

６区では、３区から５区のような大量廃棄された土器群は認められなかった(第17図)。遺物の出土傾向はＳＲ01の北岸と南岸では若干異にしている。まず、６区北岸では、土師器杯Ａ･皿Ｃ･椀Ｃ・甕Ｂ、須恵器杯Ｂ蓋・皿Ｅ・壺Ｎなどが、北岸の裾に沿って直線状に出土した。特に６区で出土した土師器皿Ｃの大半（６区全体でも100点に満たない）は北岸で出土している。出土状況から、これらの土器群は５区の廃棄グループのＦ群の一部が流水によって流れ出したものと考えられる。したがって、これらの土器群そのものは第１期に属する可能性が高いが、同時に、この出土位置は第２期におけるＳＤ2002の流路を示すものと考えられる。

６区南岸では、ＳＲ01の南肩を検出している際に出土した遺物がある。これらには土師器杯Ａ･杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｃ・甕Ａ、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・盤Ａ、黒色土器鉢Ａなどのほか、銅滓を含む鉱滓や鞴の羽口などがある。特に護岸材の間から出土した土器として土師器皿Ａ・甕Ａ、須恵器壺Ｌ(第35図294～296)がある。護岸の設置時期や第２期の時期を考える上で重要であるが、詳細な時期を知ることができる遺物ではない。なお、５区よりも東では、ＳＲ01の南半部から出土する遺物が少ないが、６区以西になると、明らかに増加する。この点で、遺物の出土傾向が５区と６区を境に大きく変化することが指摘できる。このことは、後述するように、ＳＲ01の南側、特に南西部における空間利用の方法による結果と考えることができる。

また、流路の中央部でも遺物が出土している。これらには土師器杯Ａ・杯Ｂ蓋・杯Ｃ・皿Ａ・

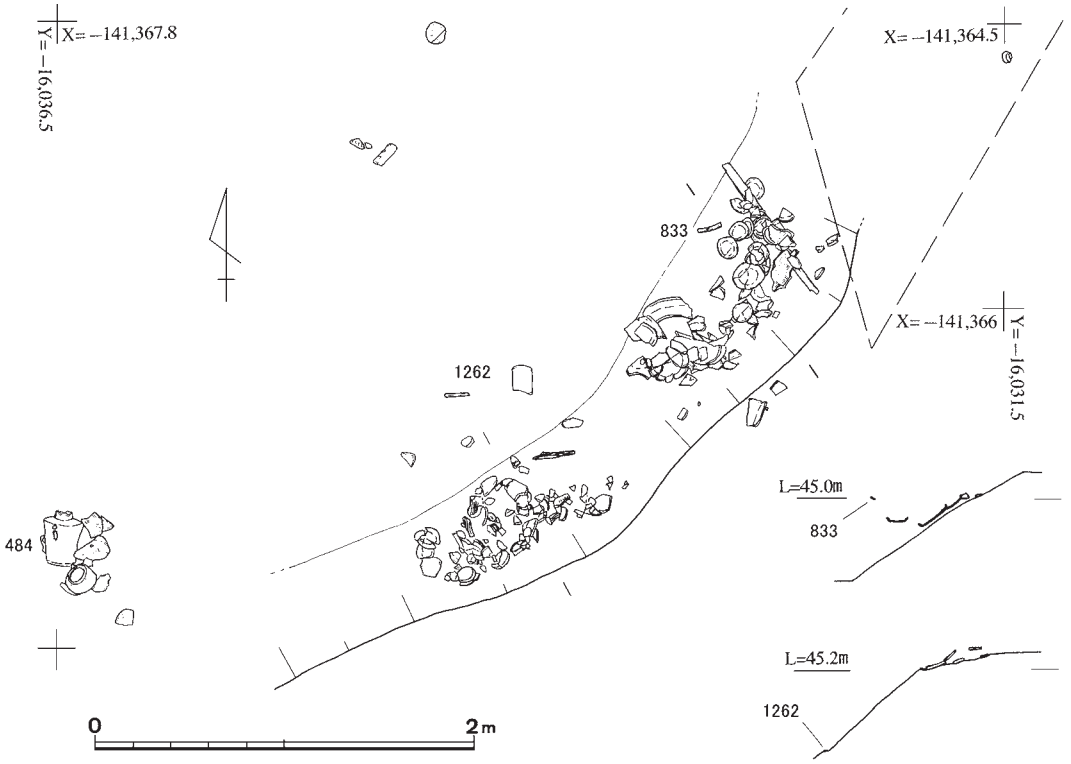


第19図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図（５）　廃棄Ｅ・Ｆ群

甕Ａ・甕Ｂ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ａ・平瓶、黒色土器片などがある。６区の南岸や中央部で出土した遺物は、いずれも第２期に相当する層位から出土したもので、第１期の流路はさらに下層に位置すると考えられる。

７区から９区にかけては全体として遺物の出土量は少ない。７区では土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・椀Ｃ・高杯・壺Ｂ・鉢Ｂ・甕、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ａ・平瓶・円面硯などのほか、黒色土器片や三彩陶器、原始灰釉陶器、瓦類、鞴の羽口、製塩土器、木製品などが出土した。これらのうち南岸から廃棄されたと考えられる遺物として土師器杯Ａ・皿Ａ・椀Ａ、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺類・円面硯、丸瓦などがある。南岸で出土した遺物のうち、円面硯が出土している点は注意される。また、土師器皿Ｃは７区全体でも50点足らずで、５区以東の状況とは大きく異なる。７区周辺で廃棄された可能性も残るが、流水によって上流から運ばれてきた可能性もあろう。以上の７区出土遺物は、いずれも第２期に相当する層位から出土した。

８区では三彩陶器火舎型香炉・壺・浄瓶、土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・甕Ａ・甕Ｂ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯B蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・平瓶などのほか、鼓胴の破片や銭貨（萬年通寶）、木製品などがある。また、８区は第１次調査の10トレンチに当たるが、やはり多くの遺物が出土している（第74図1087～第75図1117）。遺物の出土傾向は７区と異なり、やや北岸に偏っているようである。８区の出土遺物で注目されるのは、三彩陶器の出土点数が他の地区に比べ、やや多い点である。これらも北岸で出土しているものが多い。また、第１次調査分を加えても土師器皿Ｃは30点程度で、出土量はますます少なくなっている。以上の８区出土遺物は、いずれも第２期に相当する層



第20図　川跡ＳＲ01遺物出土状況図（６）　10・11区

位から出土したものである。なお、この第２期に相当する層位から萬年通寶（初鋳760年）が１点（第68図897）出土しており、注目される。第２期の実年代を考える上で重要な資料となるであろう。

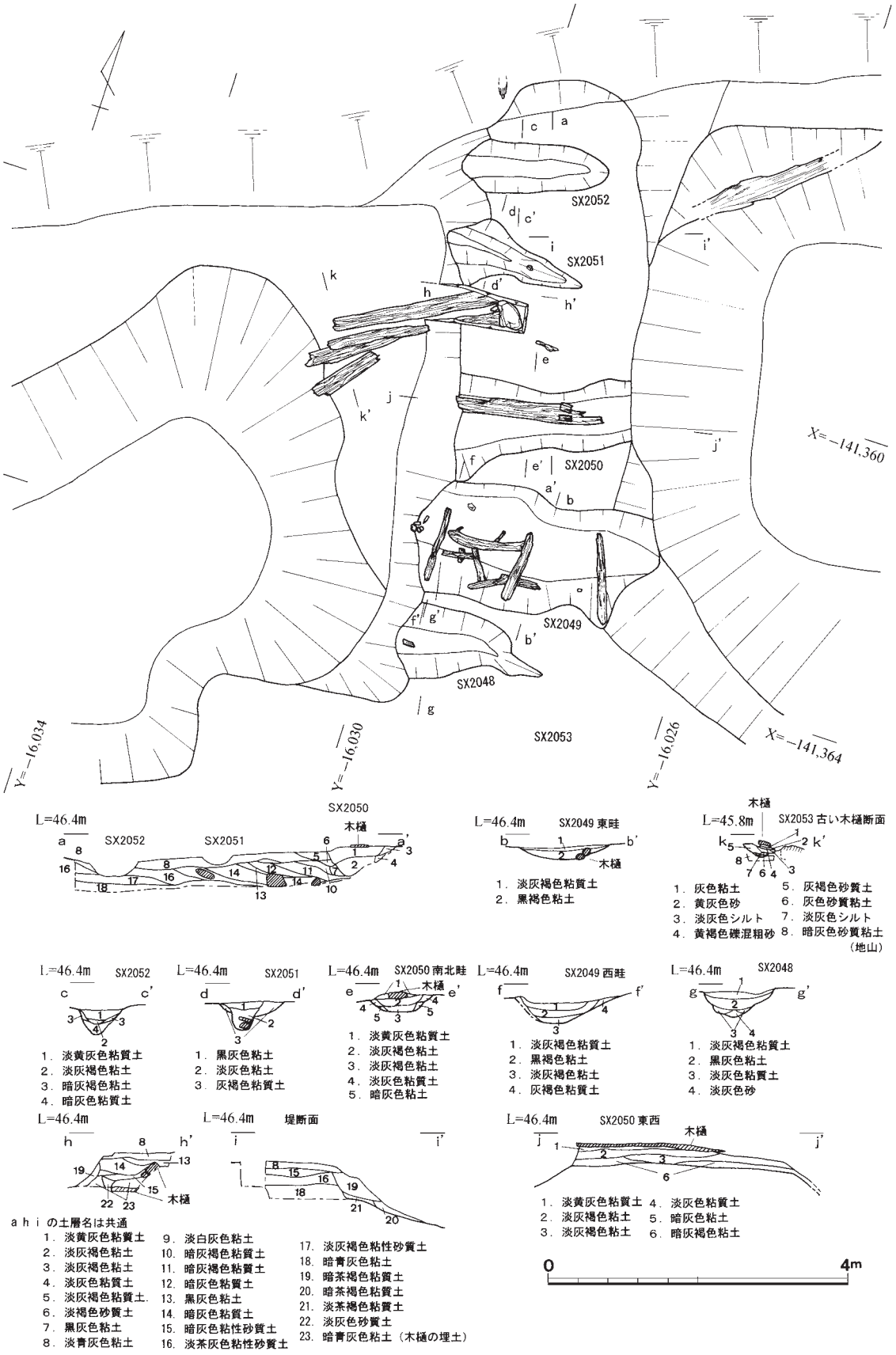
９区は７・８区に比べて、さらに出土遺物が少ない。出土遺物としては、土師器杯Ａ・杯Ｃ・皿Ｃ・椀Ａ・壺Ｂ・高杯・鍋Ａ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ａなどのほか、土馬や木製品がある。これら９区出土遺物はいずれも第２期に相当する層位から出土したものである。土師器皿Ｃもわずか10数点で、７区から９区までを合計しても90点ほどにしかならない。このことからも７～９区では燃灯供養などに伴う灯明皿の廃棄は行われていなかったと考える。

10区は堤ＳＸ2053の西側にあたるが、第１次調査16トレンチの調査成果と、断ち割り19の土層観察から上層は黒褐色系粘土層（第１次調査の有機物を大量に含んだ暗茶灰色シルト層に相当）で、多数の遺物が出土した。この層からは「阿支波支乃之多波毛美智」と墨書された万葉歌木簡（第64図833）をはじめ、三彩陶器壺、土師器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・椀Ｃ・壺Ｂ・壺Ｅ・鉢Ｂ・甕Ａ・甕Ｂ・竈、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｂ・皿Ｃ・壺Ａ・壺Ａ蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ａ・甕Ｃ、墨書土器、製塩土器、鞴の羽口、木製品、種子核などが出土した。これらのうち、土師器皿Ｃを中心にＳＲ01南岸からまとまって廃棄されたような状況で出土したものがある（第20図）。土師器皿Ｃは140点ほど出土しており、出土状況から３～５区ほどではないが、燃灯供養に伴う廃棄である可能性が高い。土師器皿Ｃも含めて10区出土土器の３割以上がこの南岸付近から出土した。土師器皿Ｃ以外では土師器甕などの煮炊具や須恵器甕、各種の壺など貯蔵具の出土点数が多い。また、墨書土器は10区だけで総出土点数の３割が出土しており、11区と合わせれば６割を超える点も注意される。また、下層は灰褐色砂層（第１次調査の灰色砂･灰色シルト･有機物の細かいラミナ）であるが、出土遺物は少ない。

11区の遺物出土状況は10区のそれに類似しており、11区出土土器の５割近くが、ＳＲ01南岸からまとまって出土した。出土層位も大半が黒褐色系粘土層である。出土遺物としては、土師器杯Ａ・杯Ｃ・杯Ｂ蓋・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・椀Ｃ・鉢Ｂ・甕Ａ・甕Ｂ・鍋Ａ、須恵器杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｂ・皿Ｂ蓋・壺Ａ蓋・壺Ｌ・壺Ｍ・三耳壺・水瓶・鉢Ａ・鉢Ｄのほか、製塩土器、木製品などがあり、煮炊具や貯蔵具の多い点が特徴的である。11区における土師器皿Ｃの出土点数は30点ほどであり、10区に比べると量的に少ない。このこと自体が皿Ｃの廃棄が10区から16トレンチにかけて実施されたことを示していると考えられる。以上のような10・11区における土器の出土状況はＳＲ01の南西側における空間利用のあり方を考える上で重要である。

出土遺物の取り上げ１区から11区までの地区割りを基本としたが、上述のように大量の土師器灯明皿をはじめとする遺物が出土したことから、代表的な一群については、出土状況を縮尺1/10で図化したのち、個々の土器に取上番号を付して取り上げた。大量に出土した３～５区の遺物については、原則として、１ｍグリッド単位で取り上げた。また、図化するほど集中して出土しなかった土器類や三彩陶器、銭貨、ガラス管など特殊な遺物についてはトータルステーションによる３次元座標を計測して取り上げた。

⑩**堤ＳＸ2053**（第21図）　調査地の西部で検出した。川跡ＳＲ01を流れる水を制御するために



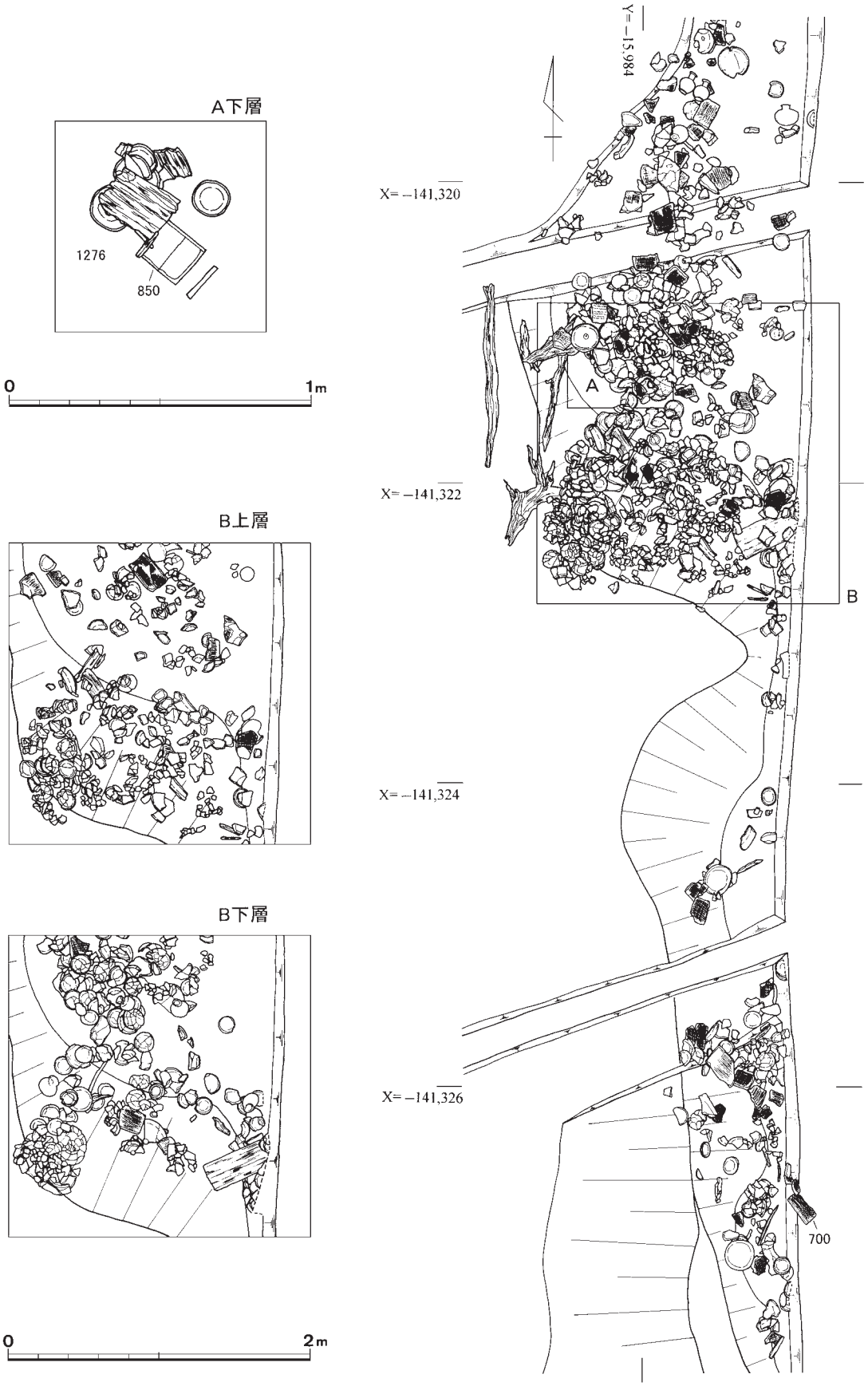
第21図　堤ＳＸ2053実測図

設置された施設と考えられる。ＳＲ01に直交し、断面がかまぼこ型を呈する。上端幅２ｍ、下端幅７ｍで、検出高は約1.2mである。ただし、遺構の重要性を考慮して基底部までの調査は行っていない。堤の北半分で南北方向(断面ａ－ａ’)および東西方向(断面ｉ－ｉ’)の断ち割りを設定し、深さ0.5mまで掘削した。この断ち割りの土層観察により、堤は、少なくとも検出面から0.5m分は盛り土により造成されていることが判明した。盛り土には20～30cm大の礫が含まれていた。堤上面では中世の暗渠と考えられる溝状遺構を検出した。

さらに、断ち割りの底で、中世の溝状遺構よりも古い段階の木樋を伴う暗渠が設置されているのを確認した。この木樋の位置は、堤の中央より北寄りで、中世の木樋よりも西に位置する。方向も中世の木樋の方向よりやや南西に振れており、設置のレベルは0.5m低い。また、木樋は堤の東端まで達していなかった。以上のことから古い木樋の明確な時期は不明であるが、堤は中世段階にこの面に盛り土をして改修されていることが明らかである。また、ＳＸ2053は古い木樋の検出面がテラス状に西側に張り出しており、これが１段階古い段階の堤の下部であるとすると、堤はこの部分に古い木樋と直交して設置されていたと想定される。中世の堤改修時に若干東寄りに方向をずらしたものと考えられる。東西方向の断ち割りで、古い木樋が東端まで延びておらず確認できなかったのはそのためであろう。周辺の精査で、三彩壺・土師器皿Ａ・椀Ａ、須恵器杯Ｂ・壺Ｍ・鉢Ａ、瓦などが出土している。断ち割りも基底部まで実施していないため、堤の設置時期は不明である。

⑪溝ＳＤ2002(第22・23図)　掘立柱建物跡ＳＢ01と川跡ＳＲ01の東側および南東側で検出した。ＳＲ01の項で述べたように、ＳＢ01の東側で、ＳＲ01が埋没した後に掘削されている。ＳＤ2002は、調査区の北東隅で、長さ8.8m分を確認した(ＳＤ2002北部)。幅２ｍ以上、深さ0.45mである。埋土は上層が青灰色粘土で、下層が暗灰褐色粘性砂質土である(第12図ｃ－ｃ’)。ここよりも南は一旦調査区外である北東丘陵の裾を南流するようで、ＳＤ2002北部の南端から南へ約12.5mのところで、流れをほぼ西に向けた状態で検出した(ＳＤ2002南部)。検出長は約14mで、それよりも西側はＳＲ01とほぼ同じ流路を辿る。幅２～３ｍ、深さ0.6m以上である。埋土は上層が灰褐色粘質土、中層が黒灰色粘質土で、下層が黒緑灰色砂層である(第23図上段)。ＳＲ01と重複するＳＤ2002の流路は、ＳＲ01の３区から７区にかけて両岸に３～５ｍの丸太や板を据え、護岸施設を設けている。この結果、造成された溝の幅はＳＲ01当初よりも狭くなっている。逆「Ｓ」字状の屈曲部には、上流から運ばれた土が徐々に堆積したようで、土層断面は縞層(ラミナ)であった(第12図ｉ－ｉ’)。なお、ＳＤ2002北部については、溝の底までほぼ完掘したが、ＳＤ2002南部については溝の底まで達していない。

次に遺物の出土状況について述べる。ＳＤ2002北部では、検出面から若干掘り下げたところで土器等が集中して出土したため、出土状況を大きく２回に分けて図化し、遺物を取り上げた(第22図ａ上層、下層・ｂ下層)。遺物は、上層分を取り上げるとすぐに下層分が出土するような状況であり、基本的には同一層からの出土と考えられる。黒漆塗箱蓋(第66図850)と厨子の扉(第67図1276)は下層分を取り上げた際に、さらに下層から出土したため、別に図化した。また、これ

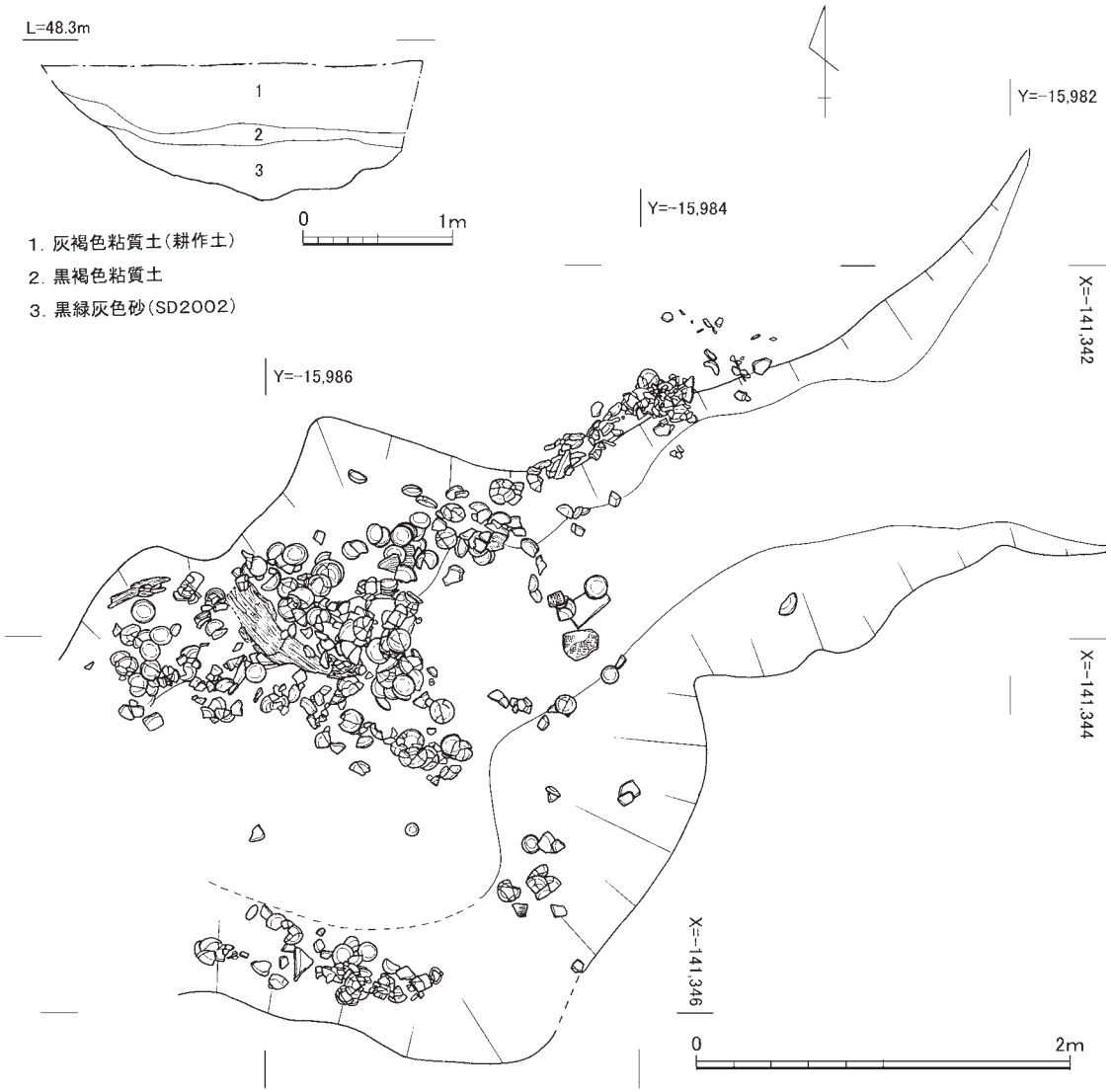


第22図　溝ＳＤ2002北部遺物出土状況図

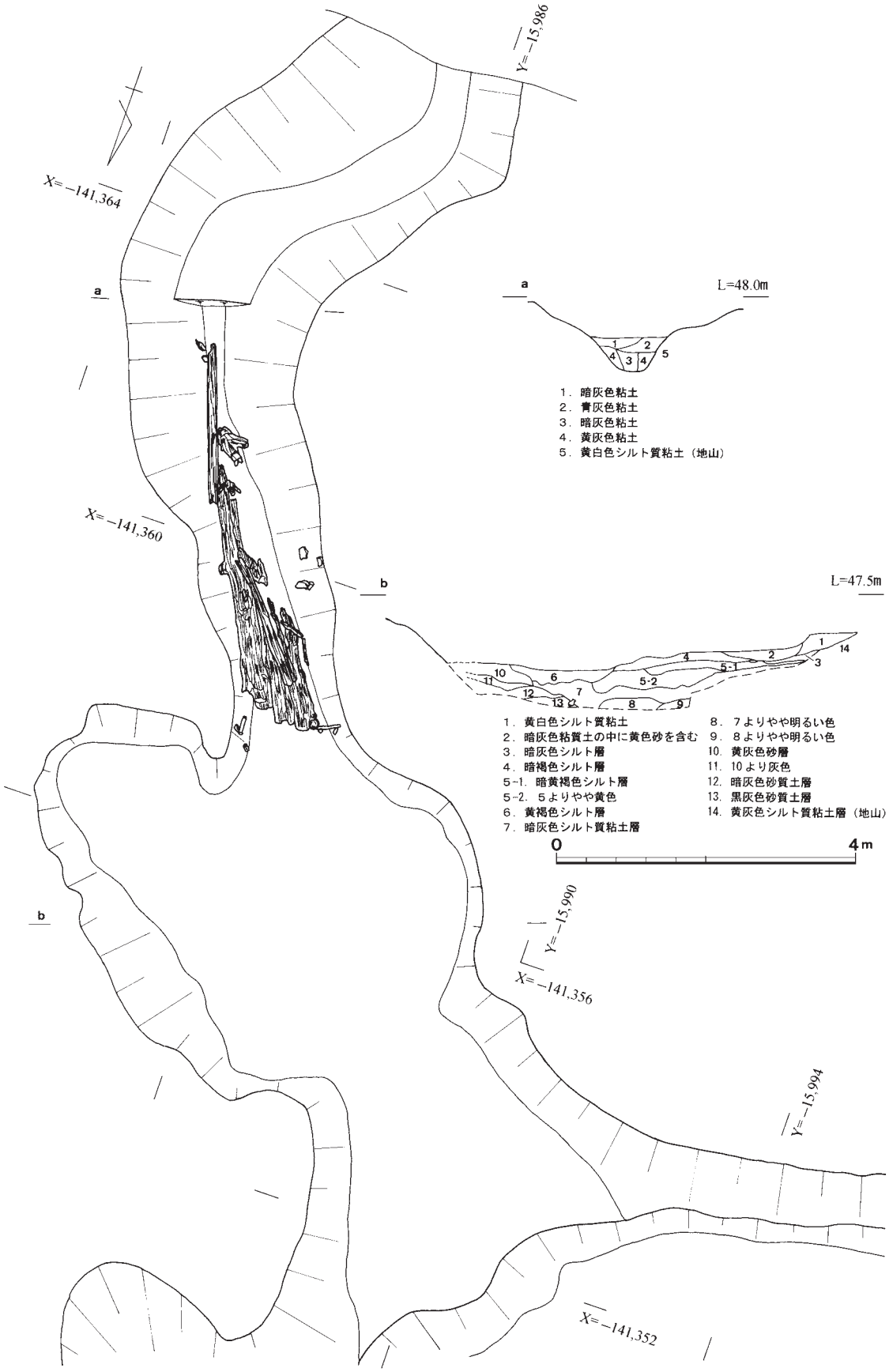
らは出土状況から平坦面１からまとめて廃棄されている。遺物のまとまりから３～４か所の単位があるようである。出土遺物には、灯明皿として使用された土師器皿Ｃのほか、彩釉山水陶器（第50図694・700・701）や奈良三彩（第49図687）、須恵器、土師器、黒色土器、瓦などがある。瓦は、平瓦が一定量、どちらかといえば上位で出土している傾向にある。

ＳＤ2002南部では、上層の黒色系粘土から大量の土師器皿Ｃがまとまって出土している（第23図）。皿Ｃの残りはよく、完形品が多数含まれる。また、皿Ｃとともに出土した土師器のうち、煮炊具の割合はＳＲ01の６～７区と同じぐらいである。これらは、平坦面１および平坦面２から廃棄されたものと考えられる。

⑫溝ＳＤ2054（第24図）　調査区中央の南半部で検出した。検出長は17.6mである。南部で幅2.5m、深さ0.5mに対して、北側約10mでは幅３～５m、深さ0.7m以上と大きくなる。また、ＳＲ01と合流する手前では東西6.6m、南北3.4mほどの広い空間がある。ここから第２期に属する遺物が出土した。他の地点はほとんど遺物がなかった。溝の中央部では、溝の底に幅30cm、長



第23図　溝ＳＤ2002南部遺物出土状況図

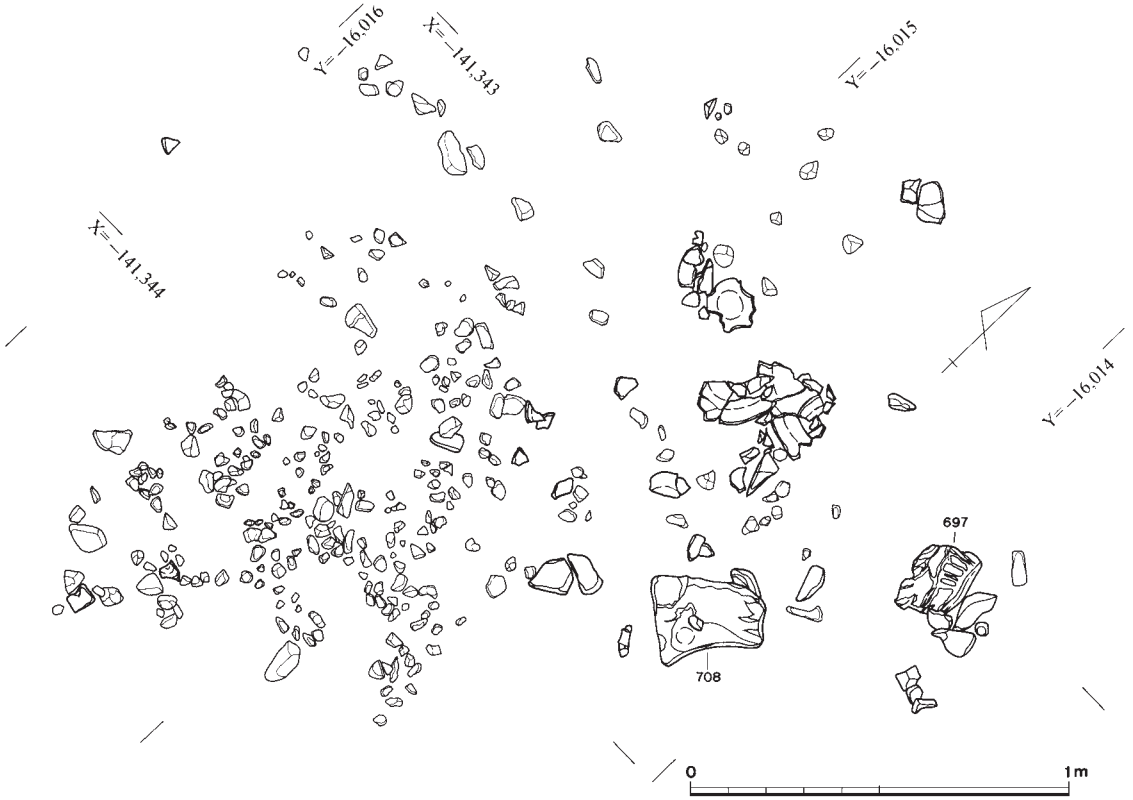


第24図　溝ＳＤ2054実測図

さ３ｍと、幅15cm、長さ２ｍの木材が縦に並べられており、北側の木材は２枚あわせになっていた。木材は黄灰色粘土で埋められており（第24図a－a’、４層）、暗渠になっていた。埋土からは第２期に属する土器が出土しており、この暗渠が設置されたのは第２期の可能性が高い。暗渠の北端辺りはしがらみ状になって、ここから溝幅が広くなる。暗渠の出口であったと考えられる。

土層の堆積状況は南部と北部の２か所で確認した。南部については前述のとおりである。北部は、１層から９層までシルト層が堆積しており、水がよく流れていた状態であったことが分かる。東肩の下層には暗灰色系の砂質土（第24図ｂ－ｂ’、11～13層）が堆積しており、古い段階には水量が少なかったようである。７層と13層の境目で須恵器壺M（第47図660）が出土している。なお、暗渠より南側と北側については、溝の底まで完掘していない。

⑬段状遺構ＳＸ2020（第25図）　調査地の中央部、やや西寄りで検出した。当初は平坦面１の西端の状況を確認するための断ち割りを行ったもので、その結果、礫混じりの灰褐色粘性砂質土や灰色砂礫土が堆積しているのを確認した。この堆積層からは摩滅した土製相輪と考えられる破片（第63図832）が出土した。この堆積層は近世になって耕作地を確保するための造成土と考えられ、この土層を除去したところ、幅1.5m、長さ2.5mの平坦面が確認できた。標高は平坦面１の西端よりも約0.8m低い。この平坦面の直上で彩釉山水陶器や須恵器・土師器など奈良時代の遺物が少量ながらまとまって出土している。彩釉山水陶器は、708・697以外は細片が多いが出土総量の３割がここで出土している。須恵器は杯Ａと壺Mの底部が、土師器は、図示していないが、供膳具のほか甕が出土している（第48図667～669・672）。以上のことから、この平坦面は第２期



第25図　段状遺構ＳＸ2020遺物出土状況図

に何らかの形で利用されており、遺跡の廃絶期に彩釉山水陶器をはじめとする土器が廃棄されたと考えられる。ＳＲ01の張り出し部分の北側に位置し、平坦面１から張り出し部へ移動するのに好都合の場所であるが、後世の削平等により平坦面１からこの平坦面への通路等は確認できなかった。

（伊野近富・筒井崇史・松尾史子）

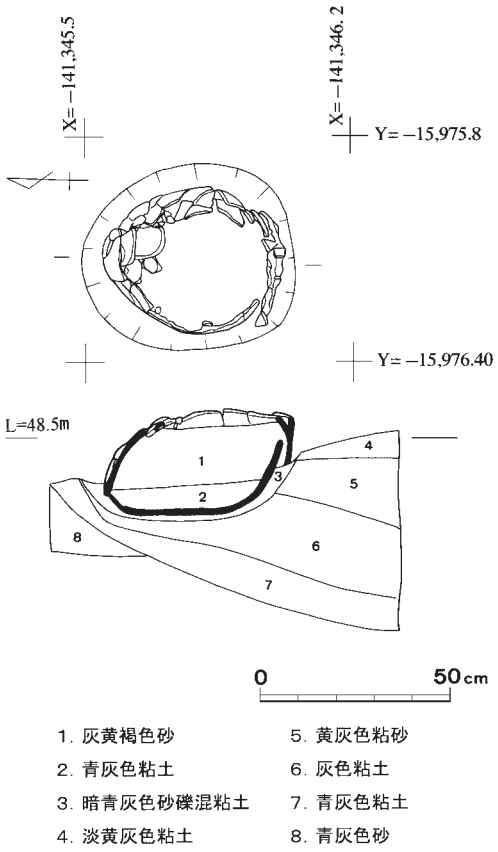
２）その他の時代の遺構

（1）弥生時代の遺構

①土器棺墓ＳＸ2015（第26図）　川跡ＳＲ01の南東角から掘立柱建物跡ＳＢ02・03や井戸ＳＥ01が立地する平坦面２へ向かう緩斜面で検出した。掘形の平面形は長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さは20cmである。土坑内には、弥生時代中期の甕（第69図918）１個体が横位で埋められていた。甕の口は別の甕の破片で蓋をするように覆われていた。甕の中には土砂が流入しているのみで遺物は出土しなかった。検出状況から土器棺墓であると考える。

（2）中世の遺構

川跡ＳＲ01の西部に設けられた堤ＳＸ2053は、先述したように木樋の存在から中世にも堤として使用されていたと考えられる（第21図）。そして近世以降、現代まで水田の畦畔として遺存していた。中世の遺構として堤ＳＸ2053の上面で、堤に直交する５条の溝状遺構を検出した。出土遺物および層位からいずれも中世に設置された暗渠と考えられるが、木樋等の施設が確認できたのは２か所のみである。



第26図　土器棺墓ＳＸ2015実測図

①溝状遺構ＳＸ2049（第21図）　長さ3.4m、最大幅1.7m、深さ0.2～0.3mの東西方向の溝状遺構である。溝内から１m前後の木材が縦横に並べられた状態で出土し、水路のしがらみのような機能が想定された。堤の東から西へ排水するための暗渠であると考えられる。また、掘形の埋土より「神雄寺」と墨書された須恵器（第52図726）や瓦器椀（第55図784）が出土した。

②溝状遺構ＳＸ2050（第21図）　長さ2.3m、幅0.7～1.4m、深さ0.2mの溝状遺構である。溝の中央北よりには長さ２m、幅0.2mの板状木材を２枚合わせにした木樋が出土した。ＳＸ2049と同じく堤の東から西へ排水するための暗渠であったと考えられる。

③溝状遺構ＳＸ2048・2051・2052（第21図）　ＳＸ2048は長さ2.4m、幅１m、深さ0.4mである。ＳＸ2051は長さ２m、最大幅１m、深さ0.4mであ

る。ＳＸ2052は長さ２ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.4ｍである。いずれも東西方向で、木樋等の木材は出土していない。

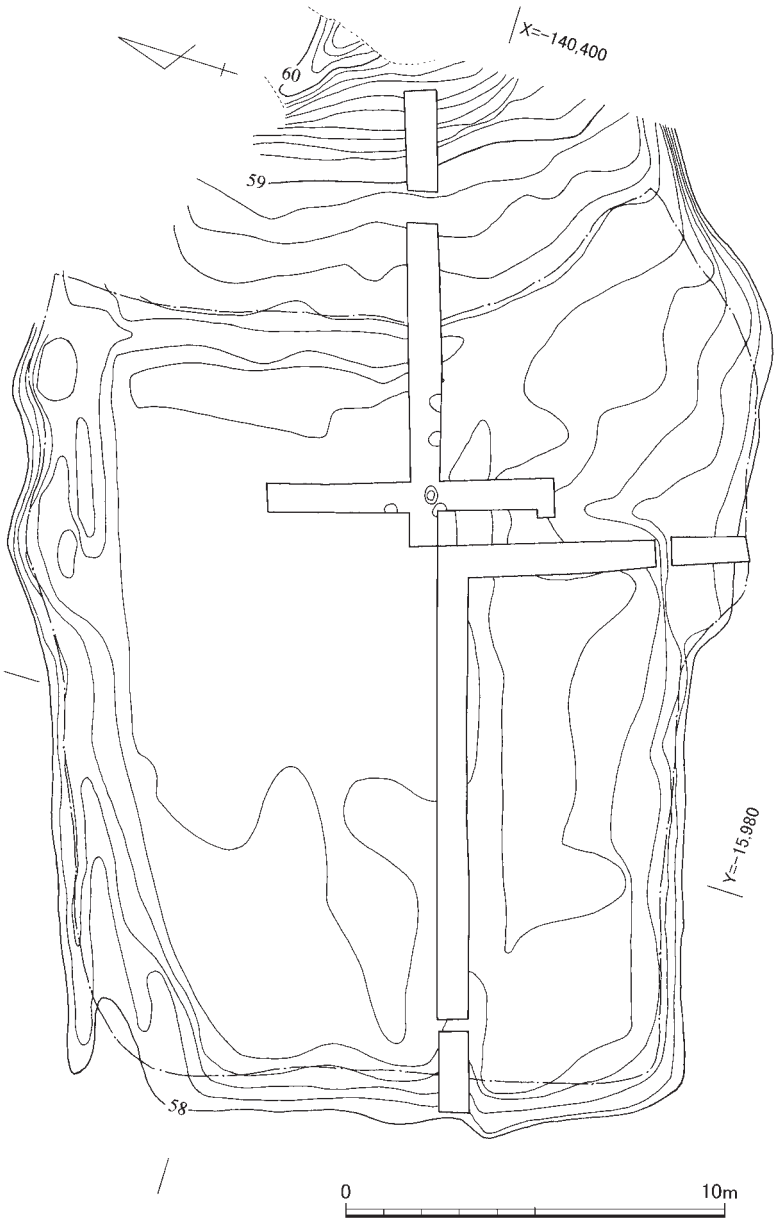
（松尾史子）

６．試掘調査

谷部で面的調査を実施したところ、多数の墨書土器により奈良時代に「神雄寺」という寺院が存在した可能性が高まった。遺物においても彩釉山水陶器や多量の土師器灯明専用皿、さらには万葉歌木簡が出土するなど､にわかに馬場南遺跡の重要性が注目されるようになった。このため、文化庁、京都府教育委員会、木津川市教育委員会が協議して、周辺部での遺跡範囲確認調査が必要との判断がなされた。調査地の南側については、都市再生機構の事業地内であったため、都市再生機構と京都府教育委員会の協議により、南丘陵上で30㎡の試掘調査を当調査研究センターが実施することとなった。

調査地は南丘陵上に位置する（第２図）。馬場南遺跡は、この南丘陵によって、井関川が開析した広い谷とは分断されている。

南丘陵は、調査前は山林であった。地形は東から西に向かって傾斜していたが、数段に亘り、平坦面があった。この中のもっとも広い場所（東西26ｍ、南北16ｍ）に、十字形にトレンチを設定した（第27図）。掘削はすべて人力で行った。表層の腐植土を取り除くと、直ちに地山と思われる黄褐色土を検出した。東側は尾根を削平して、平坦面を作った



第27図　試掘調査地実測図

ようで、人工的であったが、出土遺物は近世以降のものであった。

中央部で柱穴数基を検出したものの、遺物は出土しなかった。全体を10cmほど掘り下げたが、遺構・遺物ともほとんどなかった。中世に遡る可能性のある土師器皿の小片１点を確認したのみであった。

調査の結果、近世以降の人為的な削平は認められたが、古代まで遡る資料は得られなかった。

（伊野近富）

７．出土遺物１（第２次調査）

今回の調査では、弥生時代から中世に至るまでの遺物が出土したが、その９割以上が奈良時代に属するものである。奈良時代の遺物としては、須恵器・土師器・黒色土器などの土器類、三彩陶器、山や水面をかたどった彩釉山水陶器、瓦塼類、木簡、木製品、銭貨など、多種多様な遺物が出土した。一方、ごく少量ながら石器、弥生土器、古墳時代の須恵器、中世の瓦器、土師器などが出土した。これらは遺物包含層が主体であるが、遺構に伴うものもある。

１）奈良時代の遺物

奈良時代の遺物は、上記のように多種多様なものが出土しているので、遺物の種類ごとに報告する。

(1)土器類

出土した土器類のうちおよそ８割が、調査地を縦断する川跡ＳＲ01から出土した。それ以外は、溝ＳＤ2002ではややまとまった土器が出土したが、掘立柱建物跡や井戸、土器溜まりなどから出土した土器はそれほど多くない。なお、以下では、土師器供膳具の調整手法については、平城宮・京の調査報告に準じるものとする。(注14)

①川跡ＳＲ01

土師器、須恵器、黒色土器などが整理箱にして157箱出土した。土師器や須恵器の中には墨書されたものが多数認められたが、これらは別項を設けたので、そちらを参照していただきたい。出土した土器のうちの８割以上が燃灯供養などに用いられたと考えられる土師器の灯明専用皿（皿Ｃ）である。ＳＲ01出土土器の報告に当たっては、まず、器種構成に関する分析について述べ、その後、個々の遺物について報告を行う。なお、ＳＲ01の調査では、土層観察用のセクションなどをもとに１区から11区までの地区割りを行って、遺物の取り上げを行ったので、以下の報告でもこの地区割りにもとづいて行うこととする（第11図）。

器種構成　ＳＲ01からは大量の土器が出土したが、報告書刊行のための限られた期間では十分な接合作業と個体識別作業を行うことができなかった。しかし、ＳＲ01出土土器の器種構成を明らかにすることは、馬場南遺跡の性格を考える上で、重要と考える。そこで、以下のような方法で個体数を数え、出土地点ごとに、土器の種類・器種別に集計した（付表２・３）。

個体数の算出は、不十分ながらも接合作業を経たすべての破片を対象とし、口縁部ないし底部の残存率が1/6以上の破片について、可能な限り、個体の判別を行い、個体数を数えた。また、

残存率1/6以下の破片でも、明らかに１個体と判断できる破片は数えることにした。これによって、おおよその出土傾向を示すことができたのではないかと考えている。

ただし、土師器皿Ｃ、すなわち灯明専用皿の個体数は、別の方法によって数えた。土師器皿Ｃの個体数の算出は、まず、口縁部で1/4以上残存しているものを１個体として数えた。この際、皿Ｃの出土量が膨大であるため、個体の判別は行うことはほとんどできていない。したがって、1/2以下の場合、二重に数えてしまう可能性もあったので、できるだけ底部まで遺存しているものを取り上げ、1/4以上、1/2以下のものでも底部が遺存しないものは排除するようにつとめた。そして、1/4以下のものや１個体と認定するのに至らなかったものは、すべて整理箱ごとに重量を計測し、サンプルとして取り出した180点あまりの平均重量である94gで除し、推定個体数を算出した。皿Ｃだけを取り出し、出土地点ごとに表にしたのが付表５である。

ところで、遺構の項でも述べたように、ＳＲ01出土土器は第１期と第２期に属するものがそれぞれあるが、その区別が十分にできないまま遺物を取り上げている。そこでＳＲ01の北岸から廃棄されたＡ群からＦ群にかけての遺物と、第１期最終段階と考えられる１区南や２区出土遺物を第１期のものとし、付表２に示した。また、１区北と３区から11区にかけて出土した土器を第２期のものとし、付表３に示した。また、ＳＲ01（７～11区）と同じ性格を有する第２期の溝ＳＤ2002出土土器の器種構成を付表４にまとめた。

以下、ＳＲ01とＳＤ2002から出土した土器の器種構成について概観することにしたい。

さて、第１期に位置づけられる付表２をみると、土師器54.9％、須恵器43.2％、三彩等の陶器1.9％となる。須恵器の壺Ｍや三彩等は出土位置から、第２期に伴うものである可能性が高いので、割り引いて考えると、土師器の占める割合は一層高くなる。土師器では杯Ａ･皿Ａの割合が高く、両者合わせて60.7％である。これに次ぐのが椀Ｃで、13.5％である。これら３器種の多くは灯芯痕がみられ、灯明器として用いられたことが明らかである。第１期における土師器供膳具の特異な使用状況、偏りが確認できる。他の器種では杯Ｃが7.9％、甕類が6.7％である。また、椀Ｘとした器種は第２期では確認できなかった。

須恵器では壺Ｌと壺Ｍを合わせて30.0％と他を圧倒する量が出土しているが、上述のように壺Ｍが第２期に属するものとするならば、この比率は下がる。一方、供膳具である杯Ａ・杯Ｂが合わせて18.4％しか出土していない。これに次ぐのが須恵器の灯明器である皿Ｅで、12.9％を占める。総量としてはごくわずかであるが、第２期と比較して皿Ｅが多い点で、皿Ｅの性格が燃灯供養に伴うものであることを物語っていよう。また、平城宮・京における土器研究によると[注15]、皿Ｅは奈良時代でも前半期に盛行する。この点も第１期の時期を考える上で参考になる。

三彩陶器も1.9％存在するが、第２期の混入である可能性が高い。黒色土器が認められないのも時期的な問題として注意される。

これに対して、第２期に位置づけられる付表３をみると、土師器46.1％、須恵器51.1％、黒色土器0.2％、三彩等の陶器2.6％となる。第１期と比べると、土師器と須恵器の出土量がほぼ拮抗する。また、数値に表れない破片資料数点を含めて、黒色土器をごく少量確認している。土師器

では杯Ａ・皿Ａは合わせて42.2％と第１期に比べ減少している。第１期にみられなかった椀Ａが新たに出現し、9.0％を占める。椀Ｃは第１期に比べわずかに減少している（13.5％→9.0％）。甕類は第１期に比べ増加している（6.7％→16.8％）が、これは第１期が燃灯供養中心の資料であるためであろう。

須恵器では杯Ａ・杯Ｂが合わせて25.4％で、第１期に比べ少し増加している。杯Ｂと杯Ｂ蓋はほぼ同数が出土している。皿Ｅはわずか１点のみで第１期に比べ著しく減少している（12.9％→0.4％）。壺Ｌと壺Ｍは合わせて27.7％を占めるが、壺Ｍは上述のように第１期の資料の多くも第２期に属する可能性があるため、この数値は高くなる可能性がある。また、出土点数でも第１期・第２期合わせると50点以上あり、その用途が注目される。第２期の壺Ｌも40点以上出土しており、馬場南遺跡の壺Ｌと壺Ｍの多さが注目される。この点については、平城宮・京では、肩部に稜を持つものが平城宮土器Ⅲ以降減少し、肩部に丸味を持つものが一般化するという[注16]。馬場南遺跡における壺Ｌの多さや肩部に稜を持つ壺Ｋが１点しか確認できない（第34図280）ことから、第２期の時期を考える上で参考になる。

次に付表４からＳＲ01上層と同一の遺構と考えられるＳＤ2002の器種構成についてみる。まず、種類別では土師器31.7％、須恵器66.3％、三彩陶器１％、黒色土器１％となり、ＳＲ01上層とはやや異なった傾向が読み取れる。ＳＲ01上層に比べると土師器の割合が低く、須恵器は２倍以上ある。ＳＲ01上層ではほぼ拮抗していることを踏まえると、大きな差がある。これを器種構成の点でみると、杯Ｂ・椀Ａ・椀Ｃといった器種がほとんどみられず、土師器の相対的割合を下げているように思われる。これは、杯Ａ・皿Ａの合計が50.0％とＳＲ01上層の値（42.2％）とそれほど差がない点からもうかがうことができる。また、第２期を代表する椀Ａがみられない点も注意する必要があろう。壺類の9.3％は、ＳＲ01上層（3.7％）に比べやや多いが、甕類はＳＤ2002が18.8％に対して、ＳＲ01上層は16.8％とほぼ同じ数値である。

須恵器では、杯Ａ・杯Ｂが合わせて34.4％と、ＳＲ01上層よりもやや多いが、供膳具に関してはそれほどＳＲ01上層と大きな違いは見られない。貯蔵具のうち、壺Ｌと壺Ｍは合わせると、23.9％であるが、これはＳＲ01上層の値（27.7％）に近い。ＳＤ2002で注目されるものとして平瓶がある。平瓶は６点出土しているが、これはＳＲ01上層全体の出土点数５点よりも多い。また、ＳＲ01（第１期）では、わずか１点に過ぎず、第１期から第２期にかけての出土点数の増加（１点→11点）は顕著である。

ＳＤ2002の遺物の出土傾向は、ＳＲ01上層に類似した点も認められるが、異なる点も少なくない。また、後述するように、ＳＤ2002では1,000点以上の土師器皿Ｃが出土している。この点から、ＳＤ2002周辺は、皿Ｃの廃棄を中心とした燃灯供養が行われていた空間と考えられる。これに対して、ＳＲ01上層、特に７区以西では土師器・須恵器ともに供膳具の出土率が高いことから、ＳＤ2002とは異なった空間利用を考えることができる。つまり、ＳＤ2002とＳＲ01上層における器種別出土比率の違いは、遺跡における空間利用の違いを強く反映していると考えられる。

最後に付表５から灯明皿である土師器皿Ｃの出土傾向をみる。上述のように土師器皿Ｃの個体

付表２　川跡ＳＲ01(第１期)出土土器器種構成表

			1区南		2区		廃棄A群		廃棄B群		廃棄C群		廃棄D群		廃棄E群		廃棄F群		合計		
			点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	全体
土師器	供膳具	杯A							6	35.3%	12	42.9%	3	60.0%	6	37.5%	4	22.2%	31	34.8%	
		杯B							1	5.9%									1	1.1%	
		杯C									1	3.6%			6	37.5%			7	7.9%	
		皿A			1	100.0%			3	17.6%	7	25.0%	1	20.0%	3	18.8%	8	44.4%	23	25.8%	
		皿B																			
		椀A																			
		椀C					3	100.0%	3	17.6%	4	14.3%					2	11.1%	12	13.5%	
		椀X							2	11.8%	1	3.6%							3	3.4%	
		杯/皿							1	5.9%	1	3.6%			1	6.3%	1	5.6%	4	4.5%	
		高杯																			
		小計						100.0%		94.1%		92.9%		80.0%		100.0%		83.3%			
	貯蔵具	壺A																			
		壺B									1	3.6%					1	5.6%	2	2.2%	
		小計										3.6%						5.6%			
	煮炊具	甕類	1	100.0%					1	5.9%	1	3.6%	1	20.0%			2	11.1%	6	6.7%	
		小計								5.9%		3.6%		20.0%				11.1%			
	合　計		1	100.0%	1	100.0%	3	200.0%	17	100.0%	28	100.0%	5	100.0%	16	100.0%	18	100.0%	89		54.9%
須恵器	供膳具	杯A					1	7.7%	1	14.3%	2	7.1%					2	33.3%	6	8.6%	
		杯B	1	20.0%					1	14.3%	4	14.3%	1	50.0%					7	10.0%	
		杯C									1	3.6%							1	1.4%	
		皿B																			
		皿C									2	7.1%					2	33.3%	4	5.7%	
		皿E					8	61.5%			1	3.6%							9	12.9%	
		杯/皿			1	14.3%	1	7.7%			1	3.6%							3	4.3%	
		杯B蓋					1	7.7%	1	14.3%	3	10.7%					1	16.7%	6	8.6%	
		皿B蓋									1	3.6%							1	1.4%	
		蓋	1	20.0%															1	1.4%	
		鉢A					1	7.7%					1	50.0%					2	2.9%	
		小計		40.0%		14.3%		92.3%		42.9%		53.6%		100.0%				83.3%			
	貯蔵具	壺G																			
		壺L			1	14.3%					3	10.7%			1	50.0%			5	7.1%	
		壺M	3	60.0%	4	57.1%			2	28.6%	5	17.9%			1	50.0%	1	16.7%	16	22.9%	
		壺N																			
		壺類			1	14.3%			1	14.3%	5	17.9%							7	10.0%	
		浄瓶/水瓶																			
		平瓶					1	7.7%											1	1.4%	
		甕類							1	14.3%									1	1.4%	
		小計		60.0%		85.7%		7.7%		57.1%		46.4%				100.0%		16.7%			
	合　計		5	100.0%	7	100.0%	13	100.0%	7	100.0%	28	100.0%	2	100.0%	2	100.0%	6	100.0%	70		43.2%
緑釉/二彩/三彩									2		1								3		1.9%
黒色土器																			0		0.0%
合計																			162		100.0%

付表３　川跡ＳＲ01上層（第２期）出土土器器種構成表

			1区北		3区（上層）		4区（上層）		5区（上層）		6区（上層）		7区（上層）		8区（上層）		9区（上層）	
			点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
土師器	供膳具	杯A	1	20.0%	2	25.0%	13	38.2%	3	15.8%	3	10.3%	4	13.8%	2	14.3%	2	14.3%
		杯B			1	12.5%					1	3.4%	2	6.9%				
		杯C					3	8.8%	4	21.1%	4	13.8%	1	3.4%				
		皿A			1	12.5%	8	23.5%	4	21.1%	7	24.1%	5	17.2%	1	7.1%	3	21.4%
		椀A					1	2.9%					7	24.1%	4	28.6%	3	21.4%
		椀C					4	11.8%	1	5.3%	2	6.9%	1	3.4%				
		杯/皿	1	20.0%							2	6.9%			3	21.4%	2	14.3%
		高杯			2	25.0%							2	6.9%	1	7.1%	1	7.1%
		杯B蓋									1	3.4%	1	3.4%				
		鉢B											1	3.4%				
		盤																
		その他																
		小計		75.0%				85.3%		63.2%		69.0%		82.8%		78.6%		78.6%
	貯蔵具	壺B					1	2.9%	3	15.8%			3	10.3%			1	7.1%
		壺類																
		小計						2.9%		15.8%				10.3%				7.1%
	煮炊具	甕類	3	60.0%	2	25.0%	4	11.8%	4	21.1%	9	31.0%	2	6.9%	3	21.4%	2	14.3%
		鍋類																
		小計				25.0%		11.8%		21.1%		31.0%		6.9%		21.4%		14.3%
	合　計		5	100.0%	8	100.0%	34	100.0%	19	100.0%	29	100.0%	29	100.0%	14	100.0%	14	100.0%
須恵器	供膳具	杯A					6	20.7%					7	17.5%	4	25.0%	3	23.1%
		杯B	2	15.4%	3	20.0%	3	10.3%	1	6.3%	3	10.0%	7	17.5%	4	25.0%	2	15.4%
		杯C	1	7.7%														
		皿B					1	3.4%										
		皿C	1	7.7%			1	3.4%	1	6.3%			1	2.5%				
		皿E									1	3.3%						
		杯/皿	1	7.7%	3	20.0%	1	3.4%			1	3.3%	1	2.5%				
		杯B蓋	2	15.4%	1	6.7%	4	13.8%	1	6.3%	8	26.7%	6	15.0%	2	12.5%		
		皿B蓋					1	3.4%										
		蓋									1	3.3%						
		鉢A	1	7.7%	1	6.7%			1	6.3%							1	7.7%
		盤A									2	6.7%						
		その他																
		小計		61.5%		53.3%		58.6%		25.0%		53.3%		55.0%		62.5%		46.2%
	貯蔵具	壺A																
		壺A蓋																
		壺E									1	3.3%						
		壺G											1	2.5%				
		壺K									1	3.3%						
		壺L	1	7.7%	4	26.7%	8	27.6%	4	25.0%	4	13.3%	8	20.0%	2	12.5%	2	15.4%
		壺M	2	15.4%	2	13.3%	3	10.3%	6	37.5%	5	16.7%	4	10.0%	3	18.8%	3	23.1%
		壺N									1	3.3%						
		壺類	1	7.7%					2	12.5%	1	3.3%	2	5.0%	1	6.3%	2	15.4%
		浄瓶/											1	2.5%				
		平瓶	1	7.7%	1	6.7%	1	3.4%			1	3.3%	1	2.5%				
		鉢D																
		甕類																
		その他																
		小計		38.5%		46.7%		41.4%		75.0%		46.7%		42.5%		37.5%		53.8%
		円面硯											1	2.5%				
		小計												2.5%				
	合　計		13	100.0%	15	100.0%	29	100.0%	16	100.0%	30	100.0%	40	100.0%	16	100.0%	13	100.0%
緑釉/二彩/三彩							1		4				4		3			
黒色土器											1							
合計																		

付表４　溝ＳＤ2002出土土器器種構成表

10区（上層）		11区（上層）		合計		
点数	%	点数	%	点数	%	全体
17	24.6%	10	41.7%	57	23.3%	
1	1.4%			5	2.0%	
2	2.9%	1	4.2%	15	6.1%	
14	20.3%	3	12.5%	46	18.8%	
6	8.7%	1	4.2%	22	9.0%	
5	7.2%	2	8.3%	15	6.1%	
10	14.5%			18	7.3%	
				6	2.4%	
				2	0.8%	
2	2.9%	1	4.2%	4	1.6%	
1	1.4%			1	0.4%	
2	2.9%			2	0.8%	
	87.0%		75.0%			
1	1.4%			9	3.7%	
1	1.4%			1	0.4%	
	2.9%					
7	10.1%	5	20.8%	41	16.7%	
		1	4.2%	1	0.4%	
	10.1%		25.0%			
69	100.0%	24	100.0%	245		46.1%
4	6.7%	2	5.0%	26	9.6%	
12	20.0%	6	15.0%	43	15.8%	
		1	2.5%	2	0.7%	
1	1.7%	1	2.5%	3	1.1%	
4	6.7%	2	5.0%	10	3.7%	
				1	0.4%	
4	6.7%	4	10.0%	15	5.5%	
12	20.0%	4	10.0%	40	14.7%	
		4	10.0%	5	1.8%	
				1	0.4%	
2	3.3%	1	2.5%	7	2.6%	
1	1.7%			3	1.1%	
1	1.7%			1	0.4%	
	68.3%		62.5%			
1	1.7%			1	0.4%	
1	1.7%	1	2.5%	2	0.7%	
				1	0.4%	
				1	0.4%	
				1	0.4%	
3	5.0%	4	10.0%	40	14.7%	
4	6.7%	3	7.5%	35	12.9%	
				1	0.4%	
3	5.0%	4	10.0%	16	5.9%	
1	1.7%	2	5.0%	4	1.8%	
				5	1.8%	
		1	2.5%	1	0.4%	
5	8.3%			5	1.8%	
1	1.7%			1	0.4%	
	31.7%		37.5%			
				1	0.4%	
60	100.0%	40	100.0%	272		51.1%
2				14		2.6%
				1		0.2%
				532		100.0%

			北		南		合計		
			点数	%	点数	%	点数	%	全体
土師器	供膳具	杯A	4	40.0%	9	40.9%	13	40.6%	
		杯C			3	13.6%	3	9.4%	
		皿A	1	10.0%	2	9.1%	3	9.4%	
		椀A							
		杯/皿	1	10.0%	2	9.1%	3	9.4%	
		盤			1	4.5%	1	3.1%	
		小計	6		17		23		
	貯蔵具	壺A	1	10.0%			1	3.1%	
		壺A蓋	1	10.0%			1	3.1%	
		壺類			1	4.5%	1	3.1%	
		小計	2		1		3		
	煮炊具	甕類	2	20.0%	4	18.2%	6	18.8%	
		小計	2		4		6		
	合　計		10		22		32		31.7%
須恵器	供膳具	杯A	6	13.6%	9	39.1%	15	22.4%	
		杯B	6	13.6%	2	8.7%	8	11.9%	
		杯C			1	4.3%	1	1.5%	
		皿B	2	4.5%			2	3.0%	
		皿C	1	2.3%			1	1.5%	
		皿E	2	4.5%			2	3.0%	
		皿A	1	2.3%			1	1.5%	
		杯B蓋	2	4.5%	3	13.0%	5	7.5%	
		皿B蓋	1	2.3%			1	1.5%	
		鉢A	1	2.3%	1	4.3%	2	3.0%	
		小計		50.0%		69.6%			
	貯蔵具	壺A							
		壺A蓋							
		壺G	1	2.3%			1	1.5%	
		壺H	1	2.3%			1	1.5%	
		壺L	9	20.5%			9	13.4%	
		壺M	5	11.4%	2	8.7%	7	10.4%	
		壺N			1	4.3%	1	1.5%	
		壺類	1	2.3%	2	8.7%	3	4.5%	
		浄瓶/水瓶							
		平瓶	5	11.4%	1	4.3%	6	9.0%	
		鉢D			1	4.3%	1	1.5%	
		甕類							
		小計		50.0%		30.4%			
	合　計		44	100.0%	23	100.0%	67		66.3%
緑釉/二彩/三彩			1				1		1.0%
黒色土器			1				1		1.0%
合計							101		100.0%

数を数えるにあたっては、個体識別の可能分のほか、重量計測による推定個体数を算出した。その結果、総点数として5,300点余りの土師器皿Ｃを確認することができた。このうち、およそ８割がＳＲ01からの出土である。このうち、確実に第１期に属するものは少なくとも1,500点は超える。むしろ第２期における皿Ｃの廃棄行為が確認できるのは、出土状況から１区北・10区・11区に限られそうなので、3,500点余りが第１期に伴う可能性がある。かなり大規模な燃灯供養が行われていたと考えられるが、それらが継続的であったのか、断続的であったのかは明らかにできなかった。また、ＳＤ2002では、北部と南部を合わせて1,000点余りが出土している。第２期においても、第１期ほどではないが、比較的規模の大きな燃灯供養が行われていた可能性が高い。

以上のような器種構成や出土傾向の特徴を踏まえて、以下、個別に土器の概要を報告する。

１区（第28図）　土師器には杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・甕などが、須恵器には杯Ｂ・杯Ｂ蓋・杯Ｃ・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ａ・平瓶などがある。須恵器杯ＢⅣ[(注17)]１点を図示した（第28図２）。口径9.5cm、器高4.0cmである。第１次調査14トレンチの拡張部から出土した。なお、法量による器種の分類については付表６を参照されたい。

２区（第28図）　土師器には皿Ａ・皿Ｃ・甕などが、須恵器には杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｅ・壺Ｌ・壺Ｍ･鉢Ａなどがある。範囲が狭いこともあるが､量的には少ない。土師器皿Ａ１点を図示した(1)。強いヨコナデにより、口縁部が外反する。内面に斜放射の暗文を施す。復原口径は20cm程度と推定される。断ち割り１から出土した。

図示していないが、最上層の掘削中を中心に須恵器壺Ｍが５ないし７点出土している。遺構の項でも触れたように、壺Ｍは平城宮土器Ｖ以降に位置づけられるもので、溝ＳＤ2002が掘削される前のＳＲ01の埋没時期を示すと考えられる点で重要である。また、３区断ち割り２のセクションの北側で土師器皿Ｃが10数点出土した。口径10.5～12.2cm、器高1.8～2.7cmで、いずれも灯芯痕１～３か所が確認できる。後述する３区の断ち割り２周辺から出土した土器群と一体のものと考えられる。

３区（第28・29図）　土師器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ｃ・椀Ｘ・壺・甕などがある。３～36は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。３区出土の皿Ｃは900点以上あるが、図示したのは34点である。未使用のものもあるが、１～３か所の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていた。なお、33は灯芯痕が４か所以上認められ、皿Ｃの灯芯痕数としては非常に多い。口径10.2～

付表５　土師器皿Ｃ地点別出土点数一覧表

	SR01							
	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区
点数	84	16	982	1704	1111	97	47	28
%	1.57%	0.31%	18.45%	32.02%	20.88%	1.83%	0.88%	0.53%

	SR01			SD2002		SD2054	遺物包含層	合計
	9区	10区	11区	北	南			
点数	12	145	30	313	735	16	1	5322
%	0.23%	2.72%	0.56%	5.88%	13.82%	0.30%	0.02%	100.00%

11.9cm、器高2.1～2.8cmであるが、法量分布に偏りは認められず、大きな１つのグループを形成する。37～39は椀Ｘである。椀Ｘもｅ手法で調整するが、外面に粘土接合痕が明瞭に残る。38・39は灯芯痕がみられるので、灯明器として使用されていた。法量は口径12.4～13.0cm、器高4.1～4.3cmである。椀Ｃは法量による大小がある。43～47は椀ＣⅠで、口径13.0～13.8cm、器高3.7～4.1cmである。40～42は椀ＣⅡで、口径10.9～11.9cm、器高3.1～3.5cmである。いずれもｅ手法で調整し、灯芯痕がみられる。48は壺Ｂで、口径9.8cm、残存高5.7cmである。

49～58・64～66は杯Ａである。法量は大小２種類があり、大は口径17.6～19.8cm、小は口径13.9～14.8cmである。外面の調整は、49・52・57・64～66はａ0手法、50・51・53・54・58はｂ0手法、56はa2手法で、55は不明である。55は口縁部に連弧状暗文が施される。また、52・54・58は内面に暗文がなく、それ以外は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。49と50以外は灯芯痕が複数確認できる。59は杯Ｃである。口縁端部は外反気味に丸くおさまる。外面調整はａ0手法で内面には１段斜放射の暗文を施す。60～63は皿Ａである。60～62は、口径19.5～21.8cm前後、器高2.5～2.6cm前後である。調整は60・61はａ0手法、62はｂ0手法で、いずれも内面に１段斜放射の暗文を施す。63は口縁部が外上方に緩やかに立ちあがり、端部は内面に厚く肥厚する。調整はａ0手法で、暗文はない。60・61には灯芯痕が複数確認できる。杯・皿は内面に暗文を施すものが多く、摩滅がひどいものについても基本的には１段斜放射と螺旋状の暗文がセットであると考えられる。49・55・57・65は出土位置から第２期に属する資料である。

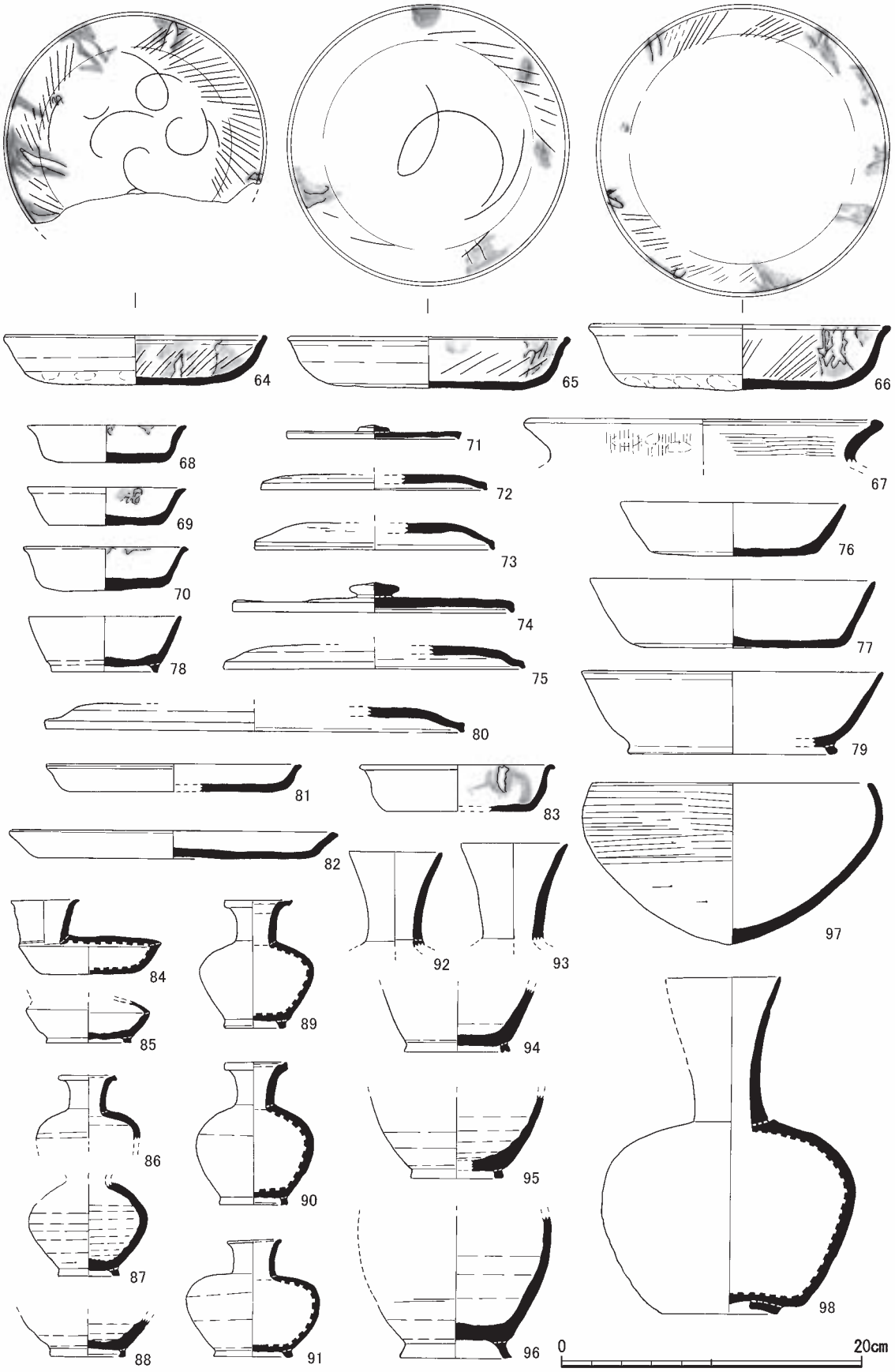
67は甕の口縁部で、端部にヨコナデを施して内面を肥厚させている。内面に横方向の、外面に縦方向のハケを施す。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・皿Ｅ・鉢Ａ・壺Ｌ・壺Ｍなどがある。皿Ｅは法量による大小がある。83は皿ＥⅠで、口径12.5cm、器高3.1cmを測る。明灰色で、砂っぽい胎土を呈する。(注18) 68～70は皿ＥⅡで、口径10.5cm、器高2.5～3.0cmである。いずれも１～２か所の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されたことが分かる。杯Ｂ蓋(71～80)には様々な形態のものがみられる。71・74は全体に扁平な器形を呈する。口径11.4～18.6cm、器高1.0～2.0cmである。72はやや扁平気味な個体である。73・75は頂部が平坦な器形を呈する。ともに口縁部が屈曲するが、73の屈曲は弱い。どちらも残存率1/6にみたない破片である。杯Ａは法量による大小がある。77は杯ＡⅠである。83と同じく、明灰色で、砂っぽい胎土を呈する。口径18.9cm、器高4.6cmである。76は杯ＡⅢで、内面に墨痕らしきものがみられ、硯に転用された可能性もある。口径14.8cm、器高

付表６　法量(口径)別器種分類表

土師器	椀C	Ⅰ：12～14cm前後	Ⅱ：10～12cm前後	Ⅲ：10cm以下	
	甕類	Ⅰ：30cm前後	Ⅱ：20～27cm	Ⅲ：15～17cm	
須恵器	杯A	Ⅰ：18～20cm	Ⅱ：15～20cm	Ⅲ：12～15cm	Ⅳ：12cm以下
	杯B	Ⅰ：18～21cm	Ⅱ：18～16cm	Ⅲ：11～16cm	Ⅳ：9～11cm
	皿C	Ⅰ：18～22cm	Ⅱ：15～18cm		
	皿E	Ⅰ：12cm前後	Ⅱ：10cm前後		

第28図　川跡ＳＲ01　１～３区出土遺物実測図



第29図　川跡ＳＲ01　３区出土遺物実測図

3.6cmである。杯Ｂは法量による大小がある。79は杯ＢⅠで、口径19.8cm、器高5.6cmである。78は杯ＢⅣで、口径9.9cm、器高3.7cmである。80は口径28.4cmの大型品で、皿Ｂ蓋である。皿Ｃも法量による大小がある。82は皿ＣⅠで、淡灰色に砂っぽい胎土を呈する。口縁端部は平坦で外傾する。口径21.2cm、器高1.9cmである。81は皿ＣⅡで、転用硯である。口径17.0cm、器高1.9cmである。81・82とも1/3程度残存する。

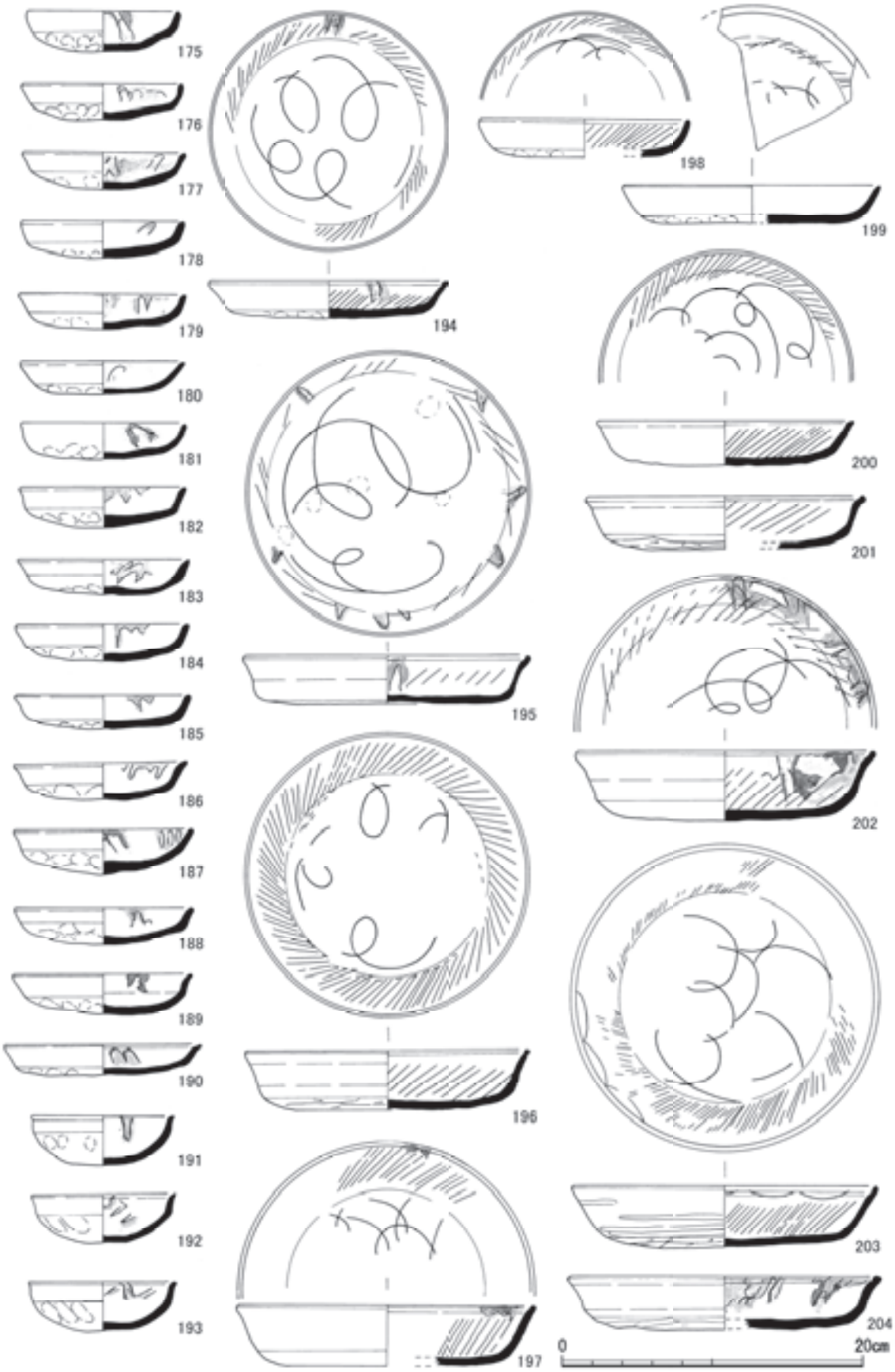
84･85は小型の平瓶で､体部最大径は8.5～9.4cmである。壺Mは完形品も含めて６点図示した(86～91)。底部に高台を有し、口縁部は端部をつまみ上げたり、面をなすものが多い。91は焼け歪みでやや扁平な体部となる。器高は7.8～9.5cmである。86～88もそれほど大型品にならないと思われる。92･93･98は壺Ｌで、いずれも口縁端部を丸く納め、外反気味の直口状の口縁部をもつ。98は肩部が丸い体部で、底部は平底である。ただし焼け歪みがみられ、別の土器片が付着している。94～96は壺の底部で、いずれも高台を有する。96の高台が94・95に比べやや高い。97は鉢Ａで、外面全体に回転ヘラケズリの後、上半部にミガキ、下半部にナデを施す。口径18.8cm、器高10.9cmである。

上記３区出土遺物のうち、土師器皿Ｃ(３～36)、土師器椀ＣⅡ(40～42)、皿ＥⅡ(68～70)、杯Ｂ蓋(74)、須恵器平瓶(85)、鉢Ａ(97)は３区北部の断ち割り２とその周辺で検出したＡ群から出土したものであり、層位的には確実に第１期に属する土器群である。

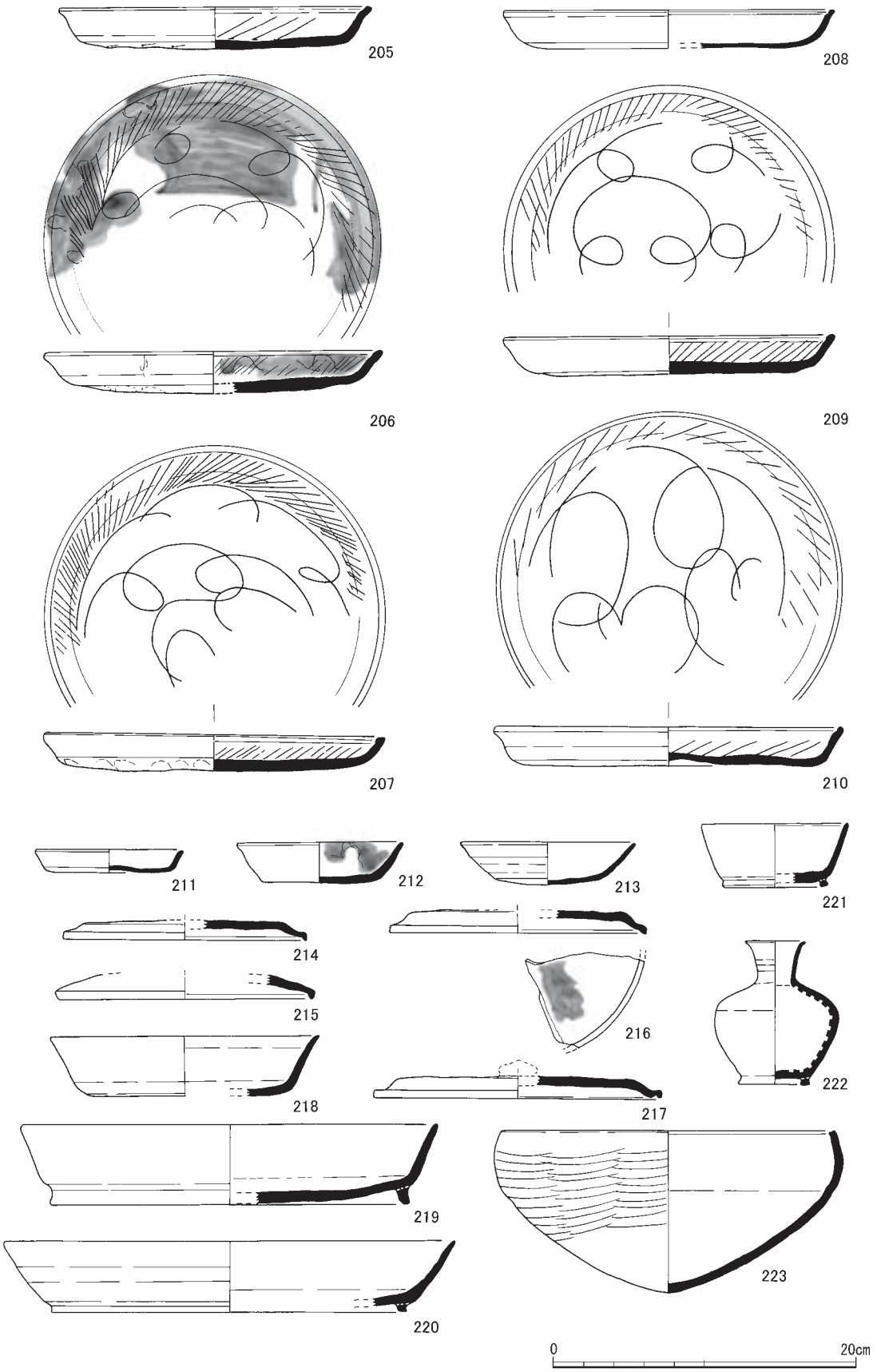
４区(第30～32図)　土師器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・皿Ｘ・椀Ｃ・椀Ｘ・壺・甕などがある。99～190・211は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。４区出土の皿Ｃは約1,400点あるが、図示したのは92点のみで、１割に満たない。未使用のものもあるが、１～３か所程度の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていた。口径10.5～12.4cm、器高2.1～3.2cmであるが、法量分布に偏りは認められず、大きな１つのグループを形成する。211は若干器形が異なり、平底に斜め上方に延びる口縁部からなる。口径9.6cm、器高1.5cmである。191～193は椀ＣⅢで、口径9.2～9.8cm、器高3.3～3.4cmである。いずれもｅ手法で調整し、灯芯痕がみられる。

194～197・201～204は杯Ａである。法量は大小２種類があり、大は口径18.6～20.4cm、器高3.2～4.2cm、小は口径15.8cm、器高2.5cmである。外面の調整は、194・195・197・202はａ0手法、196・201・204はｂ0手法、203はｂ1手法である。また、204は内面に暗文がなく、それ以外は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。195・202は１段斜放射の間隔が広い。203は口縁部に連弧状暗文が施されており、出土資料の中で最古の様相をもつ。196・201・203以外は灯芯痕が確認できる。198は杯である。口径13.8cm、器高2.5cmで、口縁端部は丸くおさまる。外面の調整は、ａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。199・200は杯Ｃで、口径はともに17.0cm、器高2.6～3.0cmである。いずれもａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。205～210は皿Ａで、口径は20.2～22.6cm、器高2.4～2.7cmである。206・207・209の口縁部の形態は、外上方に立ち上げて屈曲せずに内側に肥厚する。調整は、205がｂ0手法である以外はすべてａ0手法である。208以外は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。205・210は暗文の間隔が広い。208は摩滅がひどく調整等は不明である。191・193・200・202～204・206・209は出土位置か

第30図　川跡ＳＲ01　４区出土遺物実測図(1)



第31図　川跡ＳＲ01　４区出土遺物実測図(2)



第32図　川跡ＳＲ01　４区出土遺物実測図(3)

ら第２期に属する。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｂ・皿Ｅ・鉢Ａ・壺Ｌなどがある。212・213は杯ＡⅣで、口径10.8～11.4cm、器高2.8cmとほぼ同大であるが、器形に違いがある。212は平底で、灯芯痕が１か所みられ、灯明器として使用されている。213はやや突出気味の平底で、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施す。類似した器形としてＳＤ2002南部出土の杯ＡⅣ(623～625)がある。218は杯ＡⅡで、口縁部がやや外反する。口径は17.6cmである。214～217は杯Ｂ蓋で、天井部が平坦で口縁部が屈曲する214・216・217と、天井部が笠形を呈すると思われる215がある。216・217は内面に墨痕がみられ、転用硯である。219・220は皿Ｂで、口径27.2～29.6cm、器高4.7～5.3cmである。219は底部外面に回転ヘラケズリを施した後、高台を貼り付ける。また外面に煤が付着する。221は杯ＢⅣで、口径10.9cm、器高4.2cmである。内面に朱墨の痕跡がある。

222は壺Ｍで、口径4.0cm、器高9.5cmである。肩部が張り気味である。223は鉢Ａである。明灰色で、砂っぽい胎土を呈する。外面全体に回転ヘラケズリの後、上半部にミガキ、下半部にナデを施す。口径21.8cm、器高10.8cmである。内面に煤が付着しており、灯明器として使用された可能性もある。

５区(第33図)　土師器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・壺Ｂなどがある。224～239は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。５区出土の皿Ｃは約1,100点を数えるが、図示したのは、わずかに15点である。未使用のものもあるが、１～３か所程度の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていた。このうち、224は平底で、口径8.4cm、器高1.5cmを測り、他の個体とは若干器形を異にしている。器形的には上述の211に近い。口径8.6～11.6cm、器高1.5～2.8cmである。240は杯ＣⅡである。口径は15.9cm、器高2.5cmである。調整はｂ0手法で、内面に１段斜放射の暗文を施す。241・242は杯Ａである。口径は16.6～19.2cm、器高は3.6～3.9cmである。調整は241がｂ0手法である。242は底部と体部の境目だけをケズリで調整する。242は１段斜放射と螺旋状の暗文を施すが、１段斜放射の間隔は広い。241は内面に暗文を施さない。243～245は皿Ａである。245は口縁端部が屈曲せずに内側に肥厚する。244はａ0手法、243・245はｂ0手法である。243・244は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施すが、245は暗文を施さない。また、242は灯芯痕が複数確認できる。椀Ｃは大小の法量が認められる。247・248は椀ＣⅠで、口径12.9～13.4cm、器高4.2～4.5cmを測る。246は椀ＣⅢで、口径9.9cm、器高3.6cmを測る。いずれもｅ手法で調整し、灯芯痕がみられる。240・242・243・246は出土位置から第２期に属する。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺Ｍ・壺Ｌなどがある。250は杯ＡⅣで、灯芯痕が１か所認められ、灯明器として使用されていた。口径10.5cm、器高3.5cmである。251は鉢Ａで、外面上半にヘラミガキ、外面下半に回転ヘラケズリを施す。残存率は1/12を少し上回る程度である。252は杯ＢⅢ蓋で、焼け歪みが認められる。口径は15.0cmである。253は皿ＣⅠである。口径24.2cm、器高2.2cmである。

254・255は壺Ｍである。口径3.7～4.0cm、器高7.9～8.5cmで、ほぼ同形同大であるが、254の肩部がやや張る。256～258は壺Ｌである。256は口径9.7cm、器高19.0cm、底径9.5cmの中型品である。

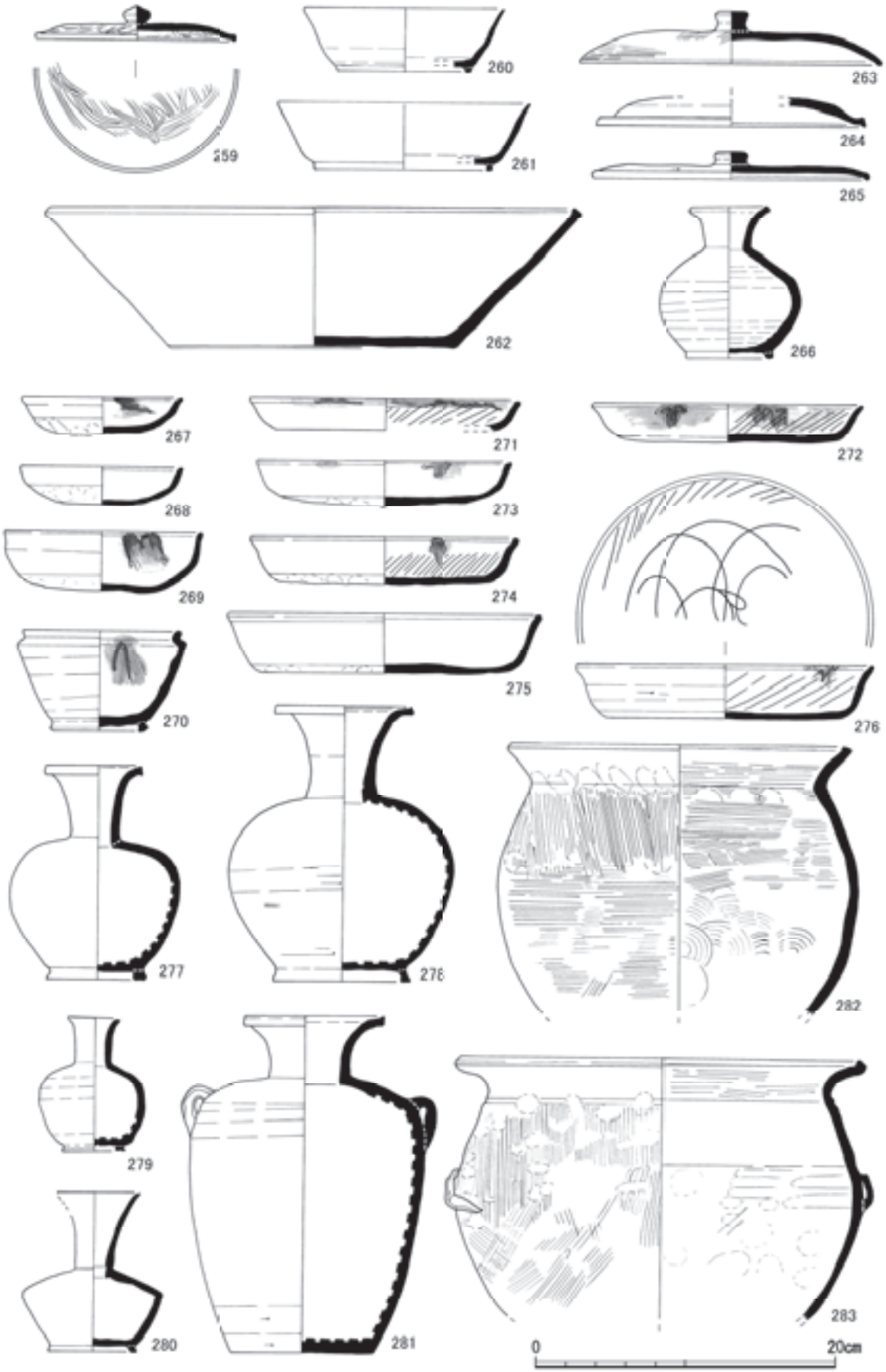
第33図　川跡ＳＲ01　５区出土遺物実測図

257は口径6.0cm、器高13.4cm、底径6.6cmの小型品である。258も口縁部を欠損するが、残存高13.3cm、底径6.5cmであることから小型品と考えられる。いずれも口頸部と体部を分割して製作したと考えられる。

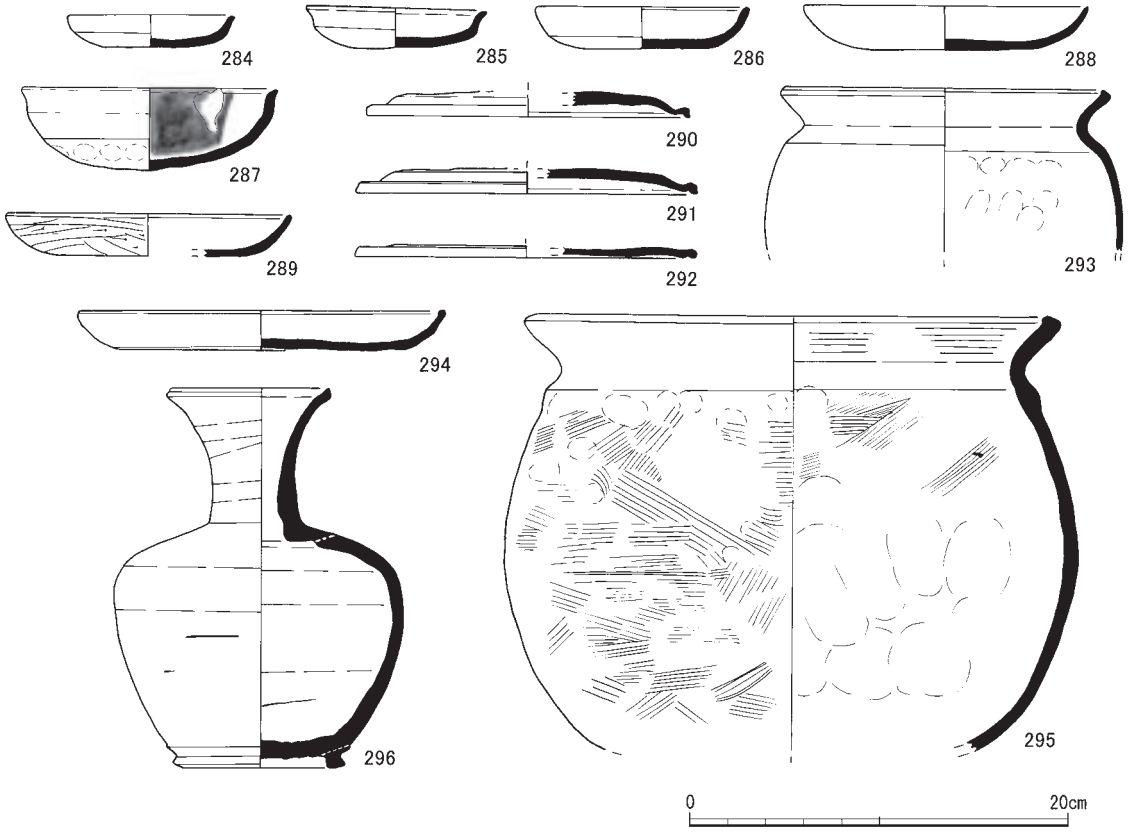
６区（第33・34図）　ここから西の地区については、基本的に第２期に位置づけられる土器群であるが、第１期の遺物の混入している可能性も高い。ただし、明確に区別することは困難であるので、一括して報告し、必要に応じて特記することにする。土師器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・壺Ｂなどがあり、須恵器には杯Ａ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺Ｍ・壺Ｌなどがある。これらは出土層位や出土地点の違いから３群に分けられる。なお、出土層位の違いは、第２期における層位的な区分であり、第２期が細分できる可能性を示すものである。

259～266はＳＲ01（第２期）の下層に当たる灰褐色砂層から出土したものである。263は土師器杯Ｂ蓋である。残存率は高くないが、口径20.0cm、器高3.5cmである。259・264・265は須恵器杯Ｂ蓋である。259は杯ＢⅢ蓋で、頂部が扁平な器形を呈し、宝珠つまみがつく。内外面に暗文風のミガキが施される。あまり例をみない器形である。口径13.2cm、器高2.3cmを測る。264は笠形に近い器形を呈し、天井部に回転ヘラケズリを施す。残存率は高くないが、転用硯である。265は杯ＢⅠ蓋で、天井部が扁平な器形に、円筒状のつまみがつく。口径18.4cm、器高1.9cmである。260・261は須恵器杯Ｂである。260は杯ＢⅢで、口径13.4cm、器高4.3cmである。261は杯ＢⅡで、口径16.8cm、器高4.5cmである。262は須恵器盤Ａである。灰白色で、砂っぽい胎土を呈する。口径35.0cm、器高9.4cmである。266は須恵器壺Ｍである。完形で、口径4.9cm、器高10.3cm、底径5.8cmである。外面にヘラミガキを施す。259と260は、それぞれ６区出土の破片と７区出土の破片とが接合した。262の一部は後述するＳＲ01の南肩検出中に出土したものである。

267～283は灰褐色砂層よりも上層の黒褐色系粘土から出土したものである。267・268は土師器皿Ｃである。ともにｅ手法で調整し、口径10.5cm前後、器高2.5cm前後である。267は灯芯痕が１か所確認できるが、268は灯明器としては未使用かもしれない。269は土師器椀ＣⅠである。ほぼ完形で、ｅ手法で調整する。灯芯痕が７か所も確認できる。口径13.1cm、器高4.1cmである。271・272は皿Ａで、口径17.8～18.0cm、器高2.0～2.2cmを測る。いずれもａ0手法で、内面に１段斜放射の暗文を施す。274～276は杯Ａで、口径17.9～20.6cm、器高3.2～4.1cmを測る。調整はいずれもａ0手法で、274・276は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。275は暗文を施さない。276の１段斜放射は間隔が広い。273は杯Ｃで、口径16.6cm、器高3.5cmを測る。調整はａ0手法で、内面に暗文を施さない。271～274・276は灯芯痕が確認できる。282は土師器甕Ａである。口縁端部を内上方につまみ上げ、端面は平坦な面をなす。内外面ともハケを多用するが、体部内面下半に同心円状の当て具痕がみられる。外面全体に煤が付着する。口径22.2cm、残存高18.0cmである。283は土師器甕Ｂである。体部に密着したような把手がつく。体部外面にハケ、体部内面にナデを施す。口径26.4cm、器高17.5cmである。270は須恵器壺Ｅで、完形である。内面に灯芯痕が１か所認められ、灯明器として使用されたと考えられる。口径10.4cm、器高6.8cm、底径5.7cmである。277・278は須恵器壺Ｌである。277は小型品で口径6.3cm、器高14.4cm、底径6.4cmである。



第34図　川跡ＳＲ01　６区出土遺物実測図(1)



第35図　川跡ＳＲ01　６区出土遺物実測図(2)

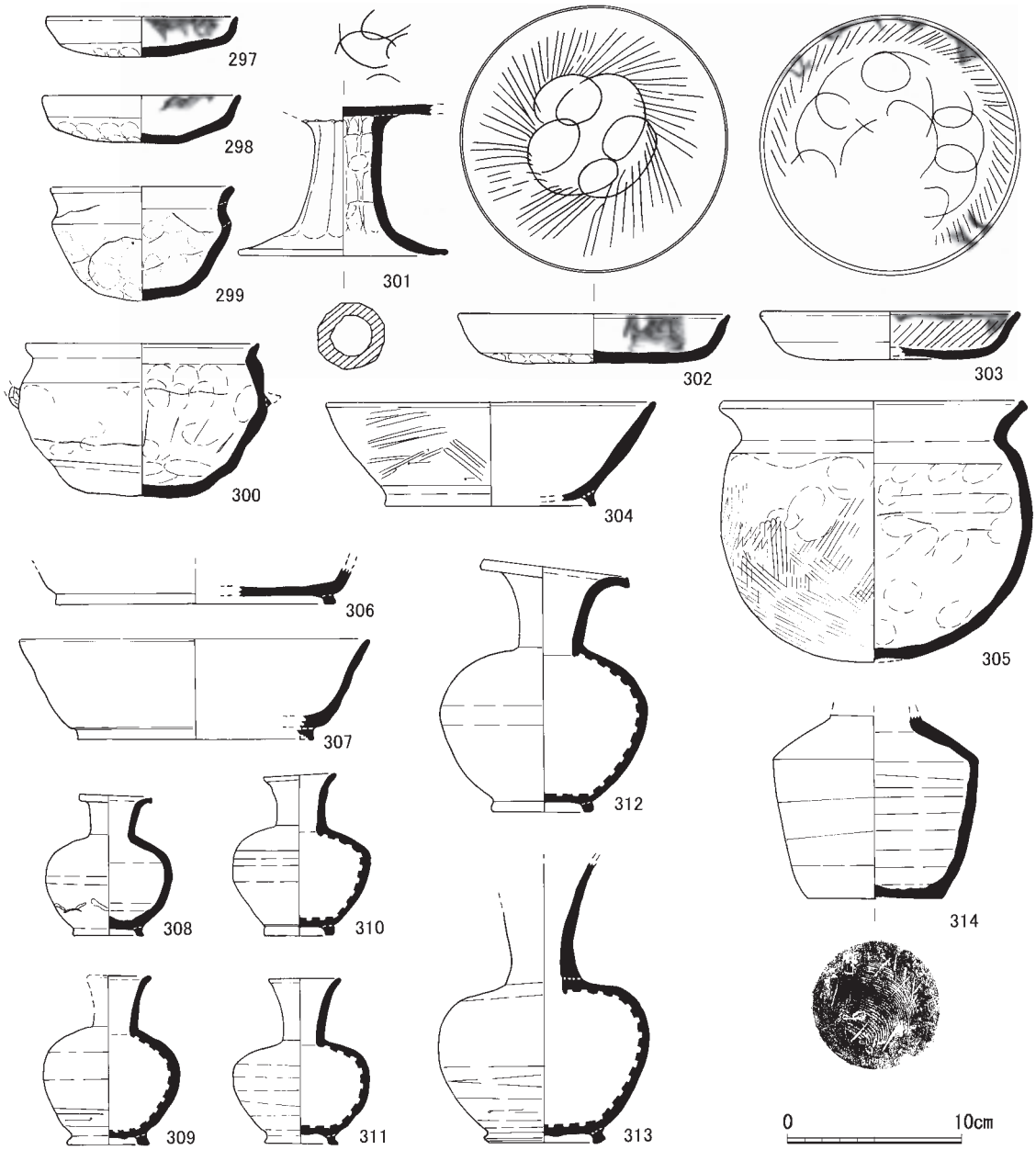
底部には糸切り痕が認められる。278は中型品で、口径9.0cm、器高18.4cm、底径9.1cmである。ともに口頸部と体部を分割して製作したと考えられる。279は須恵器壺Ｍである。わずかに外反する直立気味の口頸部に、やや丸みのある体部からなる。口径3.5cm、器高9.0cm、底径4.1cmである。280は須恵器壺Ｋである。細長い口頸部と肩部に稜を有する体部からなる。口径5.5cm、器高10.6cm、底径5.8cmである。口頸部と体部を分割して製作している。壺Ｋとしては小型品の部類に入る。281は須恵器の壺Ｎで、ほぼ完形である。肩部に耳状の把手を一対貼り付ける。口径9.3cm、器高22.6cmである。

284～296は南肩の検出中に出土したもので、特に294～296は護岸材の間から出土した（第17図左下枠内）。284～286は土師器皿Ｃである。いずれもｅ手法で調整する。口径8.4～11.2cm、器高1.7～2.2cmである。284・286は灯芯痕がみられないので灯明器としては未使用の可能性もある。６区出土の土師器皿Ｃのうち、北岸で出土したものはいずれも５区の廃棄Ｆ群から流出したものと考えられる。288・289・294は皿Ａである。288・289は口径14.8cm、器高2.3～2.4cmで、調整はｃ手法である。いずれも内面に暗文は施さない。294は口径19.0cm、器高2.3cmを測る。調整はａ0手法で、内面に暗文は施さない。287は土師器椀ＣⅠである。ｅ手法で調整する。口径13.4cm、器高4.4cmである。灯芯痕が２か所にみられ、灯明器として使用されている。293・295は土師器甕Ａである。293は体部外面はハケを施すようだが、摩滅のため不明瞭である。口径は16.6cmである。295は体部外面と口縁部～体部上半の内面にハケを施す。黒斑がみられる。口径

は22.2cmである。290～292は須恵器杯ＢⅡ蓋である。いずれも天井部が扁平で、口縁部が屈曲する。残存率は1/12～3/12程度で、復原口径は16.8～17.9cmである。296は須恵器壺Ｌである。ほぼ完形で、口径8.3cm、器高20.0cm、底径7.8cmである。口頸部と体部を分割して製作したと考えられる。

７～９区（第36～38図）　これら３地区の出土遺物は、他の調査区に比べて少ないことからまとめて報告する。土師器には杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｃ・壺Ｂ・甕Ａなどがあり、須恵器には杯Ｂ・壺Ｍ・壺Ｌ・壺Ｇなどがある。また黒色土器の鉢Ａも確認している。６区出土遺物と同じように出土層位の違いから２群に分けられる。

297～314はＳＲ01（第２期）の下層に相当する灰褐色砂層から出土した。297・298は土師器皿Ｃ

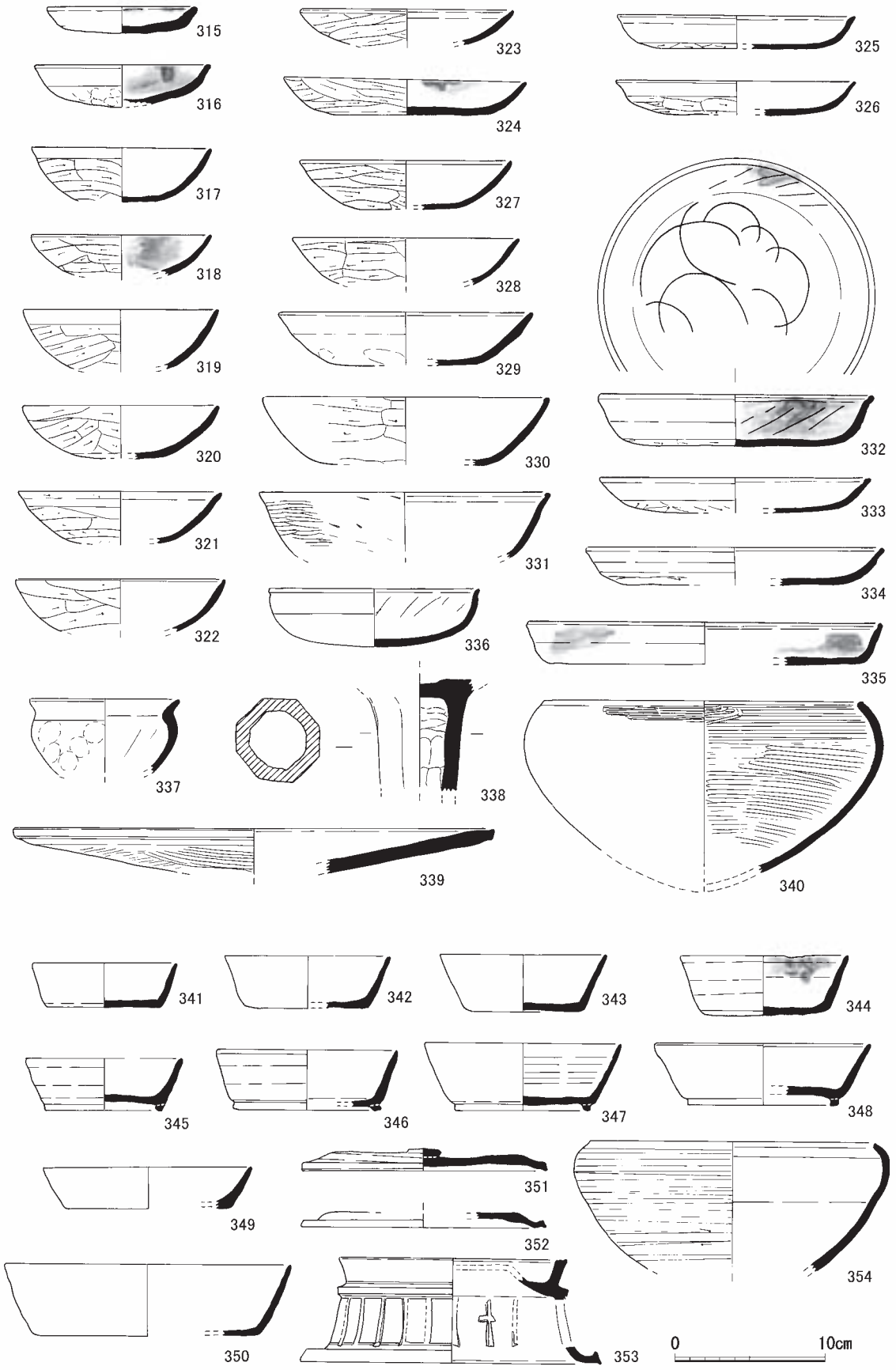


第36図　川跡ＳＲ01　７～９区下層出土遺物実測図

である。ｅ手法で調整し、灯芯痕が１～２か所みられる。口径10.9～11.3cm、器高2.3～2.8cmである。299・300は土師器壺Ｂである。口縁部にヨコナデ、体部にナデを施す。体部外面にユビオサエ痕が明瞭に残る。299は口径10.2cm、器高5.5cmである。300はいわゆる人面墨書土器に使用されるタイプである。底部は皿で型作りをし、その上に体部を立ち上げて成形している。肩部には小さな把手が付く。体部外面には粘土紐接合痕がみられ、底部付近には皿の圧痕が明瞭に残る。土馬とともに祭祀に使用された可能性がある。口径13.2cm、器高8.9cmである。301は土師器高杯である。脚部外面を14面に面取りし、杯底部内面には螺旋状の暗文がみられる。底径11.9cm、残存高8.7cmである。302・303は土師器杯Ａである。口径は14.6および15.4cm、器高は2.75および2.8cmである。調整はいずれもａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。１段斜放射は口縁部と見込みの境目まで施すのが通常であるが、302は他の資料と異なり見込みの中心近くにまでおよぶ。また、いずれも灯芯痕がみられる。304は土師器杯Ｂである。体部外面には粗いミガキが施される。305は土師器甕Ａである。体部外面にハケを施し、口縁端部をややつまみ上げる。口径17.0cm、器高15.0cmである。

306・307は須恵器杯Ｂである。２点とも残存率は1/6程度で、306は内面が研磨されており、転用硯であった可能性がある。306は底径が15.9cmである。307は杯ＢⅠで、口径19.9cm、器高5.8cm、底径13.4cmである。308～311は須恵器壺Ｍである。308は口縁端部に面をもつが、309～311は口縁端部を丸く納める。ほぼ同大で、口径3.7～4.1cm、器高8.1～9.7cmである。312・313は須恵器壺Ｌである。312は口縁部が焼け歪む。313は口縁端部を欠損する。312は口径8.3cm、器高14.5cm、底径5.8cmである。314は須恵器壺Ｇである。底部外面に糸切り痕がみられる。残存高は10.5cmである。

315～363はＳＲ01（第２期）の上層に相当する黒褐色系粘土層から出土した。315・316は土師器皿Ｃである。ともに灯芯痕が１～２か所みられる。315は口径9.7cm、器高1.8cmと、やや小型品である。316は口径11.4cmである。317～322は椀Ａである。口径は11.7～13.8cm、器高は3.4～4.0cmを測る。調整は318・320～322がｃ手法、317・319がｅ／ｃ手法である。319は墨書土器と供伴している。327～332は杯Ａである。327～329は口径13.8～16.8cm、器高3.2～3.5cmで、口縁部は外上方に立ち上がり、端部は小さく肥厚するか丸くおさまる。330～332は口縁端部が肥厚する。330・331は口径19cm前後、器高4.5cm前後で、332に比べ、深手で口縁部の立ち上がりが緩く、器壁が全体的に薄い。胎土も砂粒が多い傾向にある。外面調整は327～331はｃ手法で、331のみ体部外面にミガキを施す。いずれも内面に暗文は施さない。332はｂ0手法で、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。１段斜放射の間隔は広い。第37図に示した土師器資料の中ではもっとも古い様相をもつ。灯芯痕が１か所確認できる。333～335は皿ＡⅠで、いずれも口縁端部は肥厚する。口径17.8～23.4cm、器高2.3～2.7cmを測る。333・334は335に比べて口縁部の立ち上がりが緩い。外面調整は333・334がｂ0手法で、内面には暗文を施さない。335はａ0手法で、内面の暗文の有無は不明である。全体に黒ずんでおり、灯明器に使用した可能性がある。323～326は皿ＡⅡである。口径14.0～16.0cm、器高2.2～2.5cmを測る。外面調整は323・324がｃ手法、325・326は

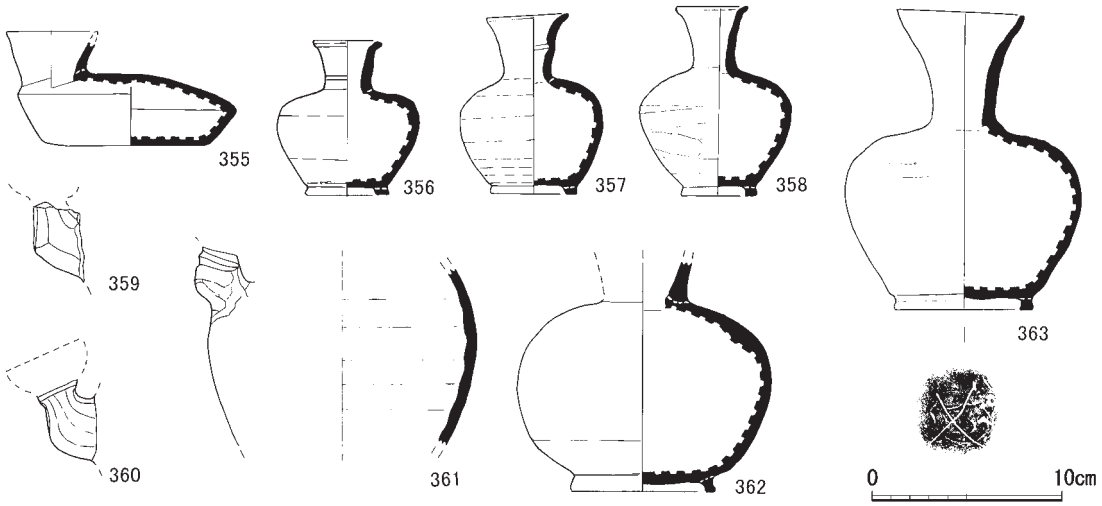


第37図　　川跡ＳＲ01　７～９区上層出土遺物実測図(1)

ｂ0手法である。いずれも内面に暗文を施さない。325の口縁端部は内側に面をもち、326の端部は外反気味である。324には灯芯痕がみられる。336は土師器椀ＣＩである。ｅ手法で調整する。口径13.9cm、器高3.9cmである。337は土師器壺Ｂである。外面にユビオサエ痕が残る。口径は9.8cmである。338は土師器高杯の脚部、339は土師器高杯の杯部である。338は外面を面取りし、８面を数える。339はやや厚手の杯部で、外面にミガキを施す。残存率が1/12程度で、復原口径は31.8cmである。

340は黒色土器の鉢Ａである。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面は緻密なミガキを施す。基本的に内面のみに黒色処理を施すが、一部外面にまで及んでいる。口径は21.2cmである。

341～344・349・350は須恵器杯Ａで、法量による大小がある。341～344は杯ＡⅣである。341がやや小さいものの、ほぼ同形同大のものである。342の内面には朱墨の痕跡が認められる。また、344は灯芯痕が１か所みられ、灯明器として使用されていた。口径9.5～11.1cm、器高3.0～4.0cmである。349は杯ＡⅢで、内面に朱墨の痕跡が認められる。口径は13.8cmである。350は杯ＡＩである。口径18.9cm、器高4.8cmである。345～348は須恵器杯Ｂで、法量による大小がある。345は杯ＢⅣで、口径10.2cm、器高3.5cm、底径7.8cmである。346～348は杯ＢⅢで、口径12.0～14.2cm、器高4.0～4.5cm、底径9.0～10.0cmである。351・352は須恵器杯Ｂ蓋である。ともに天井部が平らで、口縁部が屈曲する。351は杯ＢⅡ蓋で、硯に転用されている。口径16.2cm、器高1.5cmである。352は残存率1/12程度の破片である。353は須恵器円面硯である。出土位置からＳＲ01の南岸から投棄されたと考えられる。陸部は欠損している。圏足部に長方形と十字形の透かしを穿孔する。外堤周囲はほぼ全周するが、圏足部の残存状況はよくない。外堤径15.2cm、器高7.2cm、圏足部径19.8cmである。354は須恵器鉢Ａである。外面は回転ヘラケズリののちミガキを施す。口径は19.2cmである。355は口縁の一部を欠損する須恵器平瓶である。体部最大径は12.5cmである。356～358は須恵器壺Ｍである。356・357は完形、358は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形である。いずれも水挽き成形による。口径3.3～4.0cm、器高8.2～10.0cm、底径3.9～



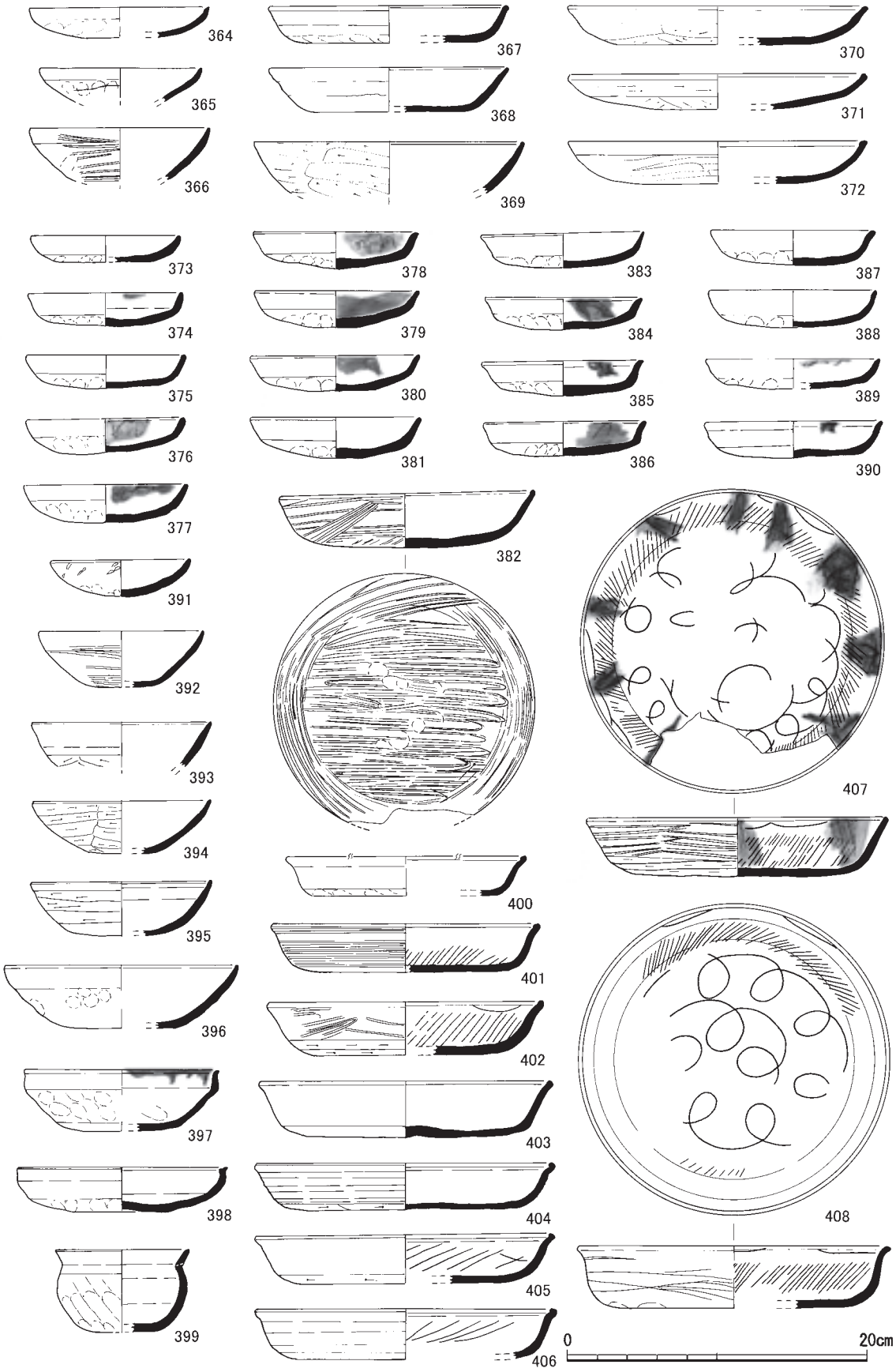
第38図　川跡ＳＲ01　７～９区上層出土遺物実測図(2)

4.5cmである。359・360は灰釉陶器の浄瓶の注口部である。361は須恵器浄瓶と思われる体部片である。注口部が部分的に残存する。362・363は須恵器壺Ｌである。ともに口頸部と体部と分割して製作したものである。362はやや扁平な体部であるが、口頸部を欠損する。363はほぼ完形で、頸部は外反気味に延びるが、口縁部がやや内湾する。また、底部外面に「×」のヘラ記号がある。口径6.6cm、器高15.8cm、底径7.2cmである。

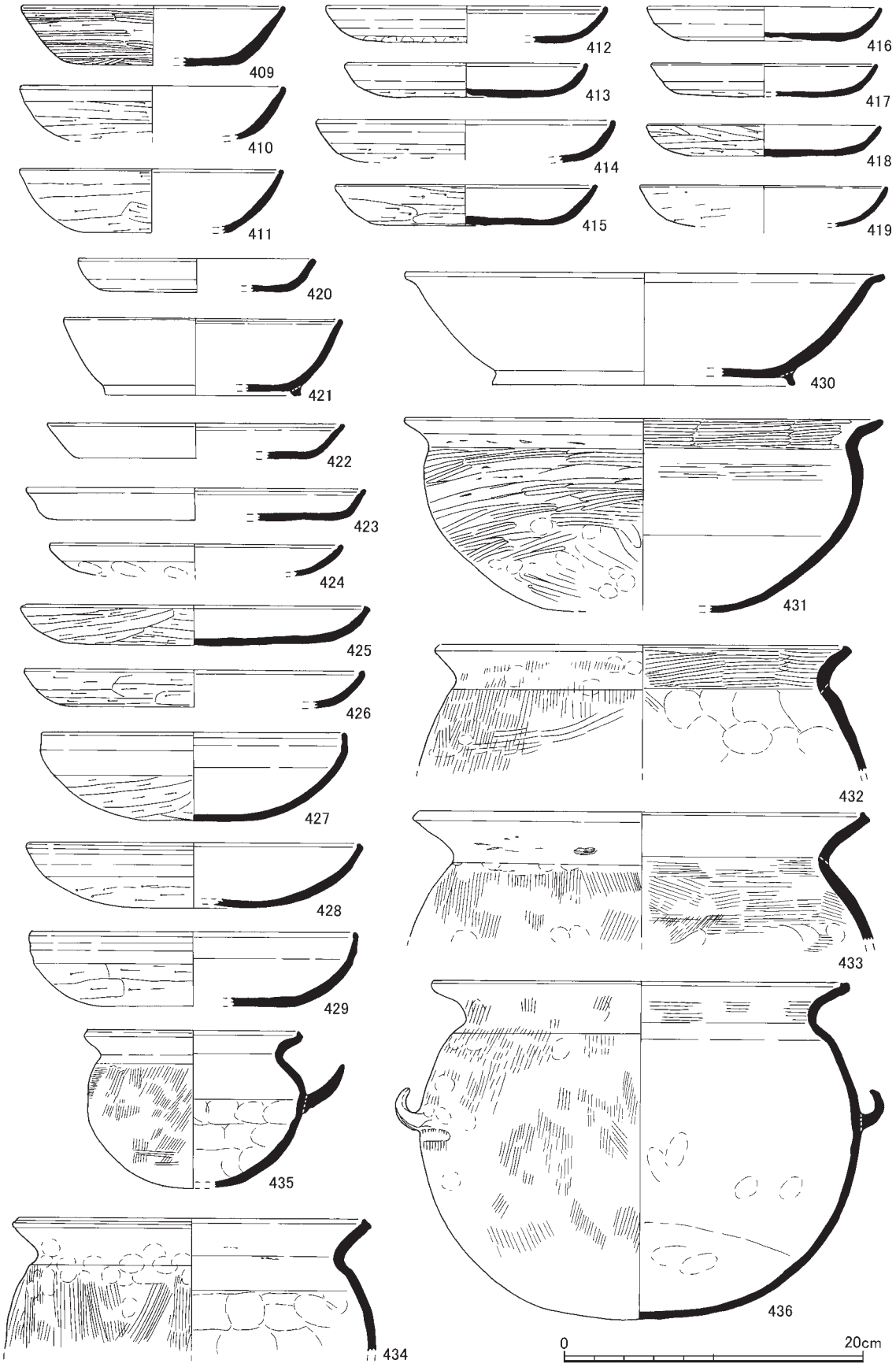
10・11区（第39～43図）　３～５区と同様に大量の遺物が出土したが、器種構成の項でも述べたように、出土土器の内容は大きく異なり、相対的に土師器皿Ｃの割合が低く、土師器の供膳具や煮炊具の占める割合が高い。また須恵器も供膳具、貯蔵具が一定量存在する。図示できた土器の点数も非常に多い。図示した土器のうち、364～372は万葉歌木簡と同時に出土した土師器である。万葉歌木簡の埋没時期を示すと考える。364は皿Ｃである。調整はｅ手法である。口径11.6cm、器高2.0cmである。365は口径10.7cm、残存高2.3cmで、外面調整はｅ手法である。椀Ａに分類すべきであろうか。366は椀Ａである。外面調整はｅ手法で、ミガキを施す。口径12.0cm、残存高3.5cmである。367～369は杯Ａである。外面調整は、367がｂ0手法、368がａ0手法、369がｃ手法である。いずれも内面に暗文は施さない。368は367に比べ口縁部が外上方に開き気味に立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。口径15.8cm、器高2.5～3.0cmである。369は口径17.8cm、器高3.5cmを測り、口縁端部の肥厚は小さい。器形としては平城宮土器Ⅳ以降にみられる資料である。370～372は皿Ａである。370は口縁部が外反気味に立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。外面調整は、370・372がｂ0手法、371がｃ手法である。いずれも内面に暗文は施さない。口径は19.5～19.8cm、器高は2.4～2.9cmである。なお、368・370・372には灯芯痕が確認できる。

373～492の大部分は黒褐色系粘土層から出土したものである。出土地点や層位については必要に応じて記述する。土師器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・椀C・壺Ｂ・鉢Ｂ・盤Ｂ・甕Ａ・甕Ｂ・鍋Ａなどがある。373～381・383～390は土師器皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。10・11区出土の皿Ｃは約170点であるが、その１割に当たる17点を図示した。未使用のものもあるが、１～３か所の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていた。口径9.8～11.9cm、器高2.0～2.9cmである。391は皿である。口径9.3cm、器高2.5cmである。外面には指頭圧痕および爪痕がみられる。392～396は椀Ａである。口径11.0～15.8cm、器高3.5～4.2cmで、396は大型のタイプである。外面調整は、392・396がｅ手法で、392はミガキを施す。393は体部下半までケズリで調整する。394・395はｃ手法である。397・398は椀CＩである。器形が若干異なるが、ｅ手法で調整する。397は灯芯痕が１か所認められ、灯明器として利用されていた。口径12.9cm、器高4.1cmである。398はやや扁平な器形を呈し、口縁部のヨコナデ調整も２段施すようである。口径14.0cm、器高3.0cmである。399は壺Ｂである。体部外面にナデ、ユビオサエを施す。口径は8.9cmである。

382・400～408は杯Ａである。口径17.2～20.6cm、器高2.6～4.1cmである。外面調整は、400・403がａ0手法、401・408がa1手法、404～406がｂ0手法、402・407がｂ1手法、382がｂ3手法である。400～402・405～408は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。405と406の１段斜放射は間



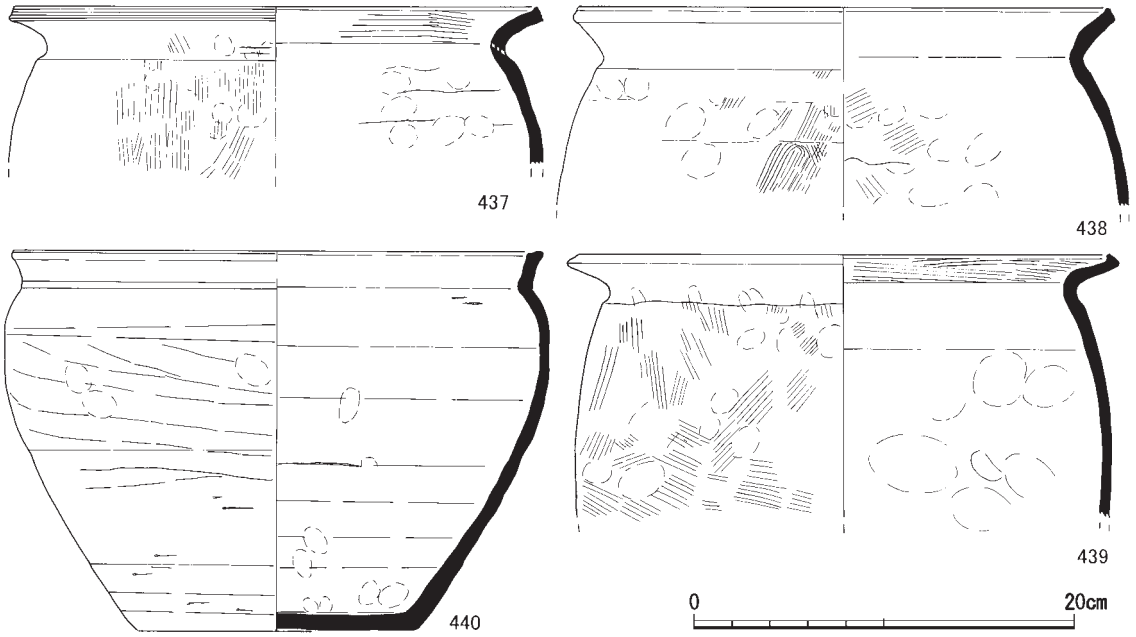
第39図　川跡ＳＲ01　10・11区出土遺物実測図(1)



第40図　川跡ＳＲ01　10・11区出土遺物実測図(2)

隔が広い。402・407・408は口縁部内面に連弧状暗文が施されており、古い様相をもつ。382・404は暗文を施さない。407は灯芯痕が10か所みられる。409～411も杯Ａである。口径17.5cm、器高3.6～4.2cmで、深手で口縁端部の肥厚は小さい。外面調整は、いずれもｃ手法で、409のみミガキを施す。いずれも暗文は施さない。412～420・422～426は皿Ａである。口径15.0～22.8cm、器高2.0～2.8cmである。口縁部の形態にはいくつかバリエーションが認められる。412～415は薄手で口縁端部が小さく肥厚し、416～419は、薄手で端部は丸くおさまる。420は厚手で端部は丸くおさまる。422・423は厚手で口縁端部が外反して内側に肥厚する。424～426は厚手で口縁部が緩く外上方に立ち上がり、内側に肥厚する。外面の調整は、412・416・420・422・424がａ0手法、413・414・417・423がｂ0手法、415・418・419・425・426がｃ手法である。423は内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施すが、その他は暗文を施さない。413・414・416は灯芯痕が確認できる。また、422は内面に漆等の付着物が認められる。421は杯Ｂである。摩滅のため不明瞭であるが、外面はヘラケズリののちミガキを施しているようである。また、外面は煤で黒色を呈する。口径18.3cm、器高5.2cm、底径12.7cmである。

427～429は鉢Ｂである。いずれも体部下半以下にヘラケズリを施す。427は428・429に比べ口径に対する器高が高い器形を呈する。口径20.0cm、器高6.0cmである。428は427・429に比べるとやや扁平な器形を呈し、口径22.2cm、器高4.4cmである。429は残存率が1/12以下であるため、口径等は推定である。430は盤Ｂである。摩滅気味であるが、外面はヘラケズリののちミガキを施す。残存率は1/12程度で、推定口径は31.8cmである。431は鍋Ａである。口縁部内面から外面にかけてミガキを施す。口径は31.6cmである。432～434・437～439は甕Ａである。いずれも口縁端部を内上方につまみ上げるが、調整手法はそれぞれ若干異なる。432･437･439は口縁部内面に、また433・438は体部内面にハケを施す。434は外面に煤が付着する。433は淡灰色で、砂礫が多い

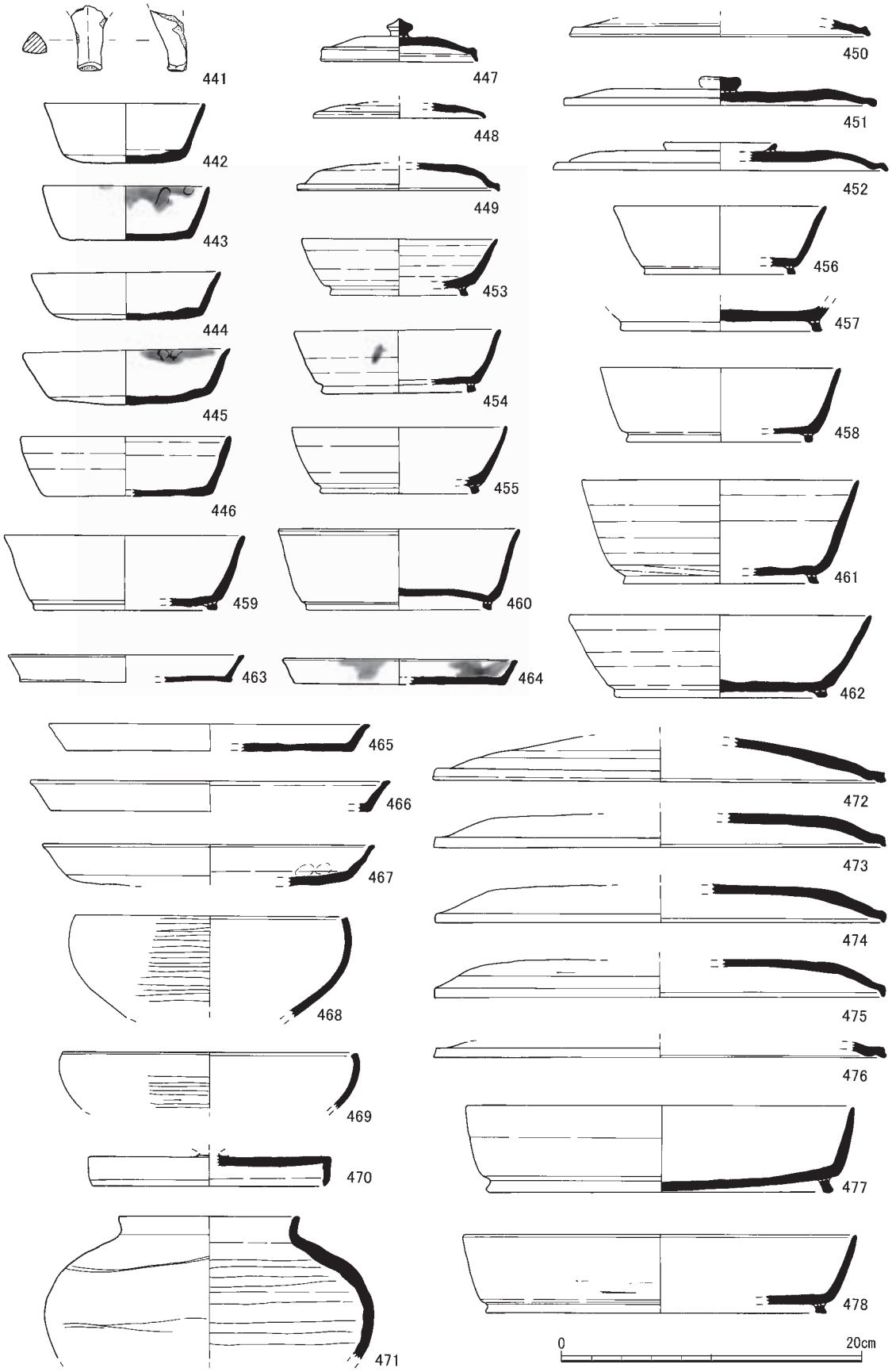


第41図　川跡ＳＲ01　10・11区出土遺物実測図(3)

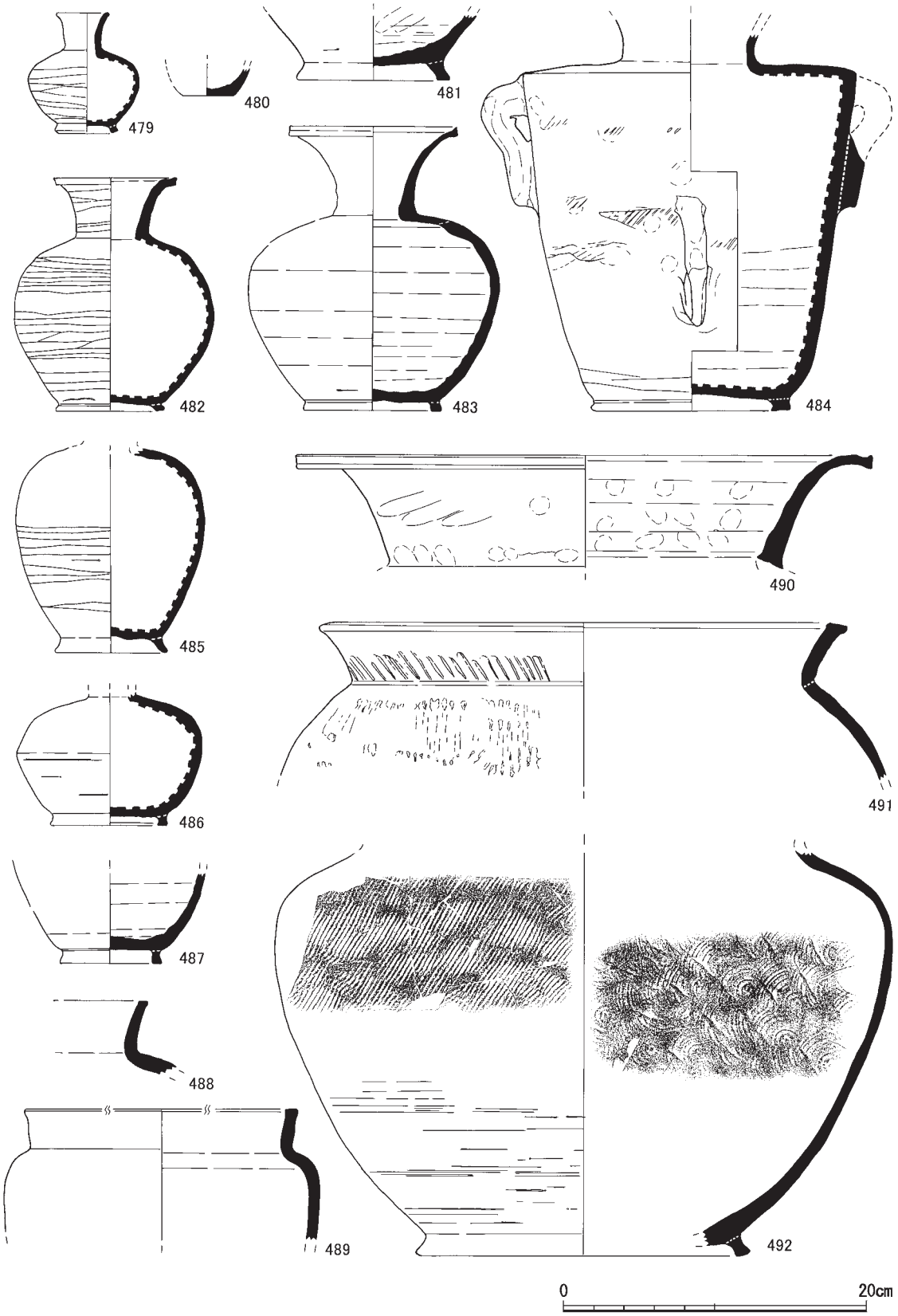
胎土である。馬場南遺跡ではあまり例をみない色調・胎土である。口径は23.0～29.4cmである。なお、437のみ残存率が1/12以下なので口径等は推定である。435・436は甕Ｂである。435は長さ４cmほどの把手を体部に取り付けるが、反対側に剝離痕が認められなかったことから、はじめから１つだけと考えられる。口縁部は端部を内上方につまみ上げる。口径14.0cmの小型の甕Ｂである。436は残存率が1/2程度で、全体の形状がわかる。口縁端部は折り返して肥厚気味にする。体部中位付近に一対の把手を有する。外面には煤が付着する。体部外面にハケ、内面にナデを施す。口径27.6cm、器高22.5cmである。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｂ・皿Ｃ・皿Ｂ蓋・壺Ａ蓋・壺Ａ・壺Ｌ・壺Ｍ・壺Ｎ・鉢Ａ・鉢Ｄ・甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｃなどがある。441は獣脚の一種である。残存高4.0cmである。442～446は杯Ａで、法量による大小がある。442・443は杯ＡⅣである。442は明灰色で砂っぽい胎土を呈する。443は灯芯痕が２～３か所認められ、灯明器として使用されていた。口径10.6～10.9cm、器高3.6～4.0cmである。444～446は杯ＡⅢである。445は灯芯痕が４か所ほど認められ、灯明器として使用されていた。口径12.3～13.8cm、器高3.3～4.0cmである。453～462は杯Ｂで、法量による大小がある。なお、459は最終的に458と接合することが判明したため、458として扱う。453～456は杯ＢⅢである。453は内面に朱墨の痕跡がみられる。454は墨痕がみられる。口径13.0～14.0cm、器高3.8～4.6cm、底径9.0～10.2cmである。458・460は杯ＢⅡである。458は内面に厚く漆が付着している。漆の表面には刷毛や筆を撫で付けたような痕が残ることから、パレットとして利用されたと考える。460は転用硯と思われる。口径15.8～16.4cm、器高5.0～5.4cm、底径12.2cmである。461・462は杯ＢⅠである。461は462に比べ器高が高いが、器高が６cmを超えるような器形はほとんど出土していない。口径18.2～19.8cm、器高5.5～6.9cm、底径12.8～13.4cmである。447～451は杯Ｂ蓋である。447は宝珠形のつまみをもち、法量もやや小型であるから、壺類などの蓋の可能性もある。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口径10.3cm、器高2.9cmである。他の４点は法量による大小がある。448・449は杯ＢⅢ蓋である。448は内面に墨痕があり、転用硯である。口径11.4～13.3cmである。450・451は杯ＢⅠ蓋で、ともに内面に墨痕があり、転用硯である。口径19.7～20.6cm、器高1.9cmである。452は環状つまみを有する蓋である。堤ＳＸ2053の西裾で出土した。口径22.0cm、器高1.8cmである。463～467は皿Ｃである。法量による大小がある。463・464は皿ＣⅡである。464は灯芯痕が少なくとも２か所確認でき、灯明器として使用されていた。口径15.4～15.5cm、器高1.7～1.8cmである。465～467は皿ＣⅠである。467は口縁部外面から内面にかけて油煙のため黒色に変色している。また、２次焼成を受けたと思われる痕跡がある。口径21.3～23.4cmである。

468・469は鉢Ａである。外面にミガキを施す。口縁部の残存率が低いが、469は口径19.6cmに復原できる。470は壺Ａ蓋、471は壺Ａである。471の内面に墨痕があり、割れるなどした後に硯に転用したのであろうか。470は口径15.2cmである。471は口径12.0cm、残存高9.5cmである。472～476は皿Ｂ蓋である。473と474は直接接合しないが、胎土・焼成が類似することから同一個体と判断し、474として報告する。472・474は明灰色で砂っぽい胎土を呈する。また、475も灰色



第42図　川跡ＳＲ01　10・11区出土遺物実測図（４）



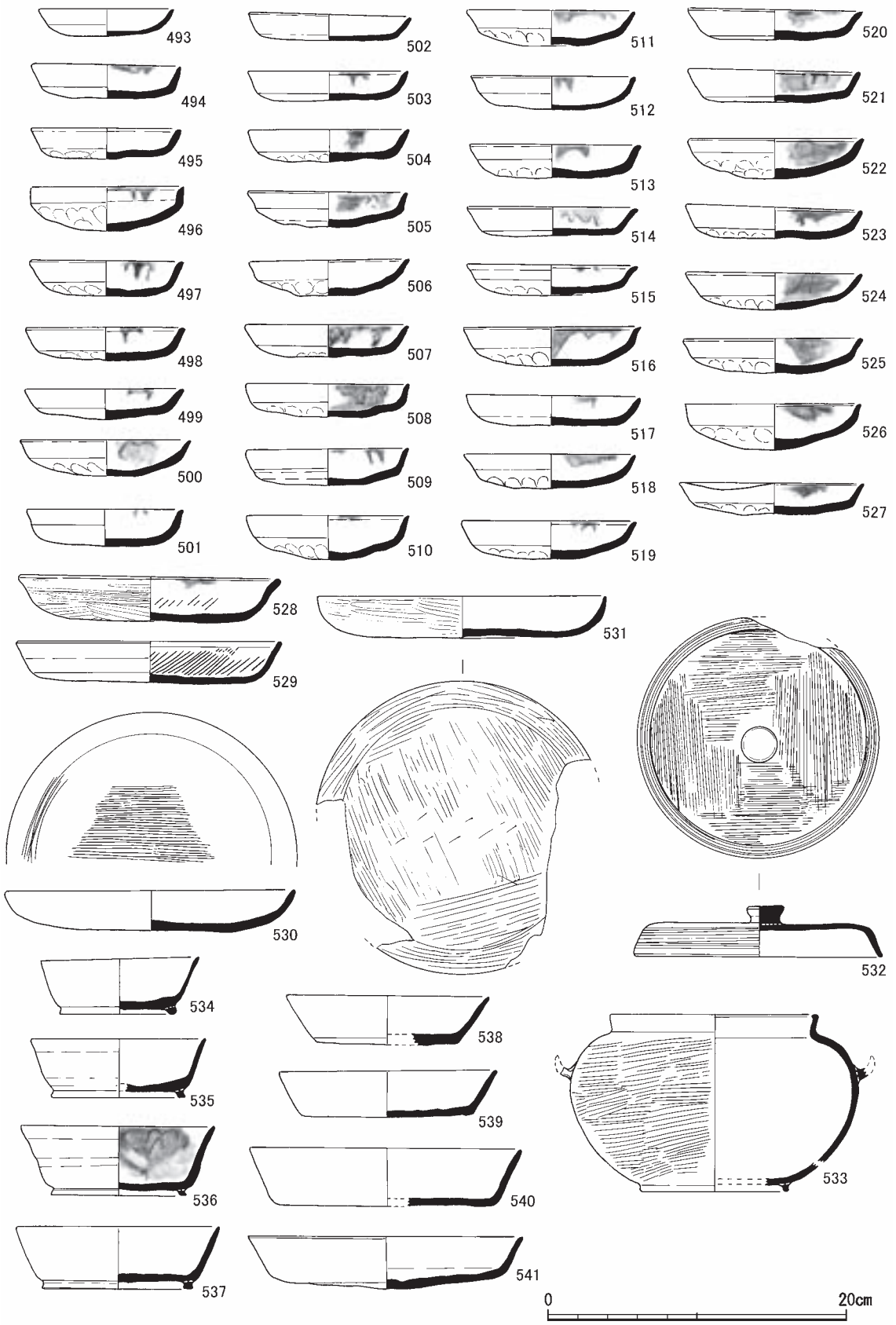
第43図　川跡ＳＲ01　10・11区出土遺物実測図（５）

でやや砂っぽい胎土を呈する。３点とも天井部外面に回転ヘラケズリを施す。残存率はいずれも1/6程度で、口径28.8～29.7cmである。476は小破片で、実測図も推定復原である。477・478は皿Ｂである。477は明灰色で、砂っぽい胎土を呈する。底部外面に回転ヘラケズリを施し、墨痕も認められる。口径25.6～26.0cm、器高5.2～5.8cm、底径21.8～22.8cmである。479は壺Ｍである。完形で、水挽き成形と考えられる。口径3.4cm、器高8.0cm、底径4.2cmである。また、480は壺Ｍの底部である可能性が高い。高台を有さない。481は壺または鉢の底部で、やや高めの高台を付す。底径は10.0cmである。482・483は壺Ｌである。ともに口頸部と体部を分割して製作したと考えられる。482の外面はヘラ状工具によって幅５mm程度のミガキのようなナデを施す。ミガキと同じように器表面が平滑に仕上げられるが、ミガキとは異なり、単位が不明瞭で、連続的である。類例がなく、詳細は不明である。ほぼ完形で、口径8.0cm、器高15.5cm、底径7.0cmである。483は上半部に自然釉が掛かる。内面にも降灰物が付着する。口径11.0cm、器高18.9cm、底径8.9cmである。484は三耳壺である。平底に高台を貼り付け、上部でわずかに開く円筒形の体部からなる。頸部より上を欠損する。肩部付近に一対の耳状把手を付し、体部中位にも耳状把手を１つ付す。体部中位のものは１つしかなく、耳状把手はもともと３個だったと考えられる。ＳＲ01の南岸から出土した（第20図）。体部はほぼ完存し、底径12.7cm、残存高26.0cmを測る。485は水瓶の体部と思われる。体部下半に回転ヘラケズリを施す。底径7.3cm、残存高13.5cmである。486・487は壺の体部ないし底部である。ともに外面に回転ヘラケズリを施す。440は鉢Ｄである。焼成が原因かもしれないが淡橙灰色を呈するため、土師器のようにみえるものの、比較的堅緻で、器形としては須恵器にみられるものなので、須恵器と判断する。体部外面下半は回転ヘラケズリを施し、それ以外は回転ナデである。外面が黒色を呈するが、煤が付着している可能性もある。残存率は口縁部が1/12程度であるが、底部では2/3程度ある。口径27.5cm、器高20.2cmである。488・489は鉢Ｄまたは甕Ｃと思われる。488は明灰色で砂っぽい胎土である。小破片のため口径等の復原はできない。489も口縁部から体部上半の破片であるが、残存率が低いため口径等の復原はできない。490は甕Ａである。残存率は1/6あまりで、口径は37.9cmである。491は甕Ｂと思われる。体部外面にタタキを施す。口縁部外面の下半にもタタキ痕が残る。体部内面はタタキの際の当て具の痕跡をナデ消している。残存率は1/6程度で、口径は32.7cmである。492は甕Ｃと思われる。口縁部を欠損するが、頸部以下の全容がわかる。体部外面上半にタタキ、下半に回転ヘラケズリを施す。また、内面にはタタキ調整の際の当て具痕が残る。残存高27.0cm、底径20.0cmである。

②溝ＳＤ2002

出土土器の器種構成については、すでにＳＲ01出土土器の項で触れたのでここでは述べない。遺構の項で述べたようにＳＤ2002出土土器の出土地点は北部（493～571）と南部（572～634）の２か所に分かれる。以下の報告でも地点ごとに報告する。

北部（第44・45図）　土師器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ｃ・壺Ａ蓋・壺Ａなどがある。493～527は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。ＳＤ2002北部出土の皿Ｃは約300点を数えるが、図示したのは



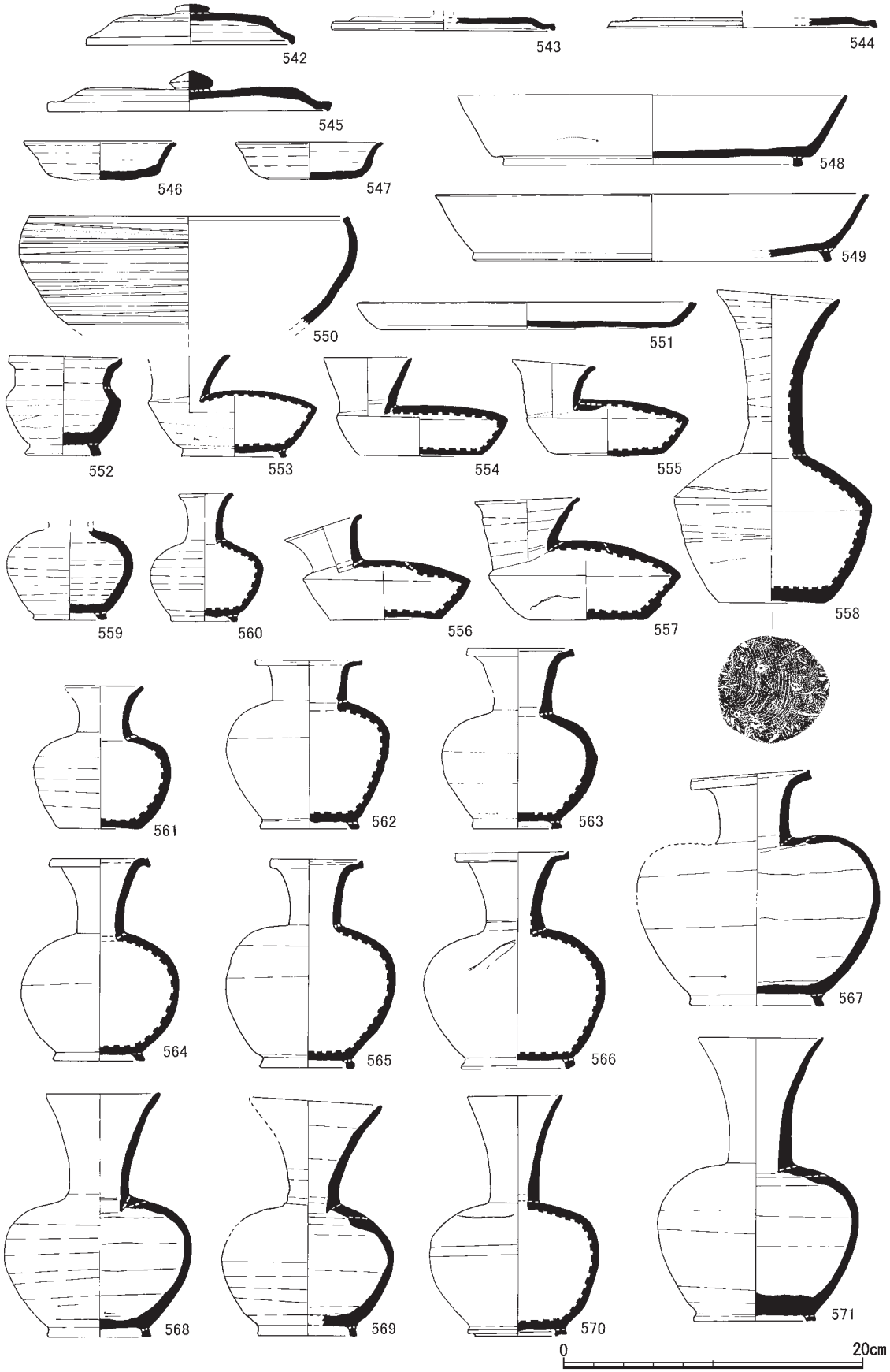
第44図　溝ＳＤ2002北部出土遺物実測図(1)

35点で、１割ほどに当たる。未使用のものもあるが、１～３か所程度の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されたことがわかる。口径9.0～12.2cm、器高1.7～3.1cmを測る。528・529は杯Ａである。528は口径17.2cm、器高3.1cmで、外面調整はａ3手法である。摩滅しているが内面にはわずかに調整の痕跡が認められる。口縁部に灯芯痕が確認できる。529は口径17.4cm、器高2.9cmである。外面調整はａ0手法で、内面に１段斜放射と不明瞭ではあるが螺旋状の暗文を施す。531は杯Ｅである。口縁部は内湾して立ち上がり、端部はそのまま丸くおさまる。外面調整はｃ手法で、外面全体にミガキを施す。摩滅が著しく、内面の暗文については不明である。532は壺Ａ蓋、533は壺Ａである。532はほぼ完形で、口径16.5cm、器高3.5cmである。外面は４回に分けてミガキを密に施す。つまみと内面にはナデを施す。533は残存率が1/2に満たないが全体の形状を知ることができる。口縁部にはヨコナデを施す。体部外面にミガキを、体部内面にナデを施す。体部中位には一対の把手を有する。口径13.8cm、器高12.0cm、底径9.8cmである。

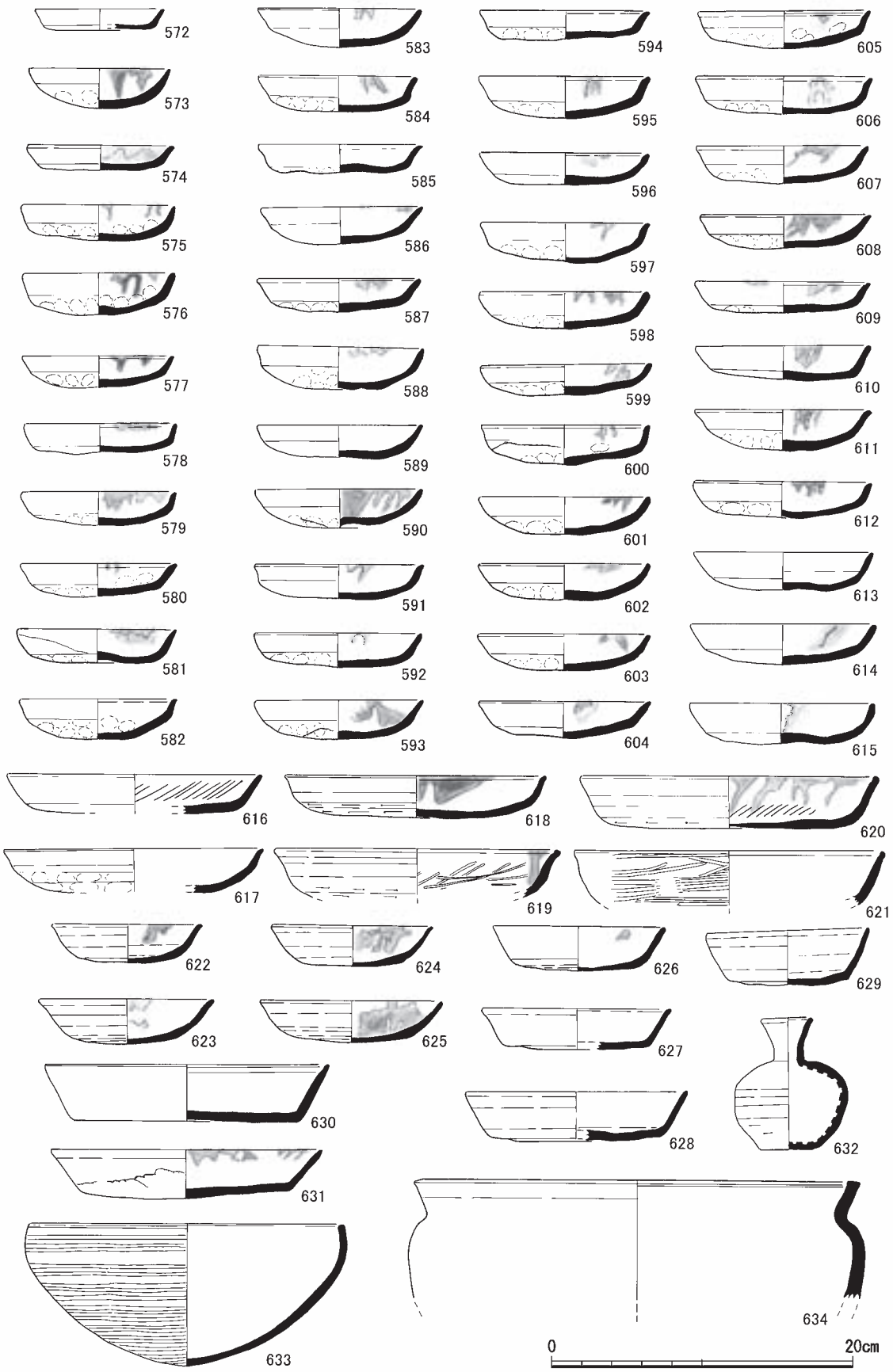
黒色土器には皿がある。530は完形の皿で、内面のみに黒色処理を施す。口縁端部を丸くおさめ、内面にミガキを緻密に施す。外面は摩滅のため調整は不明である。口径19.2cm、器高2.9cmである。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ａ・皿Ｂ・皿Ｃ・皿Ｅ・鉢Ａ・壺Ｈ・壺Ｋ・壺Ｌ・壺Ｍ・平瓶などがある。534～537は杯Ｂで、法量による大小がある。534・535は杯ＢⅣである。534は少し焼け歪みがある。口径10.6～11.7cm、器高3.9～4.0cm、底径7.6～7.9cmである。536・537は杯ＢⅢである。536は完形で、灯芯痕が２か所みられる。灯明器として使用されたのであろう。537も内外面に油煙らしきものが付着する。口径12.8～13.5cm、器高4.2～4.7cm、底径8.8～9.9cmである。538～540は杯Ａで、法量による大小がある。538・539は杯ＡⅢである。538は明灰色で、やや砂っぽい胎土を呈する。焼成もやや軟である。口径13.4～14.5cm、器高3.2～3.3cmである。540は杯ＡⅠである。内外面に大量の油煙が付着しており、灯明器として用いられたのかもしれない。口径18.1cm、器高3.9cmである。541は皿Ａもしくは杯ＡⅠである。完形で、口径18.2cm、器高3.5cmである。542～545は杯Ｂ蓋で、法量よる大小がある。いずれも扁平な天井部に口縁部が屈曲する。542・543は杯ＢⅢ蓋である。542は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。扁平なつまみを有する。口径13.9～15.0cm、器高2.7cmである。544・545は杯ＢⅠ蓋である。545は転用硯である。口径18.0～18.6cm、器高2.7cmである。546・547は皿ＥⅡである。ともに完形で、546は外面に煤が少し付着する。口径9.6～10.1cm、器高2.5～2.6cmである。548・549は皿Ｂである。ともに底部外面に回転ヘラケズリを施す。548は内外面に油煙らしきものが少し付着する。口径25.8～28.8cm、器高4.5～4.8cm、底径20.0～23.4cmである。550は鉢Ａである。外面にミガキを施す。口径21.2cmである。551は皿ＣⅠである。焼成がやや軟である。口径22.8cm、器高1.8cmである。

552は壺Ｈである。完形で口径7.4cm、器高6.7cm、底径4.9cmである。553～557は平瓶である。553は口縁部を欠損するが、高台付の平瓶である。底径6.8cmである。554～557はいずれもほぼ完形で、口径5.2～6.9cm、器高6.5～8.2cm、体部最大径10.8～12.9cmである。559～561は壺Ｍである。559は口頸部を欠損するが、水挽き成形である。560はほぼ完形で、水挽き成形と思われる。出土地点はＳＤ2002の西肩であるため、必ずしもＳＤ2002に伴うものではないかもしれない。口径



第45図　溝ＳＤ2002北部出土遺物実測図(2)



第46図　溝ＳＤ2002南部出土遺物実測図

3.6cm、器高8.6cm、底径4.4cmである。561も水挽き成形であるが、高台を有さない。口径5.2cm、器高9.6cmである。558は壺Ｇである。底部に糸切り痕が認められる。口径8.4cm、器高21.0cmである。さて、558は通有の壺Ｇに比べると、体部が大きい一方、体部と口頸部の器高の比は明らかに体部が短い。また、ＳＲ01の７区から出土した口頸部が欠損した壺Ｇ（314）もやや体部の大きな器形と想像される。558や314が、壺Ｇの初源的な形態である可能性がある。562～571は壺Ｌである。いずれも口頸部と体部を分割して製作したものである。562～567は口縁部が屈曲してやや幅広い凹帯を形成する。567は焼け歪みで体部が大きく歪んでいる。564～566は完形もしくはほぼ完形である。前５点は口径6.0～7.4cm、器高11.3～14.5cmである。568～571は口縁端部をそのまま丸く納める。570・571は完形もしくはほぼ完形である。前３点はほぼ同じ大きさで、口径6.4～7.7cm、器高16.1～16.3cmである。571はやや大きく、口径8.1cm、器高19.0cmである。

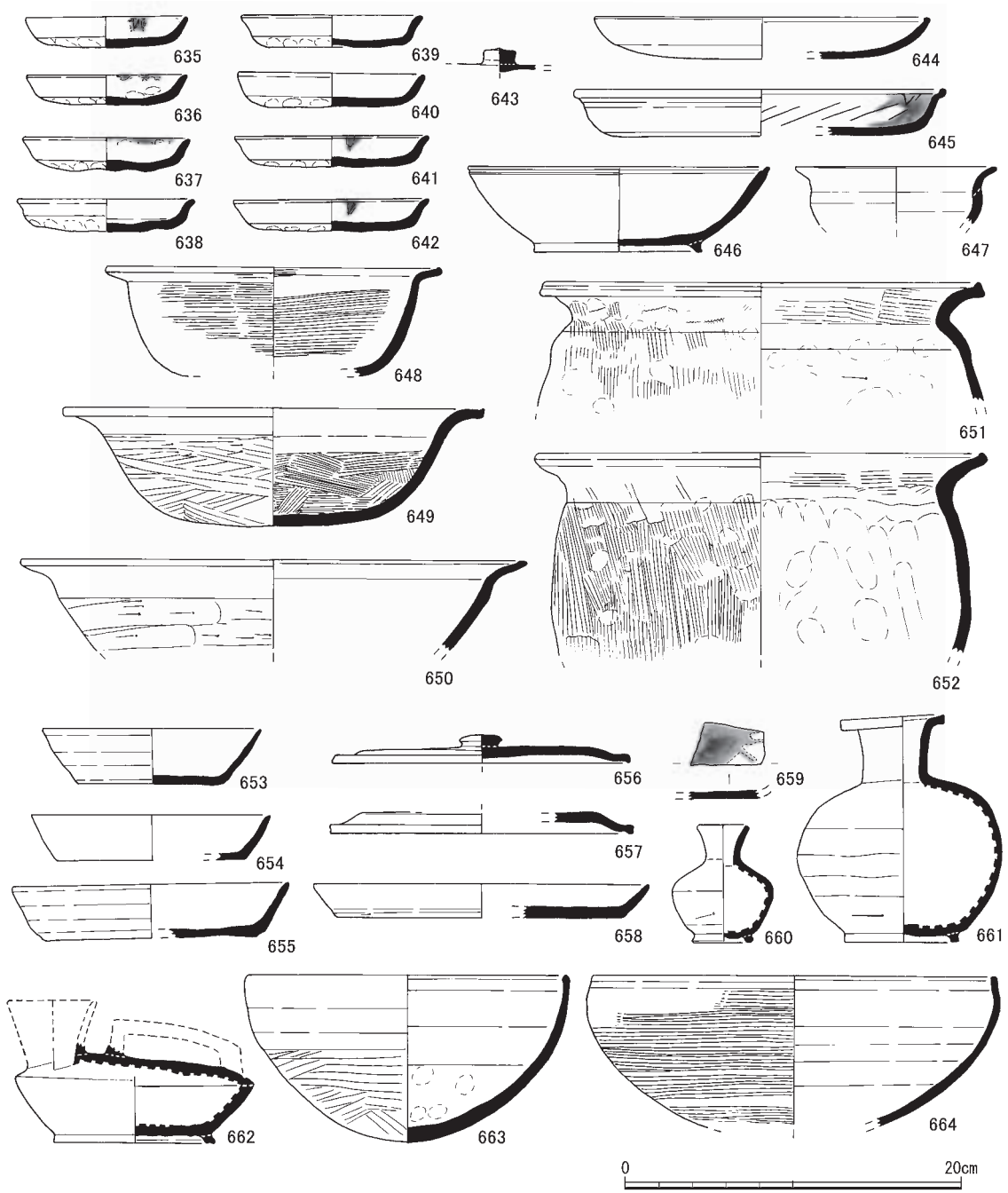
南部（第46図）　土師器には杯Ａ・皿Ｃなどがある。572～615は皿Ｃである。いずれもｅ手法で調整する。ＳＤ2002南部出土の皿Ｃは700点以上を数えるが、図示したのは44点で、１割にも満たない。未使用のものもあるが、１～３か所程度の灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていた。572は平底で、口径8.4cm、器高1.4cmを測る。他の個体とは器形が若干異なる。口径8.4～12.4cm、器高1.4～2.9cmを測る。616は杯である。厚手で、口縁端部は丸くおさまる。口径11.8cm、器高2.6cmである。外面調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文が施されている。617・618は杯Ｃである。口径17.2cm、器高2.9cmである。外面調整は、617がａ0手法、618がｂ0手法で、いずれも内面に暗文は施さない。619～621は杯Ａである。口径18.6～20.4cm、器高3.2～3.6cmである。外面調整は、619・620がｂ0手法で、621はｂ2またはｂ3手法である。619・620は内面に１段斜放射と螺旋状暗文が施される。621は暗文を施さない。618～620は灯芯痕が確認できる。

須恵器には杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・鉢Ａ・鉢Ｄ・壺Ｍなどがある。622～629は杯Ａである。622は底部外面に回転ヘラケズリを施し、底部にやや丸味をもたしている。623～625は灰白色で砂っぽい胎土を呈する。また体部外面下半から底部外面にかけて回転ヘラケズリを施し、底部にやや丸味をもたせている。628は底部の外周に回転ヘラケズリを施して丸味をもたせている。622～626は口径9.8～12.0cm、器高2.6～3.0cmである。いずれも灯芯痕が１～２か所ほど認められ、灯明器として使用されていた。627は杯ＡⅢで、623～625と同じ色調・胎土を呈する。口径12.3cm、器高2.7cmである。628は杯ＡⅡで、口径14.6cm、器高3.4cmである。629は杯ＡⅣで、同じく623～625と同じ色調・胎土を呈する。焼け歪みがあるものの完形で、口径10.7cm、器高3.8cmである。630は杯Ｃである。口縁端部内面に浅い沈線を有する。口径18.7cm、器高3.8cmである。631は皿Ａである。灯芯痕が４～５か所認められ灯明器として使用されていた。口径18.0cm、器高3.4cmである。632は壺Ｍである。完形で、高台を有さない。水挽き成形で製作されていると思われる。口径3.3cm、器高8.9cmである。633は鉢Ａである。淡青灰色で、糸状にのびる黒色粒子を胎土に含む。外面はヘラケズリののちミガキを施す。口縁部外面は黒色を呈する。口径21.0cm、器高

9.5cmである。634は鉢Ｄである。口径は28.2cmである。

③溝ＳＤ2054（第47図）

土師器には杯Ｂ蓋・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｃ・壺Ｂ・鍋Ａ・甕Ａなどがある。635～642は皿Ｃである。いずれもｅ手法で調整している。638～640は灯明器としては未使用であるが、他の個体は１ないし２か所の灯芯痕が認められ、灯明器として使用されていた。口径9.4～11.4cm、器高1.8～2.3cmである。643は杯Ｂ蓋のつまみである。644・645は皿Ａである。644は口縁部が緩く外上方に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。口径19.8cm、器高2.9cmである。摩滅が著しく、内外面の調整は不明である。645は口縁部が内湾して立ち上がり、口縁端部は外反して肥厚する。口径



第47図　溝ＳＤ2054出土遺物実測図

21.5cm、器高2.3cmである。外面調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。１段斜放射の間隔は広い。また、灯芯痕が１か所確認でき、灯明器として使用していたことがわかる。646は杯Ｂである。外面はケズリの後、ミガキを施す。口縁端部内面に沈線状の段を有する。口径17.6cm、器高5.1cm、底径9.5cmである。647は壺Ｂである。外面にユビオサエ痕が残る。口径は11.8cmである。649・650は鍋Ａである。649は外面に棒状の工具を使用したナデを施す。内面にハケを施す。口縁部はヨコナデである。口径24.8cm、器高7.0cmである。650は外面にケズリ、内面にナデを施し、口縁部がヨコナデである。残存率が1/12ほどなので、口径は推定であるが、29.6cmである。651・652は甕Ａである。ともに口縁部内面にハケ、口縁端部から外面にかけてヨコナデ、体部外面にハケ、体部内面にナデを施す。口径は25.6～26.2cmを測る。

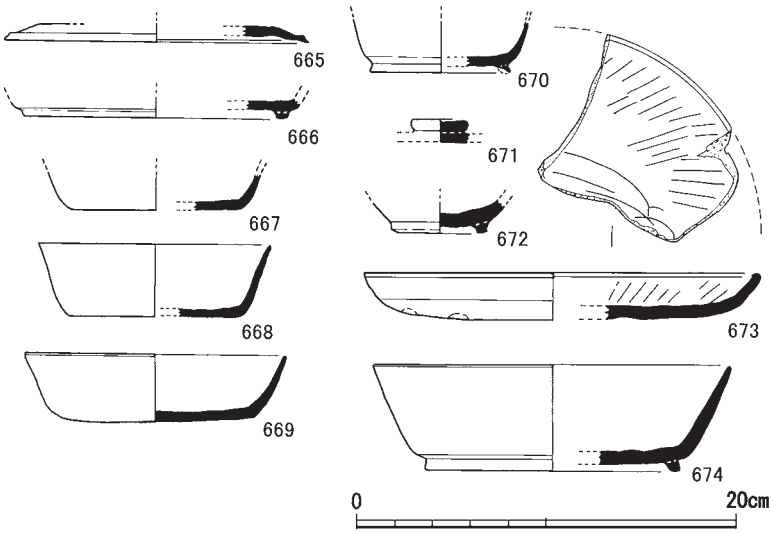
黒色土器には648の鍋がある。内外面ともミガキで、底部外面と内面の一部に黒色処理の及ばない範囲がある。残存率は1/12程度であるため実測図は推定復原である。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺Ｍ・壺Ｌ・鉢Ａ・平瓶などがある。653・654は杯ＡⅢ、655は杯ＡⅡである。口径12.9～16.3cm、器高2.7～3.3cmである。656・657は杯Ｂ蓋である。ともに天井部が扁平で、口縁が屈曲する。656は完形である。657は硯に転用されている。658は皿ＣⅠである。黒色に変化した範囲があり、灯明器の可能性もある。口径19.7cm、器高2.0cmである。659は杯もしくは皿の底部で、墨痕がみられる。また、明灰色で砂っぽい胎土を呈する。660・661はともにほぼ完形の壺Ｍである。660は口径2.7cm、器高7.0cm、底径3.4cmである。661は口頸部と体部の接合部がみられず、水挽き成形によっていると思われるので、壺Ｍに分類した。口径6.0cm、器高13.5cm、底径6.8cmで、壺Ｍとすればかなり大型の部類に入る。662は提梁と高台をもつ平瓶であるが、口縁部と提梁を欠損する。体部最大径14.0cm、底径9.5cmである。663・664は鉢Ａである。外面はともに回転ヘラケズリののち、ミガキを施す。口径19.0～23.8cmを測る。

④その他の遺構（第48図）

665は掘立柱建物跡ＳＢ03南東隅の柱穴ＳＰ2006で出土した須恵器杯Ｂ蓋である。残存率は1/12ほどで、口径16.0cmに復原できる。

666は掘立柱建物跡ＳＢ03北東隅の柱穴ＳＰ2029で出土した須恵器杯Ｂである。残存率は1/12ほどで、底径13.9cmに復原できる。高台は断面台形で高さも低い。671は同じ柱穴の柱痕から出土した須恵器杯Ｂ蓋のつまみである。



第48図　その他の遺構出土遺物実測図

670は単独の柱穴ＳＰ2003

で出土した須恵器杯Ｂである。残存率は1/12以下である。

667～669は段状遺構ＳＸ2020で出土した須恵器杯Ａである。667・668は底部外面に回転ヘラケズリを施す。669は底部外面にナデを施す。668は杯ＡⅣで、口径12.2cm、器高4.0cmである。669は杯ＡⅢで、口径13.7cm、器高3.6cmである。672は同じくＳＸ2020で出土した須恵器底部で、壺Ｍと推測される。底径4.5cmである。

673は土師器皿Ａである。掘立柱建物跡ＳＢ01の柱穴ＳＰ2004の抜き取り穴より出土した。口径19.8cm、器高2.9cmを測る。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。１段斜放射の間隔は広い。

674は井戸ＳＥ01から出土した須恵器杯ＢⅠである。色調は淡橙褐色を呈するが、焼成は堅緻で、須恵器と考える。残存率は1/4程度で、口径18.8cm、器高5.6cm、底径13.2cmである。

（筒井崇史・松尾史子）

(2)緑釉・三彩陶器（第49図）

第２次調査で出土した緑釉や三彩陶器は35点を数える。そのうち、19点を図示した。緑釉や三彩陶器の出土地点等については付表14を参照されたい。三彩陶器はすべて日本製で、いわゆる奈良三彩である。

675は三彩蓋である。外面は二彩で濃緑色をベースに黄緑色のところがある。内面は鶯色である。素地は灰白色で胎土は密である。１mm以下の角張った石英を多数含む。口径17.0cm、器高3.4cmである。

676は緑釉塔鋺（とうまり）である。釉は外面は緑色、内面は二彩様で薄く透けており、緑灰色である。胎土は密でやや軟らかい。つまみが欠損している。口径6.4cm、残存高3.2cmである。

677は三彩小壺である。釉は緑色をベースにややくすんだ褐色が斑点状にある。白釉は下地の色が表に出ている。焼成は良で、胎土は密である。口径3.3cm、器高4.3cmである。

678は三彩壺の頸部である。釉は濃緑色で、ところどころ黄色と白色釉が斑点状に施されている。中央部の径は6.2cm、残存高は6.8cmである。

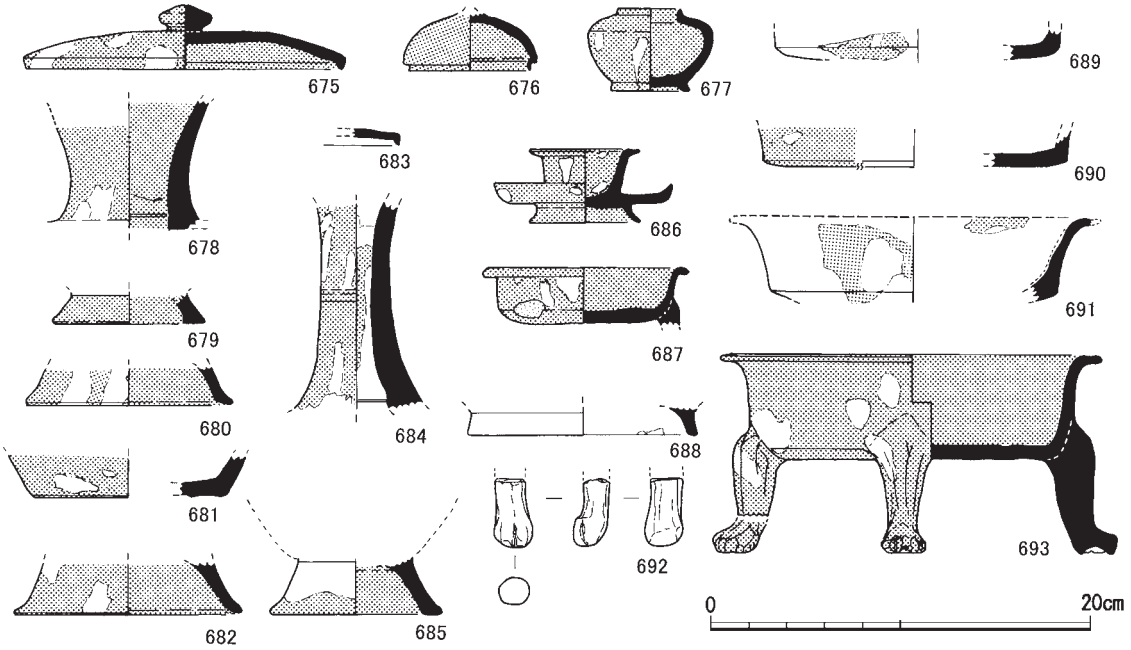
679は緑釉壺の高台である。底径は7.8cmである。釉は濃緑色をベースに黄色味がかる、薄い緑色である。内面は濃緑色がベースで、薄いところは下地の色が出て、緑灰色となっている。

680は三彩壺の高台である。底径は10.8cmである。

681は三彩壺の底部である。体部のほとんどと高台は欠損している。釉は濃緑色をベースに緑色と黄色が斑点状にある。内面は露胎であり、素地は灰白色である。底径は9.8cmである。

682は三彩壺の高台である。外面の釉は底径11.7cm、残存高は2.2cmである。釉は濃緑色をベースにやや黄色味がかる薄い緑色である。内面は濃緑色がベースで、薄いところは下地の色が出て、緑灰色となっている。素地は淡黄白色である。胎土は密で、黄褐色である。680と同じく胎土は火山灰のような細かな粒子がある。

683は三彩の壺である。小破片のため口径は不明である。色調は緑色がベースで、一部褐色のところがある。内面は緑灰色である。調整は回転作用を利用している。



第49図　緑釉・三彩陶器実測図

684は三彩浄瓶の頸部である。残存高は10.9cm、中央部に凹線があり、この部分の径は4.1cmである。釉は濃緑色である。所々に黄緑色の斑点があり、一部に褐色の小点がある。胎土は黄白色である。

685は多口瓶あるいは浄瓶の高台である。底径は9.0cm、残存高3.0cmである。釉は外面下半が濃緑色で、上半は黄緑色である。内面は濃緑色である。素地は黄褐色である。胎土はやや密で、火山灰が含まれているのか、極細な光る粒子がある。

686は三彩托である。８割残存している。口径5.8cm、器高3.9cmである。釉は半分以上の範囲が被熱したのか黒色である。ほかは明るい黄色、緑色、薄い白色である。ただし、遺存状態が悪く、変色している可能性もある。

687は三彩火舎型香炉である。もとは３足であるが、１か所を除いて欠損している。釉は濃緑色で、ところどころ薄いので下地が見えている。素地は淡黄白色である。胎土は密で、焼成は軟である。

688は緑釉杯の高台である。内外面とも施釉している。

689は火舎型香炉の体部下半である。体部径は15.0cmである。釉は濃緑色で、ところどころ黄色と白色が混じる。内面は黄緑色である。胎土は密で、焼成は良である。

690は火舎型香炉である。体部径は15.8cmである。釉は緑色と緑灰色である。内面は少し明るく、鶯色に近い。素地は黄白色である。胎土はやや密で、１mm以下の石英などを含む。

691は三彩火舎型香炉の体部である。濃緑色をベースに、ところどころ斑点状に鶯色の部分がある。その多くが剝落している。径は15.0cm、残存高4.0cmである。素地は黄白色で１mm以下の角張った石英やチャートを含む。焼成は堅緻である。

692は香炉の脚部である。緑釉があるがほとんど剝落している。足の先はヘラにより獣足を表

現している。胎土は黄灰色である。

693は三彩火舎型香炉である。内外面とも施釉されている。釉は緑色をベースに、褐色と白色の斑点がある。施釉した後で、逆さにして乾かしたようで、口縁部の上に釉垂がある。元々の色は明るい緑色であったが、遺存状態が悪く、濃緑色となっている。素地は灰白色である。彩釉山水陶器の「左五」と刻書された700と同じ胎土である。胎土は密で、焼成は良である。成形は底面が反時計回りに粘土紐を巻き上げている。全体に丁寧なナデ調整である。足は４足である。ヘラにより成形されており、獣足を表現している。また、足裏も窪ませており、肉球を表現しようとしている。底部外面に重ね焼き痕がある。

（伊野近富）

(3)彩釉山水陶器（第50・51図）

彩釉山水陶器とは、今回新たに名付けたものである。緑釉や三彩を表面に施した焼き物で、奈良時代の特注品である。第２次調査で出土した彩釉山水陶器は、小さな破片も含めて58点を確認した。そのうち､16点を図示した。彩釉山水陶器の出土地点等については付表15を参照されたい。類似品としては、緑釉水波紋磚がある。今回出土したものには次のような特色がある。

①素地は素焼きである。焼成技法からいえば、土師器に相当する。

②ヘラを使用して山の稜線や崖、あるいは洞窟を表現した山型と、ヘラによる数条の沈線で水の文様を表現した水型の２種がある。

③成形技法は布を使用しており、成形台から離れやすいようにしている。

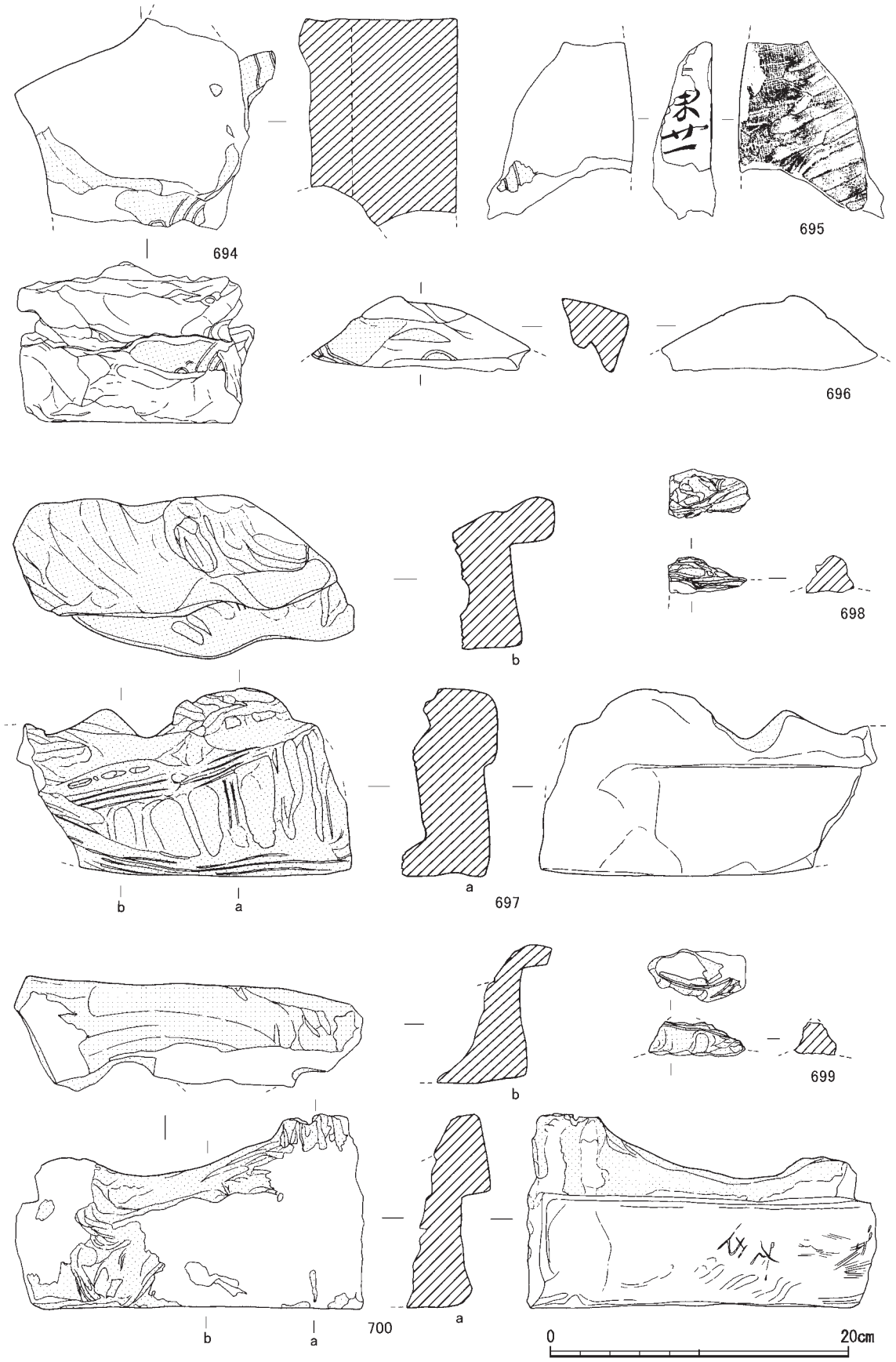
④胎土や釉薬の違いから２つに分類できる。Ａ類は胎土の色調が白色系で､焼成は堅緻である。Ｂ類は胎土の色調が淡褐色系で、焼成は軟である。

以上のことを踏まえて、個々の遺物について説明したい。

694は山型である。平面形はもともと菱形か五角形などの多角形であったと思われる。後方の左側面の２辺が遺存している。接合痕が認められ、断面は２層に分けられる。上部の平面形は、後方は下部と一体となり、同じ多角形である。ここには山が表現されているが、ほとんどは欠損している。山の平面形は後方が三角形で、前方が円形である。下部は水波紋をヘラで刻んで表現されている。胎土は良好で、１mm大の砂を含む。素地の色は黄白色である。焼成は堅緻である。したがって、胎土と焼成はＡ類である。釉色は濃緑色である。縦14.3cm、横17.5cm、厚さ10.6cmである。溝ＳＤ2002北端の上層で出土した。

695は水型である。本来の平面形は方形と考えられるが、右側面が遺存するのみである。側面は緩やかな曲線を描いている。その側面には「東廿一」と墨書されている。胎土と焼成はＡ類である。裏面には布目を施した後、ヘラにより削っている。幅0.7～1.2cmで13回以上削っている。表面はほとんど欠損しているが、残ったか所には水波紋をヘラで刻んで表現されている。釉色は濃緑色である。縦11.9cm以上、横9.8cm以上、厚さ3.9cmである。川跡ＳＲ01の10区上層（断ち割り19）で出土した。

696は山型である。もっとも高い頂部分だけが遺存しているに過ぎない。山はヘラで造形して



第50図　彩釉山水陶器実測図(1)

いる。裾野を表現したと思われる、山からの傾斜が緩やかになったか所には、水波紋がヘラにより刻まれている。釉薬はほとんど剝落している。胎土は１mm大の砂を含んでいる。色調は黄土色である。焼成は軟である。したがって、胎土と焼成はＢ類である。釉色は明るい緑色である。大きさは縦4.8cm以上、横14.7cm以上、厚さ4.5cm以上である。段状遺構ＳＸ2020で出土した。

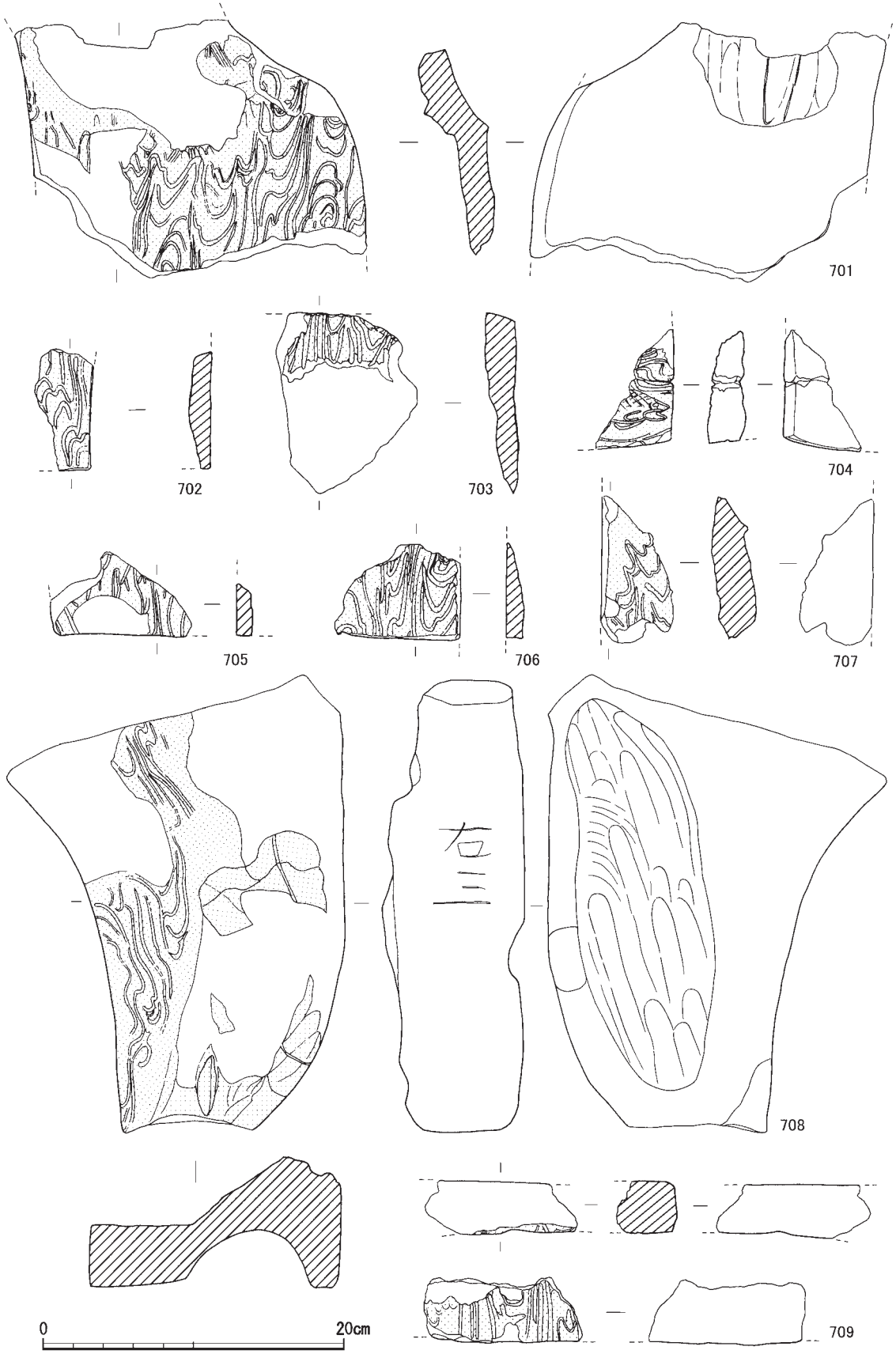
697は山型である。左端が一部欠損しているものの、ほぼ全体の形状が窺える資料である。上部は山稜をイメージして２つの頂と低い稜線がある。中位には横方向にヘラによる刻みを４条ほど施している。下半部は縦方向に窪みを表現している。崖や洞窟をイメージしていると思われる。また、最下部は、横方向に３条ほどの沈線（刻み）を施している。右端は一部中位が欠損しているものの、ほぼ遺存している。左端も欠損しているが、もともとの形を想定すれば、数cm程度欠損しているに過ぎない。表面には緑色の釉が点状に一部残っているにすぎない。胎土は良好で、淡褐色である。１～２mm大の灰色砂や白色砂を含む。焼成は軟である。釉は明緑色～緑色である。したがって、胎土と焼成はＢ類である。背面は逆「Ｌ」字状に、直角に屈折しており、製品を据えた場合、倒れないよう他の物に立てかけられるようにしている。なお、上から見た場合、外形は「く」字状に屈曲しており、蓮弁の先端部をイメージさせる。縦12.6cm、横21.5cm、厚さは5.5cmである。ＳＸ2020下層から出土した。

698は山型である。稜線の一部である。下部は欠損している。胎土は良好で、黄白色である。微細な白色砂を含む。焼成は良である。釉は褐色、線色、黄色の三彩である。縦2.5cm以上、横5.2cm以上、厚さ3.2cmである。ＳＲ01の断ち割り10で出土した。

699は山型である。稜線の一部である。下部は欠損している。上部には横方向にヘラにより沈線を２条施す。正面には窪みがあり、崖面か洞窟をイメージしているようである。胎土は良好で、淡黄褐色である。微細な石英等を含む。焼成は軟である。上部の釉は剝落しており、褐色、緑色、黄色の三彩である。緑色には明るいものと濃いものの２種ある。類例としては、奈良市一条高校出土の山水陶器が同じモチーフである。(注19) 縦2.2cm以上、横6.5cm以上、厚さ2.8cmである。ＳＸ2020で出土した。

700は山型である。表面は半分以上剝落しているが三彩である。胎土は良好で１mm大の灰色砂や白色砂を含む。色調は黄白色である。焼成は堅緻である。したがって、胎土と焼成はＡ類である。釉は緑色を基調に薄い黄色と褐色と濃緑色である。外形は右手が最も高い山の頂で、左手に向かって緩やかに傾斜した後、左端でまた、やや高くなる。背面は逆「Ｌ」字状に直角に屈折しており、製品を据えた場合、倒れないよう他の物に立てかけられるようにしている。背面、すなわち裏面下半には「左五」とヘラで刻書されている。上半は釉が１～３cmの範囲に施されている。また、山の裏面は上方から釉が垂れている。縦13.0cm、横23.3cm以上、厚さは断面の下部は6.0cm以上である。ＳＤ2002北部で出土した。

701は山水型である。平板であるが奥側は剝離しているものの、盛り上がっており、山がそこに表現されていたと考えられる。平板な表面のほとんどには水波紋がヘラにより刻まれている。現状では７流ほど表現している。山の裏側は縦6.5cm、横9.5cmの範囲が深さ2.9cmにわたって抉



第51図　彩釉山水陶器実測図(2)

られている。ただし、裏面は全面剝離している。胎土は良で、色調は黄土色である。焼成は軟である。したがって、胎土と焼成はＢ類である。釉色は緑色である。外形は左右の側面が遺存していた。右側面は緩やかに「く」字状に屈曲しており直線的ではあるが、やや弓なりに曲がっている。大きさは縦15.0cm以上、横22.0cm、厚さ最大5.0cmである。ＳＤ2002北部で出土した。

702は水型である。おそらく方形の平板なものと思われ、その右下隅が残っていると思われる。ヘラによる沈線で水波紋を表現している。裏面は全面剝離している。胎土は密で色調は灰白色、焼成は良好である。釉は濃緑色である。したがって、胎土と焼成はＡ類である。ＳＲ01の断ち割り４で出土した。縦8.1cm以上、横3.9cm以上、厚さ1.5cm以上である。

703は水型である。ほとんどの辺が欠損しているが、上端が遺存している。701と同様のものと考えられる。水波紋は３流認められる。表面は2/3以上剝離している。奥側の側面は遺存している。胎土は密で、色調は白色である。焼成は良で、Ａ類である。釉は濃緑色である。縦12.0cm以上、横8.7cm以上、厚さ2.0cmである。ＳＤ2002南部で出土した。

704は魚が刻まれた水型である。２辺が遺存している。２片が接合した。魚文様が描かれた部位はＳＲ01の５区で出土した。これと接合した水波紋を描いた破片はＳＲ01の断ち割り７の出土である。おそらく元来は方形の平板なものと考えられる。水波紋の動きを考えれば、魚の頭部が奥側であるほうが自然である。したがって、魚は流れに逆らって上っていたと考えられる。胎土は良好で、１mm以下の白色砂、灰色砂を含む。色調は灰白色、焼成は堅緻である。釉は濃緑色である。したがって、胎土と焼成はＡ類である。縦7.3cm以上、横5.0cm以上、厚さ3.4cm以上である。

705は水型である。おそらく元来は方形の平板なものと考えられる。ヘラによる水波紋は３流ほど描かれているが、剝離面が多く、不分明である。胎土は良好で、色調は灰白色のＡ類である。焼成は良好である。釉は濃緑色である。ＳＲ01の５区の断ち割り7から11にかけての範囲で出土した。縦5.5cm以上、横9.3cm以上、厚さ1.1cm以上である。

706は水型である。ヘラによる沈線で水波紋を表現している。水流は３流ほどが描かれていた。１側面のみ遺存しており、元来は方形の平板なものと考えられる。胎土は良好で、色調はＢ類である。焼成は良好である。釉は濃緑色である。縦6.5cm以上、横8.4cm以上、厚さ1.1cm以上である。ＳＲ01の５区で出土した。

707は水型である。外周を飾ったもので、「く」字状に屈曲している。ヘラによる水波紋は１流のみ遺存している。胎土は良好で、色調はＢ類である。焼成は良好である。釉はほとんど剝落しているものの、濃緑色である。縦9.7cm、横4.8cm以上、厚さ2.9cm以上である。ＳＤ2054の東岸で出土した。

708は山水型である。外周を飾ったもので、「く」字状に屈曲している。角度は約140°であり、下半分は内側に緩やかにカーブしている。全周が残っている。右側面には「右三」とヘラで刻まれている。表面の右半分は山をイメージしていて、大きく隆起している。山頂部分はほとんど剝落している。裏面は平面部分は布目痕がある。凹部にヘラケズリを数条施している。表面の突部

と一体となっており、重量の軽減、あるいは厚さを減じて焼成を容易にしたかもしれない。胎土はＢ類で、釉は明緑色である。縦26.0cm、横9.1cm、厚さ4.1cm、山の最も高いか所で厚さ8.7cmである。ＳＸ2020で出土した。

709は水型である。表面は平板ではなく、やや膨らみを持つもので、立てて置いたと考えられる。水波は２流認められる。胎土はＢ類で、裏面に布目がある。下端は面取りしている。縦4.3cm以上、横10.4cm以上、厚さ3.5cmである。ＳＲ01の７区で出土した。

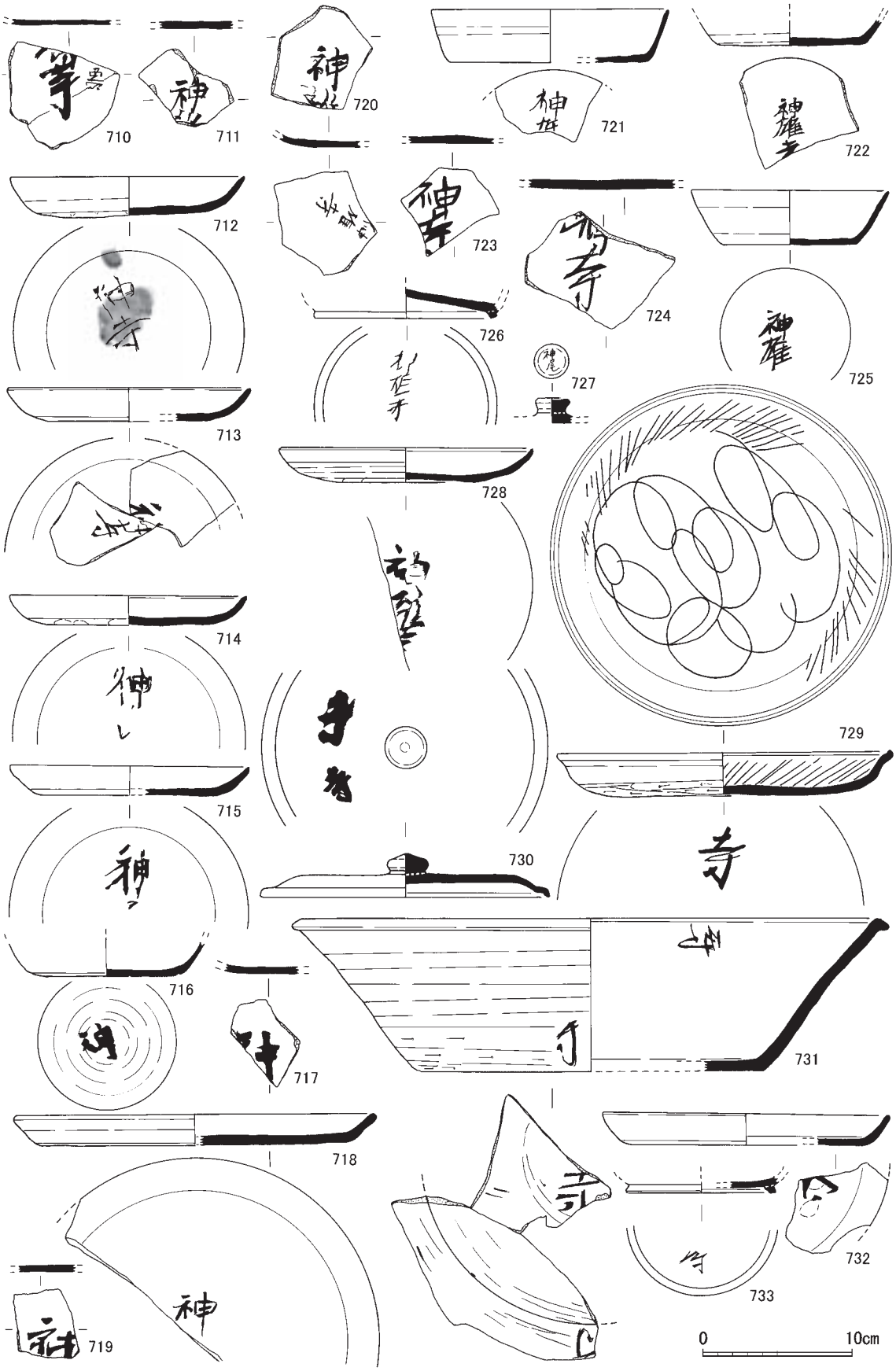
（伊野近富）

(4)墨書土器（第52～54図）

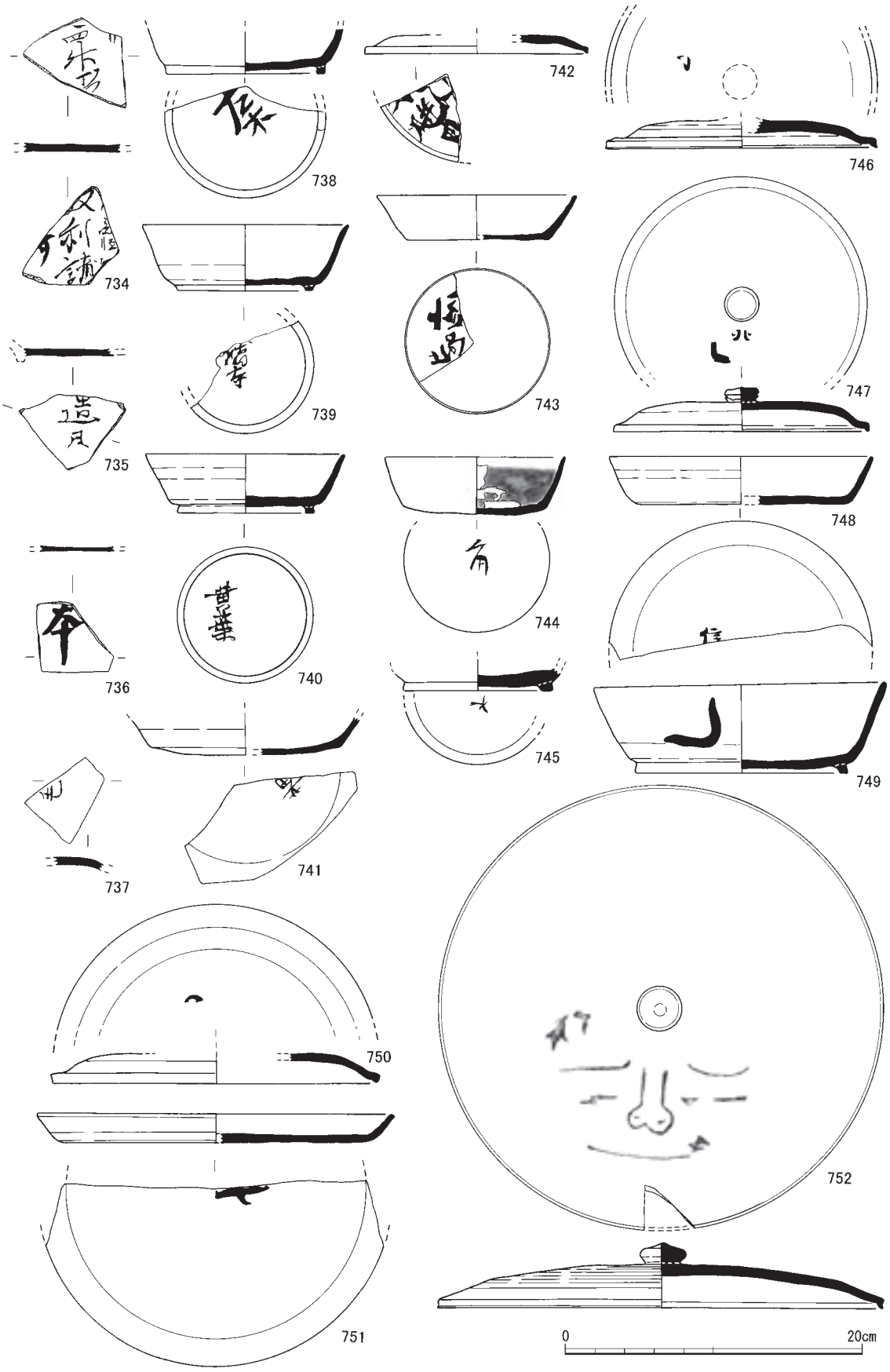
墨書土器は川跡ＳＲ01、溝ＳＤ2002、溝ＳＤ2054などから出土している。その大半がＳＲ01の西部で集中して出土した。第１次調査と第２次調査で出土した分を合わせると遺物整理箱で５箱分出土しており、判読不可のものを含めて総点数は208点である。これらのうち、文字または記号等が判読できる100点を付表16に集録した。出土地点等については表を参照されたい。以下、主なものについて図示し、報告する。(注20)

「神雄寺」に関わる墨書土器（第52図710～733）　716・718・721・722・725・726・730・731は須恵器、それ以外は土師器である。730はＳＤ2002、715はＳＤ2054、726は溝状遺構ＳＸ2049、711は堤ＳＸ2053付近の調査地北壁から出土した。ほかはすべてＳＲ01からの出土である。

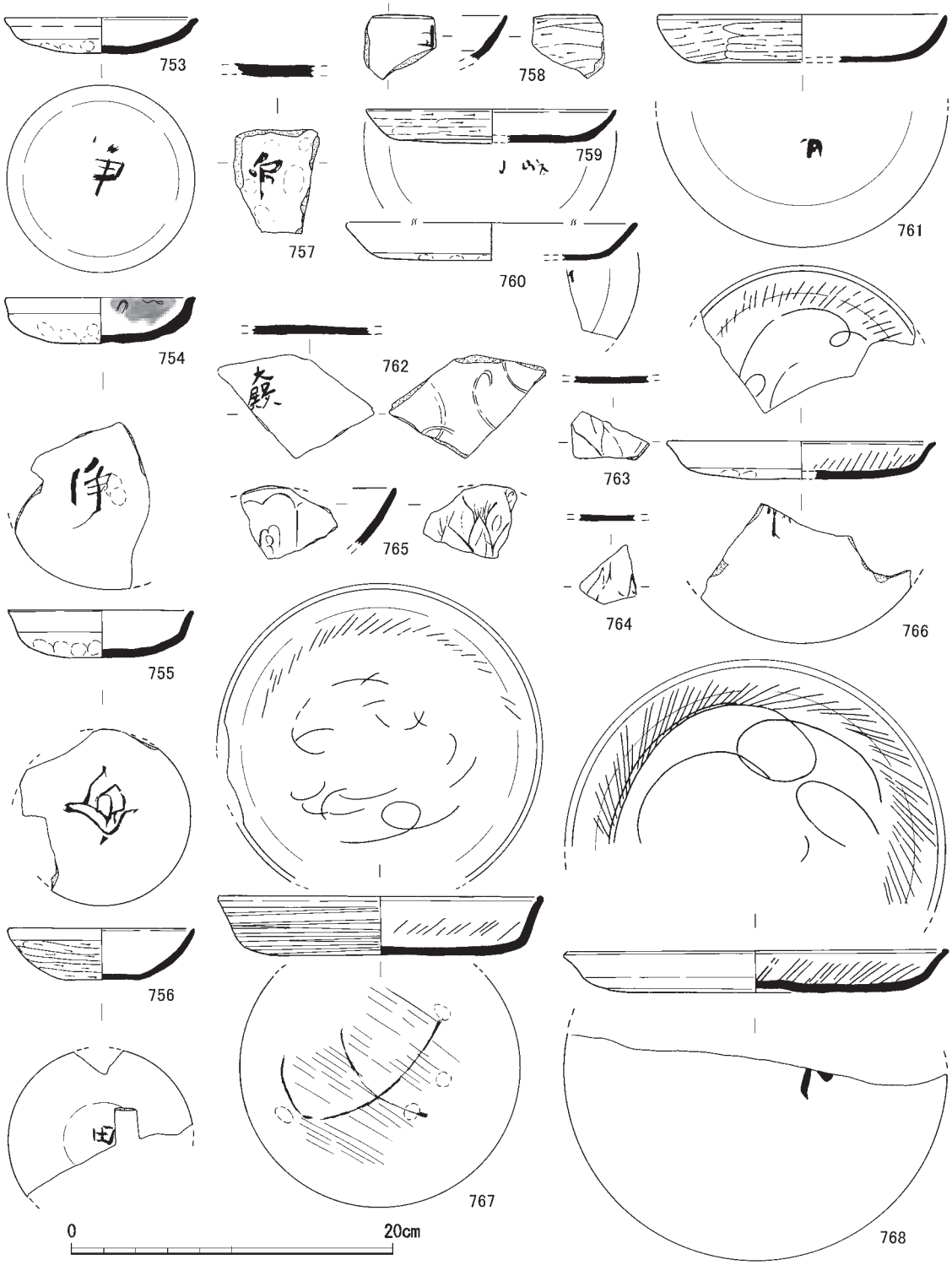
710･711は土師器杯か皿の底部である。底部外面はケズリで、内面に暗文はない。710は「神寺」「粟」、711は「神□」と墨書される。712～715は土師器皿である。調整はａ0手法で、口縁端部はまるくおさまる。712・713は「神寺」、714は「神□」、715は「□〔神ヵ〕□」と墨書される。716は須恵器杯Ａで、底部外面中央に「神」と墨書される。717は土師器杯か皿の底部で、「神ヵ」と墨書される。底部外面の調整はケズリで、内面に暗文はない。718は須恵器皿ＣⅠで、底部外面中央に「神」と墨書される。719は土師器杯か皿の底部で「神ヵ」と墨書される。底部外面の調整はケズリで、暗文の有無は不明である。720は土師器の皿か杯の底部の内外面に墨書されている。内面に「神雄」、外面に「神雄寺」と書かれており、筆跡は異なる。721・722は須恵器杯Ａで、721は底部外面に「神□〔雄ヵ〕」、722は底部外面に「神雄寺」と墨書される。721は杯ＡⅡである。723・724は土師器杯か皿の底部である。723の底部外面の調整はケズリで、「神寺」と墨書される。内面に暗文はない。724の底部外面の調整はケズリで、「神寺」と墨書される。725は須恵器杯Ａで、底部外面に「神雄」と墨書される。726は須恵器杯Ｂで、底部外面に「神雄寺」と墨書される。727は土師器蓋のつまみで、外面に小さく「神尾」と墨書される。728は土師器皿で、口縁部は緩やかに湾曲して端部はまるくおさめる。調整はｂ0手法であるが、体部中央付近までケズリを施す。底部外面に「神雄寺ヵ」と墨書される。内面に暗文はない。729は土師器皿で、口縁端部は肥厚する。調整はｂ0手法で、内面に１段斜放射と螺旋状暗文が施される。底部外面に「寺」と墨書される。730は須恵器杯ＢⅠ蓋で、外面に「寺寺」と墨書される。１字目は墨がにじんで読みにくい。731は須恵器盤Ａで、口縁部の内面に横位置で１か所、底部外面に１か所、底部に近い体部外面に１か所の合計３か所に「寺」と墨書されている。「寺」の筆跡は底部外面



第52図　墨書土器実測図(1)



第53図　墨書土器実測図(2)



第54図　墨書土器実測図(3)

の１字のみが異筆である。なお､731はＳＲ01の６区出土資料とＳＤ2054出土資料が接合している。732は土師器皿で、調整はａ0手法である。内面に暗文はない。底部外面の端に「寺」と墨書される。733は土師器杯Ｂで、底部外面に「□〔寺ヵ〕」と墨書される。

その他の墨書土器（第53・54図）　734～752は須恵器、753～768は土師器である。738・744・752はＳＤ2002北部、745・759はＳＤ2002南部、758はＳＤ2054、他はＳＲ01から出土した。

734は杯か皿の底部で、内面に「□/四升受」と墨書される。外面には「□□/□利諸/□」という経文と考えられる文言が三行で墨書される。735は杯Ｂの底部で、外面に「造瓦」と墨書される。736は杯か皿の底部で、「本」と墨書される。737は杯Ｂ蓋の破片で、外面に「毛」と墨書される。738～740は杯ＢⅢで、いずれも底部外面に墨書がみられる。738は「左木」と墨書される。平城京北方の地名と関わりがあるかどうか不明である。739は「□橋寺」と墨書される。「橋」の上の字は、墨痕から「泉」の可能性もあり、行基が建てたといわれる「泉橋寺」との関係も考えられる。740は「黄葉」と墨書される。741は杯か皿の底部で、「黄」と墨書される。「黄」の字の下は欠損しており、「黄葉」の可能性もある。742は杯Ｂ蓋で、内面に「□瓸田」と墨書される。「口瓶田」の意味であろう。743・744は杯ＡⅢである。743は底部外面に「□□〔悔過ヵ〕」と墨書される。744は底部外面に「角」と墨書される。意味は不明である。745は杯Ｂの底部で、外面に「大」と墨書される。746・747は杯ＢⅡ蓋である。746は外面に墨書があるが判読はできない。墨痕から「寺」の可能性も考えられる。747は外面に「北」と墨書される。748は杯ＡⅡで、底部外面に判読できていないが、「隹」と似た墨書がみられる。749は杯ＢⅠで、体部外面に「乙」と墨書される。750は杯ＢⅠ蓋もしくは皿Ｂ蓋、751は皿Ｃである。750は外面に、751は底部外面に墨書されるが、いずれも内容は不明である。752は大型の皿Ｂ蓋で、外面に人面が墨書される。眉毛、目、鼻、口が描かれている。なお、左上と右下に墨痕がある。

753～755は皿Ｃである。753と754の底部外面には「浄」と墨書される。ＳＲ01で大量廃棄された土器群とともに出土した。灯明専用皿を使用した法要の内容を検討する上で重要な資料である。755は底部外面に蓮の花（つぼみか）と思われる絵が描かれている。756は椀Ａで、調整はｃ手法である。底部外面に「田」と墨書される。757は杯か皿の底部で、「印ヵ」と墨書される。外面の調整はａ手法である。758は皿の口縁部で、調整はｃ手法である。横位で「□〔神ヵ〕」と墨書されている。759・761はｃ手法の皿、760はａ0手法の皿で、内面に暗文はない。いずれも底部外面に墨書されるが内容は不明である。762は杯か皿の底部で、「大殿」と墨書される。外面の調整はａ手法である。内面には螺旋状の暗文が施される。763・764は杯か皿の破片で、同一個体の可能性がある。外面に蓮の花びらが描かれている。765は杯か蓋の口縁部である。内外面に蓮の花を描いている。外面には外側からみた、内面には内側からみた蓮の花が表現されている。766はａ0手法の杯Ａで、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。底部外面に墨書されるが、内容は不明である。767はｂ3手法の杯Ａで、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。さらに、口縁端部内面には連弧状暗文が施され、馬場南遺跡出土土師器の中ではもっとも古いタイプである。底部外面には記号「ℓ」が墨書される。768はａ0手法の皿Ａで、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文を施す。底部外面に墨書される。

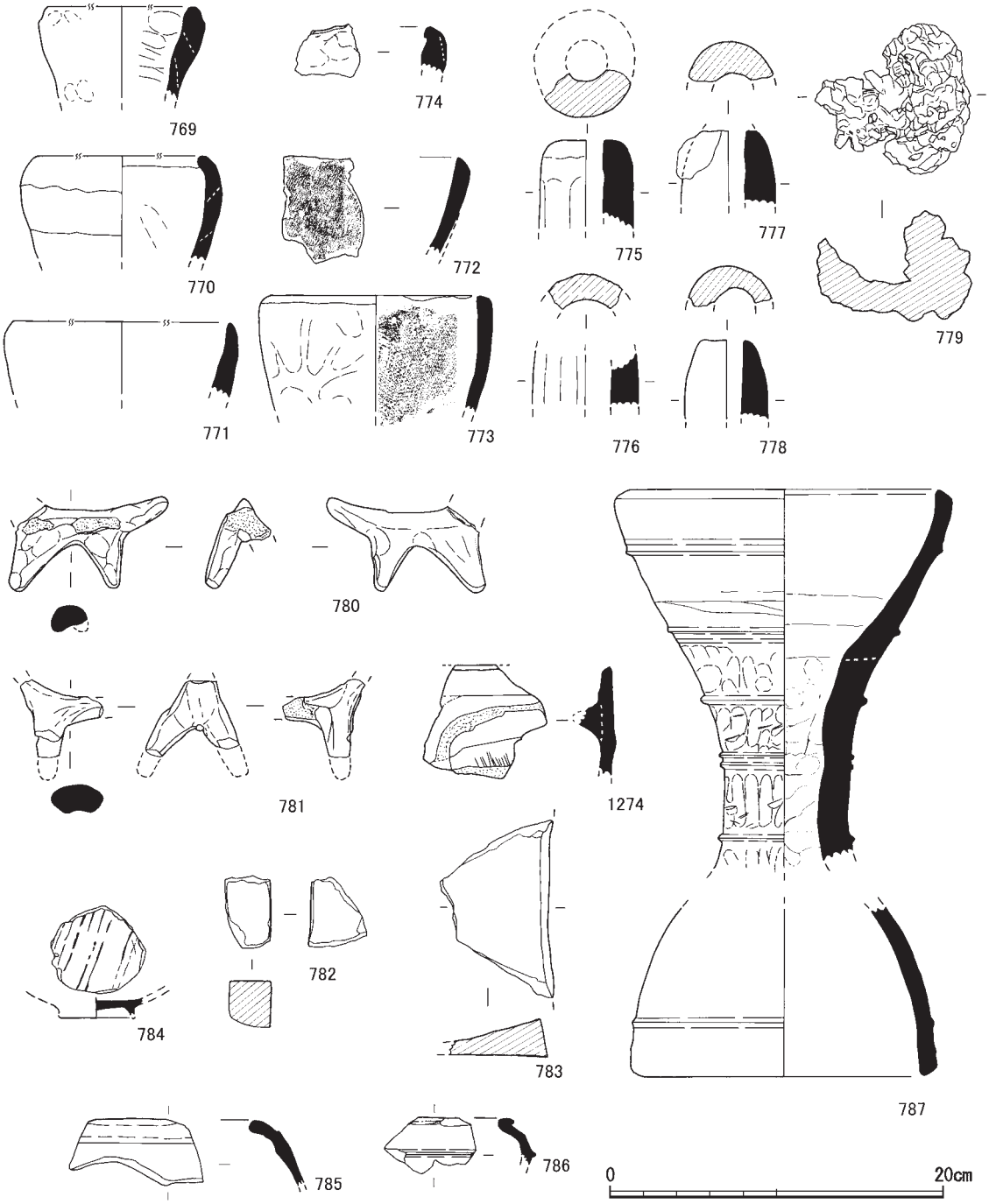
（松尾史子）

(5) 製塩土器・鞴羽口・土製品ほか（第55図）

769～773は製塩土器である。形状は漏斗形と推定されるが、いずれも小さく割れており、口径や器高がわかるものはほとんどない。焼成は軟で、２次的に火を受けて赤変している。色調は淡

褐色や明褐色である。胎土は多量の砂粒を含む。769はＳＲ01の10区から出土した。内外面ともユビオサエで成形する。770はＳＲ01の７区から出土した。外面に横方向に粘土紐の痕跡が認められる。771はＳＲ01の４区から出土した。772はＳＲ01の11区から出土した。外面はユビオサエで成形し、内面には布目がある。773はＳＲ01の10区から出土した。外面はユビオサエで成形し、内面には布目がある。口径12.2cm、残存高7.0cmである。

774～778は鞴の羽口である。すべてＳＲ01から出土した。形状は円筒形で、いずれも一部しか



第55図　鞴羽口・土馬・土製品実測図

遺存していない。羽口先端は高熱を受けて赤変している。筒部は明褐色である。外面には縦方向にナデを施す。

779は鉱滓である。ＳＲ01の断ち割り15で出土した。大粒の砂粒と鉱物とが融着している。色調は黒色や灰褐色である。

780・781は土馬である。780はＳＲ01の９区から出土した。頭部と右足が欠落している。色調は淡褐色である。胎土は良好で、砂粒は含まない。781はＳＲ01の10区から出土した。前足のみ遺存している。

1274は竈である。廂部分を含む上部のみ遺存している。ＳＲ01の断ち割り19から出土した。

782・783は砥石である。いずれも砂岩系である。782はＳＲ01の断ち割り19から出土した。783はＳＲ01の11区から出土した。

787は須恵器腰鼓である。胴部分はＳＲ01の11区から出土した。他はＳＲ01の７・８・10区に分散して出土した。両端の口縁部が円形で、そこから中位に向かって漏斗形にすぼまる形状である。胴部である中位は円筒形である。口縁部は回転作用を利用した横方向のナデ、胴部はユビオサエを施す。胴には横方向に３条の突帯を付けている。口縁部にかけてさらに上下２条ずつ横方向に突帯を付けていると推測できるが、下部は欠損しており、１条しか残っていない。胴の内面も指でナデている。色調は内面が灰色で、外面は灰褐色である。中位がすぼまり両端が広がるという、このような特異な形態のものは、国内では、三彩であるが、正倉院御物に類例（鼓胴と呼称）がある。[注21] 用途は楽器である。中国では、唐李憲墓で出土例がある。[注22]

（伊野近富）

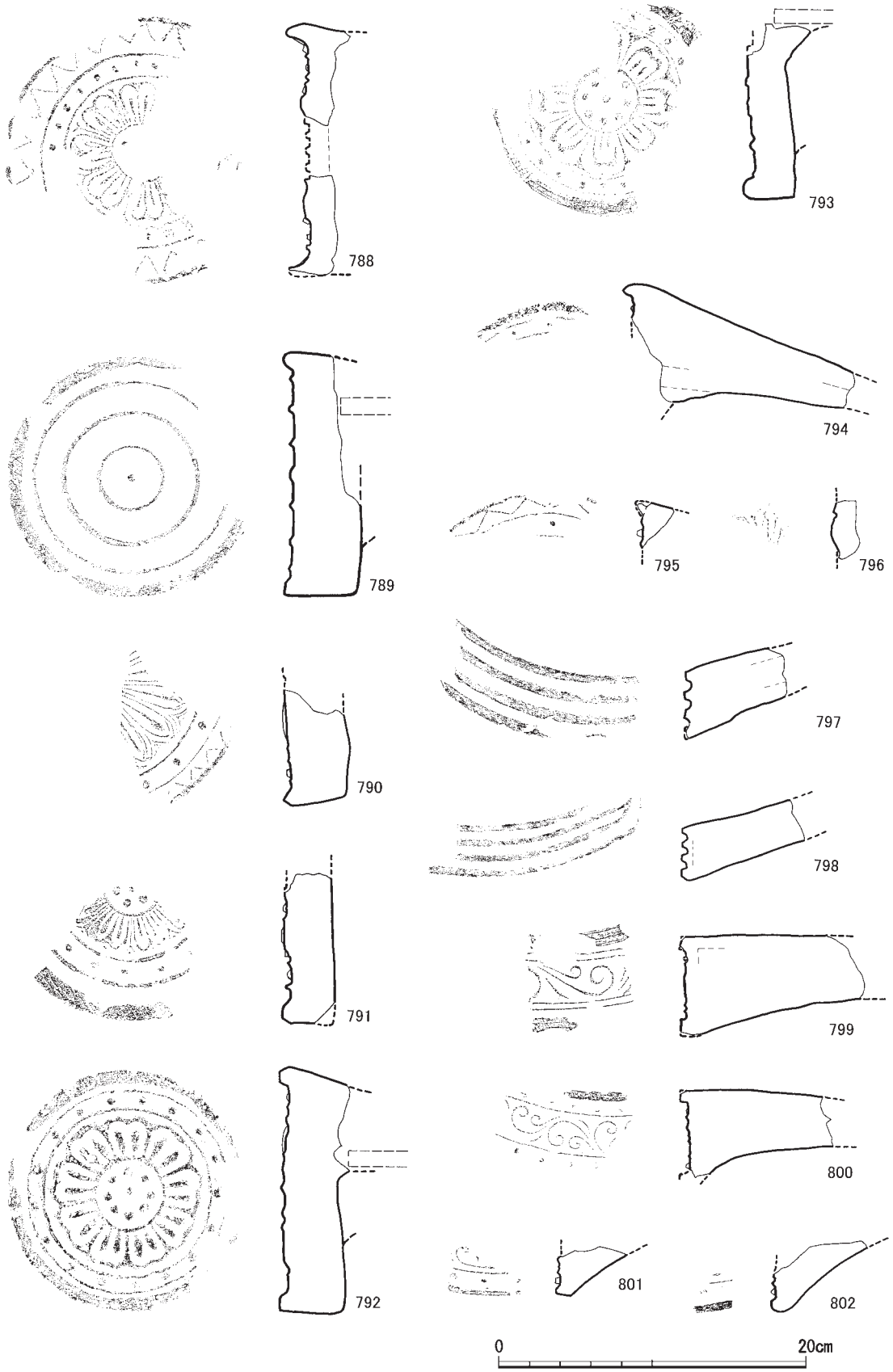
(6) 瓦塼類

①軒丸瓦（第56図788～796）

軒丸瓦は６型式18点と型式不明３点が出土した。型式不明を除けばすべて平城宮式の軒瓦である。それぞれの出土地点等については付表17を参照されたい。

788は複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。完形ではなく中房の大部分を欠く。この型式の軒丸瓦の内区は、一段低くなった中房に１＋６の蓮子を配し、その外側に照りむくりがある複弁の蓮華文を８単位配する。外区内縁には26個の珠文を配する。外区外縁部分には凸線鋸歯文をめぐらせる。瓦当側面には笵端痕跡がある。瓦当裏面の調整は残存していないため不明であるが、裏面上部には丸瓦接合のために指で凹凸を作っている。直径は15.7cm、中房径は9.7cm、弁区幅3.15cm、弁の最大幅は2.3cm、外縁幅、外縁高ともに1.5cmである。焼成は硬質、胎土は緻密で、色調は表面が灰色で、内部は灰白色を呈する。平城宮6311Aa型式で、１点出土している。788は川跡ＳＲ01の７・８区で出土した。

789は重圏文軒丸瓦である。中心に珠点をいれ、圏線を３重にめぐらす。瓦当の厚さは4.7cmと厚く、まず笵に2.6cmほどの厚さの粘土を入れた段階で丸瓦をおき、さらに瓦当に粘土を加えている。瓦当裏面は中央がやや窪むが、ナデによりほぼ平坦に仕上げている。直径は15.8cm、第一圏内径は3.6cm、第二圏内径は8.05cm、第三圏内径は11.9cmである。焼成はやや軟質、胎土は砂


788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
0
20cm

第56図　軒瓦実測図

粒を少量含みやや粗い。色調は灰白色ないし灰色を呈する。平城宮6012B型式で、４点出土している。789はＳＲ01の６区南肩付近の遺物包含層で出土した。

790は単弁蓮華文軒丸瓦である。出土資料は、いずれも小片のため中房の様子や弁数は不明である。外区内縁には珠文を配し、外区外縁には凸線鋸歯文がめぐる。瓦当面には笵ずれがあり、側面には笵端の痕跡が確認できる。弁の最大幅は1.4cm、外縁幅は1.25cm、外縁高は0.65cmである。焼成は硬質、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は灰色ないし暗灰色を呈する。平城宮6135C系型式で、２点出土している。790はＳＲ01の11区の黒褐色系粘土層から出土した。

791は複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。中房には外区に比べやや高く、１＋６の蓮子を配し、その外側に複弁の蓮華文を８単位配す。弁端中部と「Y」字状に分れた間弁の外に三角文がある。外区内縁には珠文を26個配し、外区外縁は傾斜縁Ｉである。瓦当裏面は不定方向のナデにより平坦である。復原直径は17.0cm、中房の復原径は3.4cm、弁区幅は2.95cm、弁の最大幅は2.05cm、外縁幅は2.2cm、外縁高は0.5cmである。焼成は硬質、胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は灰色を呈する。平城宮6308C型式と同笵で、１点出土している。791は平坦面１の西部の遺物包含層から出土した。

792は複弁９弁蓮華文軒丸瓦である。全体的に凹凸は弱く、平たい。中房には１＋８の蓮子を配し、その外側に複弁の蓮華文を８単位配する。外区内縁には珠文を17個配し、外区外縁は直立縁である。直径は15.5cm、中房径は4.95cm、弁区幅は2.5cm、弁の最大幅は2.9cm、外縁幅は0.9cm、外縁高は0.5cmである。焼成は軟質、胎土は砂粒を含むが緻密である。色調は灰白色を呈する。平城宮6316Ｄｃ型式と同笵で、８点出土している。792を含む４点が溝ＳＤ2002北部から出土した。

793は複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。中房は突出しており、１＋８の蓮子を配する。その外側には複弁の蓮華文を８単位配する。直径15.2cm、中房径4.35cm、弁区幅2.8cm、弁の最大幅は1.8cm、外縁幅1.5cm、外縁高0.8cmである。焼成は硬質、胎土は緻密である。色調は灰色あるいは暗灰色を呈する。薬師寺報告fig33～38と同笵で、２点出土している。793はＳＲ01の８区から出土した。

794は破片のため文様の詳細は不明である。外区内縁には珠文を配し、外区は傾斜縁である。外縁幅は1.9cm、外縁高は0.8cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を含み粗い。色調は灰白色である。瓦当上端の1.3cmは調整のため丸みを帯びており、それより後ろはタテケズリを施す。瓦当厚が2.9cmのところで丸瓦が接合されている。794はＳＲ01の１区南から出土した。

795は破片のため文様の詳細は不明である。外区内縁には珠文を配し、外区外縁には凸線鋸歯文がめぐる。外縁幅は1.3cm、外縁高は0.7cmである。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は暗灰色である。795はＳＲ01の10区から出土した。

796は複弁蓮華文軒丸瓦である。破片のため詳細は不明である。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は灰白色である。796は堤ＳＸ2053の断ち割りから出土した。

②**軒平瓦**（第56図797～802）

軒平瓦は４型式19点と型式不明２点が出土した。型式不明を除けばすべて平城宮式の軒瓦である。それぞれの出土地点等については付表17を参照されたい。

797は二重の重郭文軒平瓦である。瓦当幅は4.4cmで、内側と外側の方郭幅はともに0.6cmである。側面には0.7cmの笵端痕跡が巡る。凹面側は約３cmの幅で不定方向のナデあるいはヨコケズリを施している。凸面側はタテケズリを施している。平城宮6572Ａ型式で、９点出土している。797はＳＲ01の１区北から出土した。

798は二重の重郭文軒平瓦である。瓦当幅は3.5cmで、内側と外側の方郭幅は共に0.4cmである。側面には0.45cmの笵端痕跡が巡る。凹面側は約３cmの幅でヨコナデを施し、それ以降はタテナデを施しているが、平瓦凹面には布目が残る。凸面側はタテケズリを施している。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は暗灰色を呈する。平城宮6572Ｇ型式で、５点出土している。798はＳＲ01の10区から出土した。

799は均整唐草文軒平瓦である。中心が残っていないため中心飾りは不明である。内区と外・脇区との境に二重の界線をめぐらす。顎は欠いているが、曲線顎だと考えられる。平瓦部凸面は瓦当近くをヨコナデしているが、それ以外には縄タタキが残る。凹面の瓦当寄りは横方向にヘラケズリする。側面は二段ケズリを施す。瓦当幅は6.2cm、内区幅は2.7cm、上外区・脇区幅ともに1.8cmである。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰白色あるいは灰色を呈する。平城宮6681F型式で、２点出土している。799はＳＲ01の９区から出土した。

800は均整唐草文軒平瓦である。内区には巻きの強い唐草が４回反転し、外区には珠文を配する。瓦当幅は7.0cm、内区幅は2.7cm、上外区幅は1.9cm、下外区幅は2.3cm、脇幅は1.6cmである。外縁の高さは0.4cmで、曲線顎である。焼成は硬質で、胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は灰色を呈する。平城宮6768D型式で、３点出土している。800はＳＲ01の７区から出土した。

801は破片のため詳細な文様は不明である。中心飾りが一部残るが、詳しい形態は分らない。外区には珠文を配す。下外区幅は1.4cm、外縁高は0.4cmで、曲線顎である。凸面側はヨコナデを施す。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰白色あるいは暗灰色を呈する。801はＳＲ01の７区から出土した。

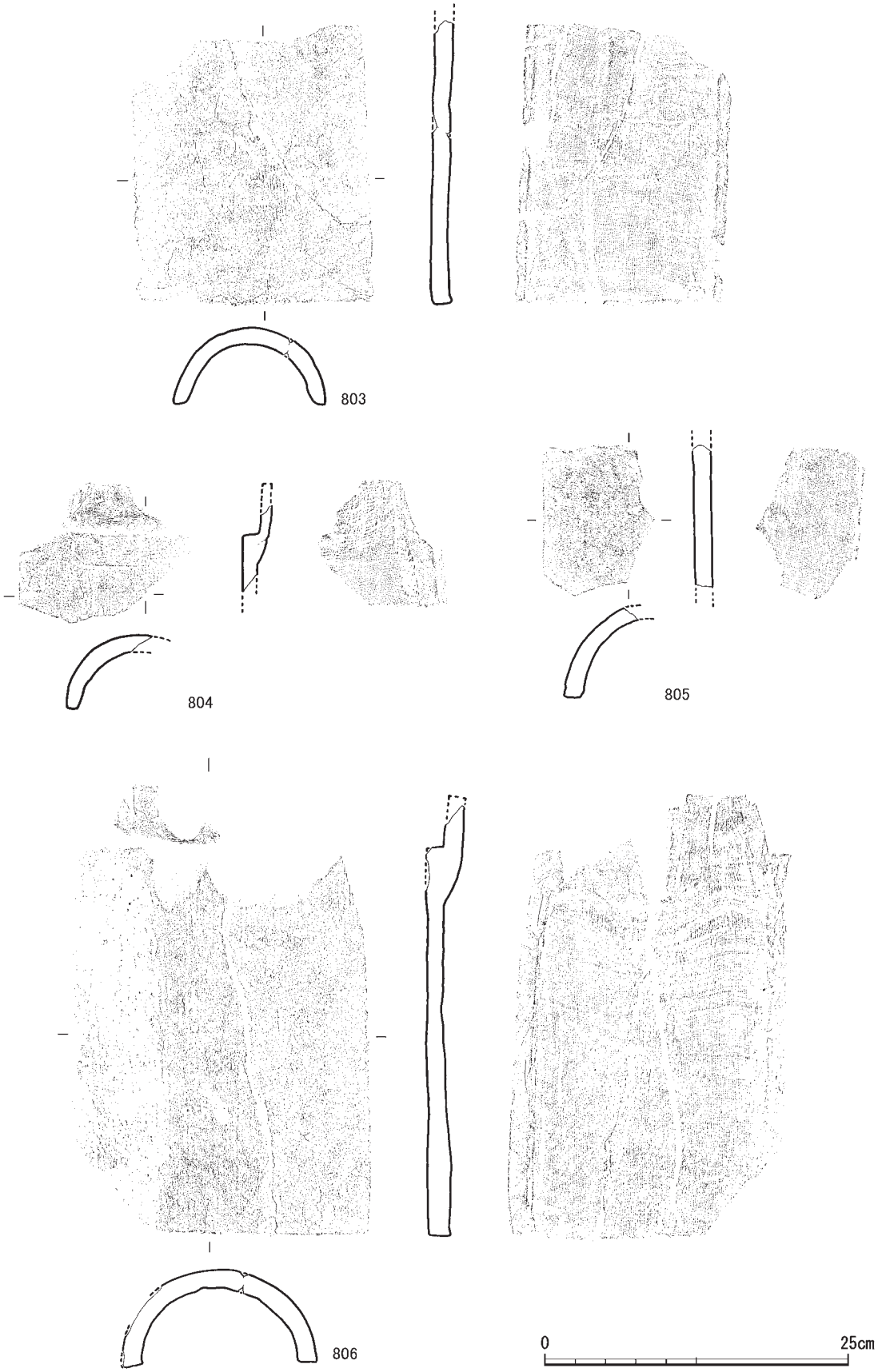
802は破片のため文様の詳細は不明である。外区には珠文を配す。下外区幅は1.65cm、外縁高は0.5cmで曲線顎である。凸面側はヨコナデ後不定方向ナデを施す。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰色あるいは暗灰色を呈する。802もＳＲ01の７区から出土した。

③**丸瓦**（第57図803～第59図810）

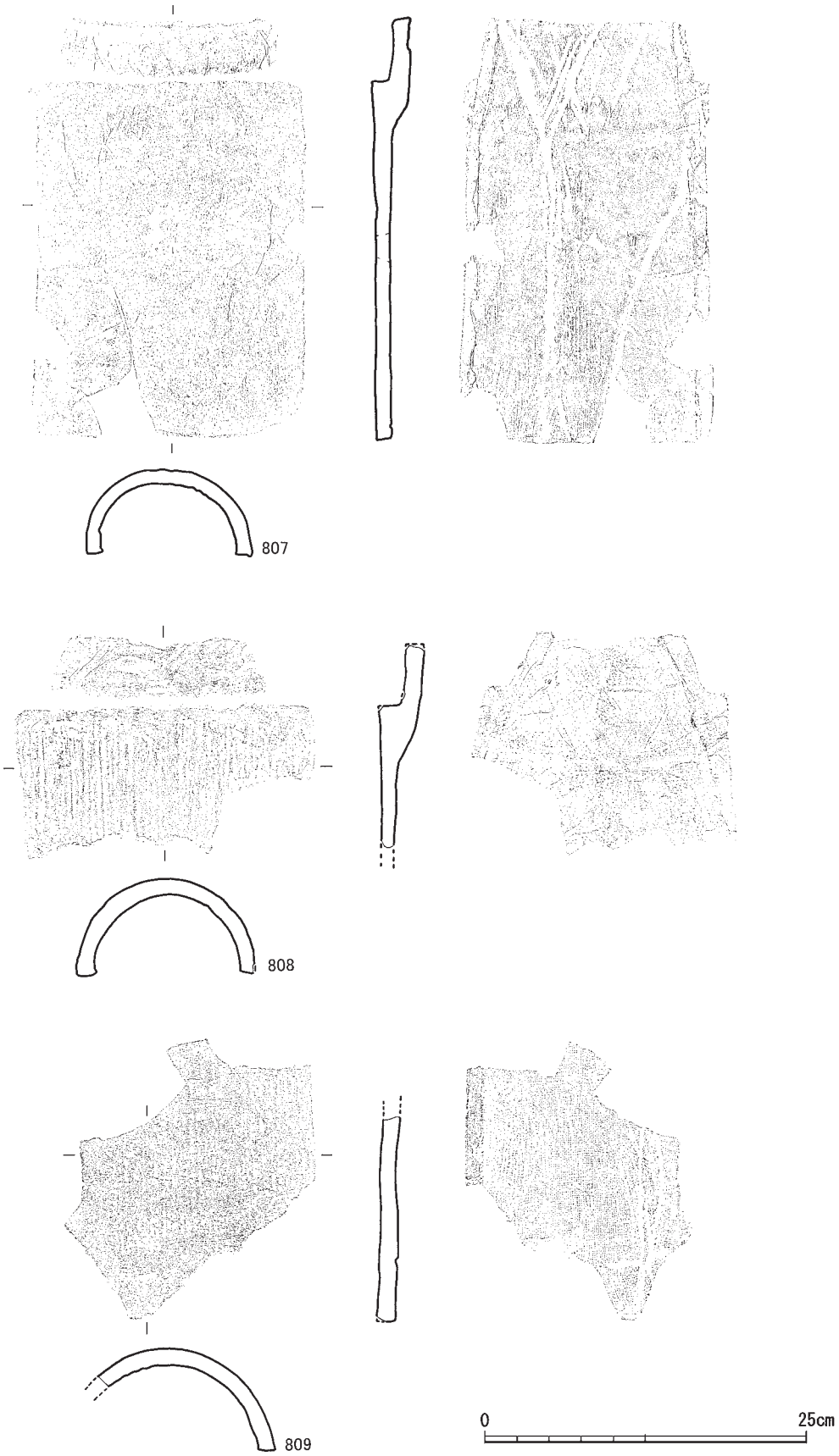
丸瓦はすべて玉縁式で、行基式のものは出土していない。出土量は、ＳＲ01が61.4kg、ＳＤ2002が5.3kgで、合計66.7kgである。

粘土紐巻き付け成形（Ⅰ類）のものと粘土板巻き付け成形（Ⅱ類）のものに分かれる。

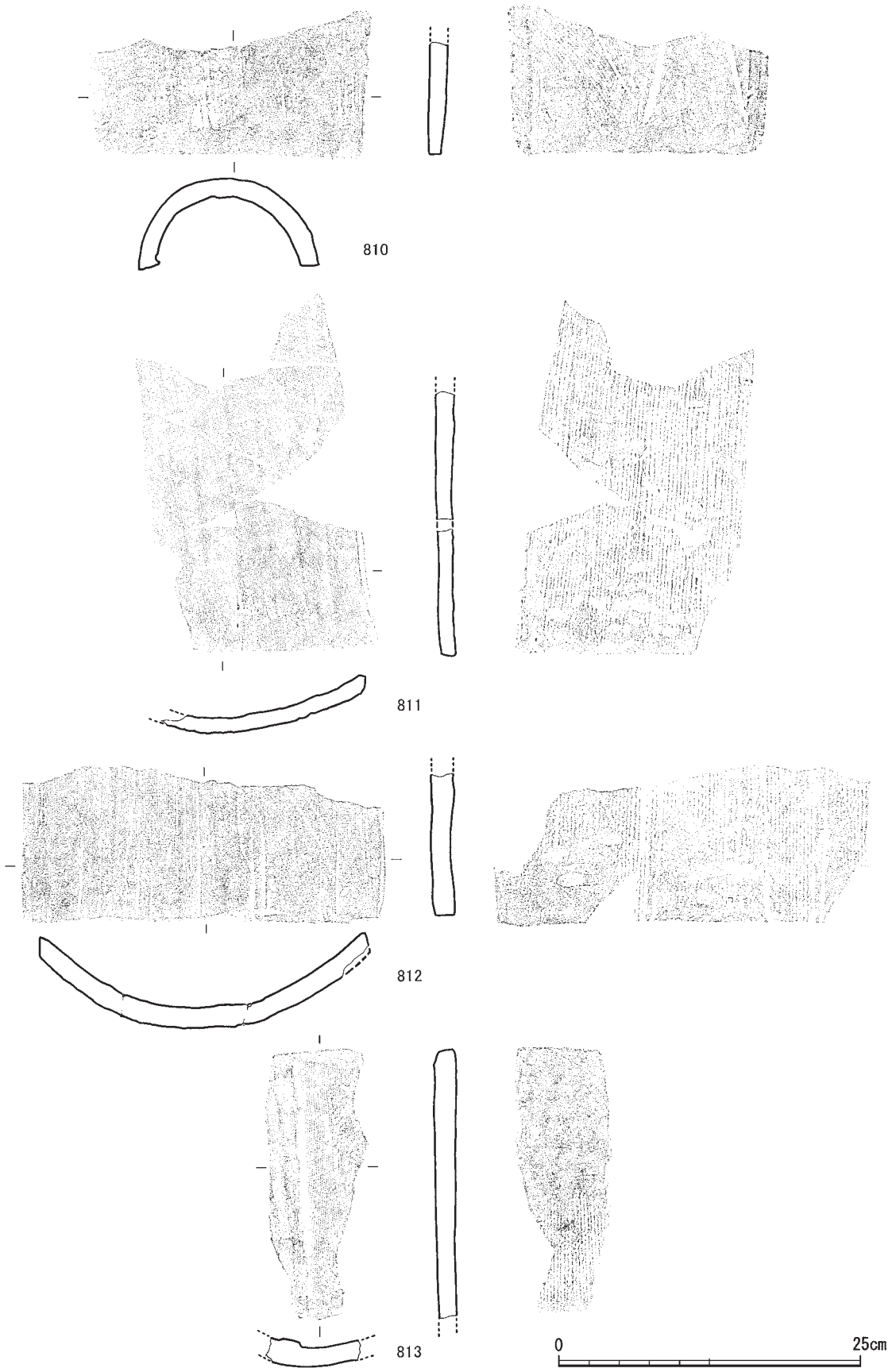
Ⅰ類（803・804）：粘土紐巻き付け成形の丸瓦で、粘土紐の継ぎ目が確認できるものをⅠ類とした。粘土紐の幅は３～４cmである。粘土紐を巻き付けてから、凸面に縄タタキを施す。その後に、凸面全面にナデ調整を施す。凹面には何の調整も加えず布目痕跡がそのまま残る。凹面の広端か



第57図　丸瓦実測図(1)



第58図　丸瓦実測図(2)



第59図　丸瓦・平瓦実測図

ら狭端にかけて面取りを行っている。側面にはケズリを施す。完形品が出土していないため全長は不明であるが、広端幅は12.3cm、玉縁長は4.1cm、玉縁部と肩部の比高は1.35cm、厚さは1.3cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は黄褐色あるいは灰黄色である。803・804は溝ＳＤ2002北部から出土した。

Ⅱ類(805～810)：粘土板巻き付け成形の丸瓦で、凹面に粘土板の合わせ目または糸切り痕跡が確認できるものをⅡ類とした。粘土板を巻き付けてから施すタタキ調整に使われるタタキ板の違いにより３種類に分類することができる。

Ⅱ－ａ類(805・806)：粘土板を巻き付けてから凸面に縄タタキを施す。縄タタキ後は凸面全面にナデ調整を施す。側面調整を行うものと行わないものがあるが、どちらも面取りは行わない。805は分割後、側面調整を行っていない。破片のため、全長や幅は不明であるが、厚さは1.4cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰色を呈する。806は分割後、側面調整を行っている。全長は36.5cm、玉縁長は4.6cm、厚さは1.6cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は灰色を呈する。805はＳＤ2002南部から、806はＳＲ01廃棄Ｂ群から出土した。

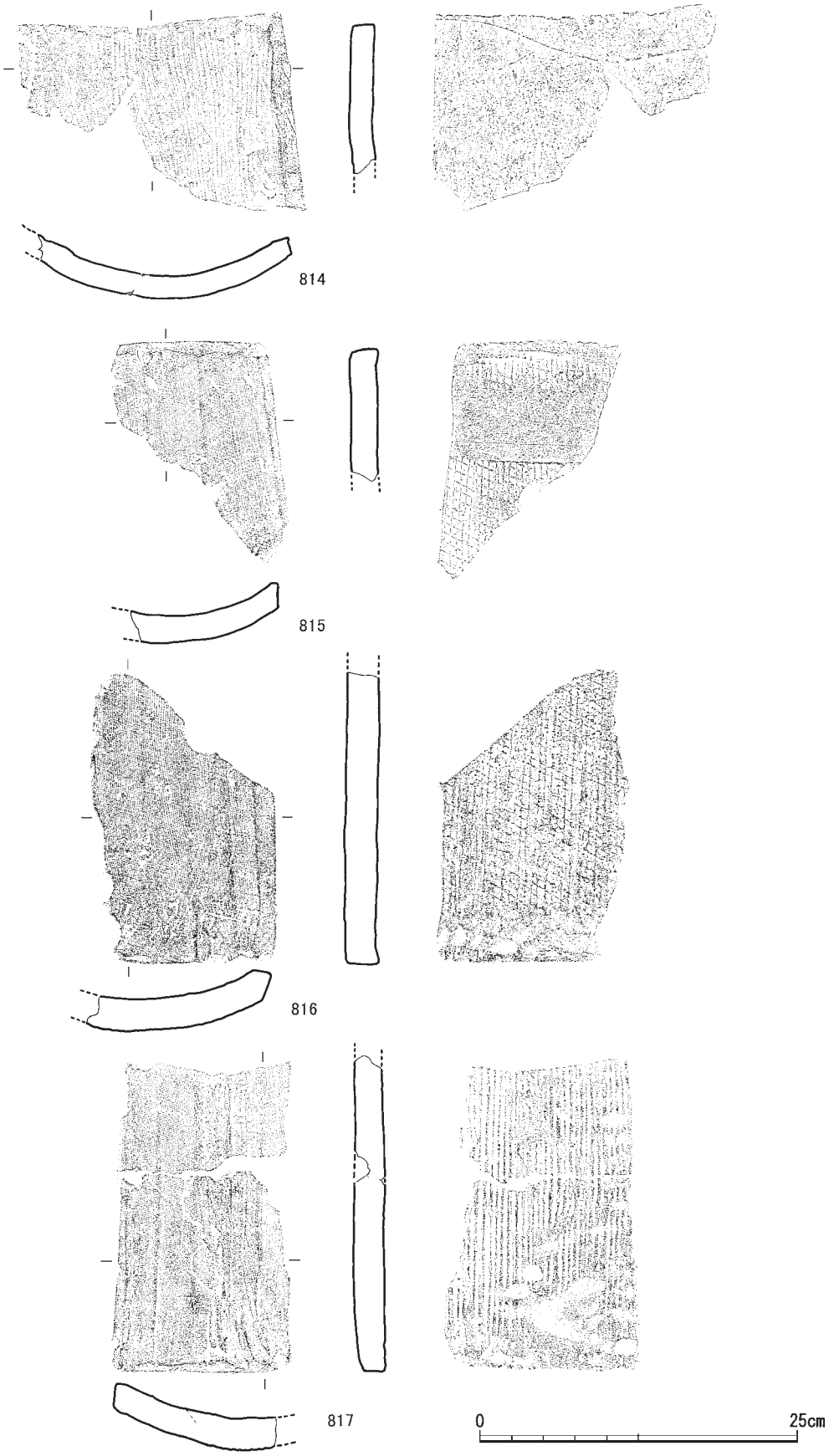
Ⅱ－ｂ類(808～810)：粘土板を巻き付けてから凸面に平行タタキを施す。平行タタキはまず側面と平行に施した後、その方向に対して約80度振った状態で再び平行タタキを施している。タタキを行った後、凸面全体にナデ調整を施すものと、タタキ後そのままのものがある。どちらも面取りは行っていない。808は平行タタキ後、凸面に何の調整も施さない。完形品が出土していないため全長は不明であるが、玉縁長は5.1cm、玉縁部と肩部の比高は1.8cm、狭端幅は9.8cm、厚さは1.3cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は暗灰色あるいは灰黄色を呈する。809は平行タタキ後全体的にナデ調整を施し、さらに分割後に側面調整を施す。破片のため、長さ・幅ともに不明であるが、厚さは1.2cmである。焼成は硬質、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰色を呈する。810は平行タタキ後、全体的にナデ調整を施すが、分割後の側面調整を施さない。破片のため全長は不明であるが、広端幅は14.0cm、厚さは1.6cmである。焼成は軟質で、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は灰色あるいは灰白色を呈する。808はＳＲ01の１区北から、809はＳＲ01の10区から、810はＳＲ01の２区から、それぞれ出土した。

Ⅱ－ｃ類(807)：タタキ調整後、全体的にしっかりナデ調整を施しているため、タタキ板の種類は不明である。分割後の側面調整は施しておらず、面取りも行っていない。全長は32.7cm、玉縁長は4.7cm、狭端幅は10.2cm、広端幅は12.0cm、厚さ1.3cmである。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は暗灰色を呈する。807はＳＲ01の７区から出土した。

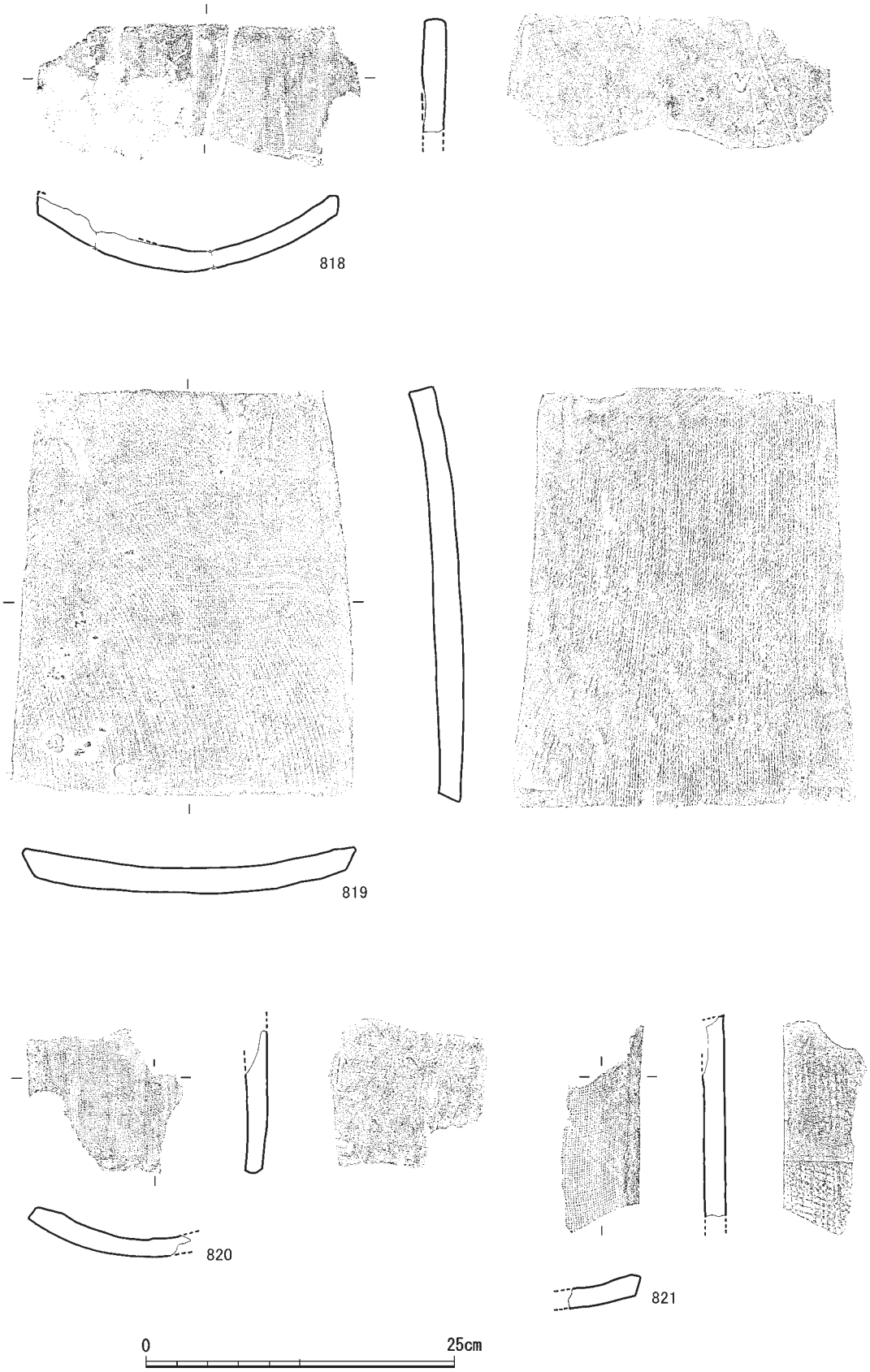
④平瓦(第59図811～第62図824)

平瓦はすべて粘土板による成形で、粘土紐による成形のものは確認していない。桶巻き作り（Ⅰ類）と一枚作り（Ⅱ類）に大別でき、さらに凸面の調整により細分した。出土量は、ＳＲ01が111.9kg、ＳＤ2002が37.1kgで、合計149.0kgである。

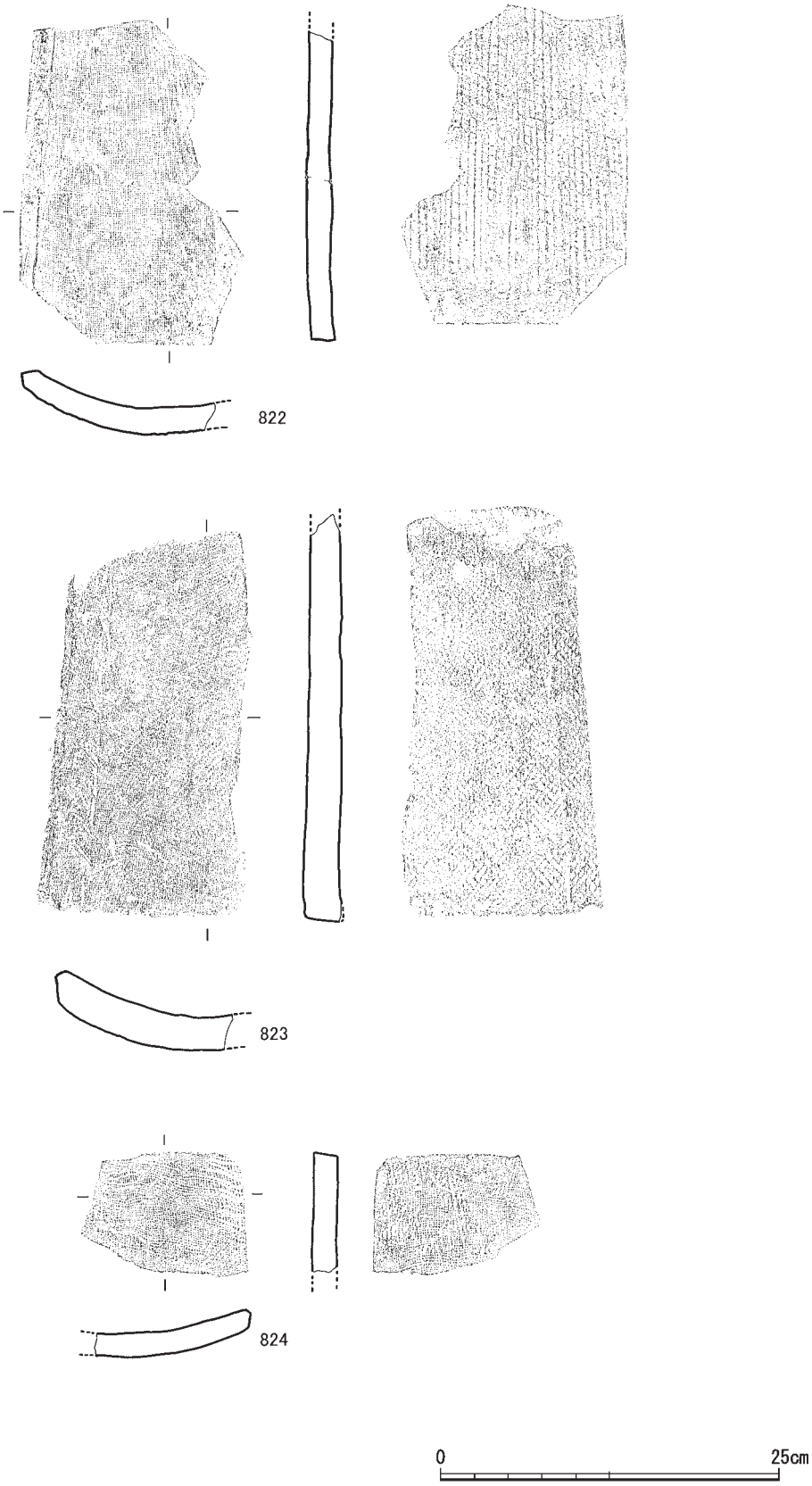
Ⅰ－ａ類(811～814)：凸面に縄タタキ調整を施すものである。811は凸面に縄タタキ調整以外の



第60図　平瓦実測図(1)



第61図　平瓦実測図(2)



第62図　平瓦実測図(3)

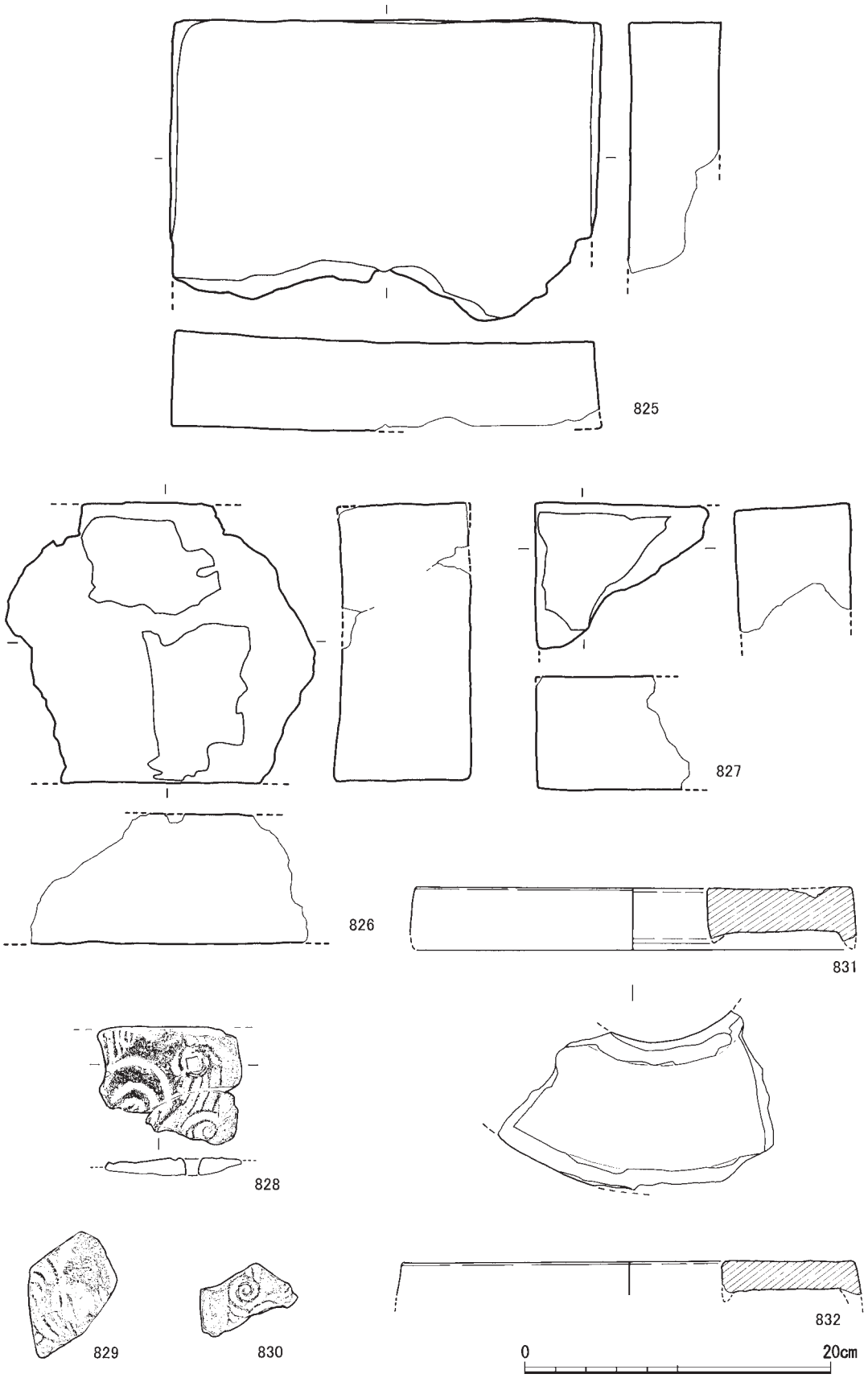
調整を施さない。側面はタテケズリ、下端部はヨコナデを施す。厚さは1.5cmである。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。812は凸面に縄タタキ調整を施した後、一部ナデを施すものである。側面はタテケズリ後、凹面側に面取りを行う。広端幅27.4cm、厚さ2.0cm。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は暗灰色である。811はＳＲ01の10区から、812はＳＲ01の４区（ただしＳＤ2002相当）から、813はＳＲ01の廃棄Ｂ群から、814はＳＲ01の５区（ただしＳＤ2002相当）から、それぞれ出土した。

Ⅰ－ｃ類（817）：凸面に縦方向の平行タタキを施したものである。817は凸面に一部布目が見られ、広端側には指オサエを施す。凹面には一部タテナデが施される。下端部と側面はケズリを施した後、凹面側に面取りを施す。厚さは2.1cmである。焼成は硬質で、胎土は砂粒を少量含みやや粗い。色調は暗灰色あるいは灰色を呈する。817はＳＲ01の４区（ただしＳＤ2002相当）から出土した。

Ⅰ－ｅ類（818）：凸面に不定方向のナデを施すものである。全体にナデを行っており、タタキの種類は不明である。818は狭端側のみ残存している。上端部は摩滅のため調整は不明である。側面はケズリを施す。狭端幅は23.1cm、厚さは1.5～1.6cmである。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰色あるいは灰黄色を呈する。818はＳＲ01の３区（ただしＳＤ2002相当）から出土した。

Ⅱ－ａ類（819・820）：819は完形の平瓦である。凸面には縄タタキ調整を施すが、その際離れ砂を用いており、離れ砂が凸面全面に付着している。下端部と上端部はケズリを施す。側面はケズリを施した後、側面凹面側にケズリを施す。このケズリの間には面取りを施す。全長は33.0cm、狭端幅は23.1cm、広端幅は25.7cm、厚さは2.0cmである。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は暗灰色を呈する。820は側面にケズリを施した後、側面凹面側にケズリを施す。下端部凹面側にはナデを施す。厚さは1.7cmである。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰白色あるいは灰色を呈する。819はＳＲ01の５区から（第19図）、820は溝ＳＤ2054から出土した。

Ⅱ－ｂ類（815・816・821・822）：凸面に平行タタキを施すものである。平行タタキはまず側面と平行に施した後、その方向に対して約80度振った状態で再び平行タタキを施している。815は凸面にタタキ調整を施した後、狭端側の約８cmの部分にヨコナデを施す。上端部はヨコケズリ後、凹面側に面取りを行っている。側面もタテケズリ後、凹面側に面取りを行っている。厚さは2.2cmである。焼成はやや軟質で、胎土は緻密である。色調は灰色あるいは灰白色を呈す。816は広端部側が残存しているのみなので狭端部にヨコナデを施しているか不明である。側面にケズリを行った後、凹面側にケズリを施している。下端部にもケズリを施す。凸面広端側に約3.5cmの幅で指オサエを施す。厚さは2.5cmである。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は灰白色あるいは暗灰色を呈す。821は凸面にタタキ調整を行った後、狭端側を約11.5cmの幅でヨコナデを行う。上端部はケズリを施す。側面はケズリを行った後、側面凹面側にケズリを行う。厚さは1.6cmである。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を少量含むが緻密である。色調は灰白色あるいは灰色を呈す。822は広端側のみ残存しているため、狭端側にヨコナデがあるか不明で



第63図　瓦塼・不明瓦質製品・相輪様製品実測図

ある。広端側約４cmの範囲にナデあるいは指オサエが見られる。厚さは1.8cmである。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を含みやや粗い。色調は灰白色あるいは白色を呈す。815はＳＲ01の１区南から、816はＳＤ2002北部から、821はＳＲ01の４区、822はＳＲ01の５区断ち割り７から、それぞれ出土した。

Ⅱ－ｄ類（823）：凸面に0.4cm四方の格子タタキ調整を施すものである。タタキ調整の際、離れ砂を用いているため、凸面には離れ砂が付着している。823は凸面の一部にナデ調整が見られる。下端部はケズリを行っている。側面はケズリを行った後、側面凹面側に面取りを行っている。厚さは2.4cmである。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は灰白色あるいは灰色を呈する。823はＳＲ01の１区南から出土した。

Ⅰ類かⅡ類かは不明であるが、凸面と凹面両方に布目を持つものが１点のみだが確認できた（824）。凸面は縄タタキを施した後、布目が付着している。上端部はケズリを行っている。側面はケズリを行った後、面取りを行っている。厚さは1.7cmである。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は灰白色あるいは灰色を呈する。824はＳＲ01の１区北付近で出土した。

⑤瓦塼

瓦塼は全体で約70kg出土した。堤ＳＸ2053の断ち割りから１点、川跡ＳＲ01以外の溝で確認された数点の破片を除き、全てＳＲ01からの出土である。出土した瓦塼は高さの違いにより３種類に分かれる。その多くがⅠ類に属するが、使用位置や使用状況などは不明である。ＳＲ01では、４・５区からの出土量が多い。５区では、灯明皿が大量に廃棄されたのち護岸材が設置されるまでに堆積した暗褐色系粘土層から破片化した瓦塼がまとまって出土しており、その使用方法等を検討する上で興味深い。

Ⅰ類（825）：高さは６cm前後で、幅は27.8cmである。上面と側面は不定方向ナデを施す。焼成は硬質で、胎土は緻密である。色調は灰色あるいは灰白色を呈する。825はＳＲ01の５区から出土した。

Ⅱ類（826）：高さは8.5～9.0cm前後である。上面と側面はヨコナデを施す。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を多く含みやや粗い。色調は暗灰色を呈する。826は第１次調査８トレンチのＳＲ01から出土した。

Ⅲ類（827）：高さは7.5cm前後である。上面と側面は不定方向ナデを施す。焼成はやや軟質で、胎土は砂粒を多く含みやや粗い。色調は暗灰色を呈する。827は溝ＳＤ2054から出土した。

（丸山香代）

⑥その他の遺物

828は不明瓦質製品である。色調は黒色で、表面は火を受けたのか、荒れている。現存する厚みは１cm程度であるが、裏面は剝落しており、本来はもっと厚みのあるものであったと考えられる。隅には方形の穴があいている。鬼瓦や隅瓦の一部の可能性もある。829・830は828と同一個体と考えられる。いずれも破片である。828～830はいずれも川跡ＳＲ01の１区北から出土した。

831・832は相輪様製品である。焼成は軟質で、色調は831が灰色、832が淡褐色である。831の

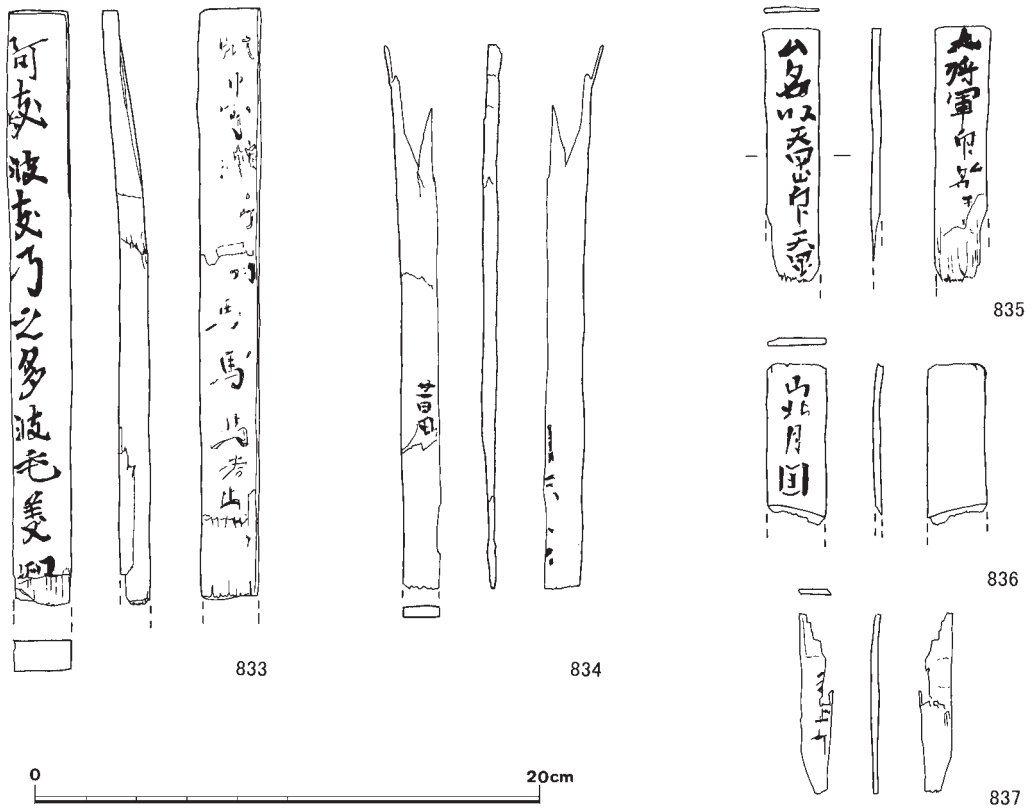
外形は中央に穴があいており、ドーナツ状に復原される。外径31.6cm、内径18.2cm、厚さ3.0cmである。上面は不調整で、下面と側面は丁寧なナデを施す。下面の外縁は下に突起している。側面は上に向かって内傾している。ただ、上下の判定は難しい。堺市の大野寺出土例を参考に復原した。(注23) 832も同種のものと考えられる。ほかにもう１点出土しており、総数で３点出土した。831はＳＲ01の７区から、832は段状遺構ＳＸ2020の上面に堆積した礫混じり灰褐色土から出土した。

（伊野近富）

(7)木簡

木簡は第２次調査で５点出土した。いずれも川跡ＳＲ01の西部、７区から10区にかけて出土した。出土層位から第２期に埋没したものである。(注24)

833はＳＲ01の10区で出土した。両面に墨書されている長方形の木簡である。途中で欠損しており、現存長23.4cmを測る。Ａ面の左側が欠けており、現存幅2.4cm、厚さ0.6～1.2cmで、上半分が薄く、下半分が厚い。Ａ面には「阿支波支乃之多波毛美□（以下欠損）」（□は〔智カ〕）と11文字書かれていた。これは万葉集巻10、2205番の歌「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ぬれば風を痛みかも」の上11文字に合致する。おそらく、この歌が書かれていたと推測する。なお、２文字目の左側にも１文字分の文字らしきものがあるが、判読できない。後で書かれた習書であろう。Ｂ面には「□□□馬馬馬馬□□□□（以下欠損）」と書かれており、上３文字は不鮮明であるが〔越中守〕と読める可能性もある。墨は不鮮明である。赤外線カメラで判読したのは以上のとおりである。Ａ面は１度も削られていないが、Ｂ面は下半分の厚さが1.2cm、上半分が0.6cm



第64図　木簡実測図

であり、特に上半分は薄くなっており、何度も削られて書かれていることがわかる。したがって、Ｂ面の文字はＡ面と同時期のものではなく、習書と判断すべき状況である。

834はＳＲ01の10区で出土した。片面に墨書されており、もとは長方形の大きな木簡である。大きく欠損しており、Ａ面の左側の一部が遺存していた。現存長21.5cm、幅2.4cm、厚さ0.4cmである。Ａ面には「廿一日用」とあった。「廿一日用」はかなり大きな帳簿状の木簡の断片と考えられるが、三七の日とすれば、この日の法要に伴う必要品を書き出した物かもしれない。

835はＳＲ01の10・11区で出土した。両面に墨書されている長方形の木簡である。途中で欠損しており、現存長10.0cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmである。Ａ面には「ム名以天罡卯天罡（以下欠損）」と８文字書かれていた。Ｂ面には「大将軍卯名天□〔罡カ〕（以下欠損）」と７文字書かれていた。５文字目と６文字目の右側には「ム」と書かれている。「大将軍・・」は呪符木簡ともいえるが、「ム（某）名」で誰を呪符しようとしたのかはわからない。

836はＳＲ01の７区で出土した。片面に墨書されている長方形の木簡である。途中で欠損しており、現存長6.4cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmである。Ａ面には「山背国（以下欠損）」と書かれていた。Ｂ面に墨書はない。内容からおそらく荷札木簡と考えられる。

837はＳＲ01の10区で出土した。片面に墨書されており、もとは長方形の木簡である。大きく欠損しており、Ａ面の左側の一部が遺存していた。現存長7.2cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmである。Ａ面には「□五斗」（□は〔米カ〕）と書かれていた。Ｂ面に墨書はない。内容からおそらく荷札木簡と考えられる。

（伊野近富）

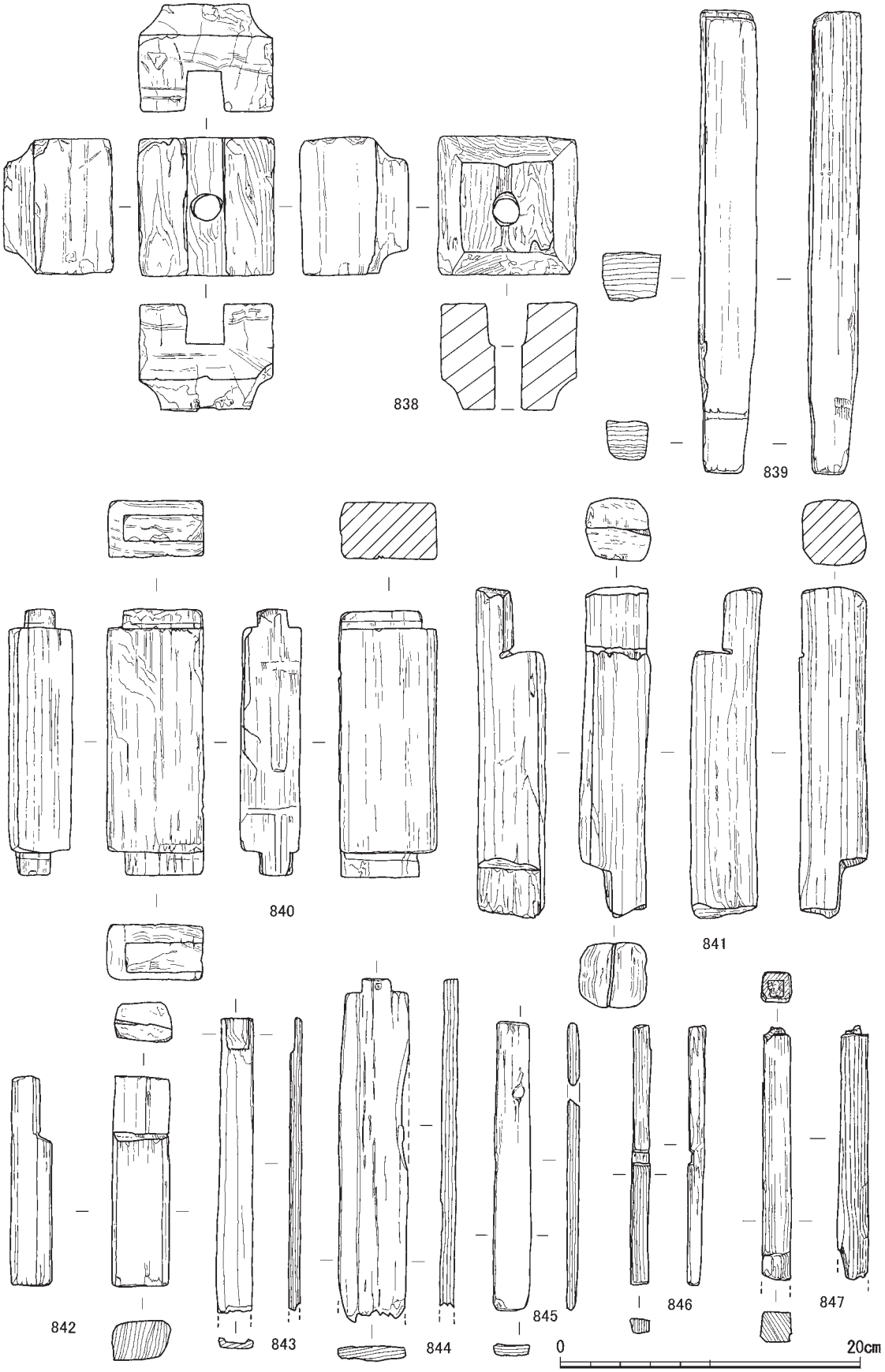
(8)木製品（第65～68図）

木製品は遺物箱で約20箱を数え、川跡ＳＲ01および溝ＳＤ2002から出土した。特に堤ＳＸ2053の西側（10・11区）や屈曲部の周辺（７・８区）からの出土が多く、部材や服飾具、食事具、容器、遊戯具などのほか、板材や角材片、削片などが多量に出土した。付近に製作場所があったと想定できる。ここでは製品や、何らかの部材と判断できた遺物を図示した。[注25]

838は巻斗である。平面形は正方形で一辺9.0cmと小型である。斗尻幅は6.0cm、含みの幅は2.5cmと狭い。全高7.0cm、敷面高2.5cm、斗面高5.0cm、斗繰高2.0cmである。中心に直径1.5～2.0cmの円形の枘穴がある。実際に使用した場合、奈良県室生寺の五重小塔と同規模の建築物が想定できる。肉眼観察では部分的に赤色に発色しており、赤色顔料が塗られていた可能性がある。ＳＲ01の８区の断ち割り17の上層で出土した。

839は杭状の角材である。一辺3.8cm、長さ30.5cmで、先端は細く加工する。840～842は建築部材と考えられる。

840は長さ17.8cm、幅6.5cm、厚さ4.0cmで、両端には枘がある。枘は一端が幅5.5cm、長さ1.3cm、もう一端が幅5.2cm、長さ1.5cmである。束の未製品か。間渡し穴はない。ＳＲ01の７区の上層から出土した。841は長さ22.0cm、幅4.3cm、厚さ4.3cmで両端に枘をもつ。枘は互い違いになっている。桁または框の可能性がある。ＳＲ01の４区で出土した。842は長さ14.0cm、幅



第65図　木製品実測図(1)

3.8cm、厚さ2.7cmで片方に枘をもつ。ＳＲ01の10区で出土した。

843～847は、用途は不明であるが、他の部材と組み合わさって製品を構成すると思われるものである。844・846はＳＲ01の７区、847は同８区、843は同９区、845は同10区で出土した。843は長さ19.5cm以上、幅2.3cm、厚さ0.8cmの板材で、一端に長さ2.0cm、幅1.5cm、深さ0.3cmの凹みをつくる。844は長さ23.3cm以上、幅4.5cm、厚さ1.0cmの板材である。一端は欠損しており、もう一端には舌状の枘をつくる。組み合せ箱の側板の可能性がある。845は長さ19.0cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmの板材で、片方の端寄りに孔があけられている。846は長さ17.5cm、幅1.0cmの角材で、中央に凹状の刳り込みがある。847は長さ17.0cm、幅2.0cm角材で、上端には1.0cm角の枘があり、下端は欠損している。

848は挽物皿である。ＳＲ01の９区で出土した。直径22.4cm、高さ1.9cm、底部厚さ0.7cmである。内底面に刃物痕が見られる。

849は円形曲物で、直径17.5cm、高さ5.2cmである。円形の底板に段をつくらずに側板をのせて皮紐で結合する。皮綴じは２か所確認できる。１か所は側板を結合したところであり、底板も一緒に複数段で綴じている。もう１か所は底板を結合したか所であり、底板の結合か所は４か所と想定できる。製作技法から蓋の可能性も考えられるが、口縁部が外方に開くことから身として報告する。ＳＲ01の10区の南肩でまとまって出土した土器とともに出土した（第20図）。

850は黒漆塗箱蓋である。ＳＤ2002北部で出土した。平面形は一辺12.0cmの正方形で、高さは2.3cmである。方形の蓋板に側板を固定する。顕微鏡観察の結果、材はヒノキ科アスナロ属と判明した。漆は全面に薄く２回塗られており、簡素なつくりである（付載２・３参照）。赤外線を通したが、文字等はみられなかった。

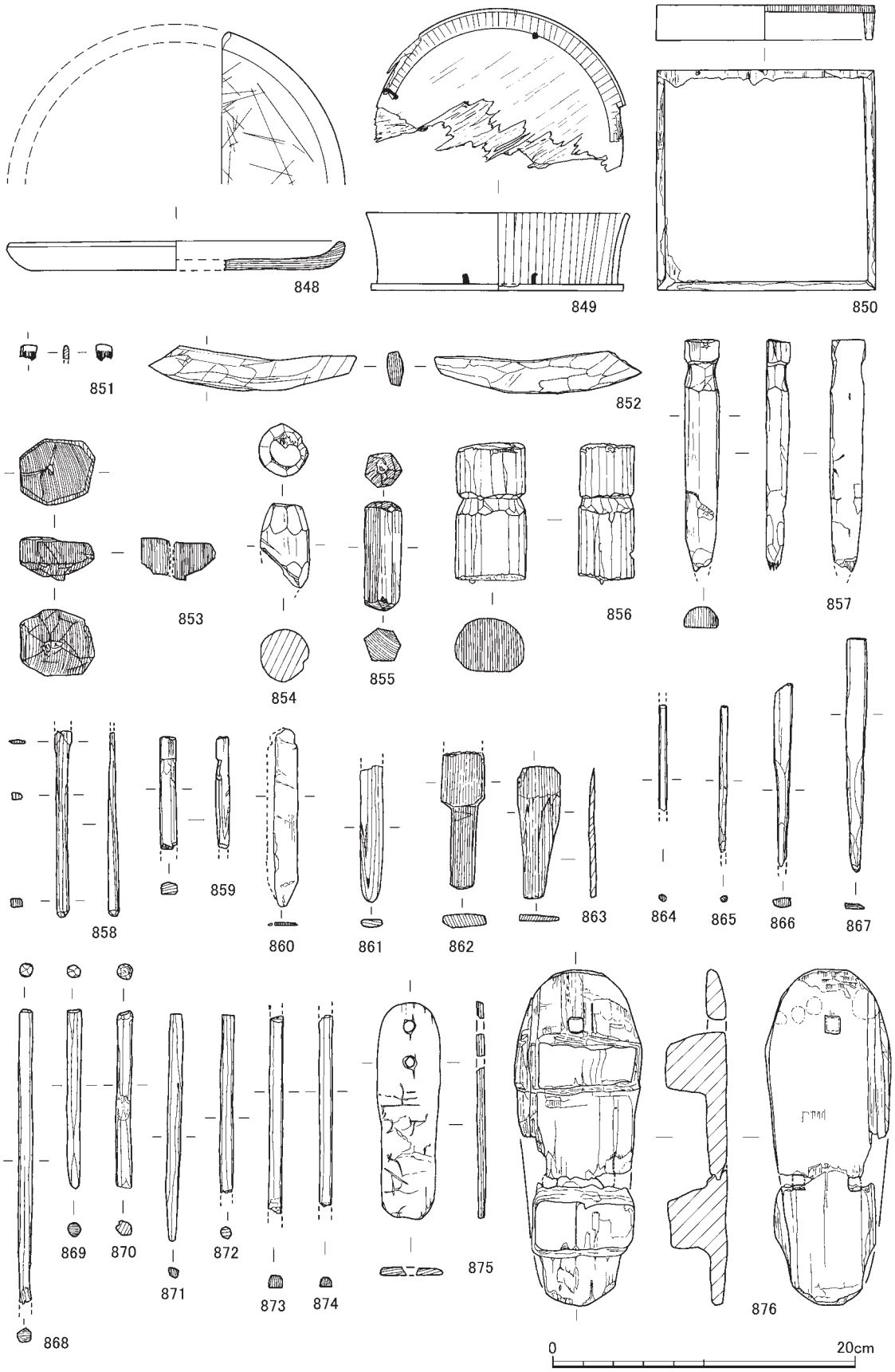
851は横櫛の断片で、幅１cm分が残っているのみである。厚さは0.4cmである。ＳＲ01の10・11区で出土した。852は不明木製品である。両面とも丁寧に加工している。動物の形代の可能性が考えられる。ＳＲ01の10区で出土した。853は独楽である。平面形はいびつな六角形で、幅5.0cm、高さは2.5cmである。中央に軸通しの穴が穿たれている。ＳＲ01の10区で出土した。

854は不明木製品である。中央の径3.3cmで、両端は八角形に面取りしている。錘か。855はサイコロである。全体を六角柱体に面取りし、両端を山形に加工する。長さ7.0cm、幅2.2cmである。賽の目はみられない。未完成品の可能性も考えられる。854・855はＳＲ01の７区で出土した。

856・857は小建築の部材の可能性がある。856は長さ9.0cm、幅4.5cm、厚さ3.5cmの棒状木製品である。全体を粗く削って整形し、中央やや上よりに全周する刳り込みが入る。857は長さ15.0cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmで、断面半円形の杭状木製品である。上端付近に刳り込みが入り、先端は尖り気味に加工する。裏面は平らに仕上げている。856はＳＲ01の11区、857は同８区から出土した。

858は長さ14.0cm以上、幅1.0cmのヘラ状木製品である。一端は山形に整形し、もう一端は平らに削ってヘラ状に整形する。匙形木製品か。ＳＲ01の11区で出土した。

859は長さ7.5cm以上、幅1.0cm、厚さ0.9cmの棒状製品で、上端から1.5cmの位置に刳り込みが

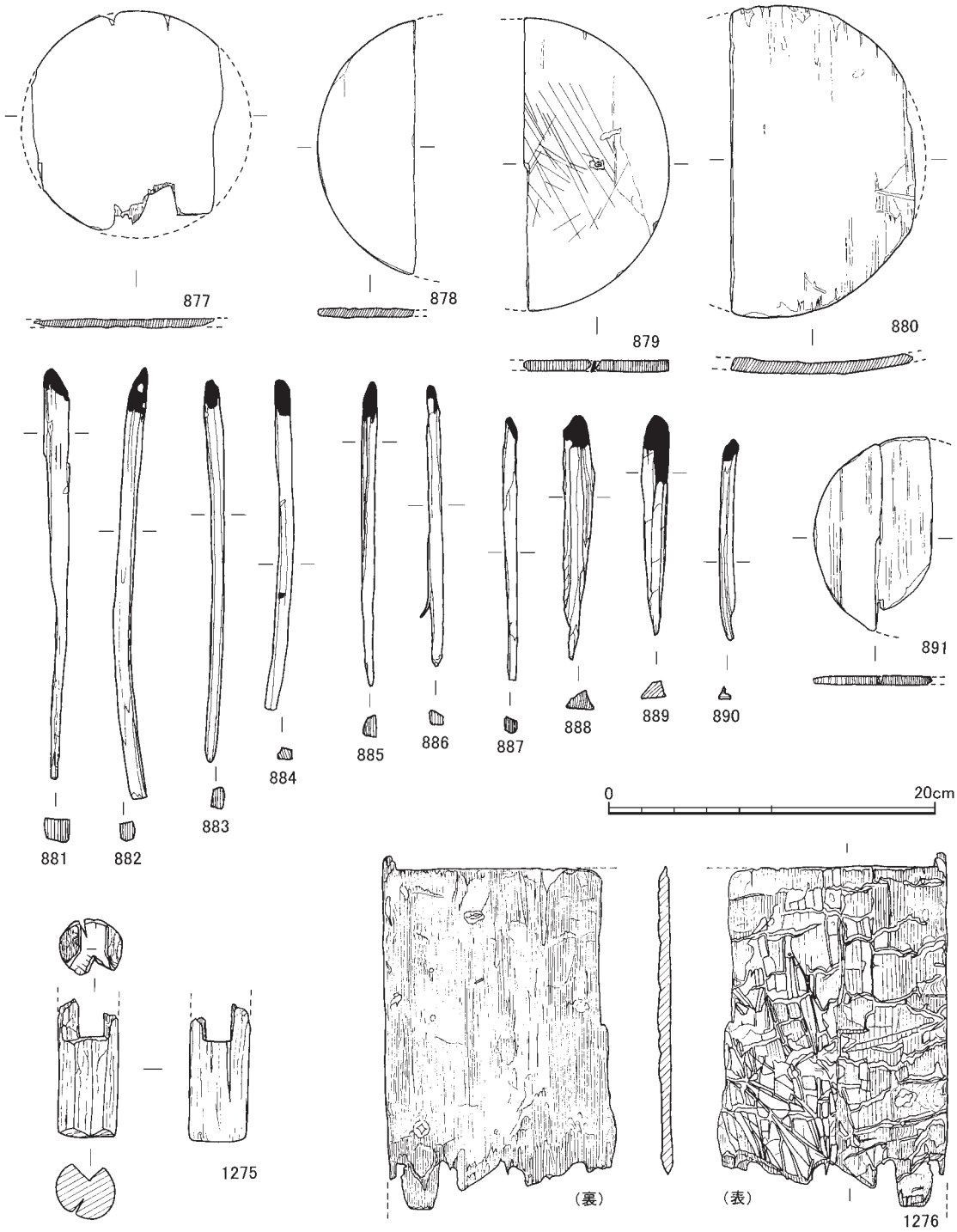


第66図　木製品実測図(2)

施される。下端は欠損している。860は長さ11.8cm、復原幅2.0cm、厚さ0.2cmの斎串状木製品である。両端を尖らせ、側面から切り込みを入れている。859・860はＳＲ01の10区で出土した。

861は長さ9.0cm以上、幅1.5cm、厚さ0.5cmの木製品である。一端は欠損しており、もう一端は半円形に薄く仕上げている。匙形木製品か。ＳＲ01の11区で出土した。

862は長さ9.0cm、厚さ0.8cmの撥形の木製品である。全体の仕上げは粗い。ＳＲ01の10区で出土した。



第67図　木製品実測図(3)

863は長さ9.6cm、厚さ0.5cmの杓子形木製品である。杓子の先は斜めにカットして薄く仕上げる。ＳＲ01の５区で出土した。

864・865は箸である。いずれも径0.5cmで、粗く加工して円形に仕上げている。ＳＲ01の10・11区で出土した。

866・867は用途不明の木製品である。いずれも割り板の先を削って尖らせる。866はＳＲ01の10区、867は同７区で出土した。

868～874は棒状木製品である。868～872は全体を粗く削って円形に加工し、868～870は上端を山形に仕上げる。871は先端を細く尖り気味に加工している。868・870・872はＳＲ01の10区、869・871は同11区で出土した。873・874は断面が半円形で、両端が欠損している。いずれもＳＲ01の10区で出土した。

875は不明木製品である。長さ14.5cm、幅4.0cm、厚さ0.5cmで両端を丸く仕上げる。片方の端よりに２か所に孔があけられている。ＳＲ01の10区で出土した。

876は台と歯を一木からつくる連歯下駄である。長さ22.3cm、幅8.5cm、高さ4.0cmである。台の平面形は前後の端を孤形にし、前幅よりも後幅を狭くする。後歯は側面からみると外開きである。鼻緒孔は方形で、前壺が中央よりやや右寄りであることから左足用である。わずかに足指による圧痕が残る。後壺は後歯の内側にあけている。ＳＤ2002南部で出土した。

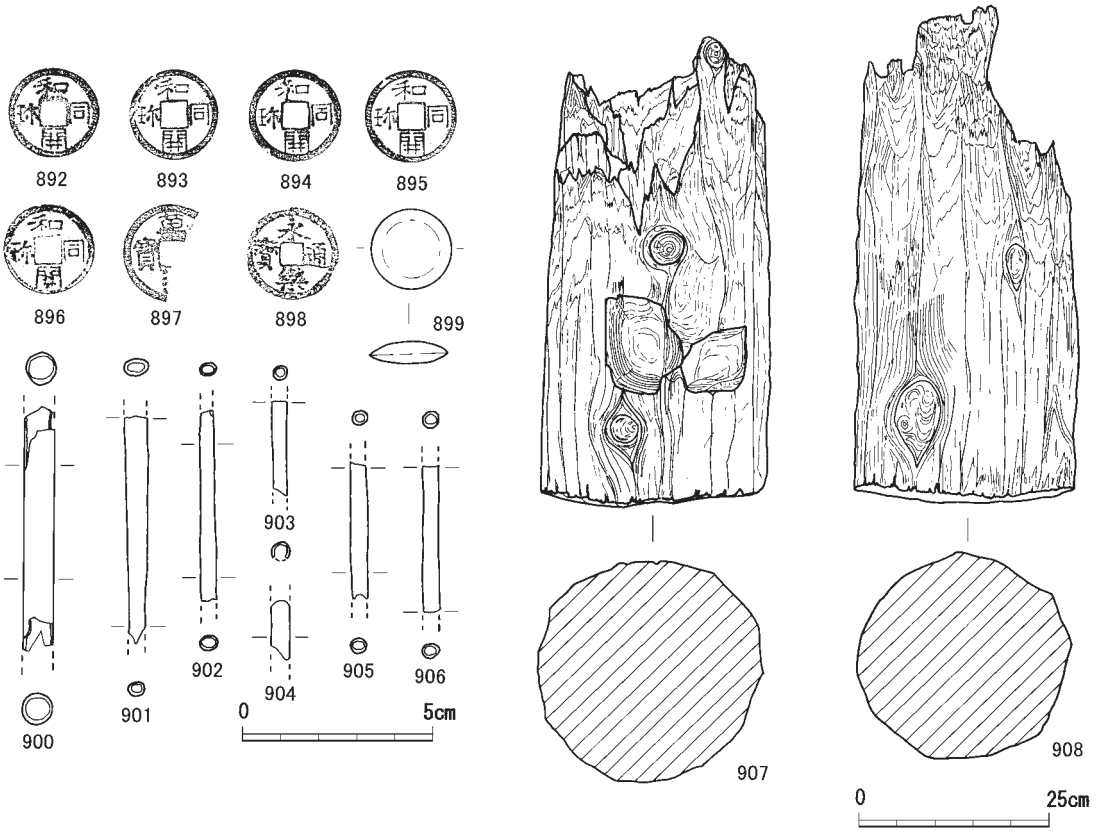
877・878・880・891は円形曲物底板もしくは蓋板である。いずれもＳＲ01からの出土で、877・891は７区、878は５区、880は10区から出土した。

879は蓋板である。中央に紐通しの穴が穿たれており、蓋板両面に刃物痕がある。ＳＲ01の４区で出土した。

881～890は火棹である。いずれも上端が炭化している。長さは12.5～31.0cmのものがあり、特に形は決まっていないようである。廃材を手頃な長さと幅に割って利用したと考えられる。887はＳＤ2002南部から、886・890はＳＲ01の３区から、882・884は同４区、その他は同10区から出土した。

1276は厨子の扉と考えられる部材である。ＳＤ2002北部で漆箱蓋とともに出土した（第22図）。現存の幅14.2cm、長さ22.0cm、厚さ0.8cmで、右肩部分に長さ1.0cmの軸がある。下辺と左辺は欠損している。表面は火を受けて炭化した上にひどくひび割れしているが、裏面は焼けていない。このことから、外側から火を受けて蒸し焼き状態になっていたと想定できる。また、薄造りであることや加工の具合から、想定される厨子は簡素な作りのものであったと考えられる。出土地が木津川市教育委員会調査の礎石建物ＳＢ0301に近く、火を受けていることから、礎石建物に安置されていた厨子の扉である可能性も考えられる。他に厨子の野地板もしくは床板と考えられる板材が出土しているが（火は受けていない）、今回は図示していない。

1275は小塔の上層階の柱材と考えられる部材である。ＳＲ01の11区の黒褐色系粘土から出土した。直径3.5cm、長さ8.5cmで上部には刳り込みがある。刳り込み部分は上からみると中央付近で左側に屈曲しており、多角形の構造物を想定することも可能であるが、右側が一部欠損してい



第68図　銭貨・ガラス製細管状製品ほか実測図

るため判断しがたい。

907・908は掘立柱建物跡ＳＢ01の柱穴から出土した柱である。907はＳＰ11の柱で、現存長62.0cm、直径は30.0cmである。下部に貫通していないが枘穴状の凹みがある。908はＳＰ02の柱で、現存長68.0cm、直径は29.0cmである。下部は八角形に面取りしていたと考えられる。樹種はいずれもヒノキで、伐採年代は不明である。

（松尾史子）

(9)銭貨・ガラス製品（第68図）

①銭貨

892～896は和同開珎である。708年初鋳である。いずれも「開」の字は上端が隷書風に開いた「隷開」である。いずれも川跡ＳＲ01の４区から出土した。出土位置から第１期に廃棄された灯明皿に伴うものと考えられる。全て完形で、892の直径は2.4cmである。銅銭で、銀銭はない。

897は萬年通寶である。760年初鋳である。「年通」の部分が欠損している。ＳＲ01の９区から出土した。出土層位から言えば、第２期に相当する。

898は永楽通宝である。1408年初鋳である。平坦面２の荒掘り中に出土した。

②碁石

899は完形の碁石である。排土より表採した。平面形は円形で、断面形はレンズ状を呈する。色調は濃い灰色である。直径2.1cm、厚さ0.6cmである。

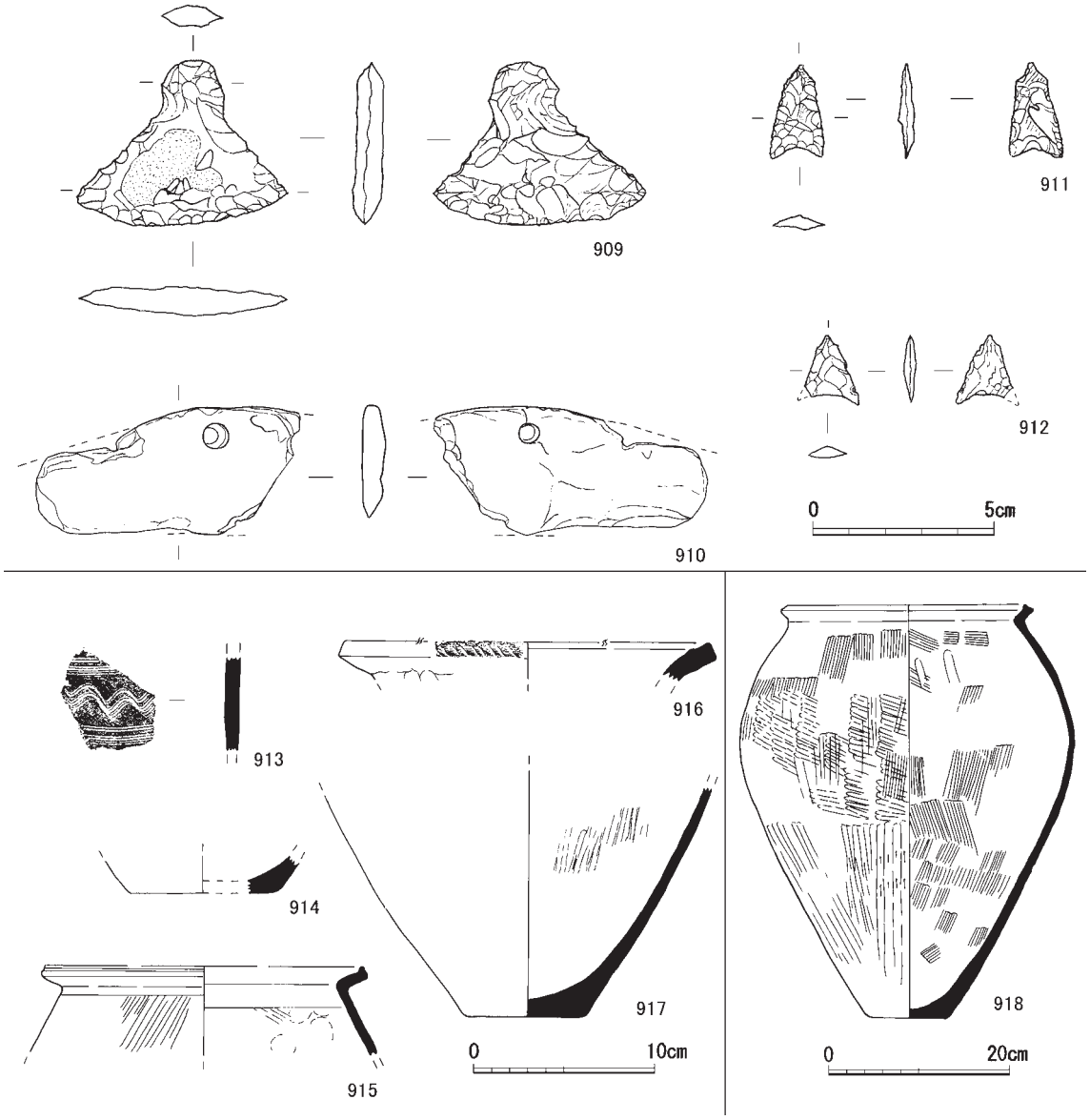
③ガラス製細管状製品

いずれも川跡ＳＲ01の４区から合計10点ほど出土した。このうち７点を図示した（900～906）。出土位置から第１期に廃棄された灯明皿に伴うものと考えられる。900は現存長6.2cmである。両端とも欠損している。直径は８mmである。901は現存長6.0cmである。両端とも欠損している。直径は上端が６mm、下端が４mmである。色調は900・904が濃い緑色で、901は全体に黒っぽい銀色であるが、部分的に黄色である。903は黒っぽい銀色、903・905・906は黒褐色である。図示できていないものに黄色のものがある。外面黒褐色で、内面濃緑色のものがあり、本来黄色や濃緑色であったものが土中で変色したものと考えられる。

（伊野近富・松尾史子）

２）その他の時代の遺物（第55・69図）

今回の調査では、奈良時代のほかに縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の各時代の遺物が少



第69図　石器・弥生土器・須恵器実測図

量ながら出土した。遺構に伴うものは少ない。

(1)石器

909は石匙である。平坦面２の精査中に出土した。形態は三角形状を呈し、ほぼ左右対称である。幅5.8cm、高さ4.6cm、厚さ0.8cmである。欠損していない。サヌカイト製である。縄文時代のものと考えられる。

910は石包丁である。川跡ＳＲ01の断ち割り６で出土した。欠損部が多いが、直線刃半月形を呈すると思われる。刃部はかろうじて遺存する程度である。残存長7.4cm、幅3.5cm、厚さ0.6cmである。穿孔が２つ確認できる。粘板岩製と思われ、緑灰色を呈する。弥生土器と同じ弥生時代中期のものと考えられる。

911･912は石鏃である。911はＳＲ01の５区の黒色系粘土層から出土した。形態は五角形を呈し、無茎である。全長2.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmである。サヌカイト製である。912は平坦面２の精査中に出土した。形態は三角形を呈するが、基部を一部欠損する。無茎である。全長1.9cm、残存幅1.5cm、厚さ0.35cmである。サヌカイト製である。

(2)土器

914～918は弥生土器である。914～916はいずれも川跡ＳＲ01の断ち割り19で出土した。小破片のため口径等の復原が困難な資料である。914は甕の底部である。915は甕の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部を短くつまみ上げる。体部外面にハケ調整を施す。916は甕の口縁部である。端部外面に先端の平坦なヘラ状工具を使用した刺突文が認められる。917は甕の底部である。柵ＳＡ02のＳＰ2021から出土した。内面にハケ調整の痕跡がみられるが、全体に磨滅が著しい。残存高は12.7cmである。918は土器棺墓ＳＸ2015の土器棺に使用されていた甕である。倒卵形の体部に短い口縁部がつく。口縁端部は内上方につまみ上げる。体部外面上半にはタタキ調整の後ハケ調整を施す。体部外面下半から体部上半に向かってケズリ調整を施す。内面はハケ調整である。口縁部はヨコナデ調整を施す。口径26.0cm、器高45.6cmである。以上の弥生土器はいずれも弥生時代中期(後葉)のものと考えられる。

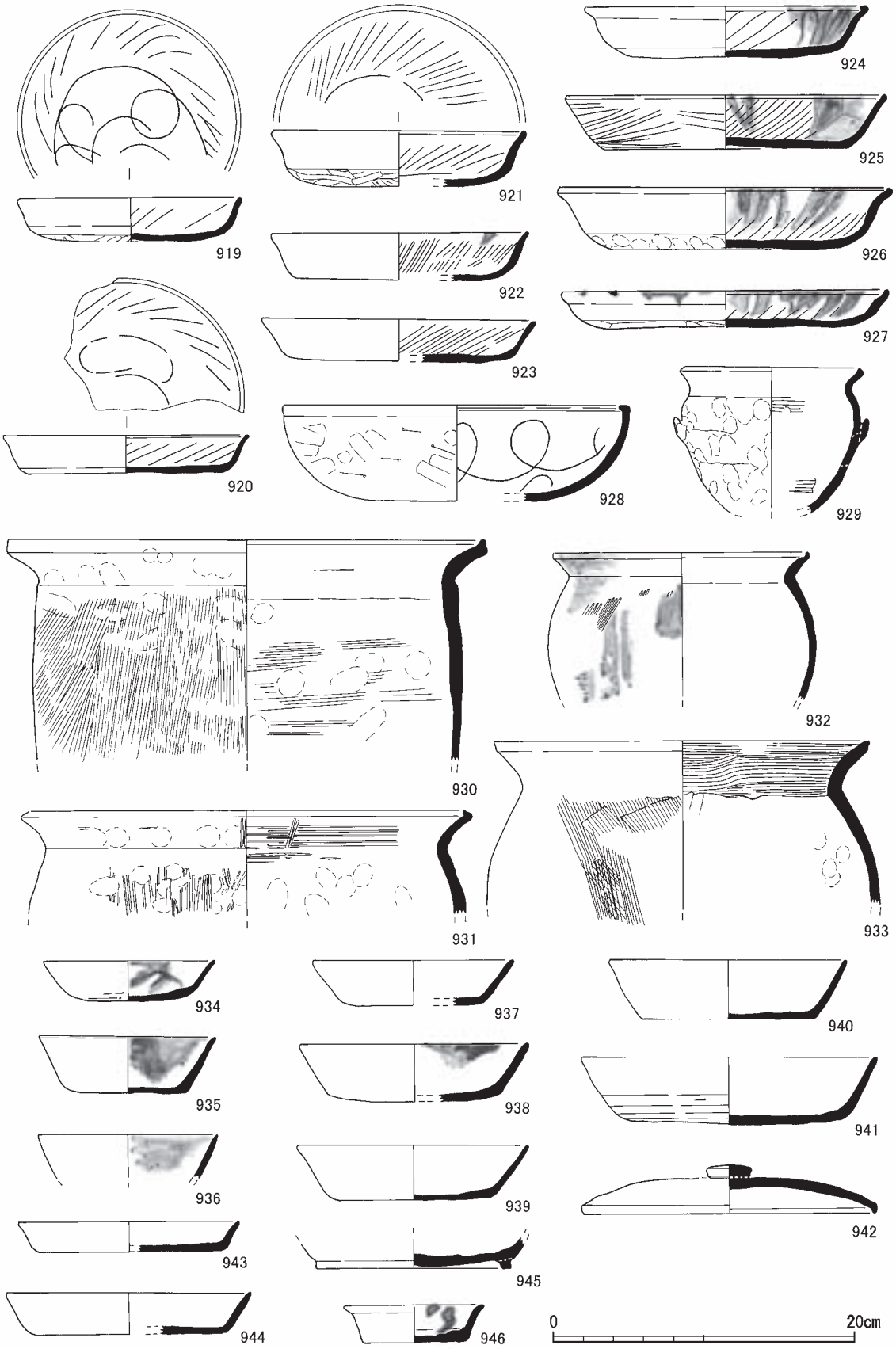
913は須恵器の破片である。外面に６条からなる櫛描波状文と、その上下に５条以上の直線文がそれぞれ配置される。古墳時代中期から後期にかけての器台の一部と考えられる。ＳＲ01の断ち割り19で出土した。

(筒井崇史)

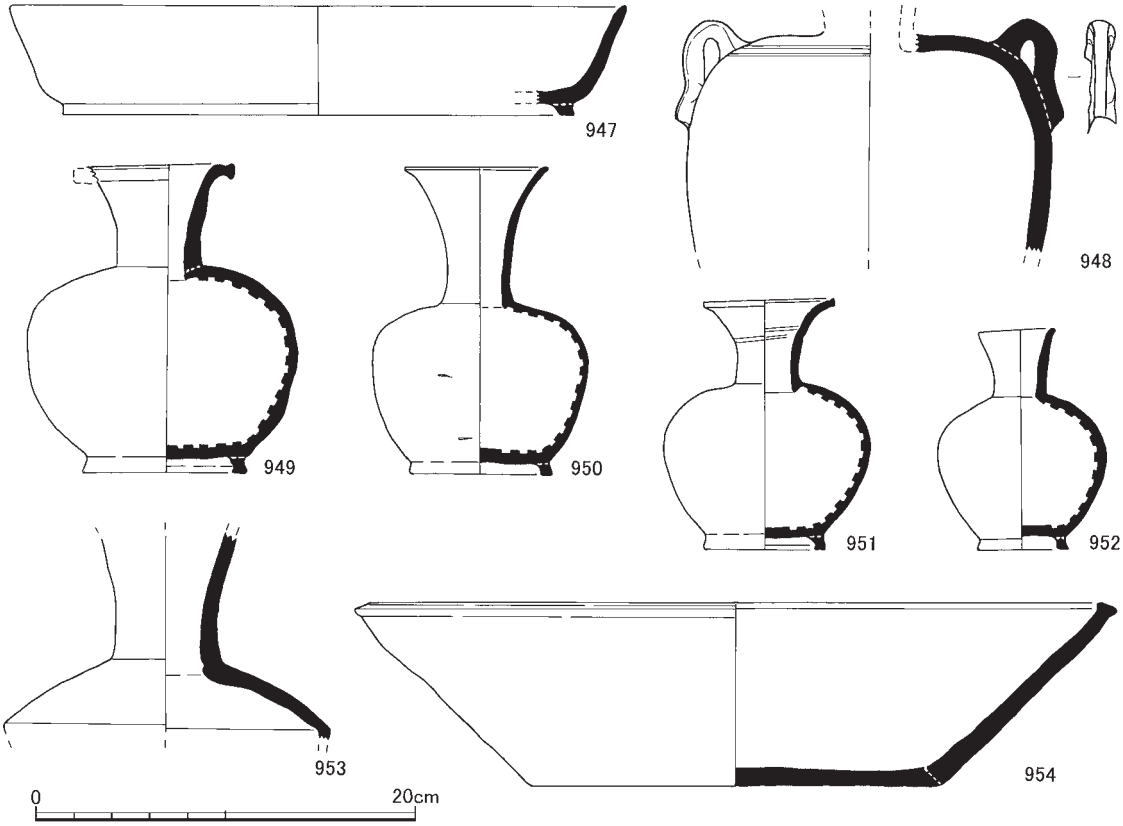
第55図784～786は中世の土器である。784は瓦器椀の底部である。堤ＳＸ2053の溝状遺構ＳＸ2049から出土した。端部を欠損するが、断面三角形を呈すると思われる高台がつく。内外面は黒色で、断面は灰色である。内面の見込みに一方向の暗文がある。

785・786は土師器羽釜である。川跡ＳＲ01の２・３区の埋没後の土層から出土した。色調はいずれも淡褐色である。785は口縁端部が丸く肥厚している。786は口縁部が外反している。これらは大和型である。

(伊野近富)



第70図　第１次調査８トレンチ出土遺物実測図(1)



第71図　第１次調査８トレンチ出土遺物実測図(2)

８．出土遺物２（第１次調査）

第１次・第２次調査で出土した遺物は馬場南遺跡の性格を考える上で重要なものであるが、第１次調査出土分については、試掘調査であったこともあって、必ずしも十分な内容とはなっていない。また、出土位置の記載について若干の遺漏がある。以上の点から、第１次調査出土遺物についても合わせて報告することとした。

なお、本報告では、第１次調査で出土した遺物のうち、奈良時代の遺物についてのみ報告し、石器や弥生土器については触れない。報告する遺物のうち、土器類については既報告分に未報告分を加えて新しく挿図を作成した。また、三彩陶器については一部挿図の訂正を行った。彩釉山水陶器、墨書土器、木簡、木製品、瓦類については、既報告分の挿図を再録することとした。

(1)土器類

第１次調査で出土した土器類は整理箱にしておよそ23箱である。これらの土器類は、第２次調査出土遺物と接合する可能性もあったが､それを確認するための作業を行うことはできていない。また、試掘調査という点と、川跡ＳＲ01という予想以上の大規模な遺構の存在から、遺物の出土状況が必ずしも十分に把握されていないこともあり、第２次調査出土土器類と合わせて報告することは避け、第１次調査の各トレンチごとにまとめて報告することにする。

なお、第２次調査で行ったような器種構成や個体識別のような作業は土師器皿Ｃを除いて行っていない。したがって、土師器皿Ｃ以外の土器の数量等については未確認である。

第72図　第１次調査８トレンチ出土遺物実測図(3)

第73図　第１次調査８トレンチ出土遺物実測図（４）

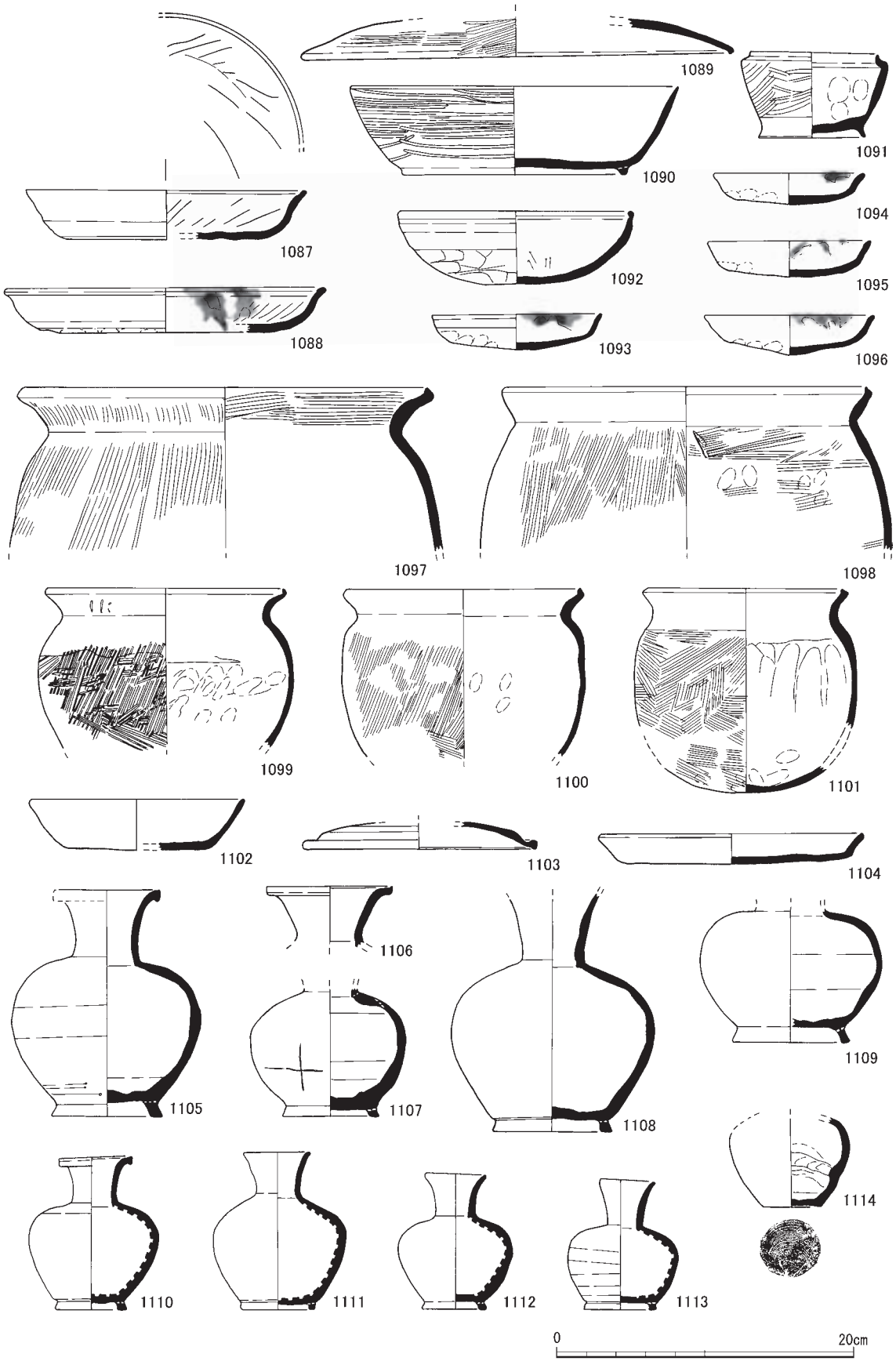
①８トレンチ（第70～73図）

川跡ＳＲ01の４区の南半部にあたる。各トレンチの位置は第２図を参照願いたい。第２次調査の成果から、これらは第２期に伴う遺物と判断される。ただし、土師器皿Ｃが300点以上出土するなど、第１期に伴う遺物も少なからず含まれていると考えられる。

土師器には杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ｃ・鉢Ｂ・壺Ｂ・甕Ａ・甕Ｃ・竈などがある。919～926は杯Ａである。いずれも内面に螺旋状と１段斜放射の暗文を施す。１段斜放射暗文は間隔が広く、粗いものが多い。922・924～926は灯芯痕が認められ、灯明器として使用されていた。919は口径14.8cm、器高2.9cmである。外面の調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。920は口径16.4cm、器高2.5cmである。外面の調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。口縁端部の肥厚は沈線によって作りだす。921は口径16.6cm、器高3.7cmである。外面の調整はb0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。922は口径16.9cm、器高3.2cmである。外面の調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。口縁端部はあまり肥厚しない。923は口径18.2cm、器高2.8cmである。外面の調整はa0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。口縁端部は丸く納まる。924は口径18.6cm、器高3.4cmである。外面の調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。925は口径21.0cm、器高3.6cmである。外面の調整はｂ1手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。926は口径21.7cm、器高4.2cmである。外面の調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。927は皿Ａである。口径21.5cm、器高2.4cmである。外面の調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。図示できなかったが、杯Ａにはｂ3手法で、口縁端部に連弧文を施す古い資料もある。

928は鉢Ｂである。内面に螺旋状の暗文を施す。外面にケズリを施す。口径は22.9cm、残存高は6.3cmである。929は壺Ｂである。体部中位に小規模な把手を有する。外面にユビオサエ痕や粘土接合痕が残る。口径は11.6cmである。930は体部の形状から長胴と考えられ、甕Ｃであろう。口縁端部を上方につまみ上げる。口径31.6cmである。931～933はいずれも甕Ａと思われる。931・932は口縁端部をつまみ上げるが、933は口縁部外面に面をもつ。931や933は口縁部内面にハケを施す。933は口径25.0cmである。955～1084は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。８トレンチ出土の皿Ｃは320点余りあるが、そのうちの約４割を図示した。未使用のものあるが、灯芯痕が１～３か所程度みられ、灯明器として使用されていた。口径9.6～12.8cm、器高2.1～2.5cmである。955～957・984・995・1011は若干器形が異なり、平底と斜め上方に延びる口縁部からなる。口径8.5～11.1cm、器高1.4～2.1cmである。1085は椀ＣⅢである。ｅ手法で調整する。２か所の灯芯痕がみられ、灯明器として使用された。口径9.3cm、器高3.3cmである。1086は竈である。口縁部と焚き口の廂が残存する。内外面ともハケを施す。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯B蓋・皿Ａ・皿Ｂ・皿Ｅ・壺Ｌ・壺Ｎ・盤Ａなどがある。934～941は杯Ａで、法量による大小がある。934～936は杯ＡⅣである。934・935は内面に油煙痕があり、



第74図　第１次調査10トレンチ出土遺物実測図

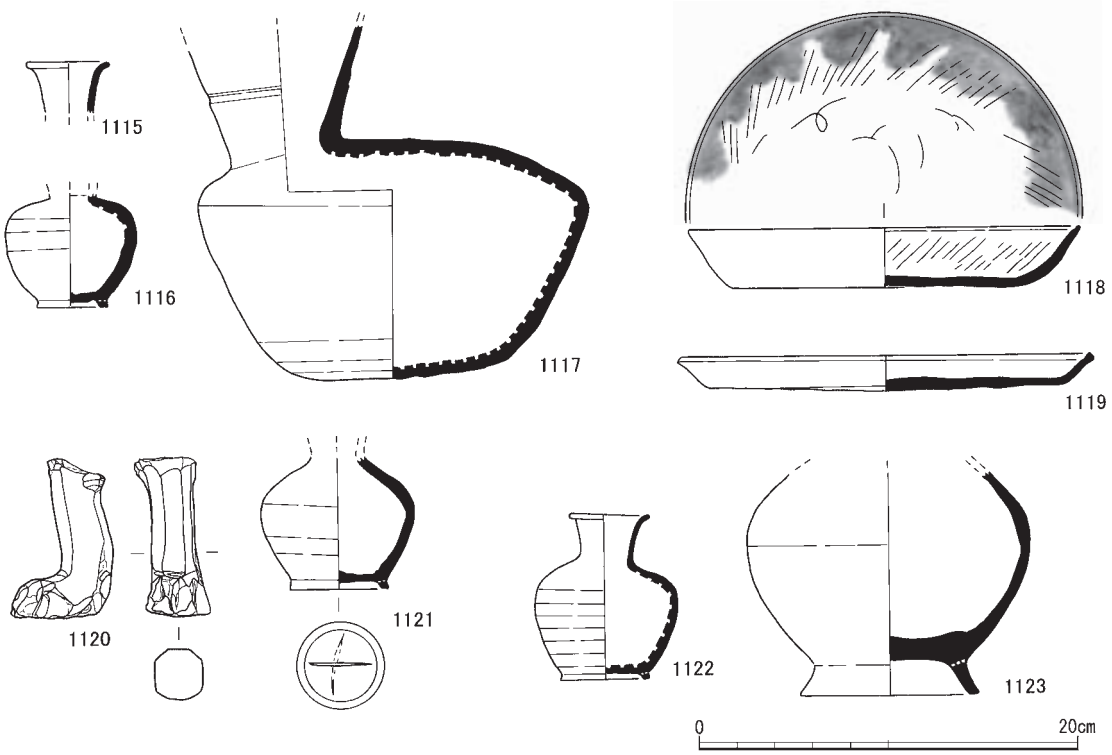
灯明器として使用されたと考えられる。また、934の底部外面には回転ヘラケズリを施す。936は内面に朱が付着する。口径11.4～11.9cm、器高2.7～3.8cmである。937・938は杯ＡⅢである。938は灯芯痕がみられ、灯明器として使用された。口径は13.4～15.0cmである。939・940は杯ＡⅡである。口径15.4～15.8cm、器高3.7～3.9cmである。941は杯ＡⅠである。体部下半から底部外面にかけて回転ヘラケズリを施す。口径19.6cm、器高4.6cmである。942は杯ＢⅡ蓋である。笠形の器形を呈し、天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口径19.4cm、器高3.2cmである。943・944は皿Ａである。口径14.7～16.2cm、器高2.0～2.8cmである。945は杯Ｂの底部である。底径は12.9cmである。946は皿Ｅである。灯芯痕が１か所あり、灯明器として使用された。口径9.2cm、器高2.5cmである。947は皿Ｂである。色調などから土師器のようにもみえるが、器形や調整手法から須恵器と判断した。口径32.3cm、器高5.7cm、底径26.8cmである。

948は壺Ｎである。口縁部や体部下半を欠損する。肩部に耳を持つ。949～951は壺Ｌである。949・951の口縁部は屈曲して口縁端部に面をなす。それぞれ、口径6.8cm・8.3cm、器高13.2cm・16.3cm、底径6.8cm・8.6cmである。950は口縁端部を丸く納める。口径7.5cm、器高16.2cm、底径7.5cmである。952は壺Ｍである。口径3.9cm、器高11.7cm、底径4.6cmである。953は壺Ｋである。口縁端部は体部下半を欠損する。外面に自然釉が付着する。954は盤Ａである。口径38.2cm、器高9.7cmである。

②10トレンチ（第74・75図）

川跡ＳＲ01の８区の北半部にあたる。基本的に第２期の遺物である。

土師器には杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｃ・高杯・鉢Ｂ・壺Ｅ・甕Ａなどがある。1087・1088は杯Ａである。



第75図　第１次調査10・７・14トレンチ出土遺物実測図

1087は口径18.8cm、器高3.3cmである。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。1088は口径21.2cm、器高3.0cmである。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。灯芯痕がみられ灯明器として使用されていた。1089は杯か皿の蓋である。外面はケズリの後ミガキを施す。口径28.6cmである。1090は杯Ｂである。底部外面はケズリで調整し、体部外面にミガキを施す。口径22.0cm、器高5.9cmである。

1091は壺Ｅである。外面にミガキを施す。また、底部外面に「本」と墨書する（後述）。1092は鉢Bである。口縁端部を内方に巻き込み、底部から体部下半にかけて外面にヘラケズリを施す。口径15.6cm、器高4.9cmである。1093～1096は皿Ｃで、いずれもｅ手法で調整する。10トレンチ出土の皿Ｃは20点ほどあるが、そのうちの４点を図示した。灯芯痕が１～３か所程度みられ、灯明器として使用されていた。口径9.9～11.3cm、器高2.1～2.65cmである。1097～1101は甕Ａである。1097･1098は中型品、1099～1101は小型品である。いずれも口縁端部をやや内上方につまみ上げ、外面にハケを施す。1097は口縁部内面に横方向のハケを施す。1098は体部内面にハケがみられる。1099～1101は内面にユビオサエやナデを施す。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・壺Ｌ・壺Ｍ・平瓶などがある。1102は杯ＡⅢである。口径14.4cm、器高3.4cmである。1103は杯ＢⅢ蓋で、天井部外面に「二カ□」と墨書する（後述）。1104は皿ＣⅡで、転用硯の可能性もある。口径17.5cm、器高2.1cmである。1105～1109は壺Ｌである。1105・1106は口縁部が屈曲して口縁端部に面をなす。1107は体部下半に「+」字のヘラ記号がある。1105は口径7.0cm、器高15.2cm、底径7.3cmである。1110～1116は壺Ｍである。1110～1113は完形、もしくはほぼ完形のもので、1110は口縁部が屈曲して口縁端部に面をなす。口径4.8cm、器高10.3cm、底径4.7cmである。1111～1113・1115は口縁端部を丸くおさめる。口径3.6～4.5cm、器高8.8～10.6cm、底径4.2～4.9cmである。1114は高台を有さない体部の破片である。底部外面に糸切り痕がみられる。1117は馬場南遺跡ではほかに例をみない大型の平瓶である。口縁端部を欠損するが、口頸部に沈線１条を施す。体部最大径20.6cm、残存高18.8cmである。

③７トレンチ（第75図）

掘立柱建物跡ＳＢ01を建てるために造成された平坦面１の大半にあたる。図示したのは４点のみで、いずれも遺物包含層出土である。７トレンチでは遺物包含層がほとんど形成されていないため、基本的に遺物自体が少ない。

1118は土師器杯Ａである。外面調整はａ0手法で、内面に螺旋状暗文と１段斜放射状暗文を施す。口縁部に灯芯痕が少なくとも５～６個みられ、灯明器として使用されていた。口径20.6cm、器高3.2cmである。1119は須恵器皿Ｃで、口径21.6cm、器高1.9cmである。1120は須恵器獣脚である。脚はヘラケズリを上から下に向かって行い、面取り風に仕上げる。指の間はヘラによって切り取って表現している。残存高8.3cmである。1121は須恵器壺Ｍである。口頸部を欠損する。底部高台の内面に「+」字状のヘラ記号がある。底径5.1cm、残存高7.0cmである。

④14トレンチ（第75図）

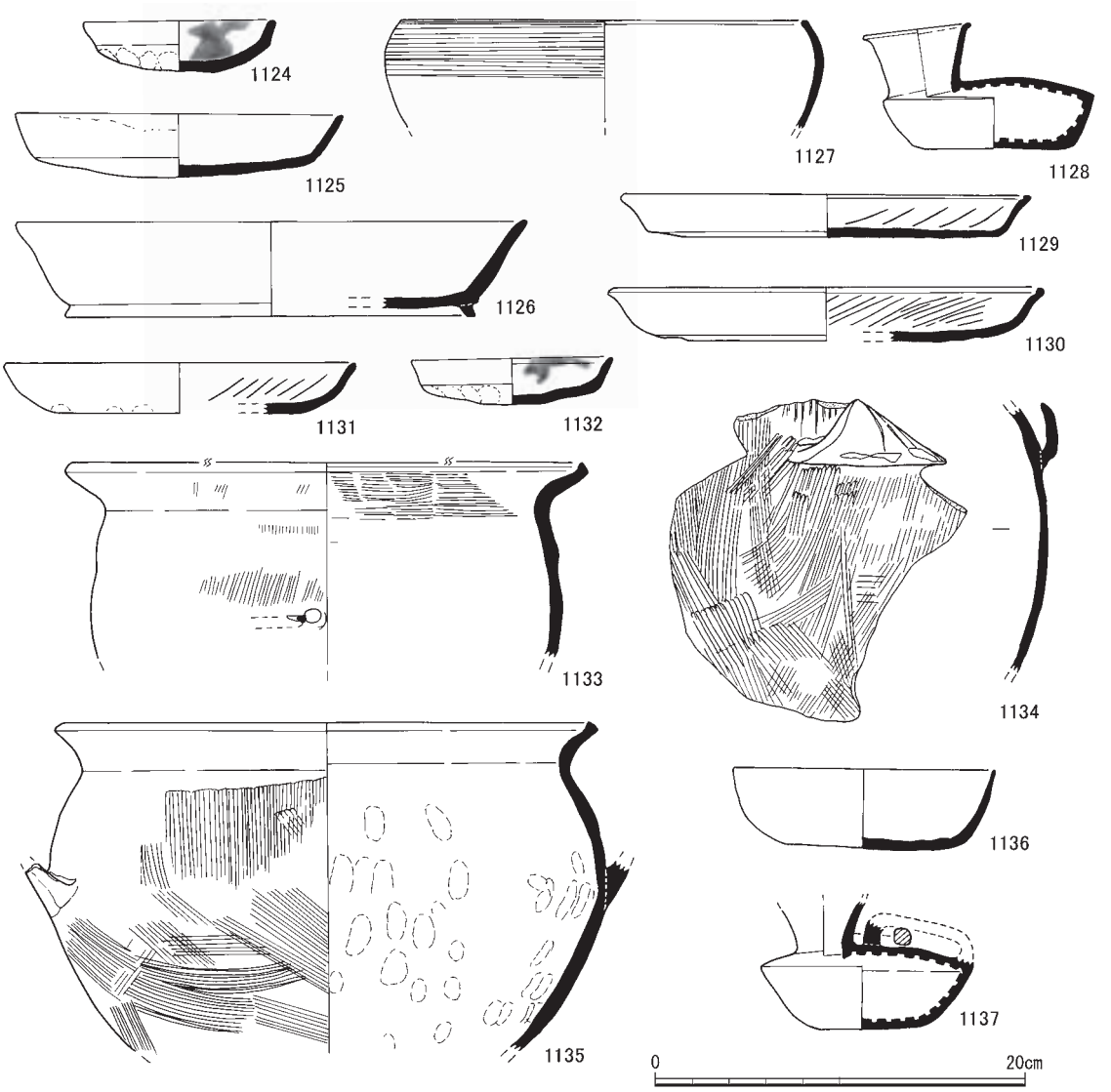
北へ延びる小規模な谷部に設定した。川跡ＳＲ01の延長部を検出し、若干の遺物が出土した。

図示したのは須恵器２点のみである。1122は完形の壺Ｍである。口縁端部を丸くおさめる。口径4.0cm、器高8.8cm、底径4.7cmである。1123は壺の肩部より下である。器種は不明でるが、やや高めの高台を有する。底径は8.8cmである。

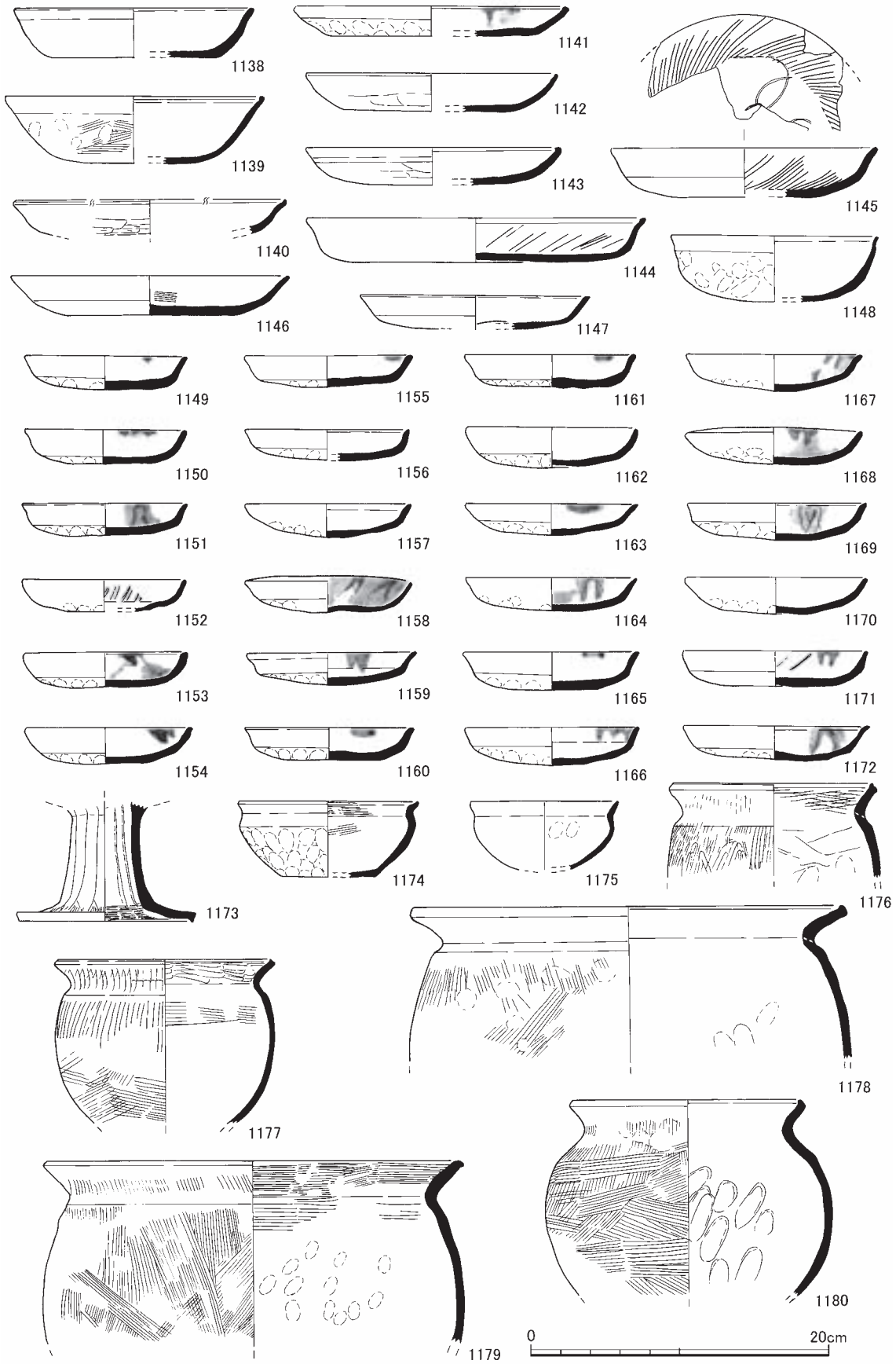
⑤16トレンチ（第76～78図）

第１次調査で最も西に設定したトレンチである。堤ＳＸ2053の西側にあたる。ここでは川跡ＳＲ01を完掘した。上層である有機物を大量に含んだ暗茶灰色シルト（第２次調査の黒褐色系粘土）から須恵器や土師器、三彩陶器・墨書土器・木簡などが出土した。また、その下層にあたる灰色砂・灰色シルト・有機物の細かいラミナ（第２次調査の灰褐色砂）や最下層にあたる暗茶灰色砂泥などから若干の土器が出土した。

1124～1128は最下層出土土器である。1124は土師器皿Ｃで、ｅ手法で調整する。完形で、灯芯痕がみられる。口径10.3cm、器高2.8cmである。1125は皿Ａである。内面全体と口縁部に煤が付着するので、灯明器としてして使用したものであろう。口径17.6cm、器高3.5cmである。1126は



第76図　第１次調査16トレンチ出土遺物実測図（1）

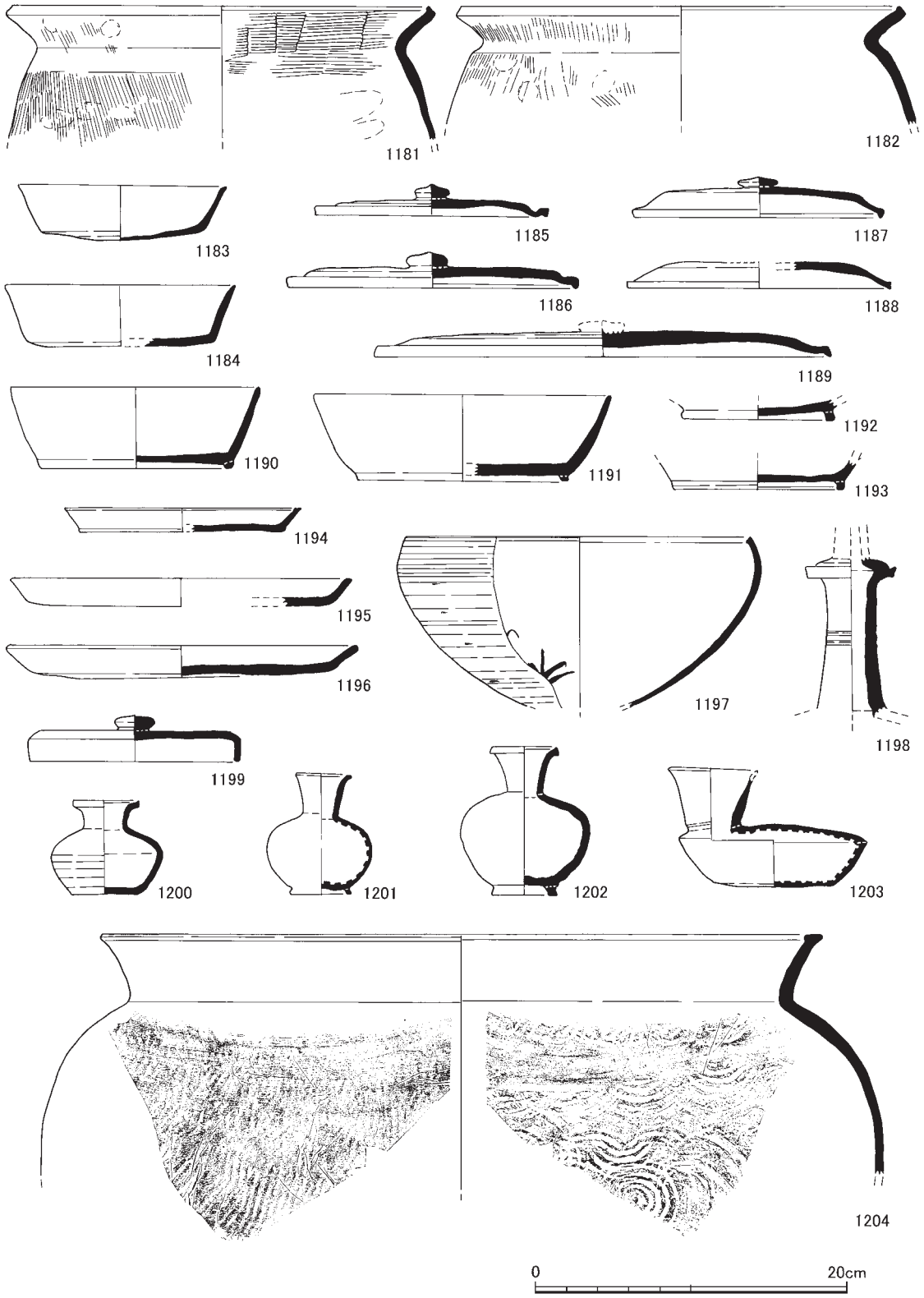


第77図　第１次調査16トレンチ出土遺物実測図(2)

須恵器皿Ｂである。口径27.4cm、器高5.2cmである。1127は須恵器鉢Ａである。外面に細かいミガキを施す。口径は22.0cmである。1128は小型の平瓶で、ほぼ完形である。口径5.6cm、器高6.8cm、体部最大径11.4cmである。

1129～1137は下層出土土器である。1129～1135は土師器、1136・1137は須恵器である。1129は口径21.9cm、器高2.3cmである。外面調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は粗い。口縁端部の肥厚は沈線によって作りだす。1130は口径23.0cm、器高2.9cmである。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。底部外面に墨書がみられる（後述）。1131は杯Ｃで、口径18.8cm、器高2.7cmである。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。接点がないため別に図化したが、1145と同一個体の可能性が高い。1132は皿Ｃで、ｅ手法で調整する。灯芯痕がみられ、灯明器として使用された。口径10.8cm、器高2.5cmである。1133は甕Ａである。口縁端部をつまみ上げる。口縁部内面に横方向のハケを施す。1134・1135は甕Ｂである。ともに体部中位に三角形をした把手を取り付ける。1134は体部の破片であるが、外面にハケを施す。1135は口縁端部をつまみ上げる。体部外面にハケ、体部内面にユビオサエとナデを施す。口径28.4cm、残存高17.8cmである。1136は杯ＡⅢである。若干焼け歪む。口径14.1cm、器高4.4cmである。1137は小型の平瓶である。口縁端部を欠損するが、提梁を有する。体部最大径11.5cmである。

1138～1204は上層出土土器である。1138～1182は土師器で、杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ｃ・壺Ｂ・高杯・甕などがある。1138・1139は杯Ａである。1138は残存率が１/12以下で、推定口径18.2cm、器高2.9mである。調整はａ0手法で、暗文はない。底部外面に「神」と墨書される。1139は口径17.3cm、器高4.5cmと深手である。口縁端部は内側に小さく肥厚し、器壁は薄い。底部から口縁部にかけてケズリで調整する。口縁部にはわずかにヨコナデがみられる。1140～1144は皿Ａである。1140は口径18.2cm、器高2.4mである。外面調整は口縁部のヨコナデ以下はケズリである。内面に暗文は施さない。器壁は薄い。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿の可能性がある。1141は口径18.0cm、器高2.0cmである。外面調整はａ0手法で、内面に暗文は施さない。器壁は薄い。灯芯痕がみられ、灯明器として使用されている。1142は口径16.6cm、器高2.6mである。外面調整はｃ手法で、内面に暗文は施さない。器壁は薄い。底部外面に「神」と墨書される。1143は口径16.9cm、器高2.5cmである。外面調整は口縁部のヨコナデ以下はケズリである。内面に暗文は施さない。底部外面に墨痕がみられる。1144は口径22.6cm、器高3.0cmである。外面調整はｂ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。1145～1147は杯Ｃである。1145は口径17.8cm、器高3.3cmである。外面調整はａ0手法で、内面には１段斜放射と螺旋状暗文を施す。暗文は密である。1146は口径18.5cm、器高2.7cmである。外面調整はａ0手法で、内面に暗文は施さない。1147は口径16.0cm、器高1.9cmである。外面調整はａ0手法で、内面に螺旋状暗文を施す。斜放射状暗文は施さない。1148は椀ＣⅠで、ｅ手法で調整する。口径13.8cm、器高4.4cmである。1149～1172は皿Ｃである。16トレンチ出土の皿Ｃは70点余りあるが、そのうちの約1/3を図示した。未使用のものあるが、１～３か所程度の灯芯痕がみられ、灯明器として使用



第78図　第１次調査16トレンチ出土遺物実測図(3)

されていた。口径10.6～12.3cm、器高2.1～2.7cmである。

1173は高杯脚部である。外面を13面に面取りする。脚裾部内面に横方向のハケ調整を施す。底径11.6cm、残存高8.1cmである。1174・1175は壺Ｂである。1174は体部外面にユビオサエ痕が明

瞭に残る。口径11.9cm、残存高5.1cmである。1175の口径は10.6cmである。1176～1182は甕Ａである。法量による大小がある。1176・1177・1180は甕ＡⅢである。いずれも口縁端部をつまみ上げる。1176は肩部が余り張らないが、1180は体部が球形に近い。口径は13.4～15.2cmである。1178・1179・1181・1182は甕ＡⅡでもやや大きい一群である。1179は口縁端部が面をなすが、ほかの３点はつまみ上げる。いずれも肩部はそれほど張らない。口径は26.7～28.8cmである。

1183～1204は須恵器で、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ｃ・鉢Ａ・壺Ａ蓋・壺Ｍ・浄瓶・平瓶・甕などがある。1183・1184は杯ＡⅢである。口径13.1～14.6cm、器高3.6～4.0cmである。1185～1188は杯Ｂ蓋である。1185は杯ＢⅢ蓋である。口径14.9cm、器高2.0cmである。1186は杯ＢⅠ蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。口径18.5cm、器高2.3cmである。1187・1188は杯ＢⅡ蓋である。笠形に近い器形を呈する。ともに天井部外面に回転ヘラケズリを施す。1187は内面に墨が付着し、転用硯である。口径16.0～16.8cm、器高2.6cmである。1189は皿Ｂ蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。内面が研磨されているので、転用硯の可能性がある。口径は29.3cmである。1190～1193は杯Ｂである。1190は杯ＢⅢである。火ぶくれがみられる。口径16.0cm、器高5.3cmである。1191は杯ＢⅠで、口径19.0cm、器高5.6cmである。1192・1193はともに墨書土器で、底部外面の高台の内側に墨書する。1192は「□〔神ヵ〕尾寺」と墨書する。1193は「□」と墨書する。1194～1196は皿Ｃである。1194は皿ＣⅡで、口径15.2cm、器高1.5cmである。1195・1196は皿ＣⅠである。1195は墨書土器で、内面に「□」と墨書する。1196は口径21.9cm、器高2.1cmである。

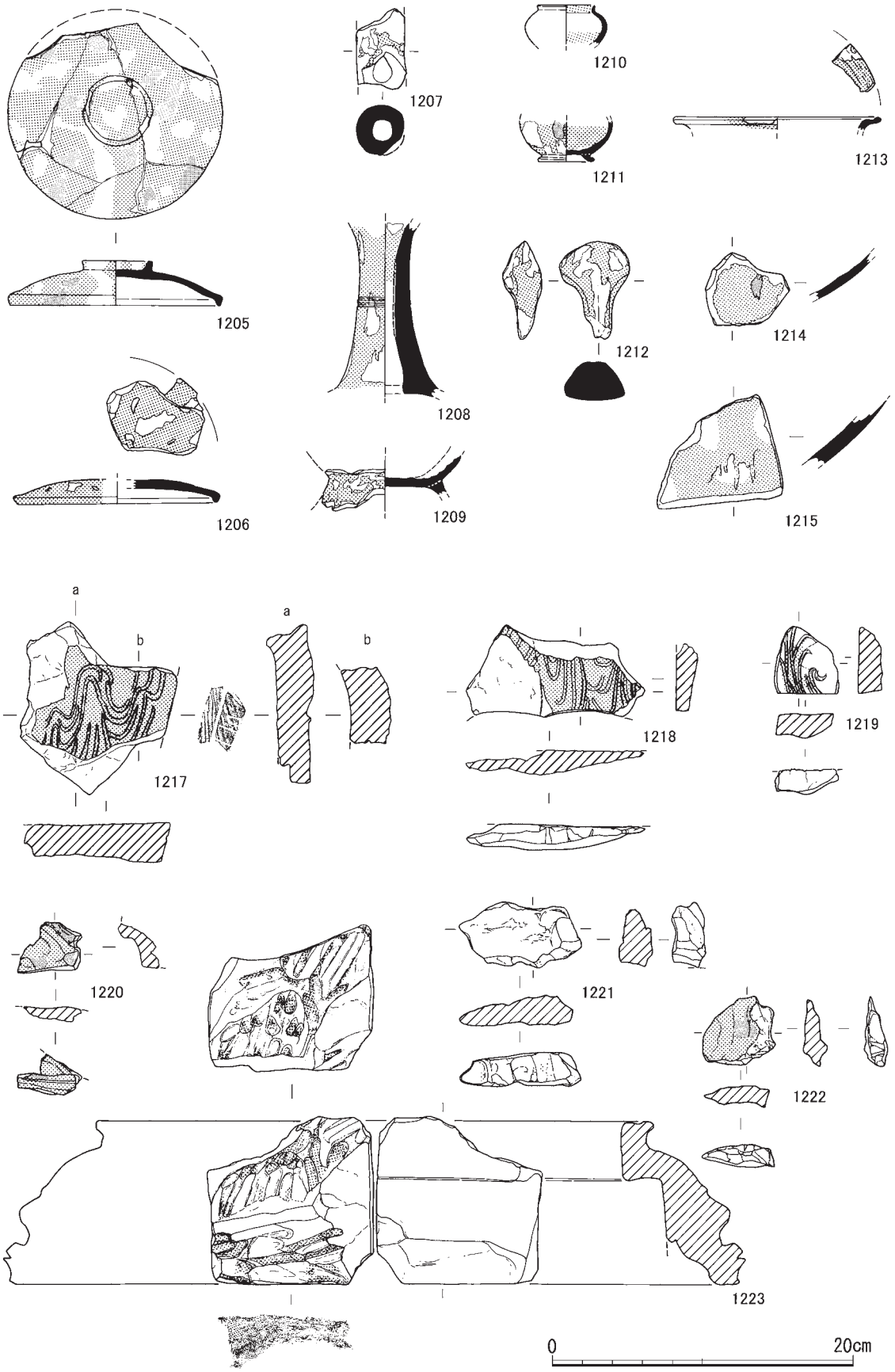
1197は鉢Ａである。口縁部外面はミガキ、体部から底部にかけて回転ヘラケズリの後ナデを施す。内面は回転ナデを施す。外面に「□」と墨書する。口径21.9cm、残存高10.9cmである。1198は浄瓶の口頸部で、外面全体に自然釉が付着する。頸部に２条の沈線を施す。残存高10.1cmである。東海地方の製品と思われる。1199は壺Ａ蓋で、外面には自然釉が付着する。内面に墨痕がみられ、転用硯である。口径13.4cm、器高3.0cmである。1200～1202は壺Ｍである。1200・1202は口縁部外面に面もつが、1201は口縁端部を丸くおさめる。1200は底部に高台をもたない。口径4.2cm、器高6.0cmで、かなりの小型品である。1201・1202は口径3.6～4.1cm、器高7.6～9.5cm、底径3.8～4.2cmである。1203は小型の平瓶である。口縁部を一部欠損するが、完形に近い。残存高7.7cm、体部最大径12.2cmである。1204は甕である。外面にタタキを施し、内面に当て具痕が残る。口径は46.0cmである。

（筒井崇史・松尾史子）

(2) 三彩陶器（第79図）

三彩陶器は川跡ＳＲ01はじめ、井戸ＳＥ01や掘立柱建物跡ＳＢ01などからも出土した。ＳＲ01出土遺物は、還元作用によって三彩の発色は銀化してくすむものが多い。奈良三彩の胎土は精良で白色を呈している。第１次調査では、19点出土し、そのうち11点を図示した。未報告分の出土地点については付表18を参照されたい。

1205･1206は蓋である。1205は環状つまみをもつ。ほぼ完形で、口径14.1cm、器高3.1cmである。



第79図　第１次調査出土三彩陶器・彩釉山水陶器実測図

1206は復原径7.2cm、残存高1.6cmである。つまみの形状は不明である。軟質で、釉調は外面が緑・黄・白の三色で、内面が緑灰色である。ともに10トレンチのＳＲ01で出土した。

1207・1208は水瓶の頸部である。1207は胎土は軟質である。残存高は5.4cmである。７トレンチの遺物包含層から出土した。1208はいわゆる二彩である。頸部中位に沈線を２条めぐらす。残存高11.6cmである。５トレンチの井戸ＳＥ01埋土から出土した。

1209は脚付の壺である。10トレンチのＳＲ01から出土した。

1210・1211はミニチュアの壺である。1210は口縁が外反気味に短く立ち上がる。器表面の剝落が激しいが、緑色釉がみられる。口径3.8cm、体部径5.5cmである。16トレンチのＳＲ01で出土した。1211は体部径6.2cmである。10トレンチのＳＫ21下層で出土した。

1212は火舎型香炉の脚の破片と思われる。胎土は軟質である。残存長6.5cmである。７トレンチの掘立柱建物跡ＳＢ01の柱穴を精査中に出土した。

1213は小型香炉の口縁端部である。復原径13.7cm、残存高0.9cmである。釉調は緑と白の二色が確認できるが、小破片のため、二彩か三彩か不明である。10トレンチのＳＲ01（暗灰色粘質土）から出土した。

1214・1215は内外面の施釉状況や器壁のカーブから、鉢と考えられる。いずれも10トレンチＳＲ01で出土した。

（竹原一彦・松尾史子）

(3)彩釉山水陶器（第79図）

第１次調査では、10点出土し、そのうち７点を図示した。未報告分の出土地点については付表19を参照されたい。

1217～1219は、水波文をもつ彩釉山水陶器である。表面にはヘラ状工具による平行する数本の沈線で水の流れが表現される。1217は山水型で、右側が遺存している。施釉部の左上端の胎土が盛り上がる（断面ａ）状況から、山河などを表現した立体感のあるものである。水波文の沈線は深くシャープである。図面右側面はヘラにより直線的に面取りされる。そこに１本の太目の沈線とこの沈線に直行する３本の細い沈線が存在した。この沈線は漢数字の「三」を表している可能性がある。仮に「三」とすれば、第２次調査で「右三」の線刻を有する彩釉山水陶器（第51図708）が出土しているので、これは「左三」の可能性が高い。残存長11.5cm、残存幅10.1cm、厚さは2.5cm以上である。素地粘土の焼きは硬く、色調が白色のＡ類である。16トレンチのＳＲ01で出土した。

1218は水型で、下端部が遺存している。水波文は彫が浅く、1217より不鮮明である。焼成はやや軟質であるが、胎土はＡ類である。図面下方の側面部は中央部に稜をもち、左右は緩やかなカーブを描いて面取りする。別部品との接合面と考えられる。釉は濃緑色である。残存幅は12.2cmである。10トレンチのＳＲ01で出土した。

1219は水型で、下端部が遺存している。水波文は彫が深い。そこに濃緑色の釉を施す。下端部は直線的に面取りする。10トレンチのＳＲ01で出土した。

1220～1222は彩釉山水陶器の山型である。1220は表面の凹凸が著しい。焼成は硬く、色調が白色のＡ類である。凸部に褐釉が掛かっている。他は濃緑色である。突部は「V」字状で、山頂の二股の尾根を表現しているのかもしれない。８トレンチＳＲ01で出土した。1221の側面部は匙面取りしている。面取り部に斑点状に緑色の釉が残る。焼成は軟質でＢ類である。10トレンチの遺物包含層で出土した。1222は焼成が硬質でＡ類である。16トレンチのＳＲ01の有機物を多量に含む層から出土した。

1223は円形の台座とみられる彩釉山水陶器である。台座は中空で、内面が階段状に上方にかけて窄まることから、木型の周囲に貼り付けられていたと考えられる。台座は数個の部品で構成されたとみられ、片方の側面に平滑な分割面がみられる。分割ラインは台座の中心を大きくはずしている。上端側面のカーブは内径35.6cmを測る。表の側面は、饅頭形のカーブをもち、先の丸い円棒で側面から軽く突き刺したり、連続的に棒の側面を押し付けたような造形がみられる。崖や洞窟をイメージしたものと考えられる。凹面の幅は８mm程度である。所々に黒色銀化した施釉が残っている。下端部は約５cmの厚さがあり、端面には布目圧痕が残る。７トレンチの遺物包含層から出土した。

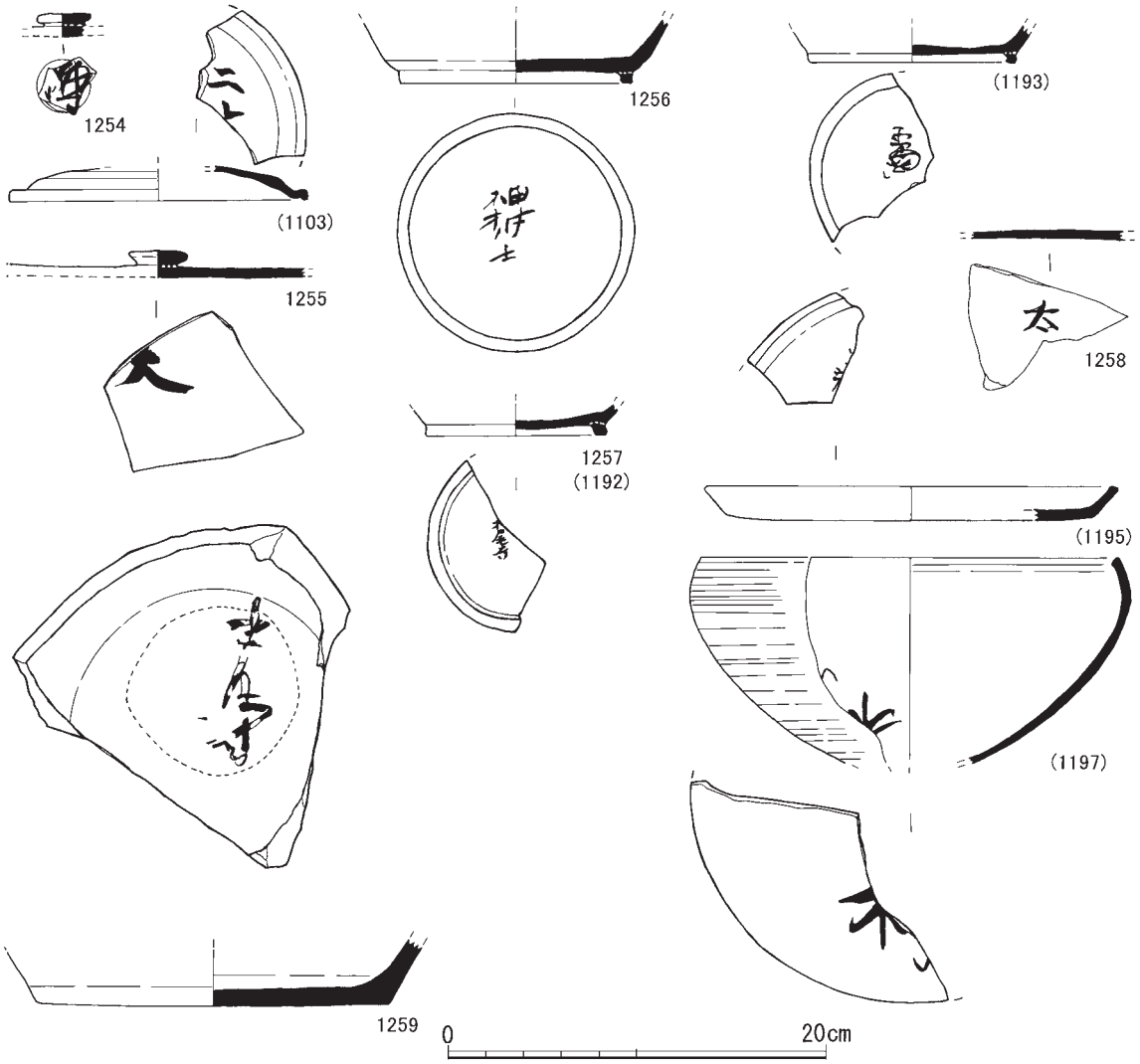
（伊野近富）

(4)墨書土器（第80・81図）

第80図は土師器、第81図は須恵器である。[注26] 墨書土器のうち、遺存状態の良いものについては各トレンチの出土傾向を確認するため、第70～78図に掲載済みである。これらの資料については先述の報告番号を（　）付で示した。また、各資料の出土地点等については、付表20を参照していただきたい。

土師器　1138は杯Ａで、底部外面に「神」と墨書される。調整はａ0手法で、暗文はない。1142は皿Ａで、底部外面に「神」と墨書される。調整はｃ手法で、暗文はない。1224は皿で、口縁内面に「神ヵ」と墨書される。調整はｃ手法で、暗文はない。1225～1233は杯か皿の底部である。1225は外面に「神」と墨書される。調整はａ手法で、暗文はない。1226は外面に「神□（寺ヵ）」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、暗文はない。1227は外面に「寺ヵ□」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、暗文はない。1228は外面に「神□」と墨書される。調整および暗文については不明である。1229は外面に「神□」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、暗文については不明である。1230は外面に「神」と墨書される。調整はｂ3手法で、暗文はない。1231は外面に「□〔神ヵ〕」と墨書される。調整および暗文については不明である。1232・1233の墨書内容は不明である。調整はともにｂまたはｃ手法で、1232の暗文については不明、1233は暗文がない。1234は杯Ｃで、底部外面に「神□」と墨書される。調整はｃ手法で、暗文はない。1235～1241は杯か皿の底部である。1235は外面に「神寺/□」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、暗文については螺旋状暗文がわずかながら確認できる。1236は外面に「神寺」と墨書される。調整はａ手法で、暗文はない。1237は外面に「□〔神ヵ〕寺」と墨書される。調整はａ手法で、暗文はない。1238は外面に「神寺」と墨書される。調整はａ手法で、暗文はない。1239は外面に「神

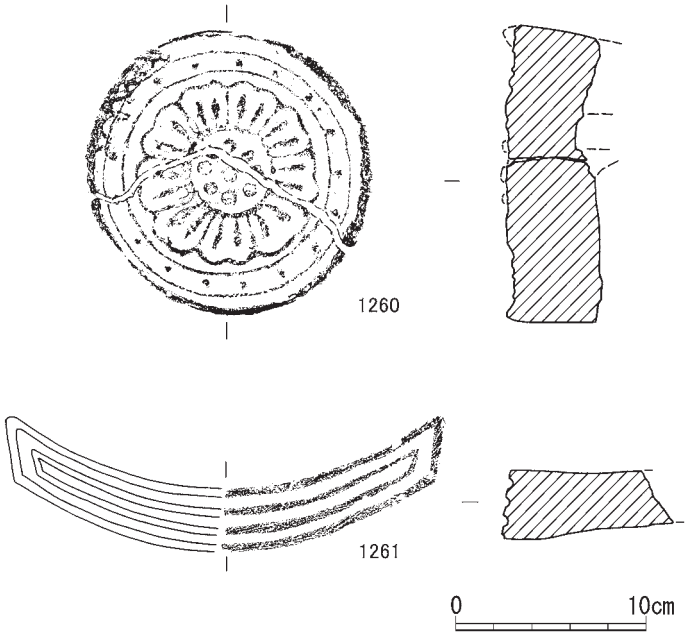
第80図　第 1 次調査出土墨書土器実測図(1)



第81図　第１次調査出土墨書土器実測図(2)

□」と墨書される。調整はａ手法と考えられる。暗文はない。1240・1241は外面に「神雄寺」と墨書される。いずれも調整はａ手法で、暗文はない。1241のほうが薄手である。1242は皿Ｃもしくは壺の底部である。外面に「雄ヵ」と墨書される。調整はｅ手法で、ナデで仕上げる。1152は小型の皿Ｃで､内面に墨痕が見られる。内容は不明である。調整はｅ手法である。1143は皿Ａで、底部外面に墨痕が見られる。内容は不明である。調整はｂ0手法で暗文はない。1243～1248は杯か皿の底部である。1243は外面に「神雄ヵ」と墨書される。調整はｂ手法とみられ､暗文はない。1244は外面に「□□山寺」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、暗文はない。1245・1246は外面に「寺」と墨書される。1247・1248の内容は不明である。調整は、1245がｂまたはｃ手法、1246がａ手法で、暗文についてはいずれも不明である。1247はａ手法とみられるが暗文はない。1248は調整・暗文いずれも不明である。1249は椀Ａの口縁部片と思われる。外面はミガキで仕上げられており、墨痕が見られるが内容は不明である。1250・1251はいずれも杯か皿の底部で、外面に墨痕が認められるが内容は不明である。1250の調整はｂ手法と見られるが暗文はない。1251の調整はｂまたはｃ手法で、暗文はない。1091は壺Eで、高台内側に「寺」と墨書される。1130

は皿Ａで、底部外面に墨書がある。偏が不明であるが、つくりは「支」のようにみえる。調整はａ0手法で、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文が施される。1252は杯か皿の底部で、外面に「黄葉」と墨書される。調整はｂまたはｃ手法で、内面には螺旋状暗文が確認できる。1253は皿Ａで、底部外面に墨書がみられるが内容は不明である。調整はａ0手法で、内面に１段斜放射と螺旋状の暗文が施される。



第82図　第１次調査出土軒瓦実測図

須恵器　杯Ｂ蓋（1103・1254・1255）・杯Ｂ（1193・1256・1257・1192）・皿Ｃ（1195）・壺または鉢（1259）・鉢Ａ（1197）など各器種に墨書される。1254はつまみ部分のみで、内面に墨書されるが内容は不明である。1103は外面に「二□〔上ヵ〕」、1255は内面に「大」と墨書される。1256は外面に「神雄寺」と墨書される。1257は外面に「□〔神ヵ〕尾寺」と墨書される。1193の墨書内容は不明である。1258は外面に「太」と墨書される。1259は内面に「神□寺」と墨書される。破線内が特に平滑であり、転用硯として再利用されている。1195は内面に墨痕がみられるが内容は不明である。1197は体部外面に墨書があり、「神」の可能性がある。墨書は、鉢を伏せた状態が文字の正位置となる。

（松尾史子）

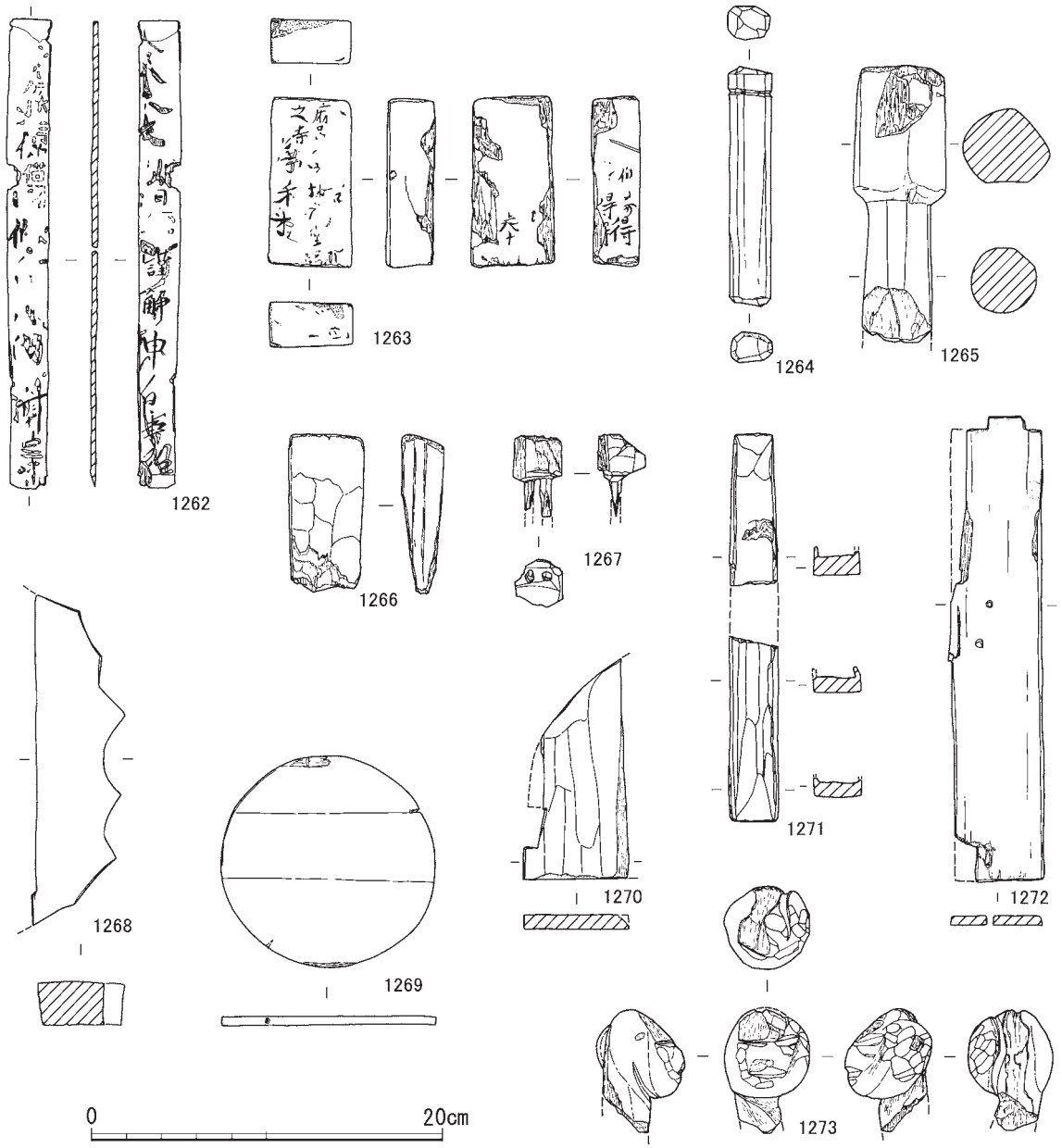
(5)瓦塼類（第82図）

第１次調査では出土した瓦塼類は、軒丸瓦２点、軒平瓦２点を数え、そのうち２点を図示した。ただし、第２次調査で出土した破片と接合した例もあり、それらは第２次調査に含めて報告している。第１次調査での出土量は、丸瓦が69.17kg、平瓦が98.3kgである。

1260は複弁蓮華文軒丸瓦であり、平城宮6316Dc型式に分類される。井戸ＳＥ01の埋土から出土した。面径は15.7cmである。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。1261は、重郭文軒平瓦である。平城宮6572A型式に分類される。16トレンチの川跡ＳＲ01黒褐色系粘土層から出土した。

(6)木簡（第83図）

第１次調査では２点の木簡が出土した。1262は長さ26.8cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmの柾目板の両面に、墨書が認められた。木簡上端の小口面は面取りするが、下端はＡ面からＢ面方向に斜めに切り取られている。赤外線判読では、Ａ面には第１次墨書として「大大大大［］」が認められ、さらに下半部の第１次墨書の上に「謹解申白事事」の第２次墨書が存在する。木簡の板面には刃



第83図　第１次調査出土木簡・木製品実測図

物による削り痕がみられ、第１次墨書も肉眼観察では不鮮明である。第１次の墨書は、第２次使用に先立って削られたようである。Ａ面は習書木簡だが、「大」をはじめとして同じ文字を単純に繰り返す部分と、解の書式に則る部分がある。全体にかなり流麗な筆致である。役所か、貴族の家政機関などを想起させる内容といえる。Ｂ面の墨書は不鮮明で判読し難い。Ａ面の第１次墨書の文字が板面の左側に偏り（Ｂ面では右側）、左側面に丁寧な調整が認められない。第１次木簡の当初の板幅は広く、再使用時に２枚の木簡材として分割したようで、第２次に伴う文字は木簡の中央に書かれている。16トレンチのＳＲ01の有機物を多量に含む層から出土した（第20図）。

1263は、厚みのある角材であり、６面（Ａ～Ｆ面）のうち、５面に墨書や墨痕が存在する。角材は長さ9.5cm、幅4.8cm、厚さ1.6cmである。Ａ面はほぼ全面に３行に渡って文字が墨書される。

右から１行目は「□□□□」、２行目は「麻呂□□□□□□」、３行目は「之寺□□禾(カ)□」の墨書がみられる。Ｂ面には墨書・墨痕は存在しない。Ｃ面には中央下端付近に「奉」の一文字がある。もう一つのＤ面には、下半部分に「得」の文字が縦１行に３文字、左右２行の合計６文字の墨書がある。小口面のＥ面では角部の１か所、相対するF面にも２か所に墨痕がみられた。Ｆ面の墨痕のうち１つは、文字の可能性もある。この木簡も連続する同一文字の状況等から、習書木簡とみられる。８トレンチのＳＲ01の有機物を含む層から出土した。

(7)木製品(第83図)

1264・1265は有頭棒である。1264は全長13.8cm、幅2.3cm、厚さ最大1.8cmである。面取りした棒の断面形は楕円形に近く、片方の先端付近に切り込みを１周させて頭部を作り出す。切り込みは先端から1.5cmの位置にある。頭部の先端は傘型に面取りする。棒の下端は縁を細かく面取りする。16トレンチの川跡ＳＲ01の有機物を多量に含む層から出土した。1265は長さ8.0cm、幅4.2～5.3cmの頭部と、折損するが断面円形の棒部(残存長7.9cm)からなる。頭部の側面は約６面に面取りする。円棒部は直径約４cmで、頭部から棒端方向にやや太くなる。16トレンチのＳＲ01の有機物を多量に含む層で出土した。

1266は楔とみられる木製品で、厚みのある板の小口の一方を片面から斜めにカットして尖らせる。全長9.0cm、幅4.3cm、厚さ最大2.5cmである。８トレンチのＳＲ01の有機物を含む層から出土した。

1267・1268は用途不明の木製品である。1267は小さな頭部の一方から、平行する２本の細長い棒が延びる。傘型に近い頭部は、長さ2.6cm、幅2.8cmである。細い棒状部は直径0.6cmである。細い棒状部は折損するが、残存長は2.2cmを測る。16トレンチのＳＲ01の有機物を多く含む層で出土した。1268は破片であるが、厚さのある円形の板の周縁部を連続的に匙面取りする。残存長は18.8cm、厚さ2.5cmである。図の右側を上位とした光背とみることも可能である。材質は異なるが、法隆寺伝橘夫人念持仏に類例がある。[注27] ８トレンチのＳＲ01で出土した。

1269は曲物の底板である。直径12.2cm、厚さ0.5cmである。周縁部の端面に１か所、目釘穴が存在する。16トレンチのＳＲ01の有機物を多量に含む層で出土した。

1270は用途不明の部材である。折損しているが、半円形を呈する板の可能性がある。曲面に面取りした周縁部の下端付近に、長さ2.3cm、幅0.8cmの方形の切込みが存在する。残存長12.6cm、幅6.0cmである。16トレンチのＳＲ01で出土した。

1271は、舟形木製品とみられる。細長い方柱板の、片方の板面中央部を0.6cm程削り込み、縁を残して舷側を作る。船底は平坦に仕上げる。舳先・艫は板小口のままである。破損品であり中央部を欠損している。欠損部を欠いた残存長は19.1cm、幅2.1～2.7cm、高さは1.4cm、舷側の高さは0.6cmである。16トレンチのＳＲ01で出土した。

1272は枘をもつ部材で、長さ26.6cm、幅5.2cm、厚さ0.5cmである。一方の小口に長さ2.0cm、幅0.8cmの方形の枘が存在する。中央付近に２か所、小さな円孔が存在する。円孔の間隔は2.4cmである。10トレンチのＳＲ01で出土した。

1273は、人形の頭部である。頭部は葛の癌部分を、頸部は蔓をそのまま利用している。人形の頸部は蔓の一方をそのまま利用しているが、折損のため頸部以下は不明である。頭部は左側側頭部を中心に刃物で細かい調整を行い、頭部を丸く仕上げている。刃物による調整痕は右頬にも認められるが、その範囲は限定的である。顔は癌の凸部先端を鼻に見立て、両目と口は鋭利な刃物で切り込んでいる。切れ長の両目はやや吊り上がる。頭部の高さは5.2cm、幅4.9cm、鼻から後頭部間は4.8cmを測る。人形の正面は円形に近いが、横顔は卵形である。16トレンチのＳＲ01の上層（有機物を多量に含む黒褐色シルト層）で出土した。

（竹原一彦）

９．遺構・遺物の検討

１）出土土器の検討

(1) 土師器供膳具について

出土した土器のほとんどが川跡ＳＲ01と溝ＳＤ2002から出土しており、溝ＳＤ2054や建物の柱穴などからの出土量は少ない。ＳＲ01およびＳＤ2002出土遺物については、出土状況から第１期：ＳＲ01の灯明皿集中か所で出土した一群と、第２期：ＳＤ2002およびＳＲ01上層で出土した一群に大きく分けられる。ここでは、時期毎に土師器の供膳具を中心に土器群の時期について検討していきたい。

第１期の遺物　この時期の遺物は、前述のとおり多量廃棄された灯明皿とそれに共伴する土器群であるが、当然のことながら皿Ｃが約90％を占めており、その他の器形は少ない。灯明皿集中か所の群別の時期については、単独で存在するＡ群の土師器には、残念ながら皿Ａや杯Ａ・Ｃなどの時期が特定しやすい資料が含まれておらず、詳細な時期は不明であるが、層位関係からＳＤ2002よりも古いことは確実である。Ｂ群からＦ群については重複関係があり厳密に分けることは不可能であるため、総体的に土器の観察を行った。ここでは時期が特定しやすい土師器の供膳具について検討していきたい。

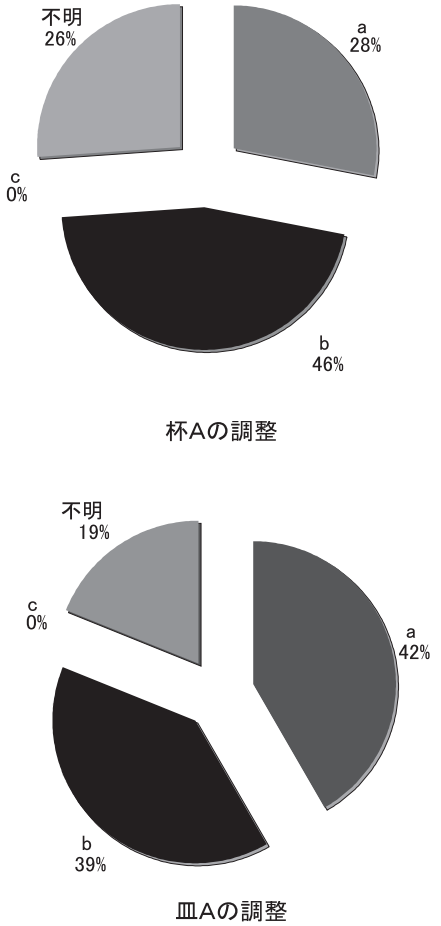
供膳具でもっとも量が多い皿Ａおよび杯Ａの口縁部形態は、基本的に口縁端部が外反して内側に肥厚するタイプである。詳細に観察すると杯Ａは口縁端部付近の形態によりさらに２つに分類できる。Ａ類：器壁がほぼ均等なタイプとＢ類：外反させる位置で器壁がもっとも厚くなるタイプ（60・195・201・275など）である。Ｂ類は概して外反の度合いが弱い傾向にある。杯の法量には、大小２種類があり、大型は口径17～21cm、小型は口径14～16cmである。大型の中で器高４cm以上の深手のものは少ない。皿は口径19～24cmの大型のものばかりである。口縁形態は、口縁部が外反して内側に肥厚するタイプ（62・244）と、外反せずに内湾して肥厚するタイプ（63・207・245など）の２種類がある。杯Ｃの出土量は少ない。

土師器の調整については、破片数による統計処理を行ったところ、第84図のような結果が得られた。まず、外面調整は、杯Ａはａ手法が28％、ｂ手法が46％で、ｃ手法はない。皿Ａはａ手法が42％、ｂ手法が39％で、ｃ手法はない。いずれも不明のものが２割前後ある。皿よりも杯のほ

うがｂ手法化している傾向にある。外面のヘラミガキはほとんど省略されている。内面の暗文の有無については、ほぼ全てに１段斜放射と螺旋状暗文がセットで施されており、１段斜放射の間隔は粗いものが若干含まれる。また、口縁端部に連弧状暗文が施されるものがわずかながらみられる。55・203・402・407・408がこれに該当する。これらは、出土地点からは第２期に属するが、土器そのものの特徴から古い資料が混入したものと判断した。

以上の特徴から、これらは平城宮土壙ＳＫ820とほぼ同時期のものと考えられ、第１期の遺物の時期は平城宮土器Ⅲの新段階(注28)、平城遷都後を中心とするといえよう。ただし、連弧状暗文を施す資料がわずかながらも存在することや、ＳＲ01がある程度清掃されていたことを考慮すると、この遺跡の造営時期はもう１段階古い時期(注29)、恭仁宮造営のころと考えてもよいであろう。

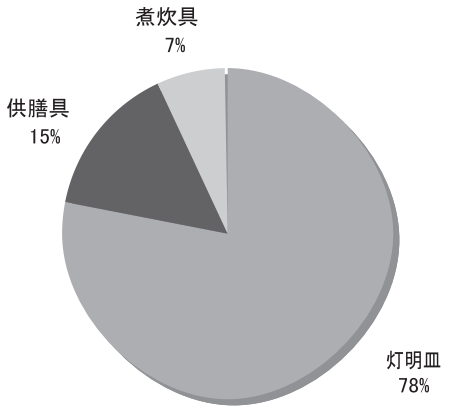
第２期の遺物　この時期の遺物は、ＳＤ2002と重複する部分のＳＲ01上層から出土しており、正確にはＳＤ2002の遺物ということになる。黒色土器も少量であるが出土しており、墨書土器のほとんどがこの時期に属する（後述）。



第84図　土師器供膳具の調整（第１期）

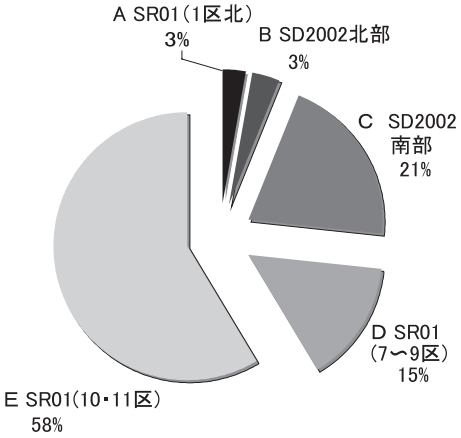
土師器の灯明専用皿と供膳具、煮炊具の割合は第85図のとおりである。供膳具の中には灯明器として使用されているものが含まれる。煮炊具の分布からは興味深いことが明らかになった。第86図のように煮炊具の６割がＳＲ01の堤ＳＸ2053の西側（10・11区）に集中する傾向があり、次いで多いのがＳＤ2002南部である。このことから堤ＳＸ2053付近に炊事施設があったと考えることが可能である。ＳＤ2002南部に多い理由としては平坦面２の建物付近に生活空間があったか、あるいは斎会などの炊き出し等の空間があったことが考えられる。

この時期の土師器の供膳具は杯よりも皿が多い。新器種として椀Ａも一定量出土する。杯Ｂは相対的に少ない。椀Ｃは小型のタイプがこの時期に属する傾向にある。溝の資料ということもあり資料には時期幅があり、杯・皿は第１期の資料と比較すると形態等にバリエーションがある。

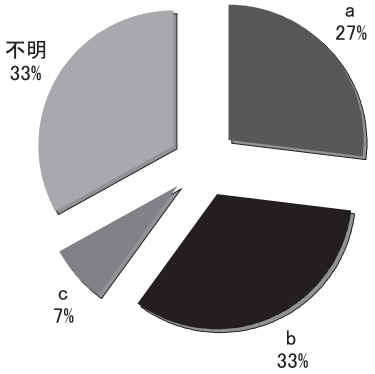


第85図　土師器破片別出土比率（第２期）

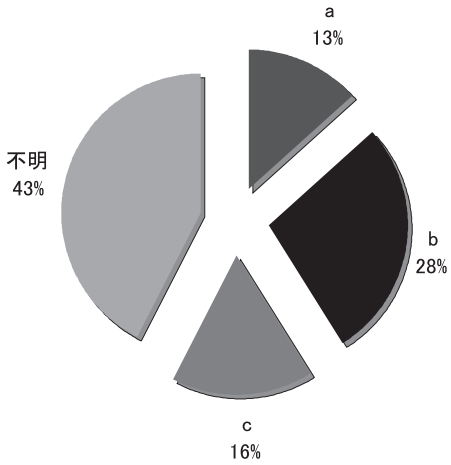
杯は、第１期の資料より深手で口縁が外上方に立ち上がり、口縁部は外反せず端部の肥厚が小さいタイプが加



第86図　土師器煮炊具破片別出土状況



杯の調整



皿の調整

第87図　土師器供膳具の調整（第２期）

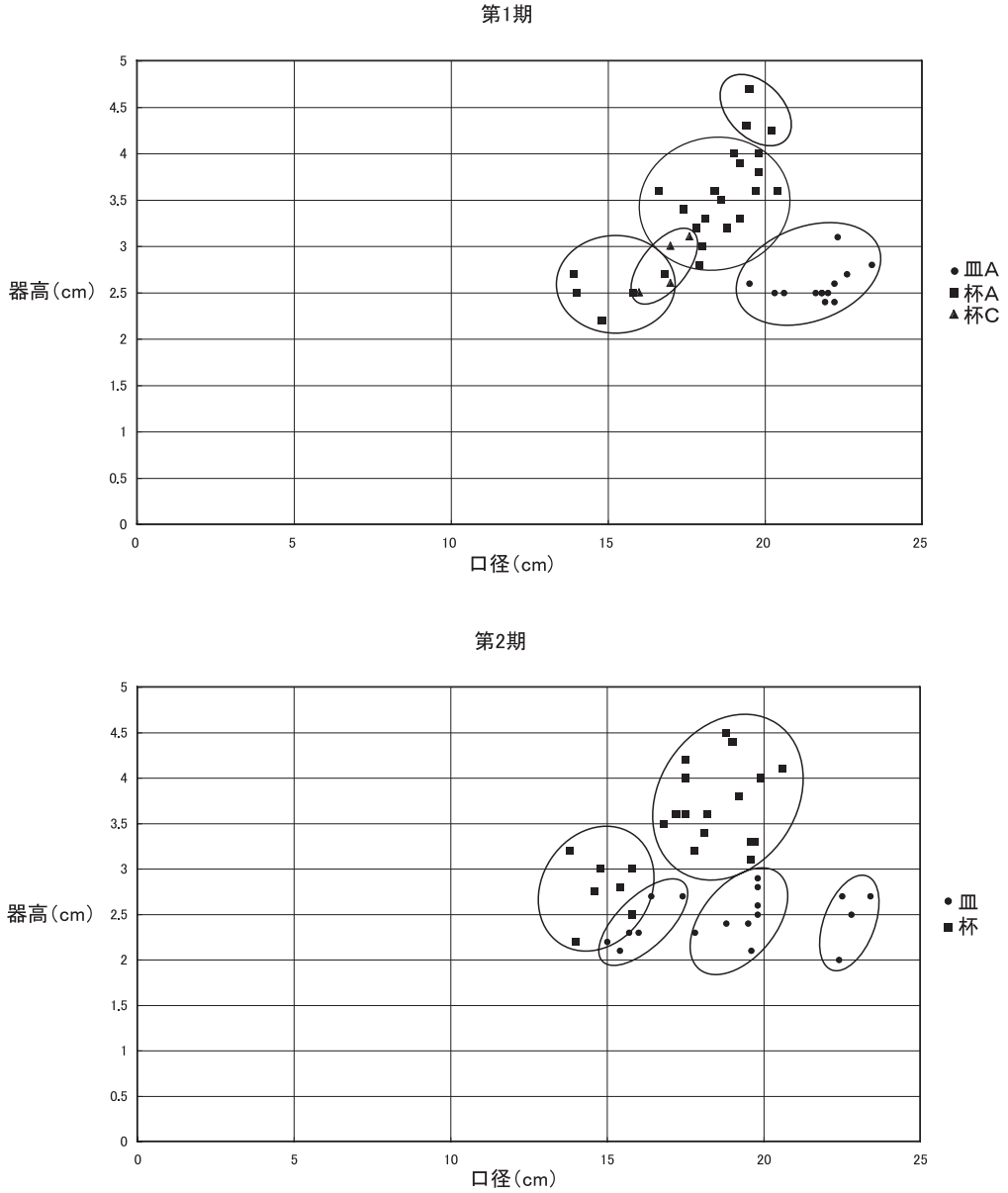
わる。このタイプの外面調整は、ｃ手法で仕上げるものがほとんどであるが、409・331・621のようにケズリで調整したのちに丁寧に磨くものが少量ある。後者は平城京内で平城宮土器Ⅳ〜Ⅴの段階に出土する傾向がある[注30]。器高が低いものは皿と区別がつきにくい。器壁は総じて薄い傾向にある。

皿は、大型のタイプに加え、第１期にはほとんどみられなかった小・中型のタイプが一定量出土している。大型のタイプは第１期に比べ口縁部の立ち上がりが若干緩くなり、口縁端部は外反せずに肥厚させるものがほとんどである。調整はｂまたはｃ手法が主体である。口径は23cm前後、器高は2.0〜2.7cmである。小・中型のタイプは、口縁部が外上方に立ち上がり、口縁端部は小さく肥厚させるか、丸くおさめる。器壁はかなり薄い。調整はａ手法もみられるが、ｃ手法が主体である。なお、口縁端部を丸くおさめるタイプ（416〜419）については、皿Ａよりもむしろ杯Ｃの系譜としてとらえ、皿化した杯Ｃと考える説がある[注31]。中型は口径20cm前後、小型は15cm前後で器高は2.0〜2.8cmである。

また、杯・皿の暗文については、ほとんど省略されてなくなる。暗文が施されている場合でも１段斜放射の間隔は広く、螺旋状暗文も円弧が大きく雑で、全体的に粗い傾向にある（209・242・276・332など）。また、少量ながら連弧状暗文を施すもの（55・203・402・407・408）が出土しているが、これについては先述したように古い資料が混入したものと考える。

杯・皿の調整および暗文については、破片数による統計処理を行ったところ、第87図のような結果であった。不明なものが４割ほどあるが、第１期にはみられなかったｃ手法のものが一定量占めるようになっている。また、ａ・ｂ手法がまだ５割ほどを占めるが、暗文がほとんど省略されている。これは器形の違いにも反映されている。ｅ手法の杯・皿類はない。

第２期になってから登場する器種椀Ａは、口径12〜13cmと小型のタイプばかりで、大型のタイプはみられない。外面調整はｃ手法のものが主体で、ミガキを施すものは少ない。



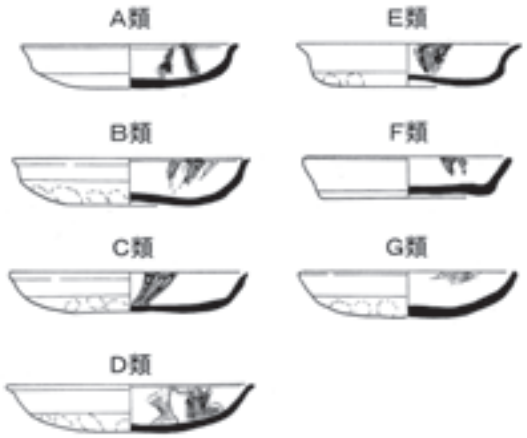
第88図　土師器時期別法量分布図

以上の特徴からこれらの資料は、奈良市平城京東市推定地第27･28次調査(左京八条三坊十二坪･東三坊坊間路)ＳＥ502出土資料(注32)や西大寺食堂院出土資料(注33)と併行する時期のものと考えられ、第２期の遺物の時期は、平城宮土器Ⅳ～Ⅵの時期幅を持つといえる。平城宮土器ⅣやⅤの資料を個別に抽出することができないため、第２期の始まりが平城宮土器ⅣかⅤかはっきりしない部分はあるが、遺物の下限が平城宮土器Ⅵまでにおさまることから、平安京遷都のころにはこの遺跡は廃絶したものと考えられる。

(松尾史子)

(2)土師器皿Ｃについて

皿Ｃと法会　土師器皿Ｃは、今回の調査で5,000点以上出土した。口縁部に灯芯痕がみられ、灯明器として使用されていたものが大半である。これらは、出土状況から燃灯供養などの法会で



第89図　土師器皿Ｃ分類図

使用されたものが大量に廃棄されたものと考えた。特に川跡ＳＲ01で検出した廃棄グループのＡ～Ｆ群は、廃棄状況を具体的に示す資料として注目される。出土状況や点数などについてはすでに述べたが、１回の廃棄の単位として、150点前後が予想できると考えた。ただ、これを毎日、例えば７日間行って、１つの群を形成したのか、何回かの法会の結果、群を形成したのかは、今回の調査で明らかにすることはできなかった。

奈良時代における灯明器に関しては、平城京左京三条二坊の濠状遺構ＳＤ5100から出土した灯明器の検討が行われている(注34)。ただ、ＳＤ5100出土灯明器は、皿Ｃのような灯明専用器はほとんどみられず、各種の供膳具や甕の体部片などを使用している点が馬場南遺跡のあり方とは大きく異なる。報告では、ＳＤ5100出土の灯明器は、天平元(729)年以降、恭仁宮遷都(740年)までに、光明皇后の皇后宮で行われた、臨時的かつ緊急的な仏会に伴う燃灯供養で使用された可能性を指摘している。馬場南遺跡の状況はこれらに比べると、灯明専用器である皿Ｃを大量に調達していると考えられ、その点で、計画的に法会が執り行われた可能性もある。

皿Ｃの分類と今後の課題　出土した皿Ｃのうち、実際に検討することができたのは半数にも満たない。このため皿Ｃに対する分析は不十分なものとならざるを得ないが、個体の特徴から２、３の指摘を行いたい。

まず、口縁部の外反度や、口唇部の形状によって、少なくとも７つに分類できる(第89図)。また、胎土や色調についても、少なくとも４種類が存在する(付表７)。残念ながら、これらの要素がどのように組み合うのかを検討することはできなかったが、こうした分類が可能であることの意味について考えたい。

口縁部や口唇部の形状に違いがみられるのは、皿Ｃの製作に関わった人(これを工人と呼ぶべきかどうかは不明である)が複数いたことを示す。また、胎土に違いが認められるのは素地となる粘土や混和材の調達方法、あるいは素地の作り方に違いがあったことを示す。しかし、素地と口縁部の形状などは必ずしも対応するものではない。以上のことから、皿Ｃの製作地が複数あり、それぞれの場所で複数の人が皿Ｃの製作を行っていた可能性が考えられる。つまり、皿Ｃの製作

付表７　土師器皿Ｃ胎土分類表

類型	胎土の特徴	色調の特徴
Ⅰ類	比較的精良で、微細な砂粒を含む。雲母がみられる。	淡黄灰色を呈するものが多い。
Ⅱ類	比較的精良で、Ⅰ類よりもやや粗い砂粒を含む。	淡黄灰色を呈するものが多い。
Ⅲ類	やや砂っぽく、砂粒を含む。雲母や白色粒を含む。	淡茶褐色を呈するものが多い。
Ⅳ類	砂粒をやや多く含む。白色粒が多くみられる。	暗灰色を呈するものが多い。

者集団の存在が予想できる。もっとも、これらが専業的な集団であるかどうかは、今回の調査では明らかにできなかった。今後の検討課題であろう。

このように馬場南遺跡では、法会に先立って、複数の製作地で製作された皿Ｃを調達していた可能性が考えられる。また、この状況は第１期と第２期で大きな変化は認められないので、時期は異なっても法会に先立って皿Ｃを調達するという方法に大きな変化はないと考えられる。「正倉院文書」や「長屋王家木簡」では、「油杯」と呼ばれたと考えられる皿Ｃを交易により調達していること分かるので、そのような方法も含めて、これも今後の検討課題であろう。

小結　以上のことから、馬場南遺跡で執り行われた法会は、平城京左京三条二坊のＳＤ5100のような「臨時的かつ緊急的」な法会ではなく、事前に十分な準備を行い、「計画的に」執り行われた法会である可能性が高い。この点からも法会の様相・性格を考える上で参考になろう。

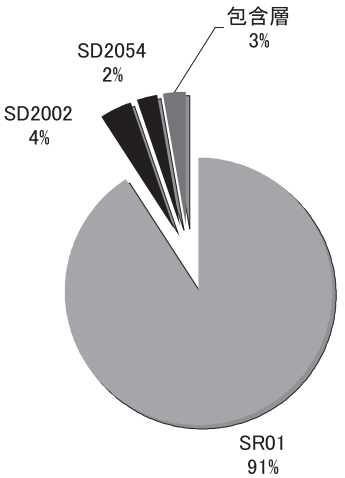
(3)須恵器壺Ｍ・壺Ｇについて

壺Ｍは「平底の丸い体部に外反する頸部を付す小型の器である。口縁端部を丸くおさめる。高台を付す例もある。轆轤水挽き成形で作られる[注35]」と説明され、平城宮土器編年では平城宮土器Ｖ以降に出現するとされる[注36]。馬場南遺跡における壺Ｍをみると、高台を付す例が圧倒的に多く、高台を持たないものには、少量であるが、糸切り痕が認められる。また、口縁部が壺Ｌのように、「屈曲してやや幅広の凹帯をなすもの」も一定量存在する。

壺Ｍの出土地点は、おおむね第２期の遺構もしくは層位からで、一部に第１期とも第２期と判断し難い地点から出土したものがあった。しかし、その場合でも確実に第１期というには困難な地点ばかりであった。また、ＳＲ01の１区南・２区・３区北半については、第２期の遺構である溝ＳＤ2002の掘削前に埋没していることが明らかになっているが、この最上層からも壺Ｍが７点ほど出土している。

以上のような状況を踏まえて、第１期と第２期の時期を壺Ｍから考えてみると、第１期の最終末期には壺Ｍが存在し、第２期を通じて普遍的に存在すると考えてよい。一方、第１期は壺Ｍを確実に含むとはいえない。したがって、馬場南遺跡の第１期と第２期の交わりの頃が平城宮土器Ｖの早い段階に位置づけられる可能性が高い。

この点を傍証する資料として、壺Ｇを取り上げよう。確認した壺Ｇはわずかに２点であるが、遺物の項でも指摘したように、出現期のものである可能性が高い。その出土地点は第２期の遺構であり、平城宮土器編年でも、型式的に古い壺Ｇを平城宮土器Ⅳに遡らせようしている[注37]。したがって、第２期は平城宮土器Ⅳまで遡る可能性がある。ただ、その一方で、平城宮土器Ｖ以降にみられるような通有の壺Ｇが馬場南遺跡で全く確認されていないのは注意を要する。その理由は不明であるが、馬場南遺跡における特徴として指摘しておきたい。



（筒井崇史）　第90図　墨書土器遺構別出土比率

付表８　川跡ＳＲ01
地区別墨書土器出土比率

地区名	点数	比率
1区	1	0.5%
3区	1	0.5%
4区	10	5.3%
5区	6	3.2%
6区	11	5.8%
7区	16	8.5%
8区	12	6.3%
8･9区	3	1.6%
9区	9	4.8%
10区	62	32.8%
11区	58	30.7%
合計	189	100.0%

付表９　墨書土器
器種別出土比率

器種	点数	比率
土師器	151	72.6%
須恵器	56	26.9%
黒色土器A	1	0.5%
合計	208	100.0%

２）墨書土器の検討

(1)墨書土器の分布

墨書土器は主に川跡ＳＲ01、溝ＳＤ2002、溝ＳＤ2054で出土しているが、そのほとんどがＳＲ01からの出土である。遺構別の出土比率は、ＳＲ01が91％、ＳＤ2002が４％、ＳＤ2054が２％である（第90図）。さらにＳＲ01での出土状況をみてみると、ほとんどがＳＲ01の６～11区にかけて出土しており、堤ＳＸ2053の西側である10・11区からの出土が60％と半数を超えている（付表８）。一方、灯明皿が多量廃棄された３～５区での出土比率は、合わせて10％にも満たないうえ、出土位置および層位からほとんどが第２期のものと考えられる。６～11区での出土層位は、上層の黒褐色系粘土である。また、前述したとおり、ＳＲ01は３～11区（平坦面１の東南角付近から西端まで）はＳＤ2002と重複しており、基本的に上層のみ掘削した。したがって、上層は第２期に相当し、出土した土師器については、平城宮土器Ⅳ以降の様相をもつものが主体である。

以上のことをふまえて整理すると、墨書土器については、一部を除いてほとんどが第２期の遺物となる。もちろん川跡出土資料という性格から古い段階の遺物も混じっているが、土器そのものに平城宮土器Ⅲ以前の特徴をもつものは少ない。出土状況から確実にＳＲ01の時期（第１期）に属するといえる墨書土器は、４・５区で出土した灯明皿に「浄」と墨書された皿Ｃ２点である（第54図753・754）。また、転用硯が墨書土器とほぼ同様の分布状況を示すことと合わせて、第２期には堤の南西側に写経や寺務に関わる施設があったと想定できる。

次に、墨書土器の器種別の出土の割合をみてみると、付表９にみるように、土師器の割合が圧倒的に多い。土師器・須恵器とも種類は杯・皿類が多く壺・甕類はほとんどない。土師器の外面調整には、ａ・ｂ・ｃ手法のすべてがあり、ａ手法とｂ・ｃ手法はほぼ同数である。(注38) 一方、内面に施される暗文の有無をみると、付表10に示したように、暗文がないものが多い傾向にある。また、墨書土器が出土した土層の他の土器との共伴関係をみてみると、椀Ａやｃ手法の土師器と共伴するものが30％である。以上のことから、墨書土器全体に関しては、平城宮土器Ⅳ以降の資料が多いといえる。

付表10　墨書土器の調整（全体）

調整	暗文有	暗文無	不明	小計
a	8	25	26	59
b	2	5	3	10
b/c	4	19	21	44
c	0	9	0	9
不明	0	1	9	10
小計	14	59	59	132
比率	10.6%	44.7%	44.7%	100.0%

(2)墨書土器の内容

墨書土器は判読不可のものも含めて208点出土しており、うち判読できたのは113点である。また、判読できた113点のうち「神雄寺」に関わる文字が書かれているものは72点で、墨書土器全体の34％を占める。墨書内

容別の出土比率は、付表11のとおりである。

「神雄寺」に関わる文字には、「神雄寺」、「神雄」、「神尾」、「神寺」、「神」、「寺」、「山寺」などがある。破片資料が多いが、「神」が19点ともっとも多く、次いで16点の「神寺」が多い。「神寺」は「神雄寺」を省略したものであると考えられる。「神雄寺」関係の墨書がある土師器は、底部の破片が多いが、器形が分かるものをみると口縁端部が肥厚しない皿で暗文のないものが多い。外面の調整は、ａ・ｂ・ｃ手法のすべてがあり、ａ手法とｂ・ｃ手法はほぼ同数である。一方、内面に施される暗文の有無をみると、付表12にみえるように、暗文がないもののほうが多い傾向にある。また、出土地点をみてみると、５割近くが堤ＳＸ2053より西側で出土している(付表13)。

付表11　「神尾寺」関係
墨書土器出土比率(全体)

内容	点数	比率
神雄寺関係	72	34.6%
その他	40	19.2%
不明	96	46.2%
合計	208	100.0%

付表12　墨書土器の調整(神雄寺関係)

調整	暗文有	暗文無	不明	小計
a	0	16	7	23
b	1	4	0	5
b/c	1	8	10	19
c	0	4	0	4
不明	0	0	1	1
小計	2	32	18	52
比率	3.8%	61.6%	34.6%	100.0%

その他の墨書内容には、注目されるものとして「浄」、「大殿」、「黄葉」、「□橋寺」などがある。また、判読しにくいが、「悔過」と読めそうなものもある。

「浄」、「悔過」はともに灯明皿を使用した法要等に深く関わる墨書と考えられ、遺跡でどのような法要を行っていたのか考える上で非常に重要な資料である。馬場南遺跡で灯明皿が大量廃棄された平城宮土器Ⅲの後半頃には、燃灯や薬師悔過の記事が『続日本紀』に散見される(注39)。馬場南遺跡で行われた法要はこれらの記事と無関係ではないかも知れない。「悔過」は第２期の遺物であるが、土器としては平城宮土器Ⅲからあってもよい資料である。

「大殿」は、①中心となる大きな建物や、②天皇や三位以上の身分の高い人物を指す場合が考えられるが(注40)、馬場南遺跡では①に該当するような立派な建物がないことから、②の人物を指すものと考えるのが妥当である。土器自体は、ａ手法で内面に１段斜放射と螺旋状の暗文をもつことから、第１期に属する資料である可能性が高い。したがって、馬場南遺跡の造営に関わる人物を指す可能性が十分考えられる。

「黄葉」は合計２点出土している。「黄葉」は紅葉と同義語で、『万葉集』でも「紅」を「黄」と表記する例が多くみられるようである。出土位置から、第１期とも第２期とも判断しがたいが、万葉歌木簡と関連づけて、歌会の御題として土器の裏に書かれた可能性もある。

付表13　墨書土器遺構別
出土比率(神雄寺関係)

出土地点		点数	比率
SR01	1区	0	0.0%
	2区	0	0.0%
	3区	0	0.0%
	4区	1	1.4%
	5区	1	1.4%
	6区	7	9.7%
	7区	10	13.9%
	8区	7	9.7%
	9区	3	4.2%
	10区	9	12.5%
	11区	25	34.7%
	10・11区	3	4.2%
SD2002北部		1	1.4%
SD2002南部		0	0.0%
SD2054		4	5.6%
SX2049		1	1.4%
合計		72	100.0%

「□橋寺」は、泉津の対岸に行基が建設したといわれる「泉橋寺」との関連が想定できるが、『行基年譜』には「泉橋院」と見え、奈良時代に「泉橋寺」と呼ばれていたかどうかは不明である。

その他、「□□/□利諸/□」とあり、経典に関わるものと思われる。「利諸」の前の字のつくりは「又」とみえ、これが「取」であれば、『十誦律』の可能性がある。蓮の花を描いたものとともに、遺跡の寺としての性格を考える上で興味深い。

「左木」は音が平城の地名の「佐紀」に通じるが、奈良時代の文献には用例が無く、不明である。「造瓦」については、馬場南遺跡は瓦の検討により、独自の窯を持っていないと考えられることから、他の造瓦所等との関係を検討する必要があろう。

(3) まとめ

以上のことから、墨書土器は、第２期に属するものが９割近く出土していることになり、「神雄寺」の墨書は第２期に属するといえる。したがって、墨書土器の様相からは、馬場南遺跡が確実に「神雄寺」と呼ばれる寺であったのは第２期であり、第１期については宗教的空間があったものの寺であったのか、邸宅その他の宗教的空間であったのか検討の余地があるといえよう。

（松尾史子）

３）その他の遺物の検討

(1) 建築部材について

馬場南遺跡で出土した木製品の中には巻斗（838）や束などの建築部材と考えられる資料が数点含まれている。また、840～842・856・857などは高欄の桁や框・土台・束と考えられる部材である。ただ、部材のサイズが、一般的な建物に使用されたものに比べると小型であることから、実際に人が入る建物ではなく、厨子や小塔などの小規模な建築物の部材と考えることができる。これらの部材を積極的に評価するならば、組物や高欄のある小建築が存在したことが想定できる。(注41) 小塔であれば奈良県室生寺五重塔（高さ16m強）と同規模の塔となる。海龍王寺や元興寺にも五重小塔があるが、これらは実物の１/10のサイズで、馬場南遺跡出土資料よりも小さい。

しかし、今回出土した部材については、風化の度合いから屋外よりも屋内にあったと想定され、掘立柱建物跡ＳＢ01内にあったと考えるならば、小塔よりも組物を持つ厨子のほうが適当であろう。このような小建築は、平城宮東院庭園・若犬養門跡や藤原京跡でも出土例があり、その性格・用途については仏堂、塔や宮殿の雛形であり、内部にものを納めるための容器または実際の建築の模型と考えられている。(注42) 今回の出土例は前者にあたる。

なお、今回の出土部材には複数の厨子・小塔の部材があるが、すべてが同じものの部材であるのではなく、複数の厨子・小塔があったと考えるのが妥当であろう。

また、火を受けた厨子の扉は、ＳＤ2002で一緒に出土した土器群との関係から、廃棄されたのは遺跡が廃絶した時期に近いと考えられる。これが礎石建物に安置されていた厨子のものであれば、礎石建物が焼亡したのは第２期の終わり頃であり、この本堂の焼亡がきっかけとなって遺跡が廃絶したと考えることも可能である。

（松尾史子）

(2)その他の遺物

鉱滓(銅滓を含む)や鞴羽口など生産に関わる遺物の出土点数は、鉱滓が９点、鞴羽口片が25点である。ＳＲ01の６区の南肩検出時と７区の上層(断ち割り14・15の黒色系粘土)でもっとも多く出土している。羽口のうち１点はＳＤ2054の黒色系粘土から出土した。これらは基本的に第２期に属する。ＳＲ01の屈曲部南西付近に小規模な工房が存在したと考えられる。

また、製塩土器は破片数で85点出土している。そのうち数点がＳＲ01の４・５・８区の黒色系粘土から出土した以外は、10・11区(堤の西側)の黒色系粘土から出土した。出土層位から第２期に属する。胎土は、①細かい砂粒が多く含まれるもの、②全体的に粗いもの、③精良であるが粗い砂粒が含まれるものの３種類に分けられる。また、内面の調整では布目が確認できるものとできないものがあり、前者は布目が粗いものと細かいものに分類できる。布目が細かいものは相対的に器壁が薄く、胎土が精良である傾向にある。製塩土器の用途については、不明である。

(松尾史子)

４)彩釉山水陶器の年代と配置復原

(1)馬場南遺跡出土の彩釉山水陶器の概要

彩釉山水陶器は30数点出土したが、完形のものはない。しかし、全形を推定すれば縦20cm、横25cm程度で、厚さ５cm程度である。表面は緑釉を基調に褐色や白色(釉が薄く、素地が透けて見えるので黄白色のものが多い)の釉が掛けられている。底面は露胎で、布目圧痕がある。１か所大きく素地を削り、厚さを減じている。この表面には山様が象られていたようで、肉厚なか所を削ったようである。側面も露胎であるが、１～２条の釉が垂れているか所が認められる。正置した状態で焼成前に乾燥させたことがわかる。側面はナデで仕上げている。素地は黄白色で、少量の砂粒を含むものと、白色のものの２種がある。焼成されたものは黄白色のものがやや軟質で、白色は硬く焼き締まっている。側面に「右三」「左五」のヘラによる刻書と、「東廿一」の墨書が認められる。また、文様は粘土塊による山と、ヘラにより水波紋を刻むのがほとんどであるが、１点だけ魚をヘラで刻んだものがある。胎土は平城宮へ供給した瓦工房がある平城山の土と同様であり、おそらく平城山の官営工房で製作されたといえよう。

(2)彩釉山水陶器の類例と年代

今回の出土品は、伴出した土師器・須恵器の型式から奈良時代中期から後期に廃棄されたと考えられる。

では、生産された時期はいつなのであろうか。先行研究である高橋照彦氏の論文[(注43)]を参考にしながら、説明しよう。

これまでの出土例のほとんどは、緑釉水波紋塼である。すなわち、方形のレンガ様で、今回のような立体的に造形したものではない。まず、緑釉水波紋塼の特徴を列記しよう。

①裏面に数字で「□条□」のような位置を示す記載があり、基本的には縦横に数列数段にわたって組み合わせて一連の画面を構成していた。

②隅角が90°のものが多いが、45°、135°のものもあり、八角形をなす場合があったか。

③刻銘として「十六」などといった、ある程度広い範囲を占めるものでありながら、釘穴などは認められず、敷き並べていたか。

以上の特徴が指摘されている。以下に出土例を示し、年代の根拠について説明したい。

川原寺出土例(注44)　飛鳥にある川原寺の出土品である。斜面に塑像片などの搬出品と一緒に廃棄されていた。その製品は７世紀のものが多く、田中琢氏によって最古級の緑釉陶器として理解されている。緑釉水波紋塼は半肉彫のものとヘラ描きのものとの２種類がある。

興福寺出土例(注45)　興福寺東金堂出土の緑釉水波紋塼を実見した。水波紋塼と思われるのは少量で、その他はやや立体的に造形しており、何をイメージしているのかわからない。調査担当の藪中五百樹氏によれば仏像の前面にある裳腰のようなものではないか、とのことである。塼は厚さほぼ３cm、最大幅18cm程度の方形（タイル様）である。釉は分厚い。ほとんどは被熱しており表面が荒れている（赤変部分）が、遺存状態のよいものは、明るい緑色をしている。釉薬がかかっていない部分は、胎土は白く、馬場南遺跡出土の「左五」と刻書されたものと似ている。高橋照彦氏によれば(注46)、神亀３（726）年に聖武天皇が元正太上天皇の病気平癒を祈って建てた興福寺東金堂において「瑠璃地」として、薬師三尊を安置する須弥檀上面を飾っていたと推定されている。なお、中金堂では、養老５（721）年に橘県犬養美千代が藤原不比等一周忌の供養のために設けた弥勒浄土の瑠璃殿に用いられたかと想定されている。

東大寺出土例(注47)　平成21年３月に奈良博物館で開催された東大寺「お水取り」の展示場で、二月堂で出土した彩釉山水陶器（緑釉水波紋塼）を実見した。わずか２点だったが、馬場南遺跡で出土した彩釉山水様陶器との比較ができた。展示品は二彩の塼の破片だった。表面に明るい緑色を基調に一部褐色を配した二彩をかけていた。その釉薬の下には水波紋がヘラで刻まれていた。やや、華奢な感じの刻み方である。馬場南遺跡で出土した水波紋のある彩釉山水陶器と比較してみると、釉調は同じく明るい緑色のものがある。しかし、ヘラはやや幅が広く、また、強く刻んだものである。この差異が何に由来するのかはわからないが、ひとつの解釈としては、馬場南遺跡で出土した水波紋のある彩釉山水陶器は、立体的なもので、これに対して二月堂で出土した彩釉山水陶器は塼という平板なものであるという、表面の違いがそうさせているのかも知れない。すなわち、曲面に刻む場合、やや力を入れて刻む必要があったのではないか。遺物は奈良時代の須恵器皿や椀の表面に、「東大」「東大寺」「造寺」と墨書されたものがあった。いずれも、奈良時代後半のものである。二月堂解体修理の際などに出土したようである。

阿弥陀悔過料資材帳（「東大寺文書」大日本古文書）神護景雲元（767）年八月三十日目録

阿弥陀浄土変一鋪

宝殿一基漆八角高一丈六尺三寸・・・

基二階上階池磯敷瑠琉（璃カ）地辺着金銅鏤辟金并畫飛并等形

下階在蓮子着金銅鏤辟端嚢等高欄上居金花八球

（以下省略）

これは、阿弥陀堂に八角形の宝殿があり高さ約4.9mであったこと、さらに、宝殿の基壇は２

段になっており、上階には「池磯敷瑠璃地」を施してあったという記事である。高橋照彦氏によれば[注48]東大寺上院地区出土の緑釉水波紋塼は、天平13(741)年３月には造り終えていた阿弥陀堂の宝殿に「池磯敷瑠璃」として使用されていた可能性が高いという。

法華寺出土例[注49] 実見はしていないが、図録に掲載された写真を見てみると、大きさは約20cmの緑釉水波紋塼で緑は濃い色であり、ヘラによる水波紋は幅が狭く細いものである。裏面には十六条などのヘラによる刻書がある。高橋氏によれば、法華寺阿弥陀浄土院は天平宝字４(760)年に光明皇太后の１周忌斎会のために完成させたもので、この製品が設置されていたと考えられている。

これらの観察結果によれば、馬場南遺跡と類似するのは山様がないので、水波紋で比較すると、東大寺出土例がもっとも近い。東大寺例が741年とすれば奈良時代中期の製品となる。

さて、上記以外の製品の観察記録を示す。

奈良市一条高校出土例[注50] 一条高校で出土した彩釉山水陶器は、馬場南遺跡で出土した「山」を模した彩釉山水陶器とそっくりである。刺突紋や波打つように沈線をヘラで刻んだ様子など、もし、馬場南遺跡の彩釉山水陶器の中に入れたら、違和感がまったくない。また、胎土が黄土色であることも同じである。報告によれば、15cm程度の破片は上から見ると135°に屈折しているという。馬場南遺跡でも、そのように屈折したものは多くあり、おそらく、135°の八角形に組み合わされた立体的な製品と想定している。しかし、同じ八角形でも一条高校の例は、一辺の側面はほぼ垂直であるのに対して、もう一辺の側面は内側へ傾斜するものである。すなわち、ほぼ垂直なか所には別なパーツを組み合わせていたと考えられる。模様をよく見てみると、水波紋が一部刻まれていることから、組み合うパーツには水の世界が描かれていたことが想定できる。

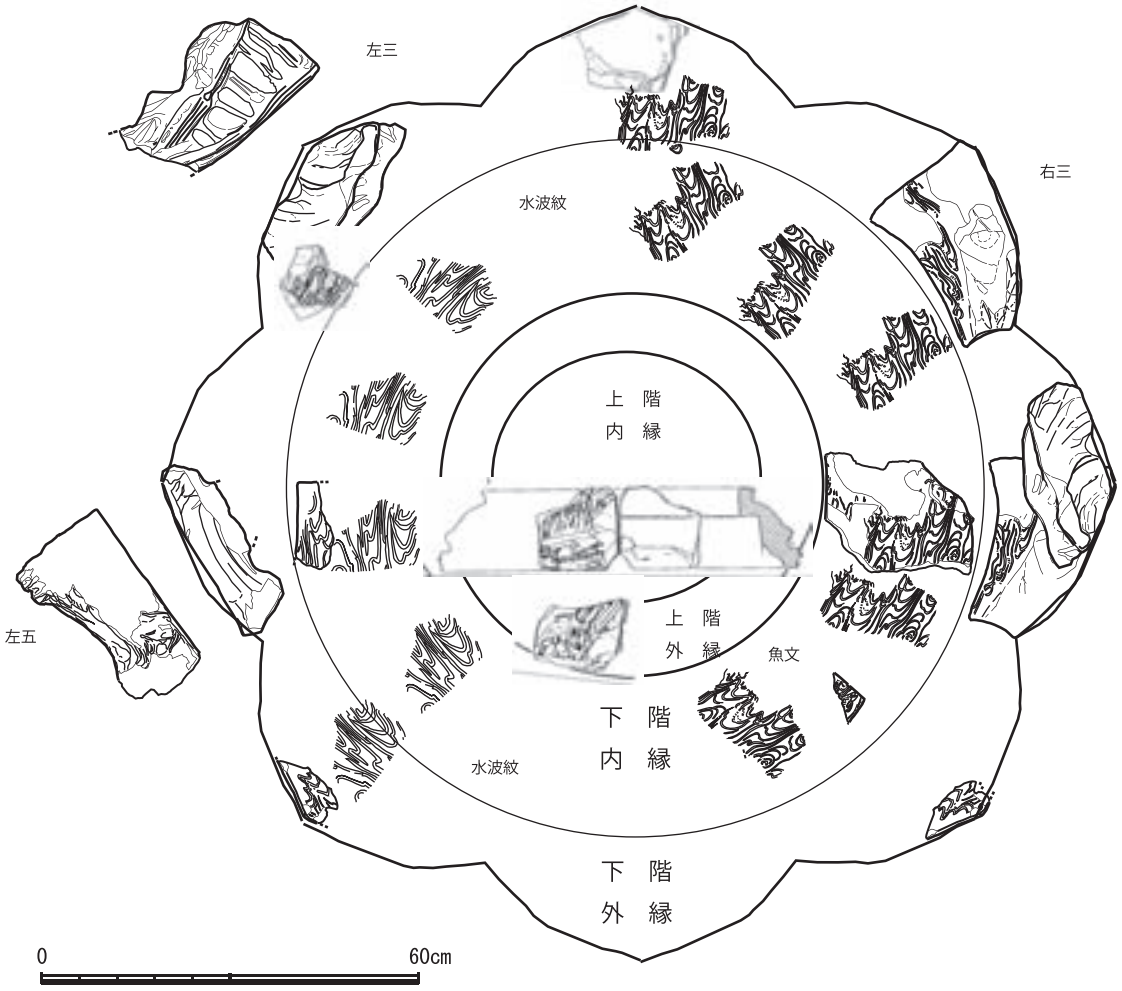
奈良市内出土例[注51] 奈良市埋蔵文化財センターで開催されている「寧楽地寶」と題した展示を見学した。ここでは、彩釉山水陶器が３点展示されており、これらについて紹介する。１点目は東大寺旧境内出土のものである。馬場南遺跡出土例に類するものはない。釉調が薄い緑色、いわゆる鶯色である。外形は半円球形である。胎土は白く、須恵器のようにやや硬く焼き締まっている。２点目は平城京左京一条三坊出土のもので、立体的な外形である。おそらく、山を象っていると思う。胎土は須恵器と同様である。また、釉は施されてはいない。３点目は平城京左京二条四坊出土のもので、小破片であるが、おそらく、「山」の上部に接合するものである。馬場南遺跡出土例に類例がある。釉調は緑色で、胎土は黄土色である。

三重県伊勢寺廃寺出土例(三重県埋蔵文化財センター調査分)[注52] 平成21(2009)年４月30日に、三重県埋蔵文化財センターに出張し、三重県松阪市伊勢寺廃寺出土遺物を見学した。この遺跡で出土した遺物と、馬場南遺跡で出土した彩釉山水陶器が似ているため、実地調査に赴いたのである。あらかじめ用意していただいたのは、松阪市伊勢寺町世古(旧飯南郡伊勢寺村大字北村)に所在する伊勢寺廃寺出土の三彩陶器(彩釉山水陶器)と、墨書土師器皿(「浄□」)、瓦(重弧文軒平瓦)である。瓦は分厚く、地元産であろう。墨書土師器皿は赤色のもので、底部外面に墨書している。奈良あるいは京都産のものより分厚く、地元産であろう。

さて、彩釉山水陶器は２点実見した。彩釉山水陶器Ａは、現存長25cm、器高10cmである。外面は鬼瓦の成形と同様に、粘土塊を巧みに貼り付ける。外周はヘラにより山を造形する。中央部は平坦で、ヘラにより水の流れ(水波紋)を刻んでいる。側面はヘラ削りで、底面には布目圧痕がある。もっとも高い山から徐々に低くなっていくが、途中で山地は剝落している。もっとも高い山の後ろは側面になり、前述した様にヘラ削りを施しているが、切断したように鋭い面である。釉調は高い山が深い緑色で、徐々に明るい緑色に変化している。水波紋の釉はもっとも端が高温で泡が吹いたようである。黄緑色に変色している。ここから水波紋が始まる。山に沿って水は流れている。山はやや内側に屈曲している。全形は端が欠損しており、わからない。

彩釉山水陶器Ｂは、現存長約22cm、幅約14cmである。器高は約７cmである。中央はかつて山が貼付されていたようであるが、剝落している。その幅は約７cmである。剝落した両側には黄緑色の釉が残っている。山は内側に緩やかに屈曲している。内側には水波紋がヘラによって刻まれている。かまぼこ状の外側にはヘラにより数条の刻みが施されているが、崖線あるいは岩面を描いたものか。

おそらく、この２点はかつて一体として理解されていたのではないか。彩釉山水陶器Ａの鋭い



第91図　彩釉山水陶器復原配置図

側面を後面と考え、欠損している方を前面と考えれば、彩釉山水陶器Ｂは、その前面に近いことが、剝落した山地の幅と、内側に水波紋があることから、確認できる。そうすると、時計回りに緩やかに屈曲する山地と内側の水波紋が復原できる。

なお、いずれも胎土の色調は灰白色で、微小な砂を少量含むものの、質は精良である。これは、馬場南遺跡で出土した「左五」と刻書された彩釉山水陶器と、釉調もふくめて極めてよく似ている。同一工房で製作された可能性が高いと考えられる。

(3)彩釉山水陶器の配置復原（第91図）

配置を復原する際のポイントは３点である。ポイント１は「右三」「左五」「東廿一」というように、あらかじめ配置する位置が決められていたということである。ポイント２は上下が決められていて、下面は布目が施され、上面は施釉されていることである。ポイント３は内側は何かに立てかけられるように、屈曲させていることである。この３点に注目して以下のように復原した。

復原のポイント１は「右三」の位置を決めることから始めた。「右三」は図の右側が山で、左側が水をイメージしていると判断し、山を外側に配置した。すると右外形の逆「く」字の屈曲が花紋の先端をイメージしていることがみてとれた。また、内側のカーブは内径を示していると考え、「右三」と同様の大きさのブロックで外周を構成していたと考え、外径約60cmの花葉と推定した。奥側の右３番目に「右三」を配置し、左５番目に「左五」を配置した。魚文や「東廿一」などの水波紋は内周に配置した。また、方形に近い高さのあるブロックは１番奥側に配置した。第１次調査で出土した1223は、ポイント３に注目すれば、内側の屈曲は他のものとは逆であり、また、復原できる径も小さいので、内周を飾っていたと考えた。

この復原の結果、外周は八葉の花紋で、内周は円形であったことが判明した。内周より中央部にかけては15cm程度高くなっており、そこに、仏像などの中心構造物が置かれていたと推定する。

５）万葉歌木簡の検討

今回のように万葉集に収録されている歌が書かれた木簡は、全国で３例ある。１例目は、滋賀県甲賀市史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡）出土の８世紀中頃のもので(注53)、「あさかや」「るやま」の文字から、『万葉集』（巻16、3807番）の「あさかやま」の歌である。これは、『古今和歌集』の仮名序に「この、２つの歌は、和歌の父母であり、初めて和歌を習得するために必ず学ぶものである」と書かれた歌の１つである。すなわち、古代においてもっとも有名な歌であった。

２例目は奈良県石神遺跡出土のも７世紀後半のもので(注54)、これは墨書ではなく、刃物様で刻まれている。『万葉集』（巻16、3807番）の「朝凪に・・・」の14文字が刻まれていた。これは、縦書きで通常とは逆に左から右に歌が書かれていた。

３例目が今回のものである。現存長23.4cm、幅2.4cm、厚さ1.2cmで、途中で欠損している。左側が割れており、字の残り具合から、元は３cm程度あったのではないかと推定している。墨書は「阿支波支乃之多波毛美智(?)」と記されており、『万葉集』巻10、2205番の歌「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」の上11文字に相当することがわかった。詠み人知らずの歌である。なお、現在伝えられている表記は「秋芽子乃下葉赤荒玉乃月乃歴去者風疾鴨」

(西本願寺本)であり、奈良時代の表記が判明した点で、万葉集研究に大きな成果があった。１字違いに『万葉集』巻10、2209番の歌「秋萩の下葉の黄葉(もみち)花に継ぎ時過ぎ行かば後恋ひむかも」がある。だが、９文字目に「の」は木簡にはない。厳密には似通った歌が存在した可能性はある。しかし、『万葉集』に限定すれば、表記のとおりで、2205番の歌と判断した。訳は、「秋萩の下葉が黄葉してしまった。月も経たので、風が激しく吹くのだろうか」というものであろうか。

万葉集には秋萩の歌が100首以上ある。そのなかで、調査地の近くを通りながら詠んだと思われる歌が、『万葉集』巻８に収められている。冬10月17日橘朝臣奈良麻呂の結集せる宴の歌十一首(1581～1591番)がそれである。歌の最後に「以前は、冬十月十七日に、右大臣橘卿の旧宅に集いて宴飲せしなり」との詞書があり、右大臣であった橘諸兄の旧宅で宴を催したことがわかる。この直前には右大臣橘家で宴を催した歌が７首(1574～1580番)収められている。それは天平10(738)年秋８月20日のことだと書かれていて、これら２つの宴の歌は、「秋雑歌」のなかに収められている。1593番の歌が天平11年秋９月なので、もし、記載した順番が時間どおりに配置してあるとすれば、橘朝臣奈良麻呂の結集せる宴は天平10(738)年冬10月17日となる。旧宅とあるので、先に見た右大臣橘家で宴を催した場所とは異なる。

今回の歌も秋の情景を歌ったものであり、これらの歌に通じるものである。これらの歌会の歌をイメージして作られたのかもしれないが、歌が作られた時期より20年以上後に、木簡は埋没している。

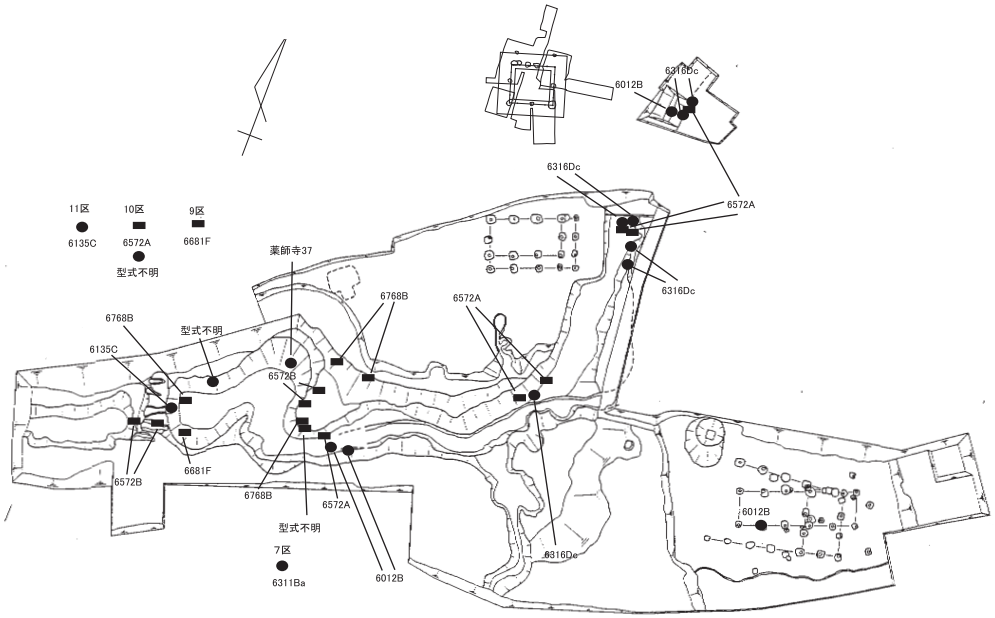
長大な木簡は、私的な歌会よりは公的な歌会で使用された可能性が高い。今回の木簡は欠損しているが、和歌を全て１行に書いていたとすれば、全長約60cmで２尺ほどの長大な木簡となる。これは栄原永遠男氏が提唱されている歌木簡の範疇に入る[注55]。歌木簡とは儀式や宴会に赴くときに、あらかじめ歌を木簡に書いて持っていったと考えるものである。歌木簡の用語を最初に使った犬養隆氏は、「典礼の席上で明示する配慮からか、長さ２尺の材に、万葉仮名で表面のみに大きく１行書きした」ものと規定されている[注56]。馬場南遺跡のものは「皇族か高級貴族が主催した準公式的な行事で使われたと推測」されており、「公的な席でうたうことを目的とするときは(中略)歌句の万葉仮名は直線的な書体で書かれたと考えられ」ている。

これらの説に従えば、灯明皿を多量に使用した法会で歌われたのかもしれない。犬養氏も引くように[注57]、『万葉集』巻８、1594番の歌「しぐれの雨間なくな降りそ紅ににほへる山の散らまく惜しも」は「仏教唱歌」という題であり、左注に(光明)皇后主催の維摩講の最終日に雅楽演奏の後この歌を琴の伴奏で合唱したとある。実際に使用したかは不明であるが、楽器である腰鼓(鼓胴)が今回出土していることは示唆的である。

６)瓦の検討[注58]

瓦塼類は、第１期の遺構である川跡ＳＲ01、ＳＲ01を新たに開削した第２期の遺構である溝ＳＤ2002から多く出土している。

次に軒瓦の出土状況をみると、大部分がＳＲ01もしくはＳＤ2002から出土している。その中でもＳＲ01の南岸に比較的集中しており、ＳＲ01より南に何らかの建物跡があったことが考えられ



第92図　軒瓦出土分布状況

る。それ以外の出土遺構としては掘立柱建物跡ＳＢ03の柱穴ＳＰ2031の掘形から、重圏紋軒丸瓦が１点出土している。この瓦に関しては小片で摩滅が著しいため詳細は不明である。堤ＳＸ2053の断ち割りからは小片のため型式不明であるが、軒丸瓦が１点出土している。

井戸ＳＥ01では、井戸としての機能が停止したのち、その埋土、井戸枠上面から6136型式の軒丸瓦が出土している。

磚はＳＲ01、溝ＳＤ2002から出土している。その中でもＳＲ01の４・５区から多く出土している。

今回出土した軒瓦は、細片のため型式が不明なものを除くとすべて平城宮式である。これらを平城宮内・京内から出土する資料と比較すると以下の４群に分かれる。

①　中山瓦窯産の6311Aa・6308C型式

②　平城宮の東方官衙で主に出土する6012B・6135C・6572A型式

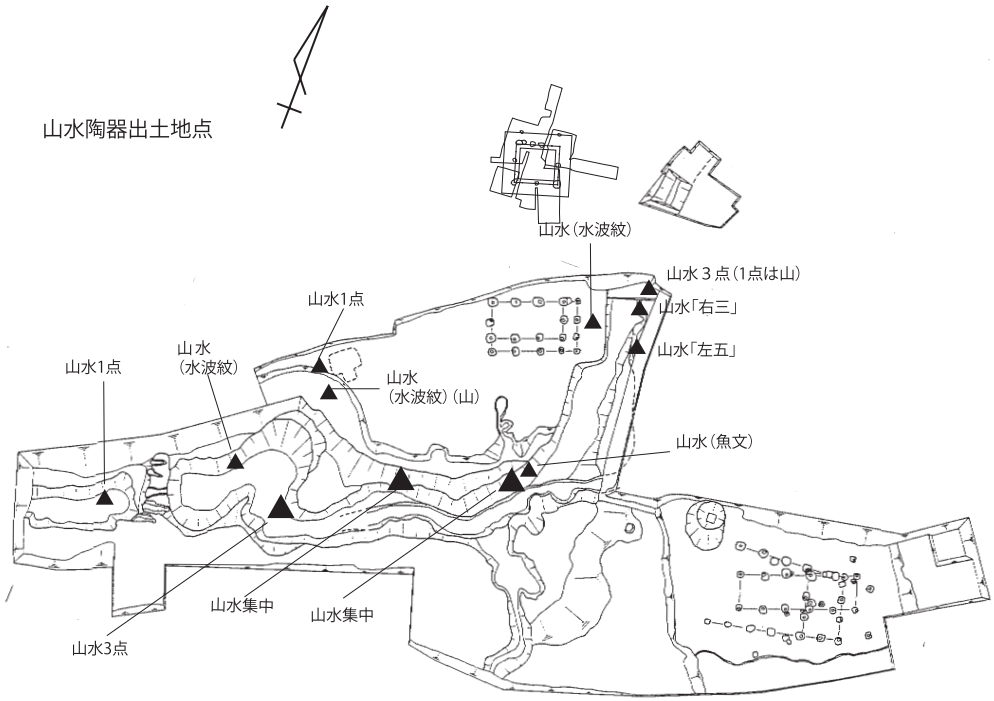
③　平城宮であまり出土が見られない6572G・6681F型式

④　①～③に比べ時期の下る6316Dc・6768D型式、薬師寺の瓦

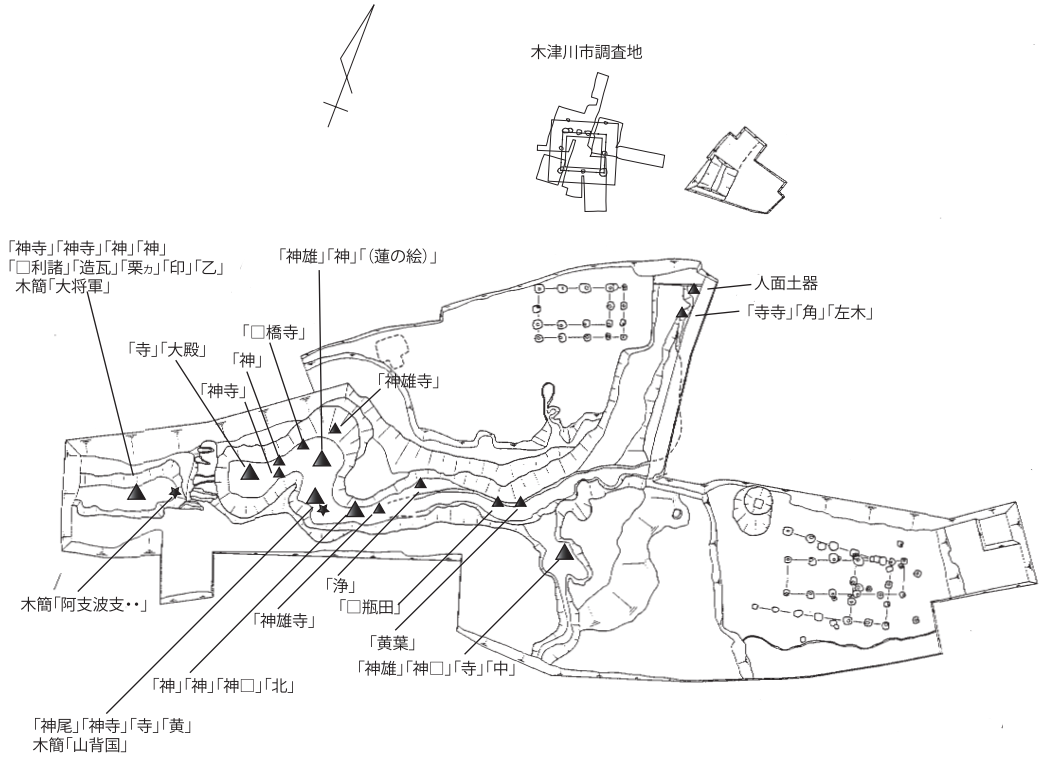
上述した４群の軒瓦の時期については、これまでの平城宮・京の調査成果による平城宮瓦編年では、6311B・6308C・6012B・6135C・6572A・6572G・6681F型式はⅡ期、6316Dc・6768D型式はⅣ期とされている。

馬場南遺跡は平城京と平城山丘陵を隔てた場所に位置しており、官窯である中山瓦窯産との同笵瓦や東方官衙地域から出土する瓦との同笵瓦が出土していることから、この遺跡の造営に国が何らかの形で関与した可能性があることが想像できる。

①～③グループの瓦を平城京内での出土場所をみると、6311A・6012B・6038C・6135C・6572Aが、平城京内の旧長屋王邸から出土している。但し、長屋王段階ではなく、730～740年頃



第93図　彩釉山水陶器出土分布状況



第94図　墨書土器出土分布状況

の皇后宮職段階に使用されている。

南山城地域の他の遺跡との関係をみると、②グループの瓦が恭仁宮・樋ノ口遺跡・上津遺跡で出土している。恭仁宮は都城、樋ノ口遺跡は寺との説もあるが、離宮である可能性が高い遺跡であり、上津遺跡は平城京のための津である泉津の一部である。しかし、南山城地域の寺院との関

連は瓦からは見られない。

（丸山香代）

７）遺跡の広がりと遺構の変遷

(1)遺跡の広がり

当調査研究センターと木津川市教育委員会とのそれぞれ２次に亘る調査成果（合計４次）をもとに、遺跡の広がりについて説明する。

遺跡の南端は谷の中で収まる。南丘陵上には古代の遺跡はない。さらに、南の井関川が開析した谷にも遺構はなく、ただ砂質土のみ広がっていた。平成20年度調査地のある谷は東北部で、ふたつの小さな谷に分かれる。いずれも地形は高くなっている。東方に延びる谷（平坦面２）の途中に掘立柱建物跡ＳＢ02がある。これより東側50mまでは、古代の遺構は検出していない。

遺跡の北端は小さな北側の谷の奥まで延びることが判明した。平成21年度の木津川市教育委員会の試掘調査（第３次調査）では、川跡ＳＲ01の水源地近くで、水の祭祀を行った場所が確認されている。また、丘陵内にも遺構は点在するようである。平成20年度の木津川市教育委員会の試掘調査では、掘立柱建物跡ＳＢ01（平坦面１）の北約10mで、小さな礎石建物（ＳＢ0301）が確認された。同様な建物が丘陵内に点在している可能性があり、今後の調査が期待される。二つの小さな谷に挟まれた丘陵で行われた平成20年度の木津川市教育委員会の試掘調査では、遺構は確認されなかったので、遺跡はこの部分には及んでいないようである。

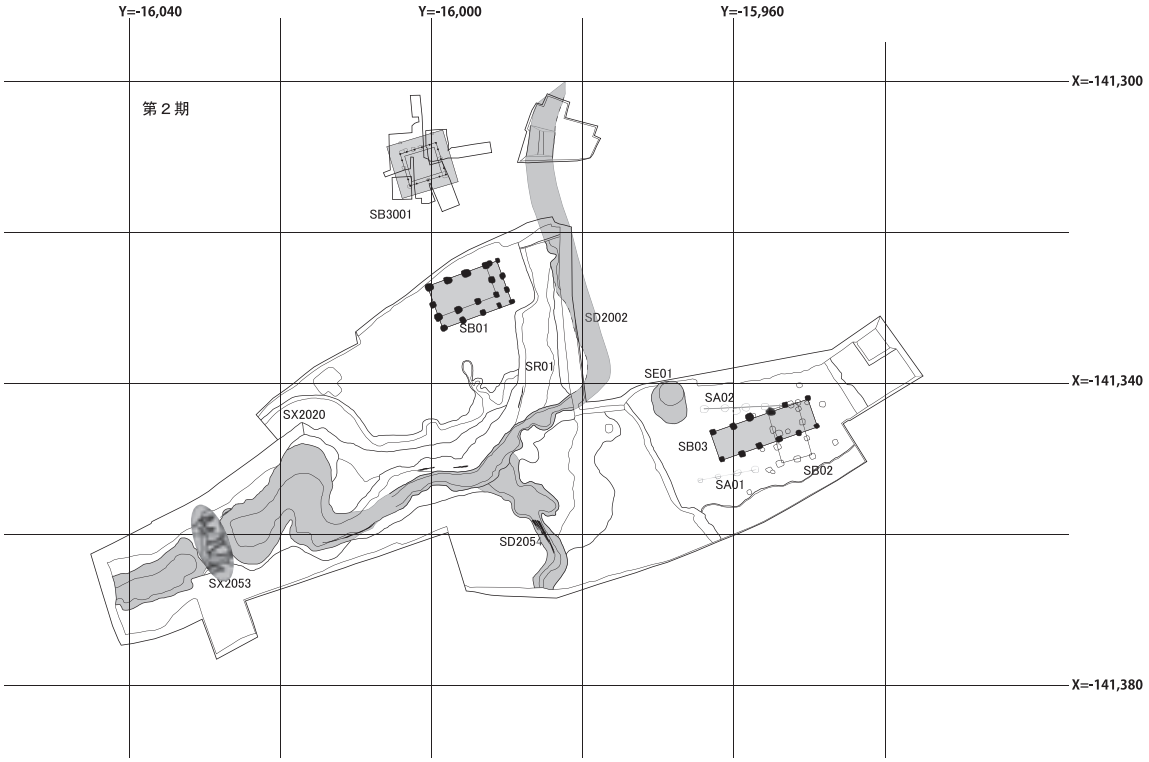
遺跡の西端は、調査地内では確認できなかった。トレンチの西端までＳＲ01はあり、遺物の出土状況からいえば、さらに西に広がることが考えられる。なお、トレンチ西端で遺物はＳＲ01の南側から投棄されたような状態で出土しており、川の南方に生活場所が想定できるが、第１次調査では確認できなかった。谷部が耕作地に転換した際に、削平されたのかも知れない。

(2)遺構の変遷

検出遺構は重複関係があり、２時期に分かれる。第１期の遺構は、掘立柱建物跡ＳＢ01・ＳＢ02・川跡ＳＲ01・溝ＳＤ2054である。また、木津川市教育委員会の礎石建物（ＳＢ0301）もこの時期と考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ01と礎石建物ＳＢ0301は南北に並んで建てられている。礎石建物の中には塑像の四天王が安置されていた。建物の中央には深い穴があけられており、そこに本尊が安置されていたと考えられている。当調査研究センター調査地で出土した彩釉山水陶器を安置していたのではないかとの考えもある。しかし、第３次調査では礎石建物周辺から彩釉山水陶器は１点も出土していない。また、礎石建物周辺の調査では火災によって焼け落ちた状況であったが、彩釉山水陶器は焼けた痕跡はない。礎石建物を第１期としたのは、出土した瓦が平城宮瓦編年の第Ⅱ期が中心で、馬場南遺跡出土の瓦の中で、もっとも古い様相を示しているからである。一方、掘立柱建物跡ＳＢ01はほとんどの柱が立ち腐れの状況であり、第２期にまで機能していたことは確実である。このＳＢ01を第１期としたのは、第１期にともなう川跡ＳＲ01が建物の方向と同じであることによる。そして、礎石建物とＳＢ01は同一方位で一直線に並んでいる。つまり、２つの建

第95図　馬場南遺跡第１期遺構平面図



第96図　馬場南遺跡第２期遺構平面図

物と川は計画的に配置され、２つの建物の位置関係から本堂と礼堂という使い方がなされたと推測できる。なお、ＳＢ01の北東隅の柱のみが抜き取られ、そこに瓦片などが埋没していたが、時期を判定できるものはなかった。

川跡ＳＲ01の西部には堤ＳＸ2053を設け、樋を設置し、水の調節をしていた。堤のすぐ東側で川は大きく屈曲しており、堤の存在によって、水が溜まれば曲水様の池が出現する。ただし、この堤は一部断ち割りをおこなったのみで、下部まで調査を実施していないため、第１期に堤と樋があったどうかは確認できていない。

東部の平坦面（標高約51m）に掘立柱建物跡ＳＢ02がある。掘立柱建物跡ＳＢ03とは重複関係があり、柱穴の切り合い関係からＳＢ02が古いこと、ＳＢ02の建物方向も上述した２つの建物と同じ方位であることから、第１期の遺構である可能性が高い。

掘立柱建物ＳＢ02の北西に近接して井戸跡ＳＥ01があるが、遺物はほとんど出土していない。かろうじて、井戸が廃絶した段階に埋没した三彩壺があることから、第２期に廃絶したと考えられる。水の必要性から、可能性として第１期に置いておく。

平坦面１で燃灯供養のような法会が行われた。使用された4000点におよぶ灯明皿はＳＲ01の北岸に廃棄されている。また、瓦や煮炊具の出土分布からトレンチの南西方向に建物があったようだが、後世に削平されたと考えられる。平坦面２ではほとんど遺物は出土せず、生活に密着した施設ではなかったと考えられる。

第２期の遺構は掘立柱建物跡ＳＢ01、掘立柱建物跡ＳＢ03、井戸跡ＳＥ01と溝ＳＤ2002である。平坦面２ではほとんど遺物は出土せず、生活に密着した施設ではなかったと考えられる。溝ＳＤ2002北東部と南東部で約1000点の灯明皿が出土した。この時期も法会が行われたと考えられる。段状遺構ＳＸ2002はこの時期には存在したようである。第２期終了に伴う三彩や彩釉山水陶器の廃棄は、平坦面１から南部と東部に放射状に行われている。したがって、掘立柱建物跡ＳＢ01にこのような遺物を保管していたと考えられる。

（伊野近富）

10. まとめ

今回の発掘成果について列挙する。

①第１期の状況は建物が点在しており、国衙や郡衙などにみられる「コ」の字形に配置された整然としたものではない。また、寺院にみられる塔や金堂の配置もみられない。建物の位置関係から一段高いところにある礎石建物跡ＳＢ0301が本堂で、その前面にある掘立柱建物跡ＳＢ01が礼堂とみる考えがある。この場合、最初から寺院として機能していたと想定することも考えられるが、離宮や貴族の別荘の中には仏堂が付設されている例がある[注59]ことから、仮設の施設（離宮や貴族の別荘）を想定したほうが妥当と考える。礎石建物から奈良時代前半の瓦で飾った須弥壇と、その周囲に安置されていただろう四天王の塑像片や塼仏が出土した。小さな建物内に所狭しと四天王像などが配置された姿は簡便な仏堂こそふさわしい。

なお、出土遺物の中に小さな巻斗（838）がある。これは、小塔か厨子の一部に使用された建築部材である。外面が焼けた厨子と判断される扉（1276）が出土しているので、現状では、礎石建物の中の厨子に使用されたと考えるのが妥当である。また、相輪状の土製品も出土した。堺市大野

寺土塔[注60]などに類例があるが、どの場所で使用されたかについては不明である。

瓦は軒丸・軒平が20点出土した。いずれも平城宮式で、しかも同笵瓦である。時期は平城宮瓦編年のⅡ-２期（19点）に集中する。瓦は平城宮へ供給する官営工房で製作されたものである。馬場南遺跡と同笵瓦は平城宮や皇后宮職（旧長屋王邸）で出土している。想定されている年代は730～745年だが、更に絞ると恭仁宮の瓦が出土していないことから恭仁宮造営以前であろう。この時期の瓦は平城宮のために作られたものだが、京内でも出土している。その中でも、平城宮式軒丸瓦6012Ｂ型式など17点は皇后宮職（元長屋王邸）の段階[注61]に相当するのである。なお、馬場南遺跡においてこの瓦を葺いた建物は不明である。瓦を使用したと想定できる建物は礎石建物跡ＳＢ0301の仏堂１か所だけである。そこに葺かれていた可能性はあるが、ＳＢ0301は焼土とともに焼けた塑像片や瓦が出土したことから焼失したようであるが、センター調査地から出土した瓦は焼けていない。瓦は掘立柱建物跡ＳＢ01周辺のＳＤ2002から出土しており、棟の一部にだけ葺かれていたのかもしれない。

②第１期の後半に多量の灯明皿を使用した儀式がおこなわれたと想定できる。この灯明皿の中に「浄」という墨書が出土している。この事実に符合する可能性がある記録が『続日本紀』天平17（745）年９月19日条に、「天皇不予。京・畿内の諸寺および諸名山浄処で薬師悔過をおこなう」とある。聖武天皇の体調がすぐれないため、各所で薬師経を読経する法要を行ったとの記事である。この行事に多くの灯明皿が使用されたことは、想像に難くない。時期や水辺の祭祀が行われていた浄処というこの立地からすれば、この記事に対応する可能性がある。また、『続日本紀』天平18（746）年10月条で「天皇、金鐘寺に行幸し、大仏の前後で燈１万５千７百余を燃やす」という燃灯供養ということがおこなわれた。このような多量の灯明皿を使用する行事も注目される。

③出土した緑釉陶器や三彩陶器・彩釉山水陶器[注62]の質・量は全国でも屈指のものである。特に、彩釉山水陶器の出土例は平城京内の大寺院がほとんどで、国家あるいは貴族の持ち物であったことが想像できる。馬場南遺跡出土の彩釉山水陶器は、奈良時代中葉の東大寺二月堂仏餉屋出土例と似ており、時期は８世紀中葉と考えられる。これ以外の緑釉陶器・三彩陶器の製品がこの時期に伴うものであるかどうかは不明であるが、ほとんどの遺物は第２期に埋没しており、これらの製品は第１期から第２期を通じて使用されたと思われる。

なお、この彩釉山水陶器の使用方法について、上原真人氏は灌仏調度説を出されている[注63]。掘立柱建物跡ＳＢ01に彩釉山水陶器が保管され、使用するに際しては、その中心に仏像が置かれたというものである。その根拠としては、礎石建物跡からは１点も彩釉山水陶器は出土していないことから、礎石建物内には置かれていなかったと考えられること、掘立柱建物跡ＳＢ01には南廂と東廂があるが、廂の位置からすれば西廂のない異様な建物となることから、通常は東廂の場所に彩釉山水陶器が保管されたと考えた。そして、灌仏会の時に使用するにあたっては広場に安置して法要を行ったとする意見である。

④この遺跡の成立時期には聖武天皇や光明皇后を筆頭に、当時活躍した橘諸兄（約10年間にわたって１人だけで大臣を務めた）や橘奈良麻呂、藤原武智麻呂・房前・宇合・麻呂の四家が歴史

舞台に登場する。

墨書土器に「大殿」がある。この用語は大きな建物という意味から転じて、それらを使用する天皇や大臣クラスの人物を指す(注64)もので、これらの人物と深く関係していた可能性が考えられる。残念ながらこの墨書土器は第２期の段階に埋没していたが、土器の製作技法・調整は古い傾向のもので、第１期の段階にさかのぼる可能性があるものである。

⑤第２期には「神雄寺」「神尾」との墨書土器が出土したことから、このように呼ばれた寺が存在したことがほぼ確実である。しかし、奈良時代の文献には記載が無く、新発見の寺である。「神」という字がつけられていることから、神仏習合の寺であったことがわかる。また、第１次調査で「山寺」との墨書土器が出土しており、山林寺院としての景観を有していたようである。

⑥万葉集に収録された歌が書かれた木簡が出土したことは、万葉研究にとって大きな成果となった。今回出土した歌は、現在知られている歌とは異なり、万葉仮名で１字１音で書かれている。万葉集の写本の比較検討から、「赤」１文字が「もみち」と読まれていたことも確認できた。これは、オリジナルの歌がどのような過程で万葉集に収録されたのかを考える上で、重要な資料となる。

さらに、馬場南遺跡では、「本堂」と「礼堂」があり、その前面に広場があり、その広場で燃燈供養を行ったと復原できる。こういった遺跡で万葉木簡が出土したことを重視すれば、あるいはこの地で歌会がおこなわれたことが窺われる。そして、木簡自体も、歌１首が１行に書かれていたとすれば、全長60cmを超える長大な木簡であったと復原できる。犬養隆氏・栄原永遠男氏は、このような大きな木簡が記録用として用いられたとは考えにくい点から、歌会用に作成された可能性を指摘されている(注65)。くわえて、須恵器腰鼓という楽器が出土しているこから、この地でおこなわれた法要が、歌会を伴うものであった可能性がある。

⑦第２期に新しく溝ＳＤ2002が掘られ、２か所で多量の灯明皿が確認できることから、第２期にも法会のあったことがわかる。なお、墨書土器に「悔過」がある。法会の存在を肯定する資料である。

⑧第２期の瓦は平城宮式で、しかも同笵瓦である。平城京での同笵瓦の出土例をみると、法華寺阿弥陀浄土院がほとんどである。阿弥陀浄土院は光明皇太后が発願した寺で、760年ごろに比定されている。したがって、第２期の始まりはこの頃に求めることができる。

なお、この時期は757年に橘諸兄が死去し、奈良麻呂が乱を起こした後である。橘氏は没落していたと考えるのが自然であり、仮に馬場南遺跡が橘氏と深い関係があったと仮定すれば、藤原氏などがこの時期の馬場南遺跡の経営者であった可能性が考えられるが、これを裏付ける資料はない。ただ、橘奈良麻呂の息子である清友は平安時代初期に木津の山に葬られており（加世山墓）、平安時代になっても、橘氏は南山城に影響力があったようである。

⑨第２期の終わりは、出土遺物から長岡京期である。最後に近い段階に薬師寺の瓦が使用されている。この関係も不明である。遺跡の終わりが長岡京期であることは、都が平城京から長岡京に移ったことが影響しているものと考えられる。

以上のように、今回の馬場南遺跡の発掘成果は一地域の歴史を解き明かすだけではなく、奈良時代の政治、あるいは文化を推進した人々の歴史を呼び起こす契機となる遺跡であり、この報告がその一助となれば幸いである。

（伊野近富）

（２）木津城山遺跡第６次・木津城跡第１次

１．遺跡の立地

木津城山遺跡・木津城跡は、旧木津町東部の丘陵上に所在する（第１図）。木津城山遺跡は、標高106mを最高点とする丘陵上に広がる弥生時代後期の高地性集落である。また、この最高所に木津城跡が築造されている。遺跡の西側に広がる平野部の標高は35m前後なので、木津城山遺跡との比高差は60～70mを測る。木津城山遺跡の立地する丘陵は南北に細長く、また、主尾根から幅の狭い支尾根が周囲に延びる。周辺では最も高い所に立地し、旧木津町の平野部はもちろん、天候がよければ京都盆地の北端、愛宕山を望むこともできる。

２．調査に至る経過

木津城山遺跡は、遺跡の南半部を主な対象として、平成９年度から平成13年度にかけて、住宅地への上水道の供給を目的とした配水池の建設が計画されたことから、発掘調査を実施した（第１～５次調査）。調査の結果、弥生時代後期前半の高地性集落であることが明らかになった。今回は、遺跡の西側から北側にかけての開発が計画されたことから発掘調査に至ったものである。木津城山遺跡の調査としては第６次調査に当たる。

また、木津城跡は、丘陵の最高所に位置する中世の城郭遺構で、遺存状態が良好なことから公園緑地帯として保存されることになっていた。しかし、今回、上記の開発に城郭遺構の一部がかかるため、発掘調査に至ったものである。木津城跡の調査は今回がはじめてである。

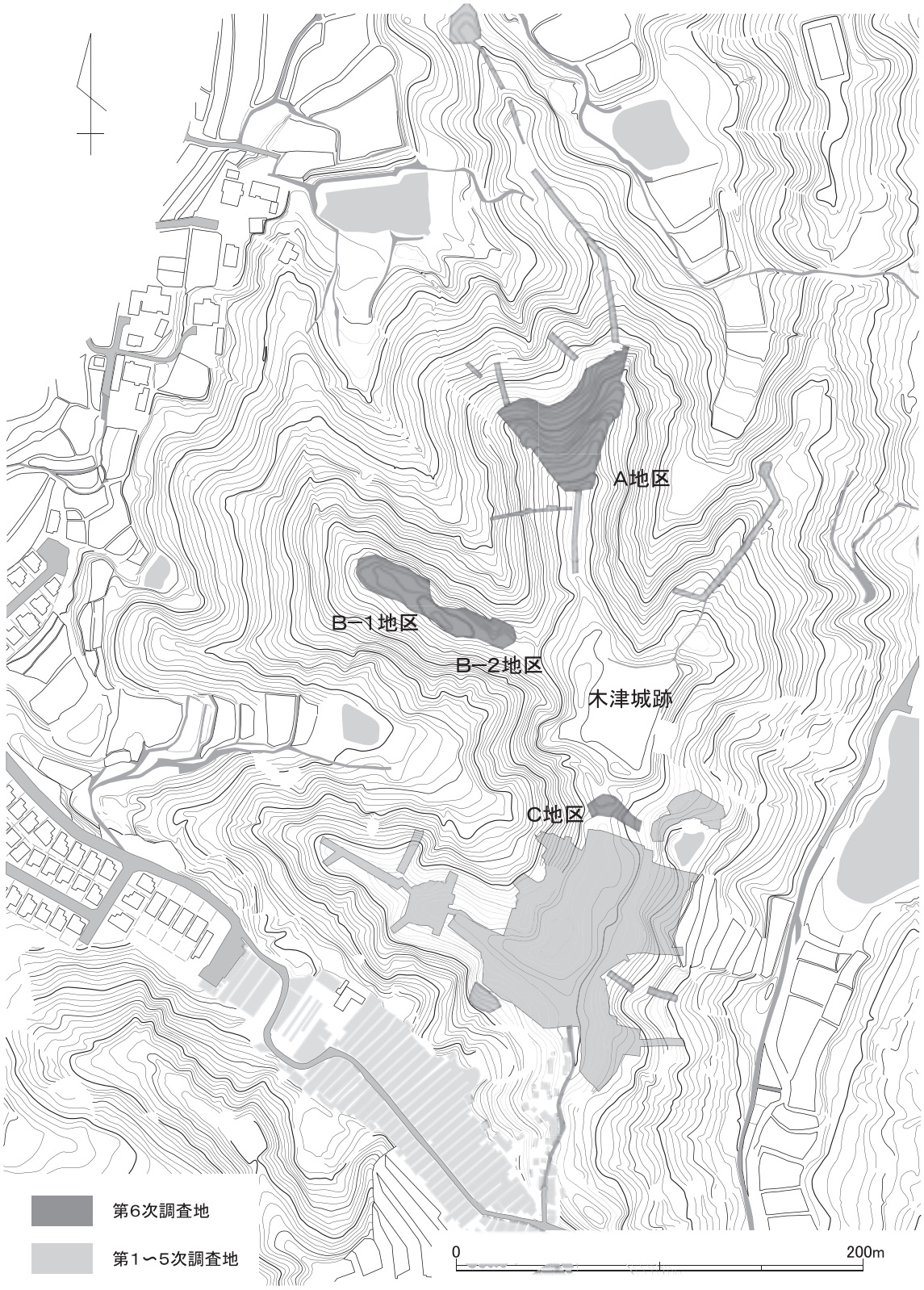
今回の調査では、木津城山遺跡の北西部に位置する尾根上と北半部の尾根・斜面の２か所（Ａ地区・Ｂ－１地区）、並びに木津城跡の南端と西端に当たる２地区（Ｂ－２地区・Ｃ地区）の、合計４地区について調査を実施した。

３．これまでの調査

木津城山遺跡は上述のように平成９年度から平成13年度にかけて調査を実施した。その調査成果について概観する（第97図）。

平成９年度は、木津城跡に関連する遺構が周囲の丘陵部に存在するかどうかを確認することを目的として調査を実施した（第１次調査）。しかし、木津城跡関連の遺構は検出されず、弥生時代後期の遺構・遺物を広い範囲で確認した。この調査成果を受けて、木津城跡から南に延びる主尾根の東側斜面の調査を実施した。平成10年度は、前年度調査地の周囲の調査を実施した（第２次調査）。

平成11年度は、これまでの調査の結果、遺跡の範囲が広がることが予想されたため、範囲確認を目的とした調査を実施した（第３次調査）。この調査の成果を受けて、平成12・13年度の調査を実施した。平成12年度は南側の主尾根の東側斜面の調査（第４次調査）を、平成13年度は南側の主



第97図　木津城山遺跡地形測量図および調査区配置図

尾根の西側斜面および西へ延びる支尾根の南側斜面の調査を実施した（第５次調査）。

以上の５か年に及ぶ調査で、約10,400㎡の調査を実施し、竪穴式住居跡39基、段状遺構19基、平坦面４か所、溝２条などを検出した。また、出土した遺物は整理箱で約80箱に達した（報告整理後）。以上の調査成果については、『京都府遺跡調査報告書　木津城山遺跡』第32冊として、平成15年３月に刊行している。

４．調査の経過

第６次調査は、まず、Ｃ地区から開始し、Ｂ－１地区、Ａ地区、Ｂ－２地区の順に着手した。各地区の調査経過は以下の通りである。

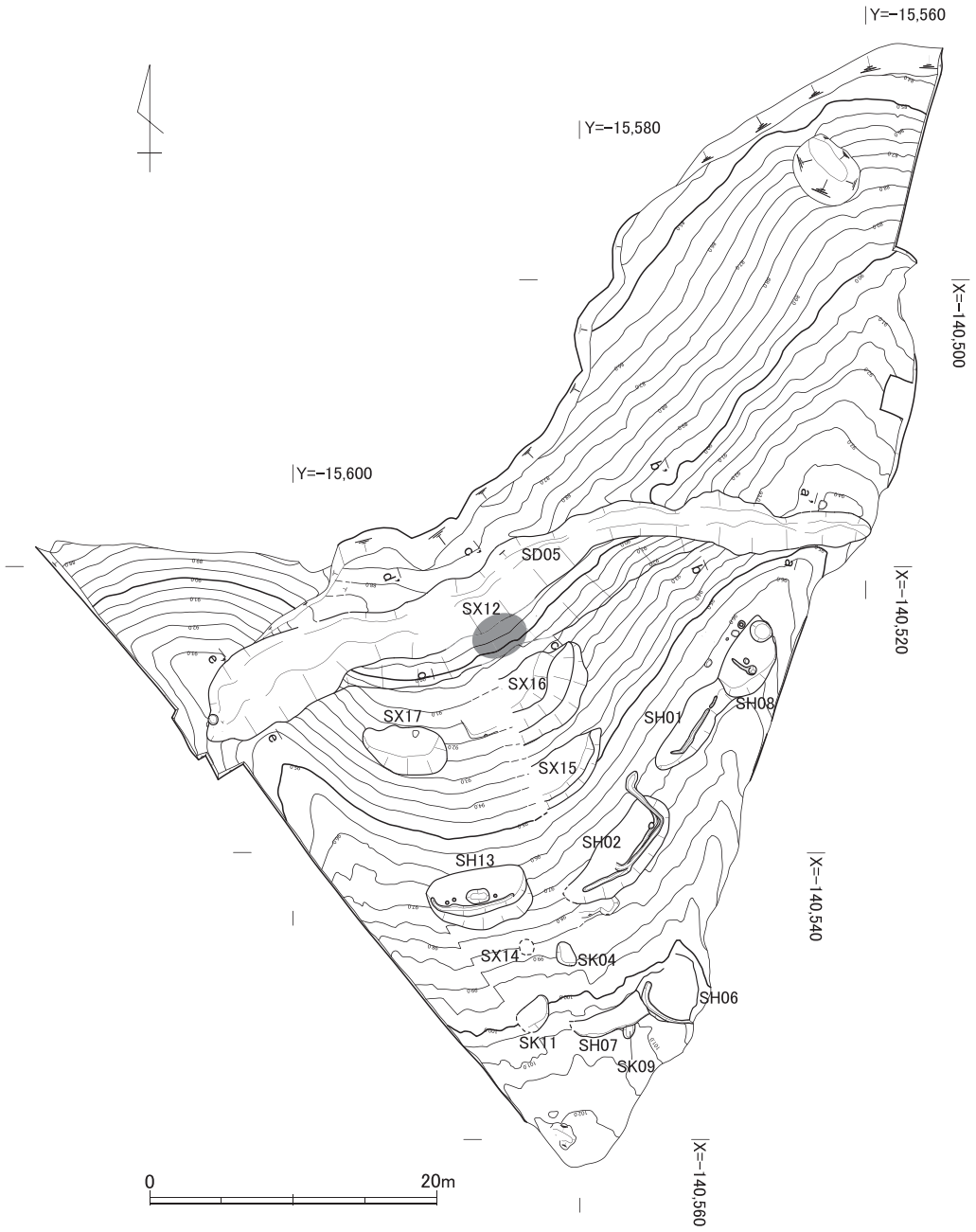
１）Ｃ地区の調査　第５次調査までに調査を終えた地区の造成工事に関連して、その隣接部分の調査をC地区として実施した。調査地区は木津城跡の南端に当たり、現状においても堀状遺構が確認できる地区である。調査は平成20年５月１日に樹木の伐採と調査区の設定を行い、開始した。調査は表土を人力で掘削し、遺構の検出に努めた。その結果、木津城跡に伴うと判断される堀割を１条検出した。後述するＢ－１地区と併行して調査を実施し、８月26日にラジコンヘリコプターによる空中写真の撮影を行い、８月28日をもって調査を終えた。Ｃ地区の調査面積は300㎡である。Ｃ地区において出土した遺物は少なく、整理箱でわずか１箱であった。

２）Ｂ－１地区の調査　Ｃ地区の調査に引き続いて木津城跡から北西に延びる支尾根の調査をＢ－１地区として実施した。Ｂ地区は、木津城山遺跡に関連する墓域が確認されていたＢ－１地区と、木津城跡に伴う堀状の痕跡が確認されているＢ－２地区に分かれる。なお、調査にあたっては、調査地の西側に住宅地があり、急峻な斜面に排土をおくことが困難であったため、調査地内で排土置き場を確保することになった。そのため、調査はまずＢ－１地区から実施し、Ｂ－２地区を排土置き場とし、その排土を反転してＢ－２地区の調査を実施することとした。調査は６月23日から人力による表土掘削を開始し、その後、遺構の検出に努めた。その結果、第１次調査で確認していたものも含めて、弥生時代後期前半の台状墓３基と埋葬施設14基を検出した。なお、第１次調査で平面形だけを確認していた遺構（ＳＸ12～14）は、今回の調査で埋葬施設等の遺構ではなく、地山上における土色の変化であることを確認した。８月26日にラジコンヘリコプターによる空中写真の撮影を行った。また、当該期としては調査例の少ない墓域の調査であったことから、10月16日には現地説明会を実施し、約70名の参加があった。その後も埋葬施設の完掘などの作業を行い、10月30日をもって調査を終了した。Ｂ－１地区の調査面積は900㎡である。Ｂ－１地区で出土した遺物は台状墓の周囲から出土したものを中心に整理箱で６箱であった。

３）Ａ地区の調査　Ｂ－１地区の調査がおおむね終了を迎えた段階で、木津城山遺跡の立地する丘陵の北斜面に当たる地区をＡ地区として調査に着手した。Ａ地区は、第３次調査で遺構の存在が確認されていた。調査は10月10日より重機による表土掘削を開始し、その後人力による遺構の検出作業を行った。調査の結果、竪穴式住居跡や段状遺構、大溝などを検出した。12月17日と平成21年２月12日の２回に分けてラジコンヘリコプターによる空中写真の撮影を行った。翌２月13

日には現地説明会を実施し、約90名の参加があった。その後も遺構の完掘などの作業を行い、平成21年２月28日をもってすべての調査を終了した。Ａ地区の調査面積は2,500㎡である。Ａ地区では、竪穴式住居跡や段状遺構、大溝、遺物包含層などから大量の遺物が出土しており、整理箱で22箱であった。

４）Ｂ－２地区の調査　Ｂ－２地区は、先述のようにＢ－１地区の掘削で生じた排土置き場としていたが、Ｂ－１地区の現地説明会後から、順次遺構の埋め戻しと排土の移動を開始した。排土の



第98図　Ａ地区遺構配置図

移動が終了した11月11日以降、人力による表土掘削を開始し、遺構の検出に努めた。その結果、C地区と同様に木津城跡に伴うと判断される堀割を１条検出した。Ａ地区と併行して調査を実施し、12月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真の撮影を行い、Ｃ地区と合わせて現地説明会を２月13日に実施して公開し、２月28日をもって調査を終えた。Ｂ－２地区の調査面積は300㎡である。Ｂ－２地区も、Ｃ地区と同様に出土した遺物はほとんどなく、整理箱で１箱に満たない程度であった。

５．木津城山遺跡の調査

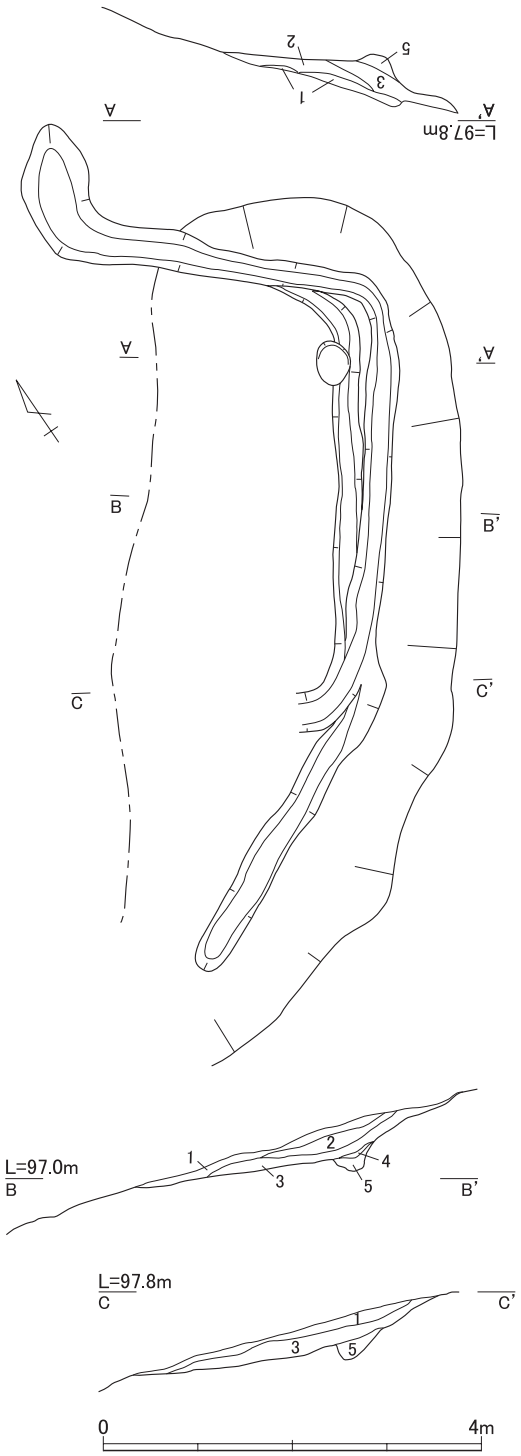
１）検出遺構

(1) Ａ地区の調査

Ａ地区は、木津城山遺跡の所在する丘陵の最高所から北へ延びる尾根が、「Ｙ」字状に広がった尾根頂部とその間の斜面に当たる。第３次調査の試掘調査で、竪穴式住居跡や土器供献遺構、土器溜まりなどを検出した。今回の調査では、調査区が急峻な斜面に位置することや、斜面下方に住宅地が広がることから、濁水と土砂の流出に対する安全対策工事を実施した上で、調査を実施した。調査の結果、竪穴式住居跡６基、段状遺構３基、大溝１条、土坑３基などを検出した。いずれの遺構からも少なからずの土器が出土したが、いずれも弥生時代後期に位置づけられるものである。

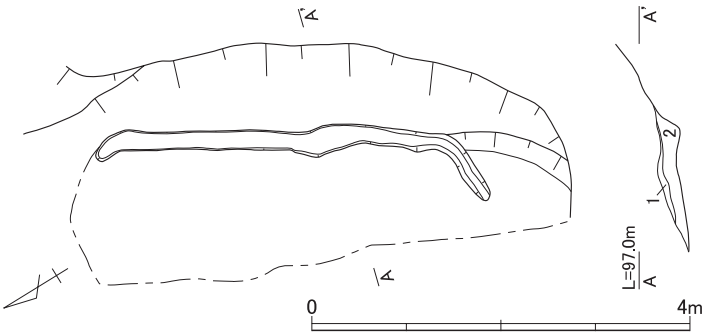
竪穴式住居跡ＳＨ01（第100図）　調査区の南東部、標高96.5m付近で検出した。周壁溝と床面の一部を検出したが、主柱穴等は確認できなかった。長辺の検出長5.3m、短辺の検出長2.1m、深さは最大で0.2mを測る。幅20cm前後、深さ25cm前後、総延長4.5mの周壁溝を検出した。出土遺物としては高杯の破片などがある（第116図１・２）。

竪穴式住居跡ＳＨ02（第99図）　調査区の南東部、竪穴式住居跡ＳＨ01の南西側に位置し、標高97.0m付近で検出した。周壁溝と床面の一部を検出した。周壁溝は丘陵の高い側で２条巡っており、



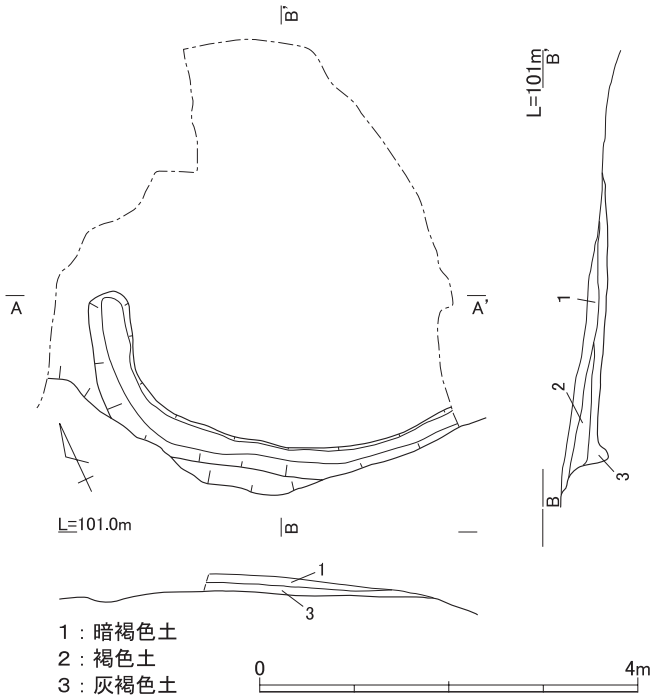
１：灰褐色砂質土（汚い）
２：黄褐色礫混砂質土（直径1～2cmの礫）
３：灰黄色礫混砂質土（直径1～3cmの礫）
４：淡桃色礫混土（直径1cmの礫）
５：淡灰色砂質土　：周溝埋土

第99図　竪穴式住居跡ＳＨ02実測図

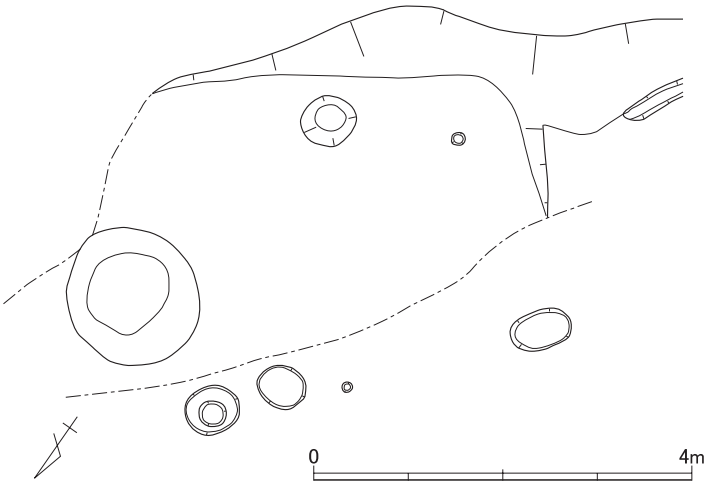


1：黄灰褐色砂質土（上が黒ずむ、締りがない）
2：淡黄灰褐色砂質土（締りがない）

第100図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図



第101図　竪穴式住居跡ＳＨ06実測図



第102図　竪穴式住居跡ＳＨ08実測図

切り合いが確認できることから住居等の建て替えがあったと考えられる。ただし、主柱穴等は確認できなかった。長辺の検出長8.9m、短辺の検出長2.8m、深さは最大で0.4mを測る。新しい方の周壁溝は、幅30cm前後、深さ14cm前後、総延長9.0mを測る。古い方の周壁溝は、幅25cm前後、深さ10cm前後、総延長7.8mを測る。出土遺物としては広口壺・長頸壺・高杯・鉢などがある（第116図５～14）。

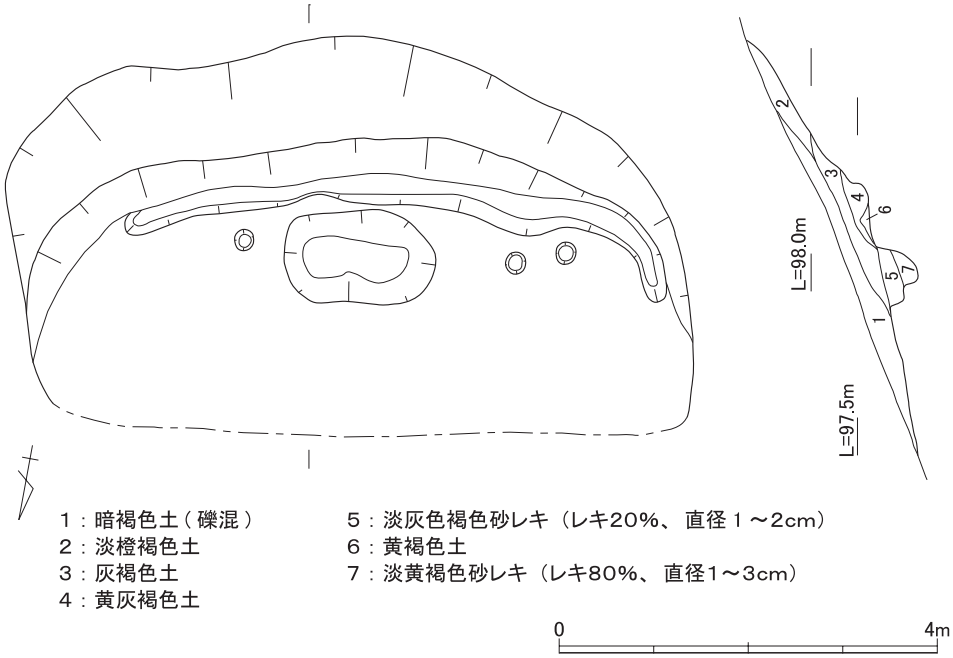
竪穴式住居跡ＳＨ06（第101図）

調査区の南端、標高100m付近で検出した。第３次調査で一部を検出していた住居跡である（第３次調査の遺構番号もＳＨ06）。周壁溝の一部と床面を検出したが、周壁と周壁溝の大半はすでに削平されて残存しなかった。残存する床面上に主柱穴は確認できない。周壁溝から復原すると、直径４ｍ程度の円形に近い隅丸方形を呈すると考えられる。出土遺物としては甕がある（第116図３・４）。また、第３次調査で、鉢ないし甕の底部の破片が出土している。

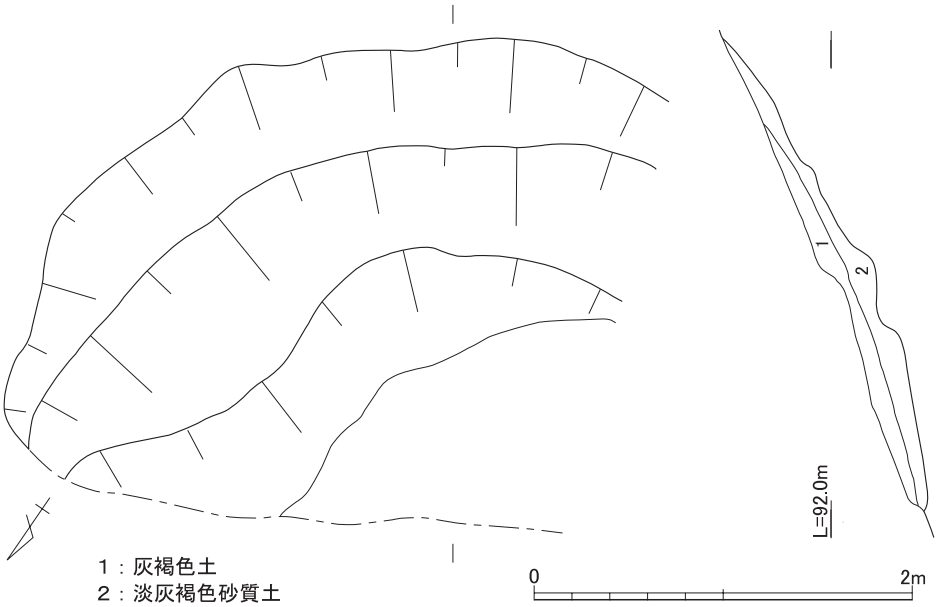
竪穴式住居跡ＳＨ07　調査区の南端で検出し、竪穴式住居跡ＳＨ06と重複関係にある。検出標高はＳＨ06よりも若干高く、100.5m付近である。第１・３次調査で大半を検出していた住居跡である（第３次調査の遺構番号もＳＨ07）。長辺の検出長5.4m、短辺の検出長1.6m、

深さは最大で0.2mを測る。出土遺物としては、過去の調査分も含めて、弥生土器の破片があるが、図化できるものはほとんどなかった。

竪穴式住居跡ＳＨ08（第102図）　調査区の東端、北へ延びる尾根の鞍部に造営された住居跡である。標高96.5mで検出した。南西側には竪穴式住居跡ＳＨ01が位置する。第３次調査で大半を検出していた（第３次調査の遺構番号はＳＨ03）。床面の一部と主柱穴と思われる柱穴を２基検出したが、周壁溝は認められなかった。また、住居跡の北半部は削平されて残存しない。長辺の検出長5.0m、短辺の検出長3.0m、深さは最大で0.3mを測る。今回の調査での出土遺物はないが、第３次調査の際に鉢などが出土している。



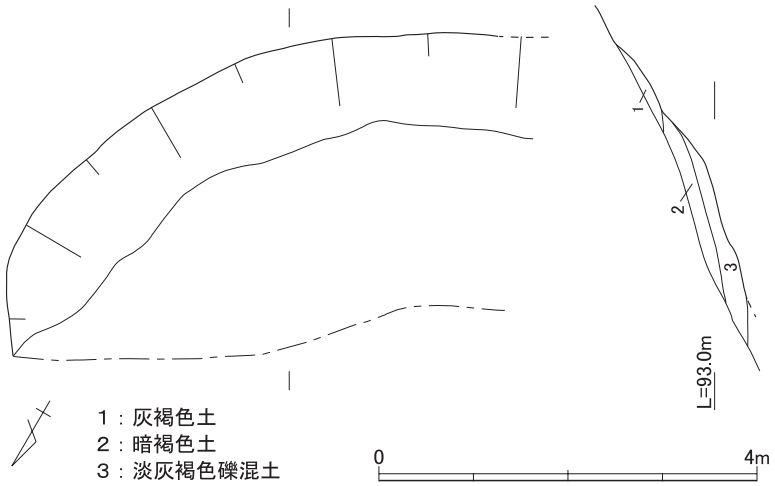
第103図　竪穴式住居跡ＳＨ13実測図



第104図　段状遺構ＳＸ16実測図

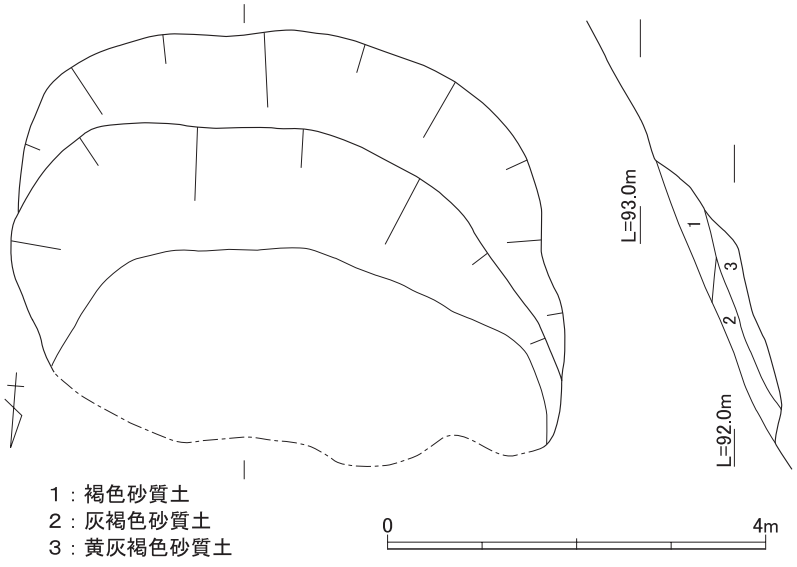
竪穴式住居跡ＳＨ13（第103図）　調査区の南西部、竪穴式住居跡ＳＨ02の西側に位置する。標高97.0m付近で検出した。周壁溝と床面の一部、貯蔵穴と判断される土坑などを検出した。長辺の検出長6.9m、短辺の検出長3.8m、深さは最大で0.3mを測る。周壁溝は幅30cm前後、深さ25cm前後、総延長6.0mを測る。土坑は住居の丘陵高位側、周壁溝にほぼ接するように営まれており、長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。また、直径20cm前後の小規模な柱穴を３基検出したが、主柱穴とは考えられない。出土遺物は比較的豊富で、長頸壺・広口壺・短頸壺・甕・高杯などがある（第117図15～27）。

段状遺構ＳＸ15（第105図）　調査区の中央部、標高93.0m付近で検出した。丘陵の高位側に竪穴式住居跡ＳＨ02、低位側に段状遺構ＳＸ16が位置する。傾斜の緩い平坦面を検出したが、周壁溝や柱穴等は確認できなかった。長辺の検出長5.6m、短辺の検出長3.2m、深さは最大0.3mを測る。従来、木津城山遺跡で検出している段状遺構にくらべ、長大さがみられず、規模の大きな不整形の土坑状を呈する。後述するＳＸ16・17も同様である。なお、遺構の南西部は第３次調査の試掘トレンチによって、平面形の形状等は確認できなかった。出土遺物としては広口壺・甕・鉢・高杯などがある（第119図36～54）。



第105図　段状遺構ＳＸ15実測図

段状遺構ＳＸ16（第104図）　調査区の中央部、標高91m付近で検出した。丘陵の高位側に段状遺構ＳＸ15、低位側に大溝ＳＤ05が位置する。ＳＸ15と同様に、傾斜の緩い平坦面を検出したが、周壁溝や柱穴等は確認できなかった。長辺の検出長6.1m、短辺の検出長5.0m、深さは最大0.4mを測る。また、遺構の西辺部は第３次調査の試掘トレンチにより削られており、平面の形状等は確認できなかった。第３次調査の際に、ＳＸ16の南東部に相当する地点で、土器溜まりＳＸ04を検出し



第106図　段状遺構ＳＸ17実測図

ており、これが今回報告するＳＸ16に伴う遺物であった可能性が高い。出土遺物としては、広口壺・甕・鉢・高杯などがある（第120図55～67）。

段状遺構ＳＸ17（第106図）　調査区の西半部、標高92.0m付近で検出した。東側に段状遺構ＳＸ16が位置する。ＳＸ15・16と同様に、傾斜の緩い平坦面を検出したが、周壁溝や柱穴等は確認できなかった。長辺の検出長6.0m、短辺の検出長3.3m、深さは最大0.4mを測る。不整形な大型土坑のようである。出土遺物としては、広口壺・甕・鉢・高杯などがある（第120図68～79）。

土坑ＳＫ04　調査区の南端近く、標高99.0m付近で検出した。長軸1.6m以上、短軸1.2m以上、深さ0.3mで、平面形は楕円形を呈する。広口壺や甕の破片が出土した（第121図80・81）。

土坑ＳＫ09　調査区の南端、竪穴式住居跡ＳＨ07と重複して検出した。長軸1.0m以上、短軸0.8m、深さ0.3mで、平面形は楕円形を呈する。底部の破片などが出土した（第121図84）。

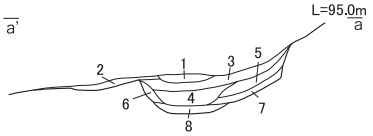
土坑ＳＫ11　調査区の南端、標高100m付近で検出した。長軸2.3m以上、短軸1.7m以上、深さ0.5mで、平面形は楕円形を呈する。広口壺の破片などが出土した（第121図85）。

土器溜まりＳＸ14　調査区の南端近く、標高99m付近で検出した。直径1.0mほどの範囲から土器片が出土したが、掘形は認めらなかった。広口壺や底部の破片などが出土した（第121図82・83）。

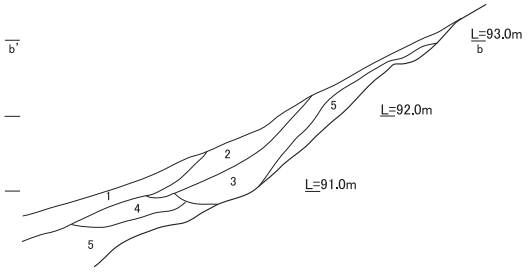
大溝ＳＤ05（第98・107図）　調査区の中央部をおおよそ東西方向に横切る大溝で、検出した総延長は50mに達する。土層断面１（ａ－ａ’）では断面形が逆台形状を呈し、幅2.0m、深さ0.6mを測る。溝底の標高は93.8mである。土層断面２（ｂ－ｂ’）の断面形は上端が大き開く「Ｕ」字状を呈し、幅2.1m、深さ0.8mを測る。溝底の標高は90.8mである。土層断面３（ｃ－ｃ’）の断面形も土層断面２と同様、上端が大き開く「Ｕ」字状を呈し、幅4.0m、深さ1.0mを測る。溝底の標高は87.4mである。溝底の標高は土層断面３から同４にかけての付近が最も低くなる。土層断面４（ｄ－ｄ’）の断面形も同断面２・３と同じく、上端が大き開く「Ｕ」字状を呈し、幅4.0m、深さ1.0mを測る。溝底の標高は87.6mである。土層断面５（ｅ－ｅ’）の断面形は上端が大き開く逆台形状を呈し、幅4.3m、深さ0.9mを測る。溝底の標高は91.9mである。以上のように、大溝の底の標高は、一定ではなく、東端から西に向かって下がっていき、中央の谷部の溝底で最も低くなる。その後、西に向かって上がっていき、西端の丘陵上に達する。このように溝底が大きく変化するが、その理由は不明である。

溝の埋土は黄灰褐色砂質土や灰褐色礫混じり土を主体とする。いずれも遺跡の立地する丘陵基盤土から生じた流土であると考えられ、意図的に溝を埋めたような痕跡は認められなかった。遺物は大溝の比較的広い範囲で、上記の堆積土から出土したが、第３次調査の土器供献遺構ＳＸ05のような、まとまった土器の出土はみられなかった。出土遺物としては長頸壺・直口壺・無頸壺・広口壺・鉢・高杯・器台などがある（第122図86～103）。

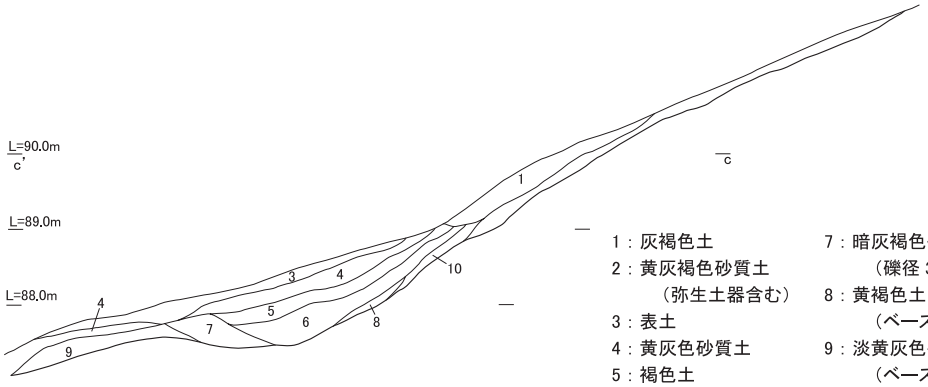
また、ＳＤ05の中央部南肩の最上層でも土器がまとまって出土しており、調査当初、土器溜まりＳＸ12として遺物を取り上げた。丘陵上位側にＳＸ16が位置し、ＳＸ16から転落した遺物の可能性もあるが、ＳＸ16に伴う遺物かどうかは不明であるので、別に報告することとした（第118図



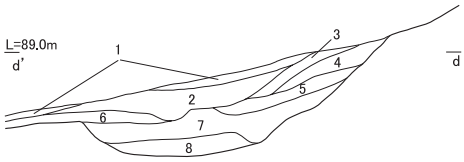
1:橙色土(一部表土)　2:灰褐色土
3:黄褐色土　4:黄灰色土
5:淡赤褐色土　6:黄橙色粘質土
7:黄橙色土　8:黄白色粘質土



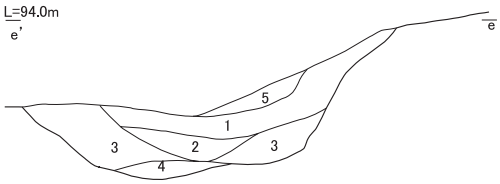
1：灰褐色礫混土（礫 20%）
2：黄灰褐色土
3：黄灰褐色礫混土（礫 40%）
4：淡灰褐色礫混土（礫 10%）
5：淡灰褐色礫混土（礫多数）
（4・5は遺構のベース）



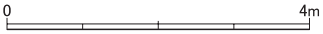
1：灰褐色土
2：黄灰褐色砂質土
（弥生土器含む）
3：表土
4：黄灰色砂質土
5：褐色土
6：灰褐色砂質土
7：暗灰褐色礫混土
（礫径 3〜5cm）
8：黄褐色土
（ベースが流れた土層）
9：淡黄灰色砂質土
（ベースあるいは溝の土手）
10：灰褐色礫混土
（礫径 5〜8cm）



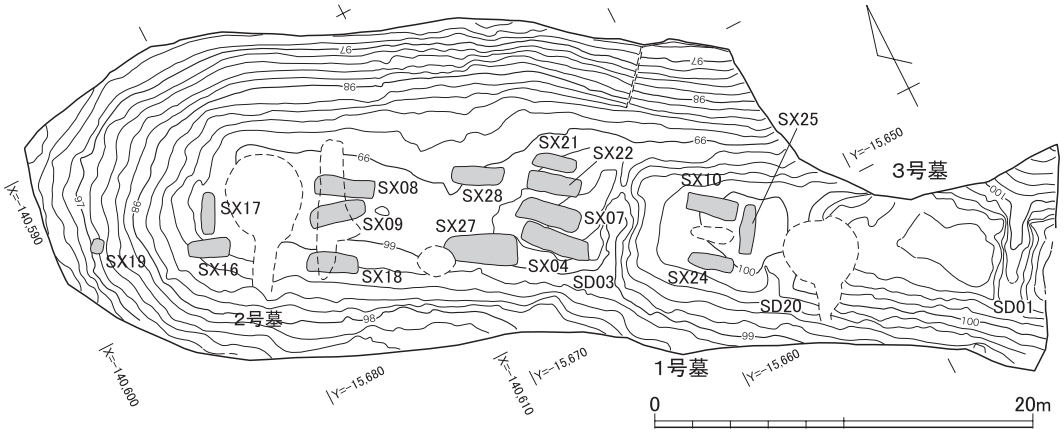
1：表土・黒褐色土
2：灰色礫土（径 1〜8cm）
3：灰褐色礫混土（礫 20%）
4：灰褐色礫土（径 3〜5cm）
5：灰褐色礫混土
6：黄褐色礫混土
7：黄灰褐色砂礫土
8：黄褐色砂礫土



1:黄灰色砂質土
2:灰褐色礫混土(礫40%、径2〜6cm)
3:黄灰褐色砂質土
4:褐色礫土(礫80%、径3cm)
5:表土



第107図　大溝ＳＤ05土層断面図



第108図　B－1地区遺構配置図

28～35)。

(2) B－1地区の調査

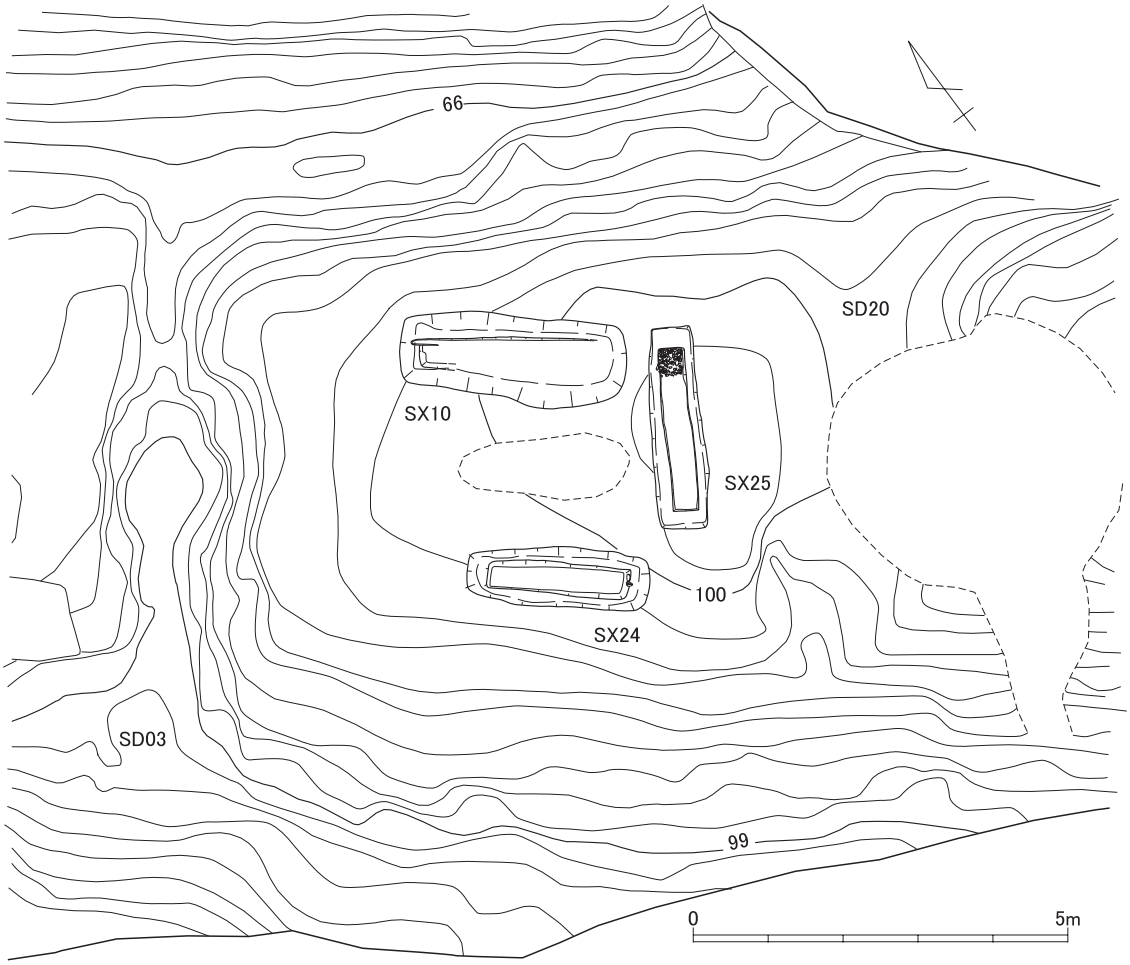
B－1地区は、木津城山遺跡の所在する丘陵の最高所から北西に延びる支尾根の頂部にあたる。第1次調査では、溝2条と埋葬施設4基を検出し、少量ながら弥生土器数点と中国製と推定される鏡片が出土した。支尾根には溝2条によって区画された台状墓2基が存在すると判断されていた。今回の調査では、尾根の両斜面が急峻であり、掘削土などの土砂流出を避けるため、土留め柵の設置などを行った上で調査を実施した。調査の結果、台状墓3基を検出した。台状墓はお互いを切り離す溝3条と台状墓上で埋葬施設14基を検出した。なお、第1次調査では台状墓2基と判断していたが、今回の調査では、1号墓を破壊して構築された高射砲陣地の下層から、台状墓を切り離すための溝SD20を検出した。1号墓の東南側で検出した墳丘を新たに3号墓と命名した。

①**1号墓**(第109図)　B－1地区の中央部で検出した。北西側を溝SD03で2号墓と、南東側を溝SD20で3号墓と区画している。北東辺は墳丘裾と判断される浅い溝状を呈する平坦面が確認できたが、南西辺については、調査区の境界付近まで墳丘斜面が続くことを確認した。北東側の平坦面と溝SD03の底は連続的につながる。1号墓に伴う遺物としては北東辺で検出した平坦面上でごく少量の弥生土器が出土した。細片が多く、図示できたのは底部1点のみである(第125図141)。

台状墓の規模は、墳丘がほぼ正方形に近く、東西の溝の中心間で9.4m、北東辺の平坦面の裾から南西辺の調査区界までで10.0mを測る。墳丘頂部で3基の埋葬施設を検出した(埋葬施設SX10・24・25)。3基の埋葬施設は、「コ」字状に配置されており、中央の凹みは後世の撹乱である。

埋葬施設SX10(第110図左上)　1号墓の墳頂部やや北寄り、北東辺に沿って検出した。1次調査で埋葬施設の南西半部を完掘していたため、今回の調査では北東側について調査を行った。

墓壙は、全長2.8m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。墓壙を掘り下げると、中央部分と周囲で土質



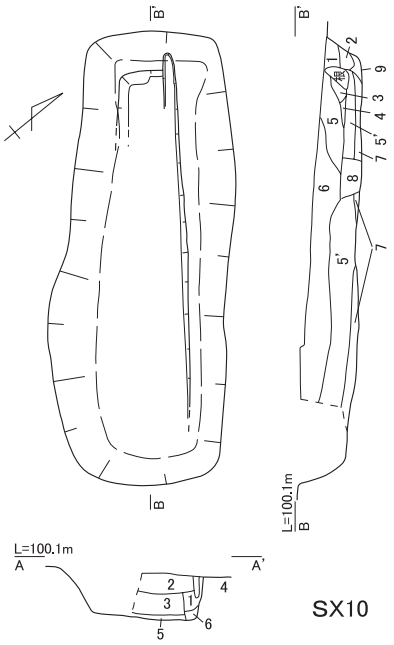
第109図　１号墓墳丘測量図

の違いが認められたため、墓壙内に木棺を納めていたと考えられた。ただし、木棺に伴う棺材の痕跡を確認することはできなかった。上記の土質の違いを木棺の規模とすると、全長2.1m以上、幅0.4m以上である。なお、以下の埋葬施設の記述のうち、木棺の検出状況については、特記しない限りすべて土質の違いによる。木棺内ならびに墓壙内から遺物は出土しなかった。

埋葬施設ＳＸ24（第110図右上）　１号墓の墳頂部やや南寄り、南西辺に沿って検出した。墓壙は、全長2.4m、幅0.7～0.8m、深さ0.3mを測る。墓壙内には木棺を納めていたと考えられる土色の違いが認められた。木棺の規模は全長1.9m、幅0.4mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

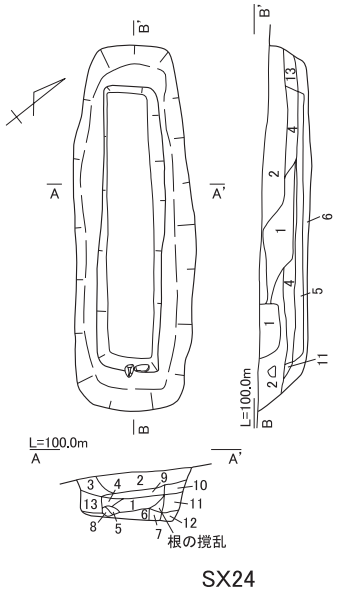
埋葬施設ＳＸ25（第110図左下）　１号墓の墳頂部やや東寄り、南東辺に沿って検出した。墓壙は、全長2.7m、幅0.6～0.7m、深さ0.2mを測る。墓壙内には木棺を納めていたと考えられ、全長2.2m、幅0.35mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかったが、墓壙の北端で30cm四方ほどの範囲に小規模な礫が集中して検出された。礫の厚さは１～２cmほどであるが、用途等は不明である。

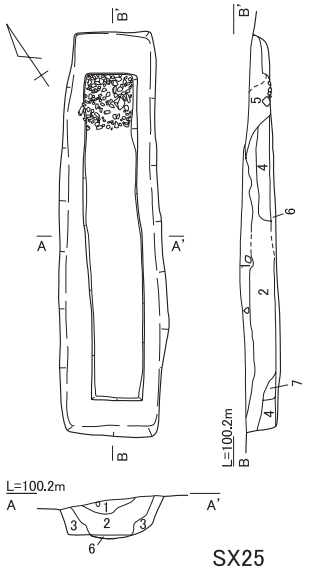
②２号墓（第111図）　Ｂ－１地区の北西部で検出した。南東側を溝ＳＤ03で１号墓と区画するが、北西側を区画するような遺構や墳丘の造作が認められず、緩やかな緩傾斜が確認されたのみであ



横断面
1　黄褐色粘質土
2　明赤褐色土
3　黄褐色粘質土（やや白味を帯びる）
4　暗茶褐色砂質土（根の撹乱）
5　明茶褐色粘質土
6　明茶褐色粘質土

縦断面
1　黄褐色砂質土
2　黄茶褐色粘質土
3　明黄褐色土（橙色土混）
4　明黄褐色土
5　黄褐色粘質土
5’　黄褐色粘質土（やや白味を帯びる）
6　明赤褐色土
7　明茶褐色粘質土
8　黄褐色土（根の撹乱）
9　淡褐色土



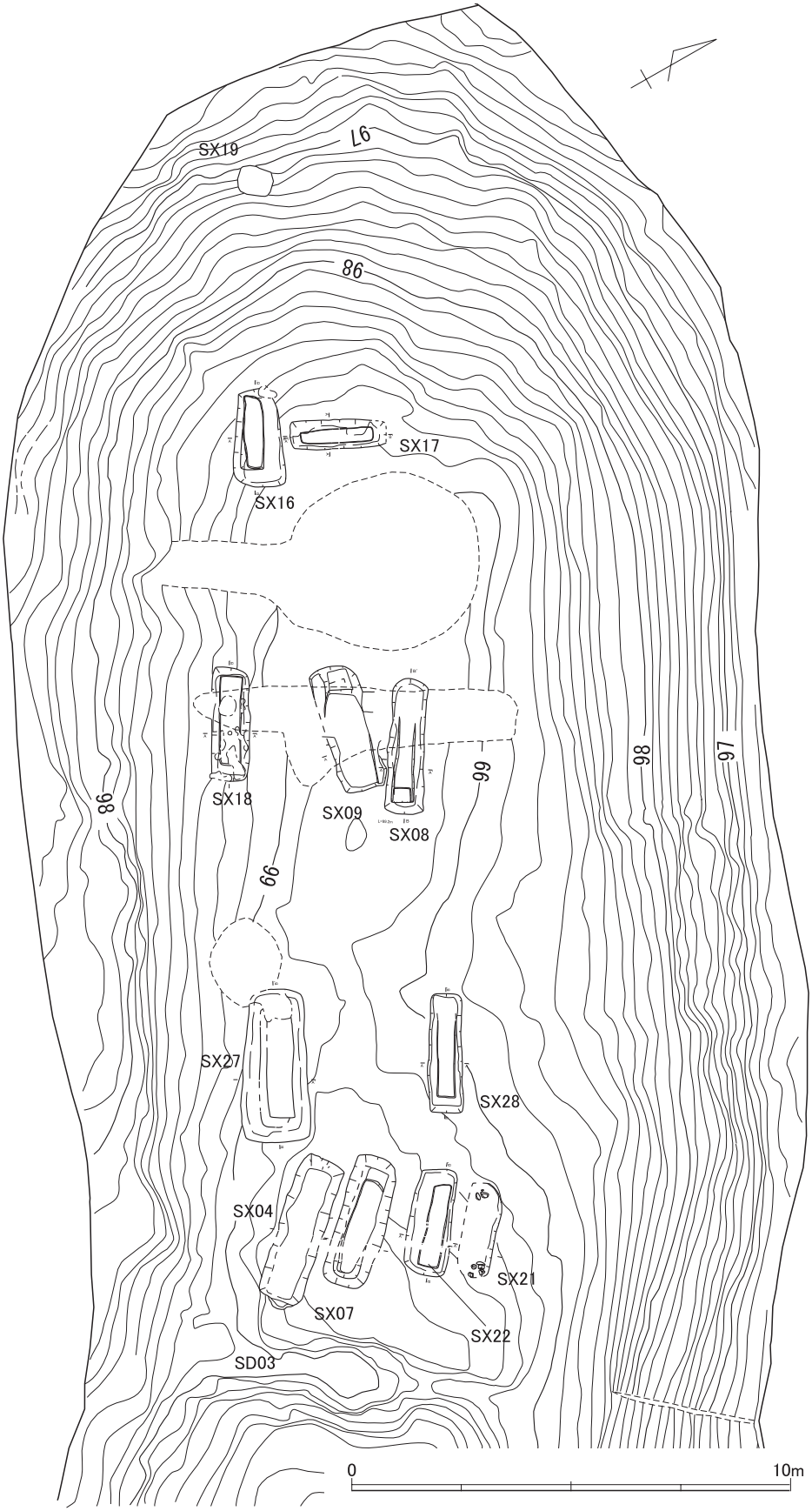


1　暗黄白褐色粘質土（根の撹乱）
2　暗赤黄褐色粘質土
3　明茶褐色粘質土
4　明黄白褐色粘質土
5　明黄赤白褐色粘質土
6　明黄赤褐色粘質土
7　明黄赤褐色粘質土
　（6 より黄色味帯びる：木棺痕跡か）
8　暗黄灰褐色粘質土（根の撹乱）
9　明赤白黄褐色粘質土
10 暗赤茶褐色粘質土（木棺裏込め土）
11 明黄白赤褐色粘質土（木棺裏込め土）
12 明赤黄褐色粘質土（木棺裏込め土）
13 暗赤茶灰褐色粘質土（木棺裏込め土）

1　黄褐色礫混粘質土（撹乱）
2　黄褐色小礫混粘質土
3　黄灰色粘質土
4　黄褐色粘質土
5　茶褐色粘質土（根の撹乱）
6　淡灰褐色土
7　？

0　1m

第110図　1 号墓埋葬施設実測図



第111図　２号墓墳丘測量図

る。墳丘盛り土などが流出してしまった可能性もある。北東辺では溝状を呈する遺構が確認できたものの、部分的である。南西辺は墳丘裾と思われる平坦面が確認できた。２号墓に伴う遺物としては溝ＳＤ03と、墳丘の北東側ならびに南西側で検出した平坦面から弥生土器がまとまって出土した。溝ＳＤ03から出土した土器は、２号墓の北東角からＳＤ03に向かって転落したような状況で出土した（第125図142～145）。北東側の平坦面から出土した弥生土器は細片が多く、墳丘から転落したものであると考えられた（第125図152～157）。南西側で検出した平坦面からは大型の土器片を含む弥生土器がまとまって出土した（第125図146～151）。ただし、南西側で出土した土器が、もともと墳丘裾に当たる平坦面におかれていたのか、墳丘上にあったものが転落したのかは判断できなかった。

台状墓の規模は、東側の溝の中心から西端の埋葬施設までで23.0m、北東辺の裾から南西辺の裾までで13.2mを測る。墳丘上では埋葬施設を合計11基検出した。これらは、その検出位置から、大きく東西の２群に分かれていたと考えられる（東群：埋葬施設ＳＸ04・07・21・22・27・28、西群：ＳＸ08・09・16～18）。

東群では合計６基の埋葬施設を確認した。

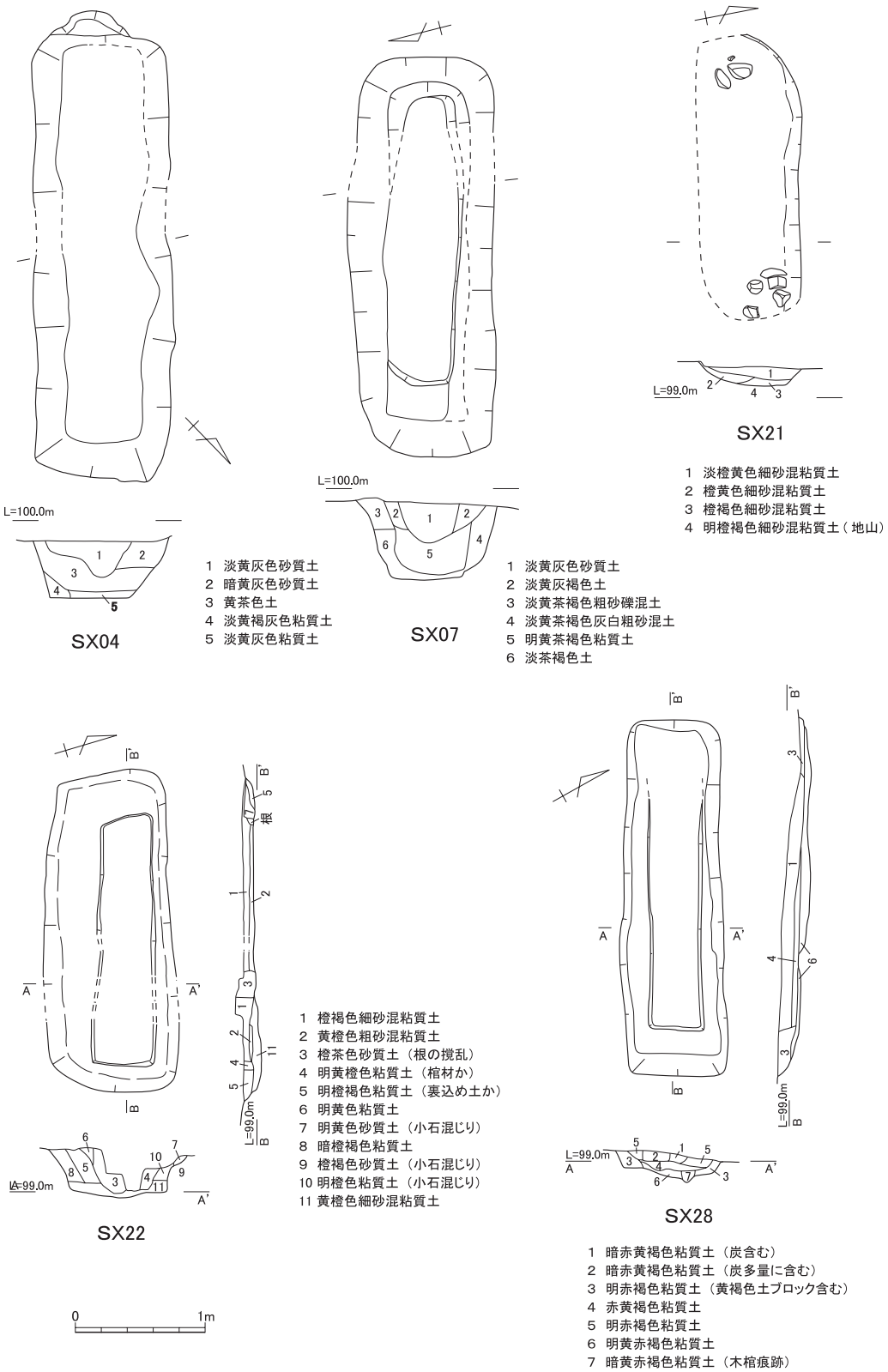
埋葬施設ＳＸ04（第112図）　２号墓の墳頂部の南東角で検出した。ＳＸ04は第１次調査の際に検出し、完掘したものである。墓壙は、全長3.4m、幅1.0～1.1m、深さ0.5mを測る。木棺の痕跡等を確認することはできなかった。墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ07（第112図）　２号墓の南東部、埋葬施設ＳＸ04に接して検出した。ＳＸ04同様、第１次調査時に検出し、完掘したものである。木棺等の痕跡を確認することはできなかったが、土層断面をみると木棺が納められていた可能性がある。墓壙は、全長3.1m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ21（第112図）　２号墓の北東部で検出した小型の埋葬施設である。墓壙は、全長2.1m以上、幅0.7m以上、深さ0.15mを測る。墓壙内の両端で握り拳大ないし20cm前後の礫が複数まとまって検出されたことから木棺の小口を押さえるための礫と判断した。この礫の存在から墓壙内には木棺を納めていたと考えられ、全長は1.5m程度を測る。木棺の幅は不明である。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

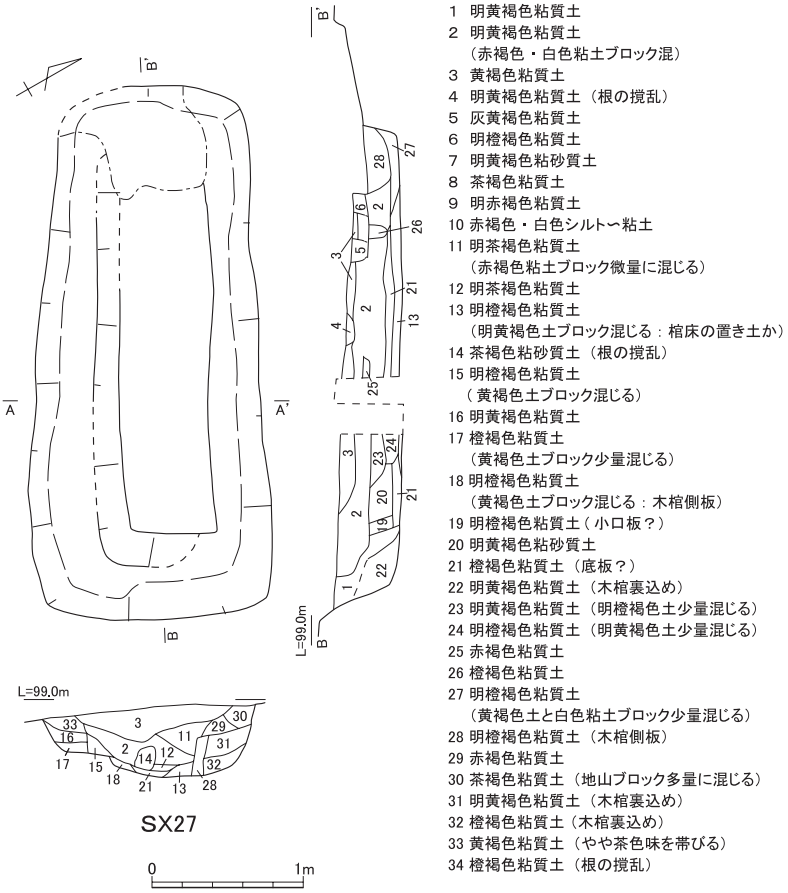
埋葬施設ＳＸ22（第112図）　２号墓の北東部で検出し、埋葬施設ＳＸ07とＳＸ21の間に位置する。当初はＳＸ21と一体の大型の墓壙の存在を想定したが、最終的には別個の墓壙であることが判明した。墓壙は、全長2.5m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。また、墓壙内で木棺と思われる土色の違いを確認することができた。木棺は、全長1.9m、幅0.45mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ27（第113図）　２号墓の南東部、埋葬施設ＳＸ04の西側で検出した。今回の調査で検出した埋葬施設の中では最大規模のものである。当初、木棺の陥没痕跡を墓壙と判断していたが、調査を進めた結果、本来の墓壙を確認した。ＳＸ27の墓壙は、南西側に検出面から25cm程度下がったところに幅40cmほどの平坦面があり、さらに北東側を１段掘り凹めて木棺を納め



第112図　２号墓埋葬施設実測図（１）

ていたと考えられる。片側に寄せられて掘られた２段墓壙といえるが、このような構造は、今回の調査で検出した他の埋葬施設にはみられないものである。墓壙は、全長3.5m、幅1.5m、深さ0.35mを測る。土色の違いにより墓壙内には木棺が納められていたと考えられる。木棺の規模は、北西端が撹乱を受けているため、全長2.3m以上、幅0.5m以上である。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。



第113図　２号墓埋葬施設実測図（２）

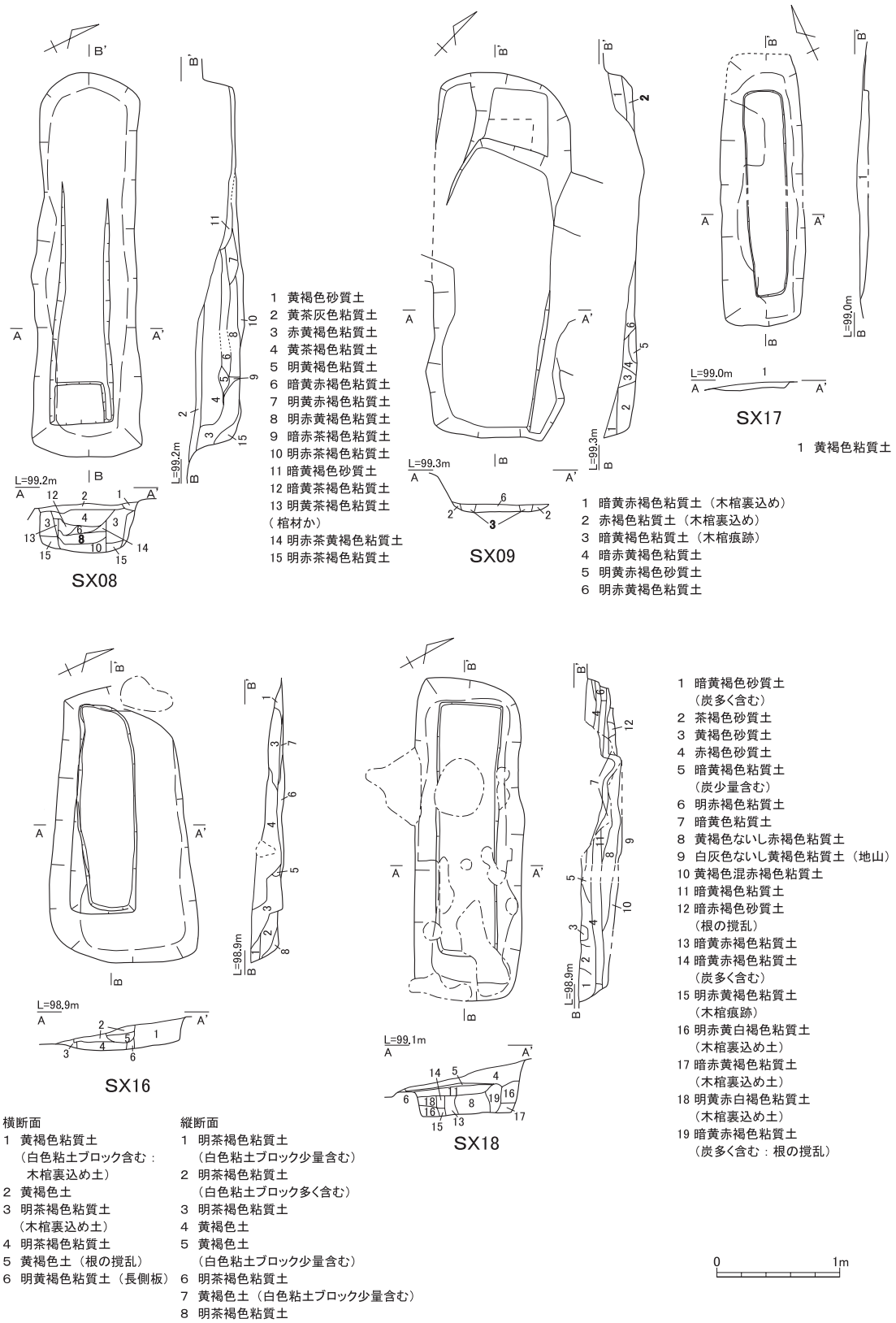
埋葬施設ＳＸ28（第112図）　２号墓の南東部、埋葬施設ＳＸ22の西側で検出した。全体として遺構の残存状況はよいとはいえなかった。墓壙は、全長2.75m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。墓壙内には木棺を納めており、全長1.8m以上、幅0.4mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

西群では合計５基の埋葬施設と性格不明の土坑１基を確認した。

埋葬施設ＳＸ08（第114図）　２号墓の中央部やや北西寄りで検出した。埋葬施設ＳＸ04・07と同様、第１次調査で確認しており、今回、内部の調査を実施した。墓壙の南東側で木棺痕跡を確認したが、墓壙の中央部を後世の撹乱により破壊されていた。墓壙は全長3.1m、幅0.8～0.9m、深さ0.35mを測る。木棺は全長1.7m以上、幅0.45mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ09（第114図）　２号墓の中央部やや北西寄りで検出し、埋葬施設ＳＸ08の南西側に位置する。第１次調査で確認しており、今回、内部の調査を行った。墓壙の大半を後世の撹乱により破壊されていたため、木棺の痕跡等を確認することはできなかった。墓壙は、全長3.0m、幅1.0～1.1m、深さ0.25mを測る。第１次調査の際に、ＳＸ09の上から掘り込まれた撹乱の精査中に中国製の鏡片が出土した。ＳＸ09に伴う副葬品と考えられる。鏡片については報告書第32冊で報告している。

埋葬施設ＳＸ16（第114図）　２号墓の南西部で検出した。墓壙は、全長2.2m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。墓壙内には木棺を納めていたと考えられ、全長1.7m、幅0.5mを測る。木棺内なら



第114図　２号墓埋葬施設実測図（３）

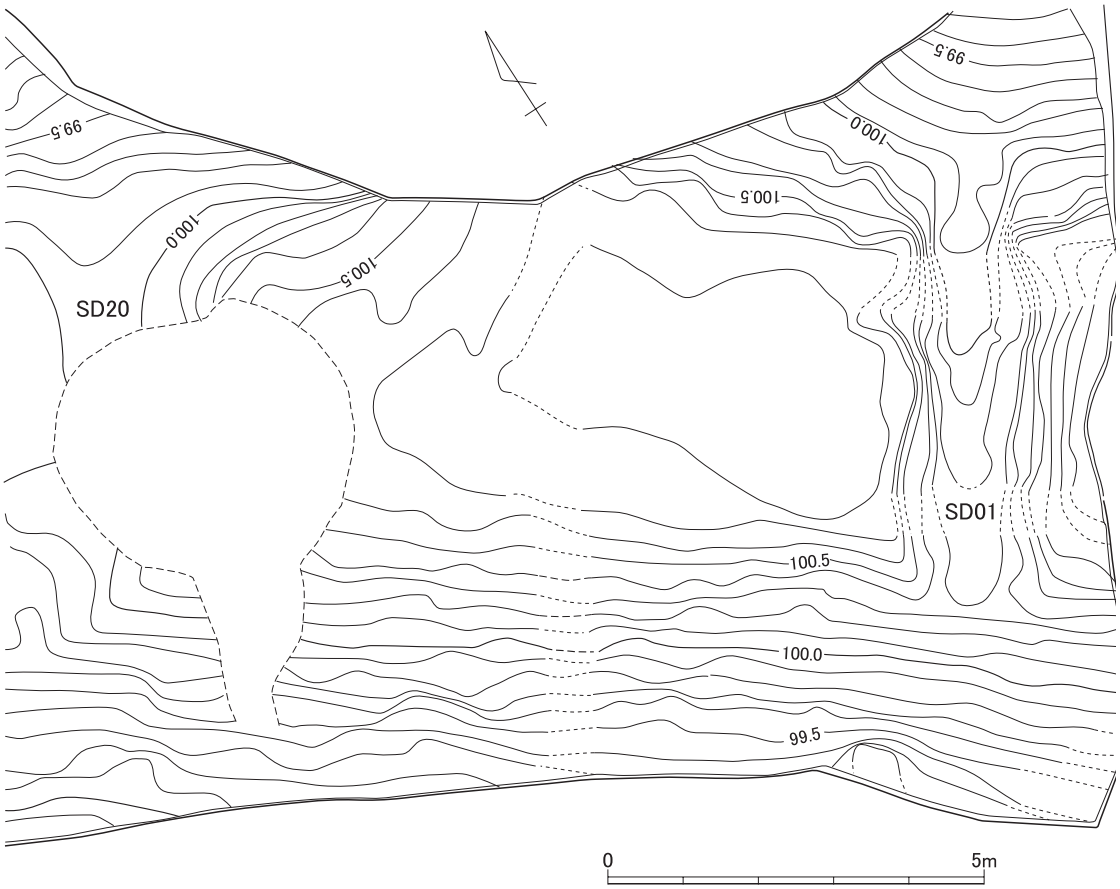
びに墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ17（第114図）　２号墓の南西部、埋葬施設ＳＸ16の北側で検出した。ＳＸ17の主軸はＳＸ16に対して直交する。墓壙は、全長2.2m、幅0.65mを測り、深さ0.1mと非常に浅い。墓壙内には木棺を納めていたと考えられ、全長1.7m、幅0.33mを測る。木棺内ならびに墓壙内から出土遺物はなかった。

埋葬施設ＳＸ18（第114図）　２号墓の中央部、やや北西寄りで検出した。埋葬施設ＳＸ09の南西側に位置する。墓壙の規模は、全長2.6m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。墓壙内は全体に撹乱が著しいが、土色の違いにより墓壙内には木棺が納められていたと考えられ、木簡の規模は全長2.1m、幅0.5mを測る。木棺内からは鉄鏃１点が出土した（第126図164）。

土坑ＳＸ19　２号墓の西端、墳丘斜面を若干下ったところで検出した。長軸0.55m以上、短軸0.65m以上、深さ0.2mを測るが、西側は堆積土が流出したためか、残存していなかった。土坑底には赤色顔料が認められたが、遺構の性格等は不明である。出土遺物はなかった。

③３号墓　B-１地区の南東部、１号墓の南東側で検出した。第１次調査の際は１号墓と合わせて１つの台状墓と判断していたが、今回の調査で、新たに区画のための溝ＳＤ20を検出し、３基の台状墓であることが判明した。３号墓は台状墓群が展開する尾根上では最も高い位置にあたる。３号墓に伴う遺物としてはＳＤ01の埋土中位から細頸壺の体部と思われる個体が１点出土し



第115図　３号墓墳丘測量図

たのみである（第125図158）。

台状墓の規模は東西の溝の中心間で11.4mを測るが、南北方向の長さは、北側丘陵斜面が大きく崩落していることから不明である。なお、３号墓に伴う埋葬施設はすでに削平されてしまったためか、検出できなかった。

２）出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半が弥生土器である。このほか、銅鏃や鉄鏃などの金属器と、中世と判断される土師器片が少量出土した。土師器片は木津城跡に伴うものである可能性もあるが、木津城山遺跡の遺物包含層から出土したので、ここで報告する。

（1）弥生土器

今回の調査では、整理箱で約28箱の弥生土器が出土した。Ａ地区は集落域、B-１地区は墓域で、遺構の性格が大きく異なるが、土器そのものに大きな違いは見られない。しかし、器種構成等の点で集落域と墓域の違いがあると思われる。また、集落域の資料は第１～５次調査で出土したものと大きく異ならないが、若干の特徴的な遺物がみられる。

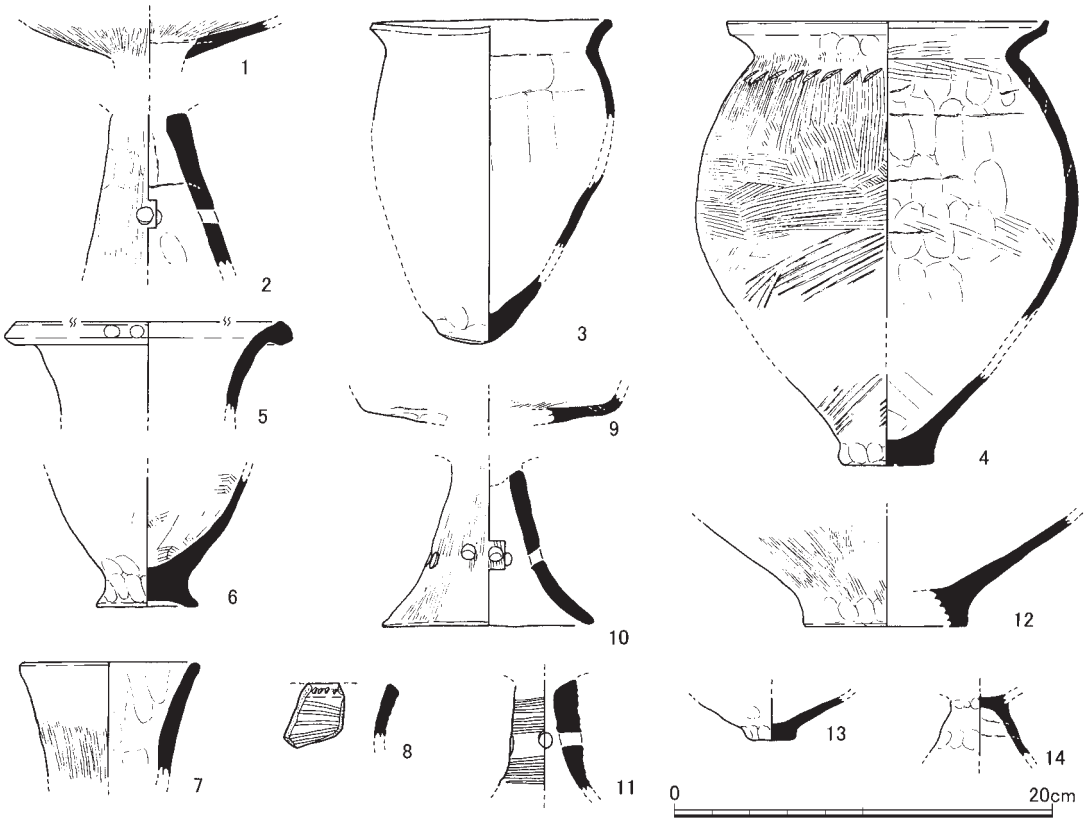
なお、弥生土器の報告にあたっては、器種分類を行う必要があるが、基本的に報告書第32冊に準じるものとする。ただし、新たな器種･器形と判断したものについては新たな分類を設定した。

①Ａ地区出土遺物

竪穴式住居跡ＳＨ01（第116図１・２）　高杯などが出土した。１は高杯で、杯底部の充填物が剝離している。内外面ともヘラミガキ調整を施す。２は高杯の脚部内面に接合痕がみられる。透し孔は４個確認できる。

竪穴式住居跡ＳＨ02（第116図５～14）　広口壺Ａ、長頸壺、高杯、鉢などが出土した。５は広口壺Ａと思われる。外反気味の口縁部に断面台形状に粘土帯を貼り付けて下垂部を形成する。口縁端部外面に円形浮文を貼り付ける。６は鉢Ａと推定されるが、口縁部が欠損するため不明である。底部は脚台状を呈する。底径は5.2cmである。７は長頸壺と考えられる。口縁部上半にヨコナデ調整を施し、口縁部外面下半にハケ調整を施す。口径は9.0cmである。８は器種不明の口縁部の破片である。口縁端部外面をわずかに肥厚させて刻み目を施す。口縁部外面には沈線が５条確認できるが、口縁とも、沈線どうしでも平行しない。９は高杯Ｂの杯底部と考えられる破片である。10は脚部ｃである。２個一対の透し孔を４方向に施す。底径11.2cm、残存高8.6cmである。11は脚部ｅと考えられる。中位に透し孔が４個認められ、沈線をその上段に６条、下段に５条施す。12･13は底部ａで、いずれも壺の底部と考えられる。12はかなりの大型品であるのに対して、13は小型品である。ただし、壺の詳細な器種は不明である。14は脚部ｅと推定されるが、杯部、脚端部ともに欠損するため、詳細は不明である。

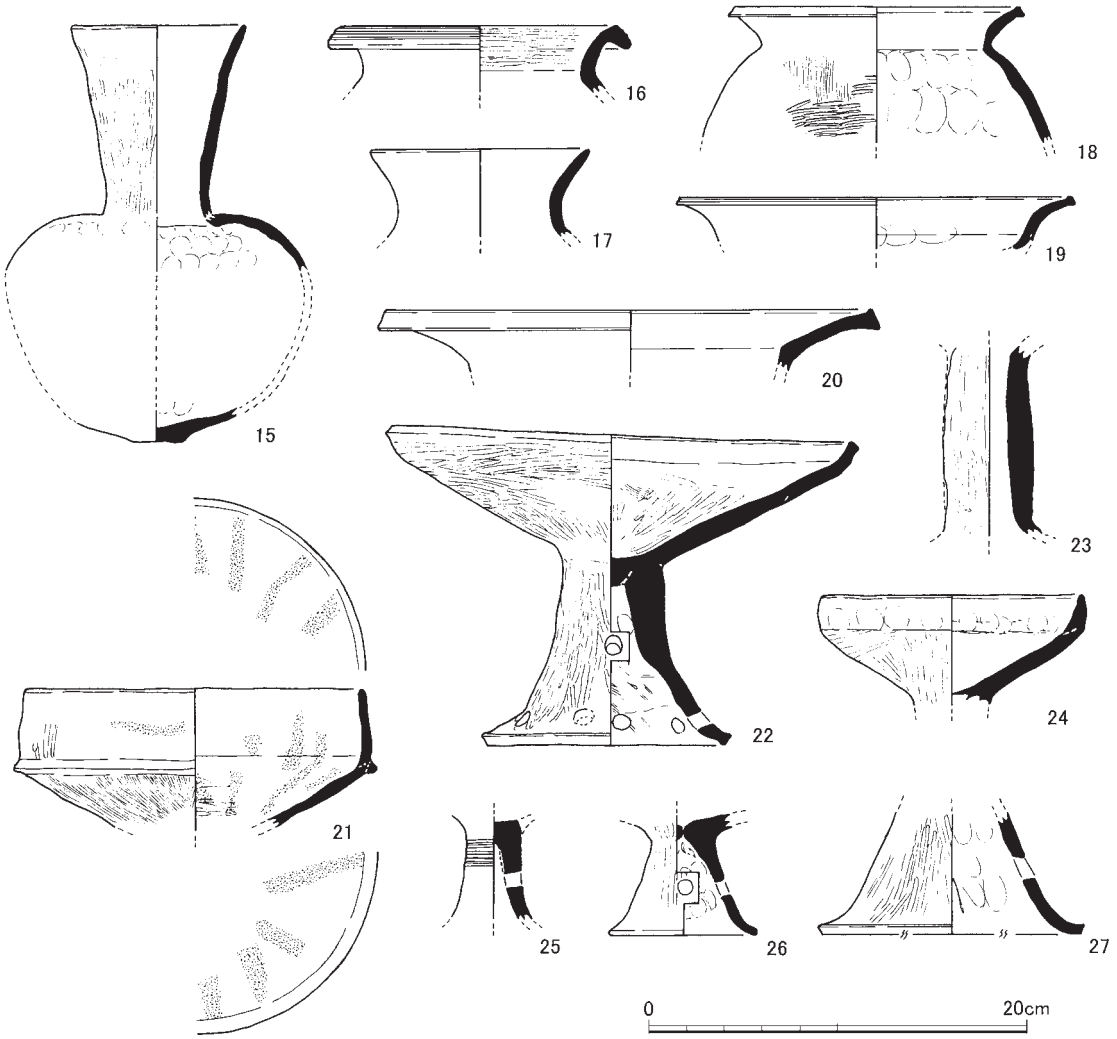
竪穴式住居跡ＳＨ06（第116図３・４）　甕Ａ・Ｃなどが出土した。３は甕Ｃに分類できる。前報告書では小型品としていたが、今回の資料は中型品である。内面に削りのような強い板ナデ調整を施す。全体に２次焼成痕が認められる。形態の歪みが著しいが、口径は12.0cm、器高は17.1cmである。４は甕Ａである。口縁端部をつまみ上げ気味にして、受け口状を呈している。ハ



第116図　竪穴式住居跡ＳＨ01・02・06出土遺物実測図

ケメ原体は、体部上半が７～８本／cmであるのに対して、体部下半は４～５本／cmと粗い。両者の間に明瞭な接合痕はみられないが、分割成形によると考えられる。肩部に刺突文を施す。外面に煤が付着する。口径は16.9cmで、器高は、直接接合しないが、23.6cmに復原できる。

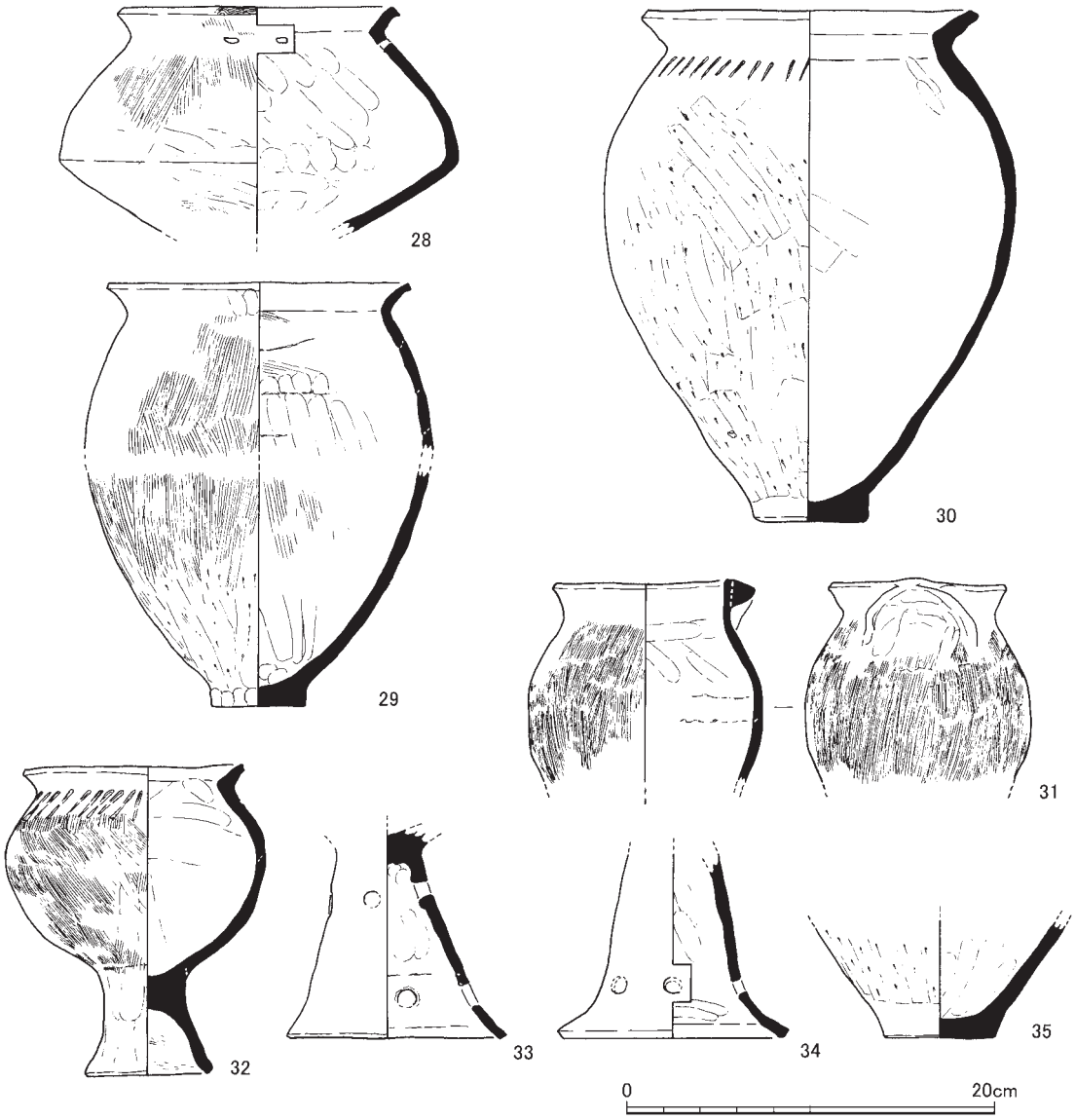
竪穴式住居跡ＳＨ13（第117図15～27）　長頸壺、広口壺Ｇ、短頸壺、甕Ｂ、高杯Ｄ・Ａ・Ｃなどが出土した。15は長頸壺である。体部の大半を欠損するが、底部と肩部、口頸部が残存する。胎土や色調などから同一個体と判断した。体部は、肩部が実測図ほど張らないかもしれないが、玉葱形もしくは倒卵形を呈すると思われる。底部は直径2.5cmほどの凹み気味の平底を呈する。口径は9.0cmである。なお、器形の特徴から弥生時代後期の土器ではなく、後期末ないし古墳時代初頭の庄内式前後の土器である可能性がある。16は広口壺Ｇである。頸部から短く外方へ立ち上がる口縁部に斜め下方に下垂部をもつ。下垂部外面に擬凹線文を３条施す。口径は14.5cmである。17は頸部から緩く上外方へのびる口縁部をもつ。摩滅が著しく調整等は不明である。18は甕Ｂで、口縁部と体部上半が残存する。口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁端部に面をもつ。体部外面にタタキ調整ののちハケ調整を施す。口径は15.0cm、残存高は7.1cmである。19は高杯の杯底部以下が欠損しており、破断面に杯底部との接合面が確認できる。杯口縁部が大きく外反している点が特徴的である。藤田三郎氏のいう結合形土器[注66]のようなものである可能性がある。20は摩滅が著しく調整は不明であるが、口縁部が外上方に大きく広がる杯部が途中で大きく屈曲して深い杯部を成形するようなので、高杯Ｄに分類し、いわゆる結合形土器の一種と考えたい。口径は



第117図　竪穴式住居跡ＳＨ13出土遺物実測図

25.3cmである。21は本来ならば高杯Ａに分類できるが、加飾が認められることから高杯Ｄに分類しておく。杯部のみの資料で、斜め上方に延びる杯底部と、やや内傾気味に立ち上がる口縁部からなる。杯底部外面にはヘラミガキ調整がみられるが、杯口縁部の調整は不明である。杯部の内外面に、赤色顔料を放射状に塗布している。兵庫県表山遺跡段状特殊遺構出土の125などに類似している。(注67) 若干歪みがみられるものの、口径17.9cm、残存高7.2cmである。22は高杯Ａである。口縁部が短く外傾するが、杯部が深い。脚部には透し孔が上下２段、合計８個確認できる。本来は10個程度であろうか。杯部内外面、脚部外面にヘラミガキ調整を施す。若干歪みがみられるものの、口径24.2cm、器高16.9cm、脚裾径12.4cmである。23は脚部ａもしくはｂである。外面に沈線などは認められない。24は高杯Ｃであるが、形態的には高杯Ａを小型化したものといえる。杯口縁部にユビオサエ痕がやや明瞭に認められる。口径は13.7cmである。25･26は脚部ｅである。25は沈線を６条施すが、摩滅が著しい。26は脚頂部(もしくは杯底部)にわずかな隙間がある。焼成の際に粘土の収縮によって生じたものであろう。脚裾径は7.6cmである。27は脚部ｃの下半部である。

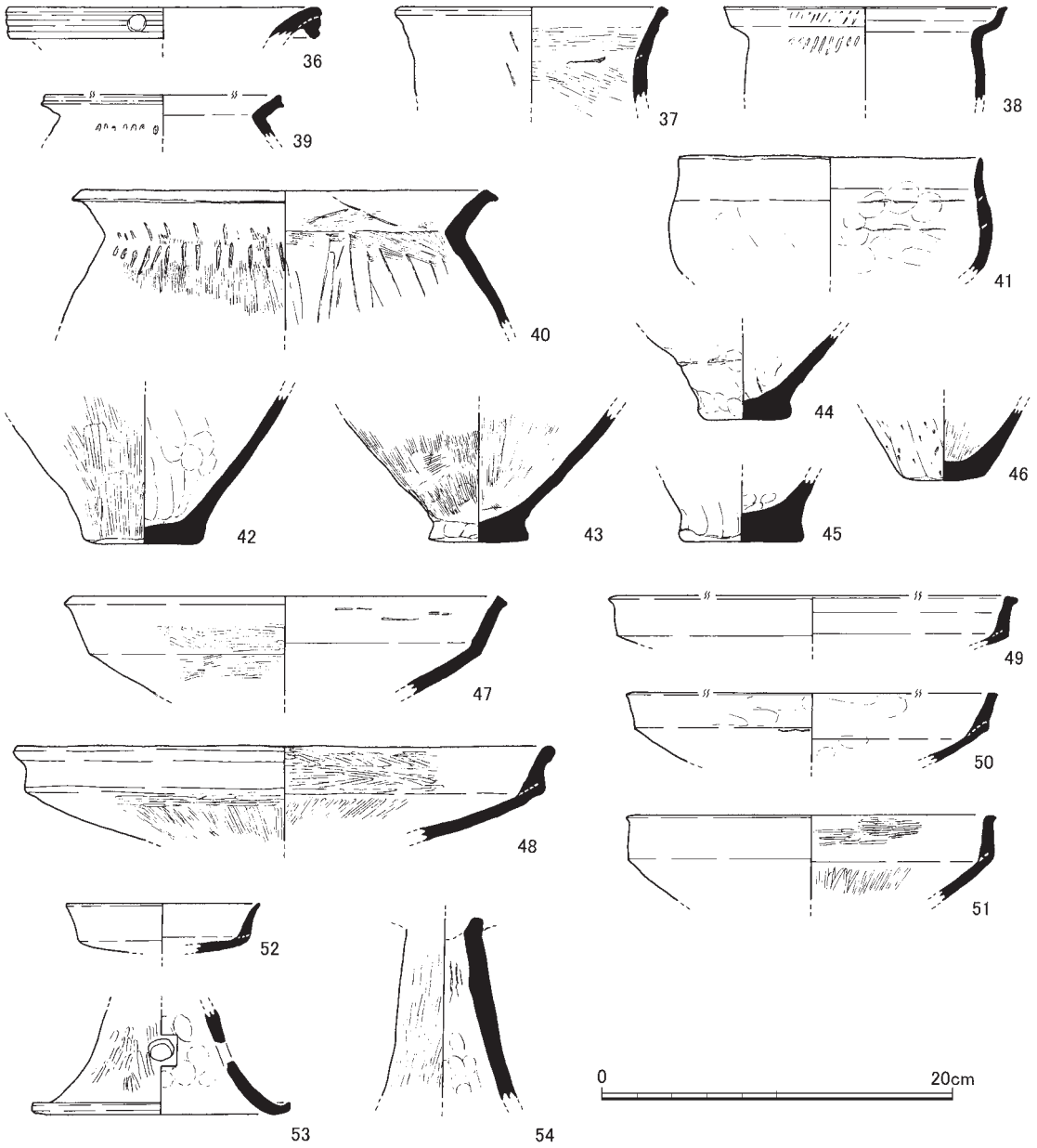
土器溜まりＳＸ12（第118図28～35）　無頸壺Ａ、甕Ａ、把手付甕Ｃ、脚台付鉢（もしくは甕）、高杯などが出土した。28は無頸壺Ａである。口縁端面に４条程度の波状文を施す。頸部に２個１組と考えられる穿孔がある。体部は算盤玉形を呈する。体部外面上半に縦方向のハケ調整を施し、下半はハケ調整ののちナデ調整を施す。口径14.5cm、残存高12.3cmである。29･30は甕Ａである。29は体部下半に、30は肩部以下底部までヘラケズリ調整を施している。前報告の際にこれほどヘラケズリ調整を多用している甕Ａはみられなかった。29の頸部はゆるく外反している。体部最大径付近が欠損するため、直接、接合しないが、口径は16.2cm、器高は23.0cmに復原できる。30は「く」字状を呈する短い口縁部を有する。肩部に刺突文を施す。口径17.4cm、器高27.7cmである。31は把手付の甕Ｃである。把手は口縁部から肩部にかけて帯状の粘土を逆「Ｕ」字状に、体部の一部を切り取ったところに差し込んで製作している。口縁部は緩く外反する。体部外面にハケ調整を施す。口径10.3cm、残存高11.1cmである。32は脚台付の甕もしくは鉢である。口縁



第118図　土器溜まりＳＸ12出土遺物実測図

部が短く「く」字状に屈曲し、やや球形の体部に、高さ5.5cm程度の脚台が付く。肩部にはヘラ状工具による刺突文を連続的に施す。体部外面にハケ調整を施し、煤が付着する。口径11.8cm、器高16.9cmである。33・34は脚部ｃである。33は上下２段、４個ずつ円形の透し孔を施す。底径は11.4cmである。34の脚端部は33にくらべやや大きく開く。底径は12.0cmである。35は甕の底部と思われる。外面にヘラケズリ調整を施す。

段状遺構ＳＸ15（第119図36～54）　広口壺Ａ、甕Ａ、鉢Ｄ、鉢Ｆ、高杯Ａ・Ｂなどが出土した。36は広口壺Ａである。口縁端部外面に下垂部を貼り付け、擬凹線２条を施して、円形浮文を貼り付ける。口径17.5cmである。37は壺類もしくは鉢類の口縁と考えられる。口径は復原であるがやや大きく、器形も外湾するので鉢類の可能性が高い。外面に工具痕がみられる。口径14.7cmである。38は鉢Ｄである。口縁部外面と肩部に刺突文を施すが、摩滅気味のため不明瞭である。口径



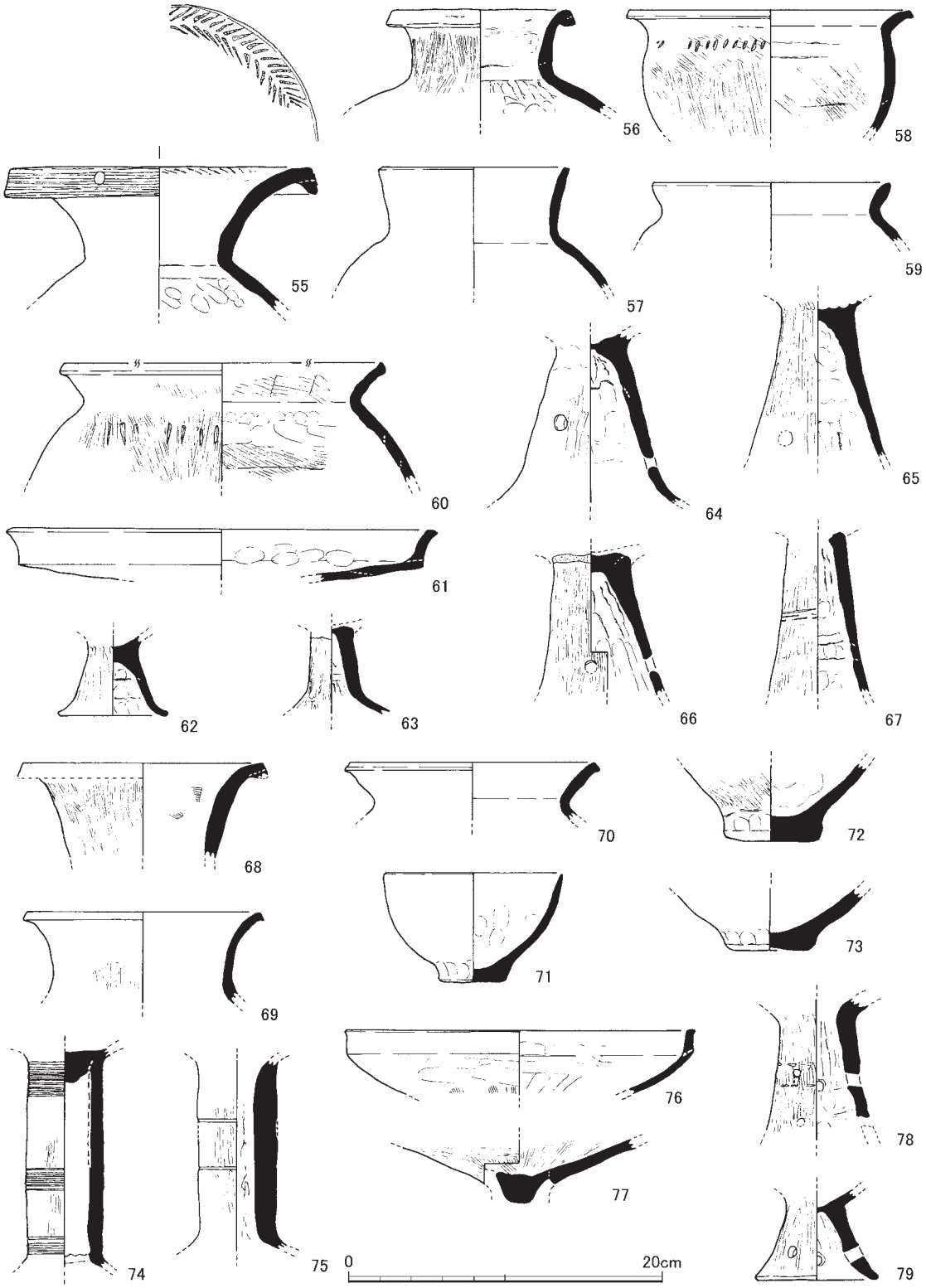
第119図　段状遺構ＳＸ15出土遺物実測図

15.9cm、残存高5.3cmである。39は甕であるが、小破片のため甕Ａなのか甕Ｃなのか不明である。口縁端面に擬凹線状の凹線が１条みられる。肩部には刺突文が施される。40は甕Ａである。口径23.0cmの大型品である。「く」字状に屈曲する口縁と、明瞭な口縁端面をもつ。肩部にヘラ状工具による刺突文がある。内面にはハケ調整に伴う工具痕が明瞭にみられる。41は鉢Ｆである。これと類似した器形は、以前の報告の際には確認していない。口縁部から体部にかけては緩く「Ｓ」字状を呈する。口径17.0cm、残存高7.0cmである。42～46はいずれも甕の底部と思われる。42・44・45は底部ｂである。42は外面にハケ調整を施し、44・45は外面にナデ調整やユビオサエ痕がみられる。43は底部ａで、底部の周囲にユビオサエ痕やナデ調整がみられる。46は底部ｃで、外面にケズリ調整を施しており、42～45とは少し異なる。47～52は高杯の杯部である。47・50・51は高杯Ａの杯部と思われる。47の外傾度が最も大きく、51はほぼ直立に復原できる。47は口径23.9cm、51は20.0cmである。48・49は高杯Ｂの杯部と思われる。48の杯口縁部はやや外方に開くが、外面に強いヨコナデを施して、口縁端部外面がやや丸味を帯びて肥厚する。口径30.0cmである。49は杯口縁部の小破片である。口径10.9cmである。52は小型の高杯Ａもしくは高杯Ｂに分類できると考える。53・54は高杯脚部ｃ類である。53は脚部下半の資料である。脚端部がわずかに反り返り、端部を上方につまみ上げて端面を形成する。54は脚部上半の資料で、脚端部は欠損する。

段状遺構ＳＸ16（第120図55～67）　55は広口壺Ａである。口縁端部外面に下垂部を貼り付け、浅い擬凹線４条を施す。剝離しているものが多いものの、３個一組の円形浮文を４方向に貼り付けている。口縁部内面には、ヘラ状工具による綾杉状の刺突文を施す。口径18.7cm、残存高8.1cmである。56は広口壺Ｄである。口縁端部外面に下垂部を貼り付けるが、端面は無文である。口径10.9cmである。57は直口壺である。全体に摩滅が著しく調整は不明である。58は鉢Ｂである。「く」字状の口縁と、肩部に刺突文を有する。体部外面に縦方向のハケ調整を施す。口径17.8cm、残存高7.7cmである。59は甕Ｃと思われるが、小型品というよりは中型品に近い。60は甕Ａである。「く」字状の口縁部に、ややつまみ上げの口縁端部をもつ。体部外面に縦方向のハケ調整と、肩部にヘラ状工具による刺突文を施す。61が高杯Ｂの杯部である。杯口縁部は短くわずかに外反する。口径26.4cmである。62・63は脚部ｅである。62は高杯Ｃの可能性が高い。64～67は脚部ｃである。64～66は脚柱部からやや大きく「ハ」字状に開くが、67はほかの個体にくらべ脚部の開きが弱い。脚柱部外面のほぼ中位に３条の沈線を施す。いずれも摩滅気味であるものの、ヘラミガキ調整を施す。

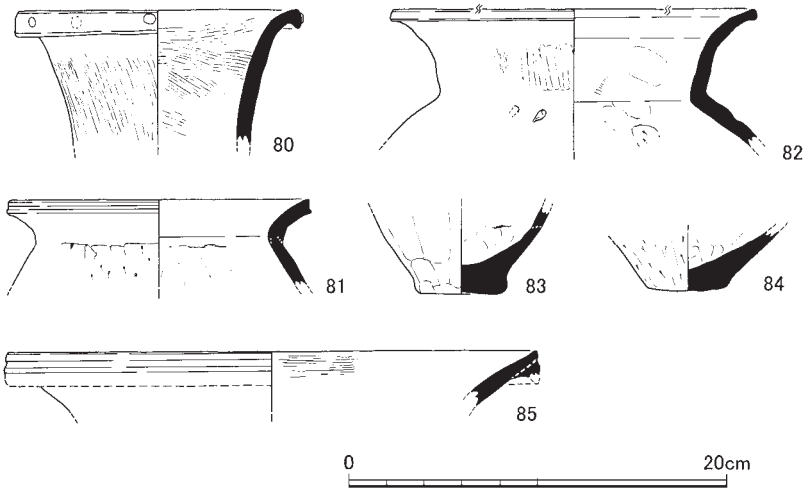
段状遺構ＳＸ17（第120図68～79）　広口壺Ａ・Ｂ、甕、鉢Ａ、高杯、脚部ａ・b、底部ａ・ｂなどが出土した。68は広口壺Ａである。下垂部の一部が欠損する。口縁端部外面は無文のようである。頸部外面にハケ調整を施す。口径は15.2cmである。69は広口壺Ｂである。口縁部が緩く外反する。口径は14.7cmである。70は甕の口縁部である。体部の調整が不明であるので、ＡかＢか明らかでない。71は鉢Ａである。全体に摩滅が著しい。口径11.2cm、器高7.0cmである。72は底部ａに分類でき、甕の底部と考えられる。73は底部ｂに分類でき、壺の底部と考えられる。74・

75は脚部ａまたはｂである。脚端部が不明であるので、ａかｂのいずれであるのかは明らかでない。ともに摩滅が著しいが、外面にヘラミガキ調整を施す。74は上段に９条、中段に６条、下段に４条の沈線を施す。脚柱部内面がかなり平滑であるので、円形の棒状品に粘土板を巻き付けて



第120図　段状遺構ＳＸ16・17出土遺物実測図

製作している可能性がある。残存高は14.0cmである。74に類似した個体としては、第３次調査の16トレンチ土器供献遺構ＳＸ05出土の高杯Ｂ（506）がある。75は脚柱部外面に２条の沈線を施す。残存高は12.1cmである。76は高杯Ａである。口縁部は短く立ち上がる。口径は22.0cmである。77は杯底部の破片である。脚柱頂部の充填状況が非常によくわかる資料である。内外面ともハケ調整である。78は脚部ｃである。上段に４つ、下段に２つ透し孔が穿孔される。外面にヘラミガキ調整を施す。79は脚部ｅで、高杯Ｃの脚部の可能性が高い。透し孔は５つ穿孔される。外面にヘラミガキ調整を施す。脚裾径7.6cm、残存高5.8cmである。



第121図　土坑ＳＫ04・09・11、土器溜まりＳＸ14出土遺物実測図

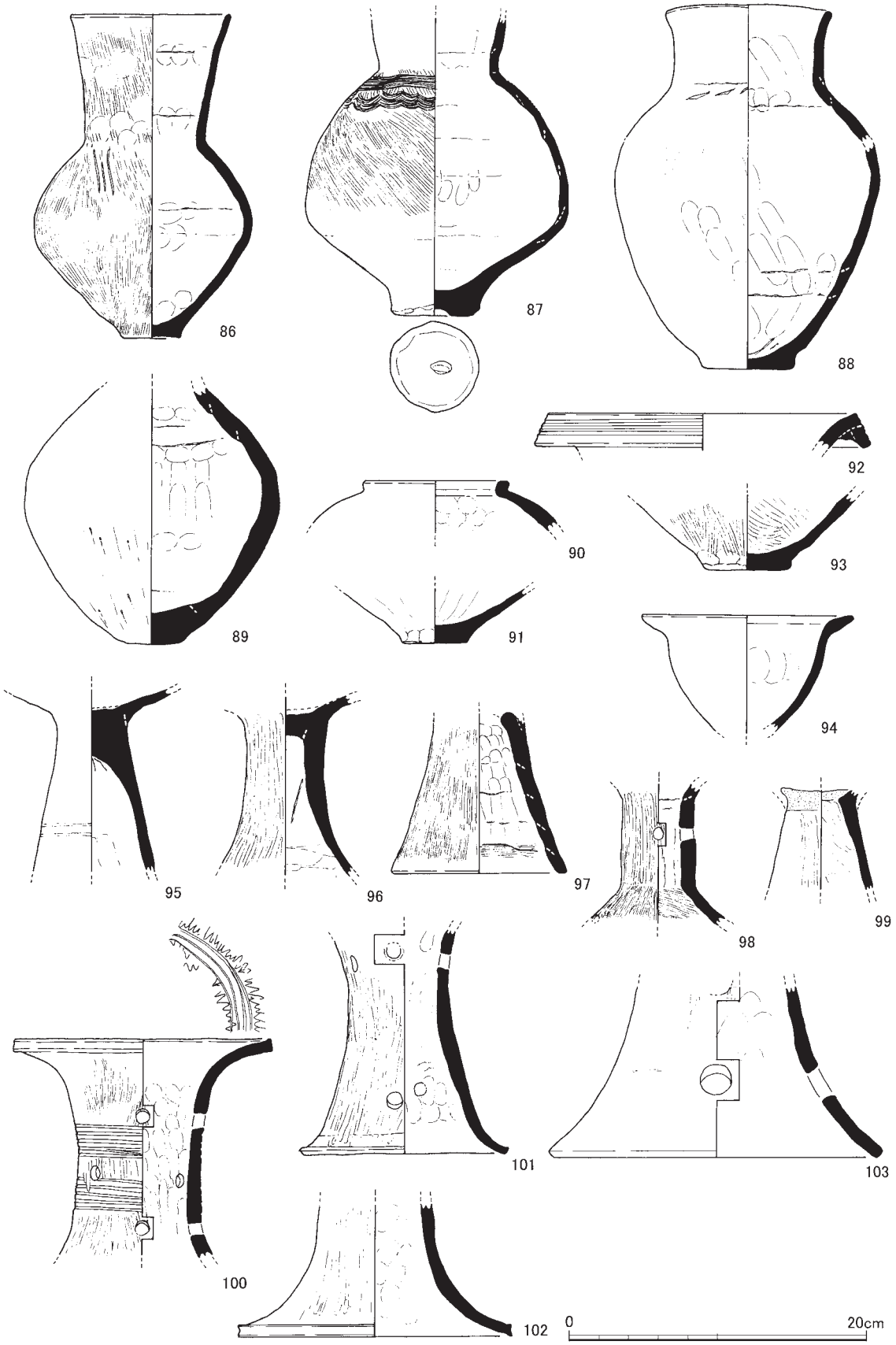
土坑ＳＫ04（第121図80・81）　80は広口壺Ａである。口縁端部外面に下垂部を貼り付け、口縁端面に円形浮文を貼り付ける。口径14.8cm、残存高7.1cmである。81は甕Ａである。口縁端面に沈線状の段が１段つく。体部外面はヘラケズリ調整を施す。口径15.6cm、残存高4.6cmである。

土器溜まりＳＸ14（第121図82・83）　82は広口壺Ｂと思われるが、甕類の可能性もある。口縁部外面にミガキ状の調整がみられる。肩部に刺突文を施すようである。83は底部ａで、甕もしくは鉢の底部と思われる。

土坑ＳＫ09（第121図84）　84は底部ｃである。外面にヘラケズリ調整を施すので、甕の底部と思われる。

土坑ＳＫ11（第121図85）　85は広口壺Ａと考えられる。口縁部外面の下垂部の一部を欠損する。器台の可能性もあるが、傾きから広口壺であろう。口径は27.6cmである。

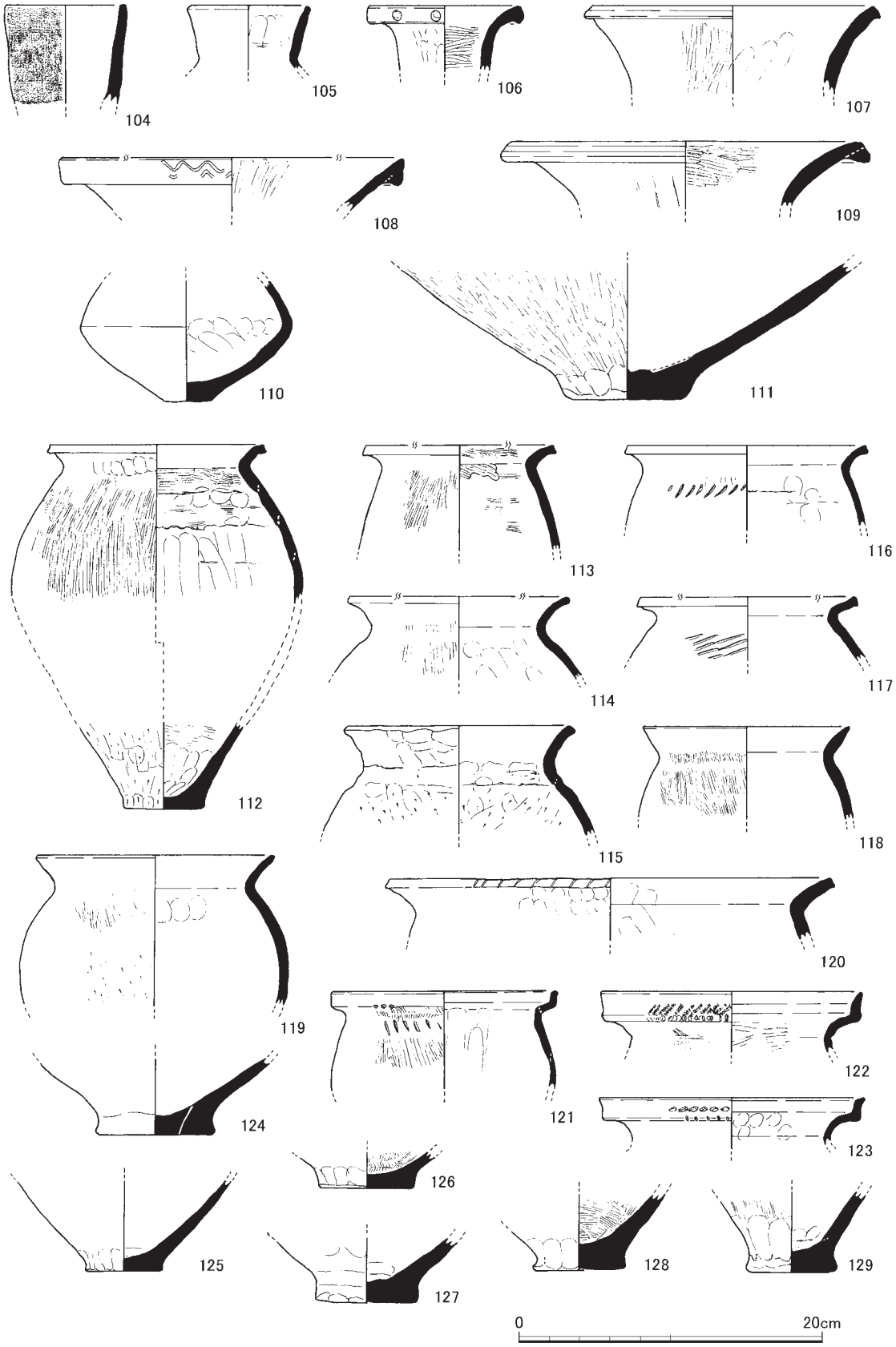
大溝ＳＤ05（第122図86～103）　長頸壺、直口壺、無頸壺、広口壺Ａ、鉢Ｂ、高杯脚部、器台Ａなどが出土した。86は長頸壺で、ほぼ完形である。外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。肩部に３条のヘラ記号を刻む。口径10.6cm、器高21.8cmである。87は直口壺と思われるが、口縁端部を欠損する。体部最大径が体部下半にあり、下膨れ状の形状を呈する。底部は突出度が高い。体部外面上半にハケ調整、体部外面下半にナデ調整を施す。肩部には、ともに６条からなる直線文と波状文を施す。体部最大径が12.6cm、残存高20.0cmである。88は広口壺Ｆ、もしくは直口壺である。直接、接合しないので図上で復原した。全体にナデ調整を多用する。肩部に刺突文らしきものがみられる。口径11.0cm、器高（復原）24.5cmである。89は壺の体部である。ほかの個体にくらべ器壁が厚いのが特徴である。外面にヘラケズリ調整を施すものの、体部の形状か



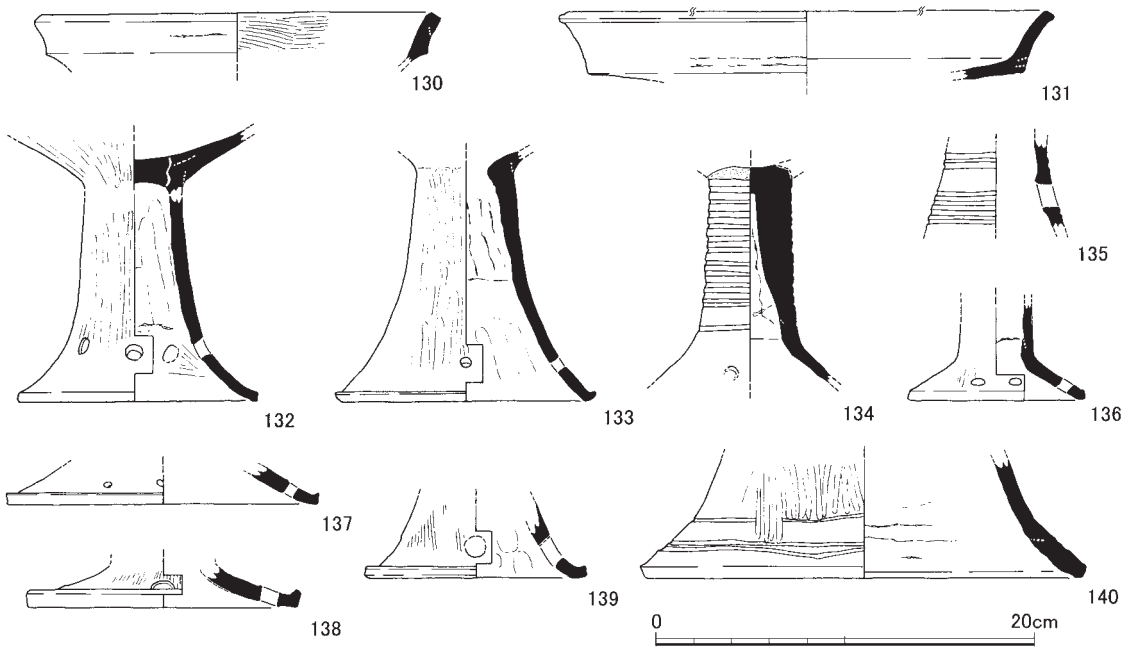
第122図　大溝ＳＤ05出土遺物実測図

ら壺と考えられる。体部最大径17.0cm、残存高17.2cmである。90は無頸壺Ａで、やや小型の器形を呈する。口径は9.7cmである。91は底部ｂである。胎土や色調から90と同一個体と考えられる。92は広口壺Ａである。口縁端部に粘土帯を貼り付けて下垂部を形成する。端面に擬凹線を３条施す。口径は20.3cmである。93は底部ｂである。体部の立ち上がりから、壺の可能性が高い。94は鉢Ｂである。内外面ともナデ調整を施す。外面に煤が付着する。口径14.0cm、残存高7.9cmである。95～97･99は脚部ｃである。95は摩滅が著しいものの、外面に２条の沈線がかすかに認められる。97は外面にハケ調整を施す。内面には脚部成形時の粘土紐の巻き上げ、もしくは輪積みした際の接合痕が明瞭に残っている。これによると、２cm程度の粘土紐を使用していることが分かる。98は脚柱部が少し短いものの、脚部ｂに分類したい。脚柱部に透し孔が４つ、脚裾部で２個確認できる。脚裾部も本来４つの透し孔があったと考えられる。脚柱部外面にヘラミガキ調整、脚裾部内外面にハケ調整を施す。100は器台Ａである。筒部に１段当り４個の透し孔を３段穿孔する。各透し孔の間には５条ずつの沈線を施す。外面にはヘラミガキ調整を施す。口縁端部はややつまみ上げ気味で、その内側に波状文と直線文からなる文様を口縁に沿って施す。文様自体はやや拙い。口径16.0cm、残存高14.7cmである。101･102も口縁部が欠損するものの、器台Ａと思われる。101は筒部に上下２段、４個ずつの透し孔を穿つ。外面にヘラミガキ調整を施す。脚裾径13.4cm、残存高15.1cmである。102は脚裾が大きく開く。外面は摩滅気味であるものの、ヘラミガキ調整を施す。103は大型の器台の筒部から脚裾部にかけての資料である。上下２段に直径２cmほどの透し孔が開けられる。外面に沈線らしきものが１条認められる。脚裾径は21.6cmである。

Ａ地区遺物包含層（第123図104～129、第124図130～140）　長頸壺、広口壺Ａ・Ｂ、甕Ａ・Ｄ、鉢Ｄ、高杯Ｂなどがある。104はやや小型であるが、長頸壺の口縁部であろうか。外面に波状文と直線文を３～４条ずつ３段施す。口径は7.9cmである。105は直口壺の口縁部である。口径は7.5cmである。106は広口壺Ｄである。口縁部端面に円形浮文を貼り付ける。頸部の内外面にヘラミガキ調整を施す。口径は9.8cmである。107は広口壺Ｂである。外面にヘラミガキ調整を施す。口径は8.4cmである。108・109は広口壺Ａである。108は粘土紐を貼り付けて下垂部を形成し、その外面に波状文を施す。109は下垂部に沈線状の凹線を１条施す。内面にはヘラミガキ調整を施す。口径は22.4cmである。110は体部中位に稜を有する壺の体部である。体部最大径は14.0cmである。111は大型の壺底部である。外面にヘラミガキ調整を施すが、内面は全体に剝離・摩滅が著しい。112は甕Ａである。直接、接合しないが、体部上半と底部がある。体部上半外面にハケ調整を、底部外面にヘラケズリ調整を施す。口縁端部は面をなす。体部外面に煤が付着する。口径は14.0cmで、復原高は24.2cmである。113は甕Ｃであろうか。口縁端部にヨコナデ調整を施すほかは、ハケ調整を施す。114・115は甕Ａであるが、頸部がやや丸味を帯びて体部から口縁部に至るものである。115は体部内外面にヘラケズリ調整を施すもので、他に例をみない特徴である。口径は14.6cmである。116は甕Ａである。肩部に刺突文を施す。口径は15.6cmである。117は甕Ｂである。体部外面にタタキ調整を施す。118は甕Ａないし甕Ｃである。口縁端部を丸く納め、体部外面にハケ調整を施す。119は甕Ａである。摩滅が著しいものの、体部外面にハケ調整とヘラケズリ調



第123図　A地区遺物包含層出土遺物実測図（1）



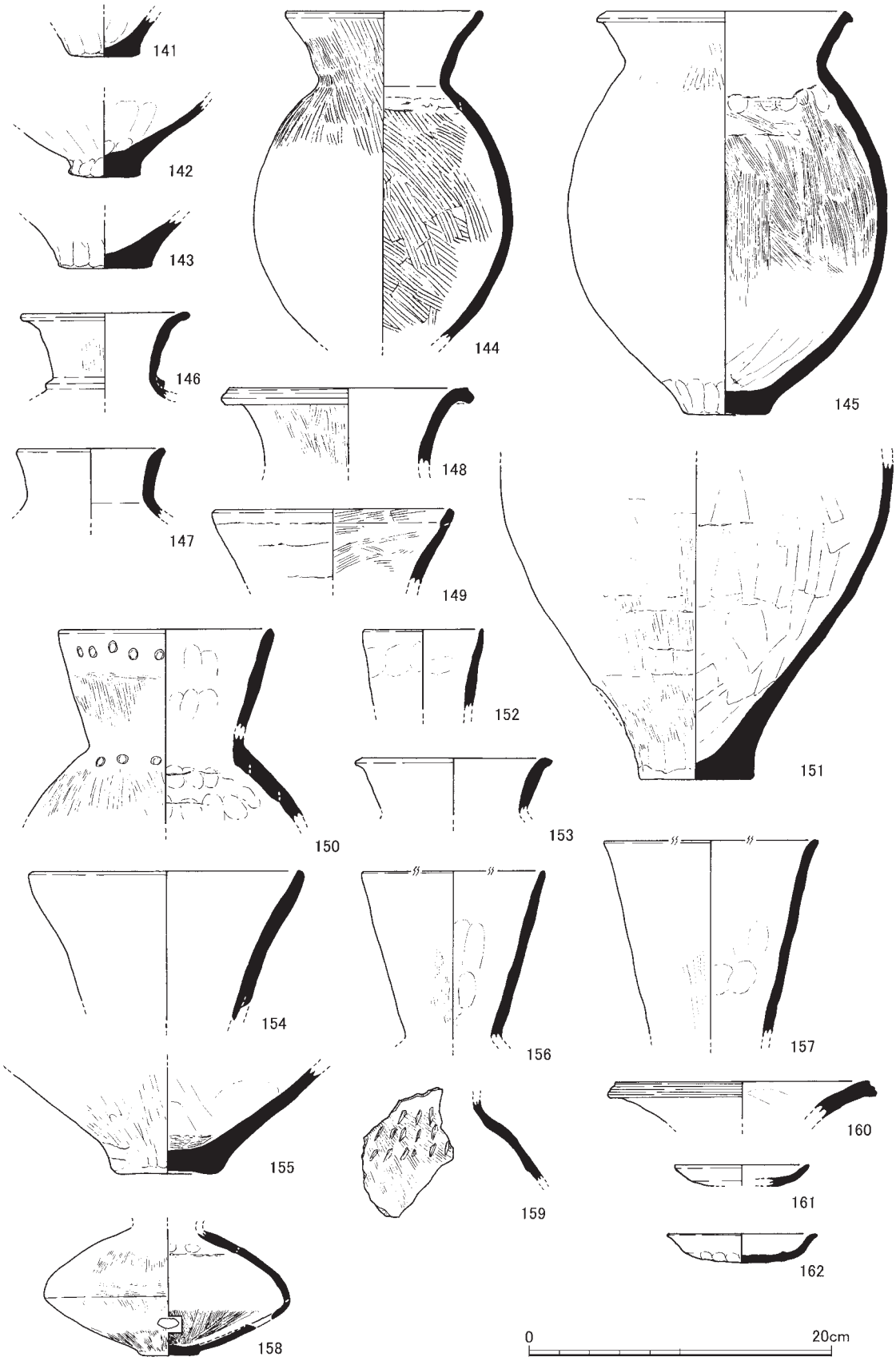
第124図　Ａ地区遺物包含層出土遺物実測図（２）

整の痕跡が認められる。口径は15.4cmである。120は大型の甕である。口縁端面に刻み目を施す。口径は28.8cmである。121は甕Ｄないし鉢Ｄと思われる。口縁部外面に刻み目を、肩部に刺突文を施す。口径は14.6cmである。122・123は甕Ｄである。口縁部外面に列点文や刻み目を施す。122は口径17.0cm、123は口径17.3cmである。胎土や色調から近江地域から搬入されたものと考えられる。124・126・127は底部ａ、125・128・129は底部ｂである。130は高杯Ａである。外面にヨコナデ調整、内面にヘラミガキ調整を施す。口径20.6cmである。131は高杯Ｂと思われる。杯口縁部にヨコナデ調整を施す。132・133は脚部ｃである。ともに摩滅が著しいものの、脚柱部外面にヘラミガキ調整を施す。132は透し孔が４個確認できる。脚裾径12.3cmである。133は透し孔が２個確認できる。脚裾径は12.7cmである。134は脚部ａであろう。脚柱部に12条の沈線を１本ずつ描く。脚裾部には透し孔１個が認められる。135は脚部の破片である。透し孔が１個認められ、その上に沈線を２条、下に沈線を４条施す。136は脚部ａで、やや小型に属するかもしれない。脚裾部の透し孔は２個で１組のものかもしれない。脚裾径9.0cm、残存高5.1cmである。137・138は脚部ａの裾部である。139は脚部ｃの裾部である。透し孔が１個みられる。140は大型の器台の裾部と考えられる。外面にヘラミガキ調整を施し、やや粗雑な沈線を３条施す。脚裾径は22.8cmである。

②Ｂ地区出土遺物

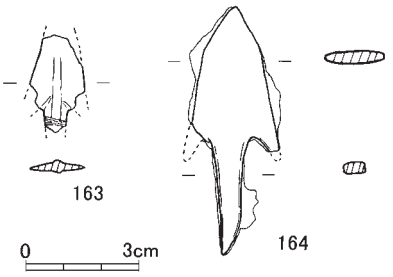
１号墓（第125図141）　少量の土器が出土したのみで、141のみを図示した。141は底部ｃで、甕の底部と思われる。

溝ＳＤ03（第125図142～145）　直口壺、底部ａ・ｂなどが出土した。142は底部ａ、143は底部ｂである。144は接合の困難な資料を図上で復原しながら図化したので、体部の最大径などに若



第125図　B 地区出土遺物実測図

干の不安が残るものの、余り例をみない器形を呈する。口縁は外方に広がりながらも上部でわずかに内湾する。口縁部内面にナデ調整、口縁端部にヨコナデ調整を施す。それ以外は、体部外面が摩滅のため調整不明であるものの、内外面ともに粗いハケ調整を施す。口径13.8cm、残存高22.0cmである。145は器形の上からは壺か甕か判断に苦しむところであるが、外面にナデ調整を施すことや、体部最大径が中位に位置することから壺と考えたい。器種は口縁部の形状から短頸壺とすべきであろうか。口径15.6cm、器高26.7cmである。



第126図　金属器実測図

２号墓（第125図146～157）　広口壺Ｂ・G、直口壺、短頸壺、長頸壺などがある。146は広口壺Ｂである。肩部突帯を貼り付ける。口径は11.0cmである。147は短頸壺と思われる。口径9.4cmである。148は広口壺Ｇである。下垂部を設け、その外面に沈線のような凹線を１条施す。頸部外面はハケ調整である。口径は15.6cmである。149は他に例をみない壺である。口縁端部内面は幅１cmほどの突帯を貼付けたような状況を呈する。口径は15.4cmである。150は直口壺である。直接接合しない口縁部と肩部の破片からなる。外面にハケ調整を施す。口縁部上半部外面と肩部に竹管文を施す。口径13.6cm、残存高12.8cmである。151は甕もしくは壺の底部である。比較的大型品で、外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。残存高は20.8cmである。152は直口壺ないし長頸壺である。いずれにしても小型品であろう。153は短頸壺であろうか。154は口縁部が緩い「Ｓ」字状を呈する壺で、広口壺の一種であろうか。口径は17.6cmである。155は壺の底部である。外面にヘラミガキ調整を施す。156・157は長頸壺であろうか。どちらも小破片のため、口径等は不明である。157の残存高は13.0cmである。

溝ＳＤ01（第125図158）　158は長頸壺の体部である。算盤玉形を呈し、内外面ともハケ調整を施す。体部下半に直径1.3cm前後の焼成後穿孔がみられる。体部最大径16.3cm、残存高8.6cmである。

Ｂ－２地区遺物包含層（第125図159～162）　159は甕Ａの体部片である。外面にハケ調整を施し、肩部に刺突文を３段にわたって施す。刺突文を３段も施す例は木津城山遺跡では確認できていない。160は器台Ｂと思われる。口縁端部に粘土帯の付加は認められないが、端面に２条の擬凹線を施す。161・162は中世の土師器皿と思われる。木津城跡に伴うものであろうか。161は口径8.8cm、残存高1.4cmである。162は口径9.6cm、器高2.0cmである。

(2) 金属器

今回の調査では、金属器として銅鏃と鉄鏃各１点が出土した（第126図）。木津城山遺跡では、このほか、Ｂ－１地区では、第１次調査の際に埋葬施設ＳＸ09から中国製の鏡片が出土している。163はＡ地区の竪穴式住居跡ＳＨ02の周壁排水溝から出土した銅鏃である。残存長2.6cm、残存幅1.45cmを測る。164はB－１地区の埋葬施設ＳＸ18から出土した鉄鏃である。全長6.7cm、残存幅2.5cmを測る。

３）小結

今回の調査では、従来知られていた木津城山遺跡の集落域の広がりを確認するとともに、部分的に知られていた墓域の全容を明らかにすることができた。集落域では集落域を区画するための大溝ＳＤ05を検出した。これより下方に竪穴式住居跡などがみられないことから、前回報告した平坦面と同じように、集落域を区画するための施設であると考える。ただ、この遺構をもって防御的な性格を考えるのは早計であり、今後の類例の増加を待ちたい。

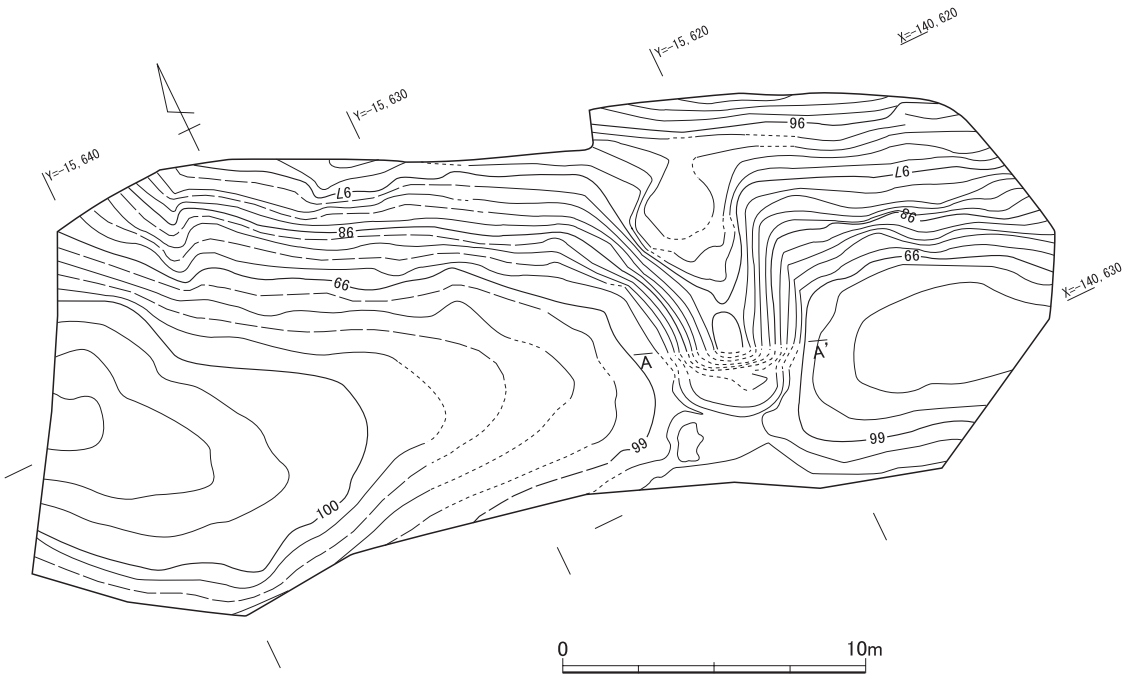
墓域では１つの墳丘に多数の埋葬施設が営まれている状況が確認でき、中期の方形周溝墓群に類似した特徴が指摘できる。また、中心的な埋葬施設が存在せず、規模の大小はあるものの、各埋葬施設が計画的かつ均質的に配置されている。このような埋葬施設の配置から、造墓の契機となった個人が集団の中で突出した地位を獲得していた可能性は低いと考えられる。また、顕著な副葬品がみられない点も注意を要する。以上の点から弥生時代後期前半の段階では、集団から突出したような個人の出現はみられず、弥生時代中期のような家族墓的様相が続いていたと考えられる。しかし、当該地域の後期前半の墳墓としての立地は特異であり、鉄鏃や鏡片の副葬品は類例が知られず、貴重である。

（筒井崇史）

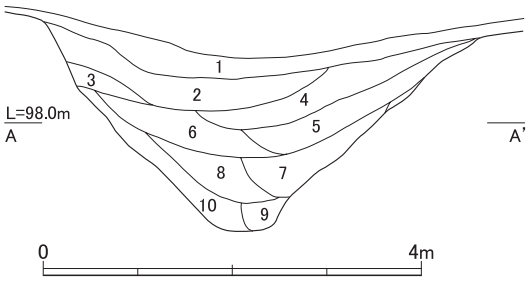
６．木津城跡の調査

１）Ｂ－２地区

Ｂ－２地区は、木津城跡の西限に当たる。調査前の地表面観察では幅約３ｍ、深さ約50cmの堀状遺構が確認できた。調査の結果、幅約4.5m、深さ約1.6mの規模を測る堀切を確認した（第127図）。


Y=-15,640
Y=-15,630
Y=-15,620
X=-140,620
X=-140,630
96
96
96

断面形状は頂部のつぶれた逆三角形を呈していることが明らかになった。堀の北側終端は竪堀にはならず、尾根上から約５ｍのところで西へ振りながら閉塞する。南側は丘陵斜面が急峻なため、安全面に配慮し、終端を確認していない。



1. 淡黄灰色土（最上層 5cm は表土）
2. 黄橙色土
3. 黄灰褐色礫混じり土
4. 橙褐色土
5. 褐色土
6. 暗褐色細礫混じり土（旧表土混じり）
7. 黄褐色土
8. 淡黄褐色小礫混じ土
9. 黄灰色礫土
10. 淡黄白色土（締まっている）

第128図　B-２地区土層断面図

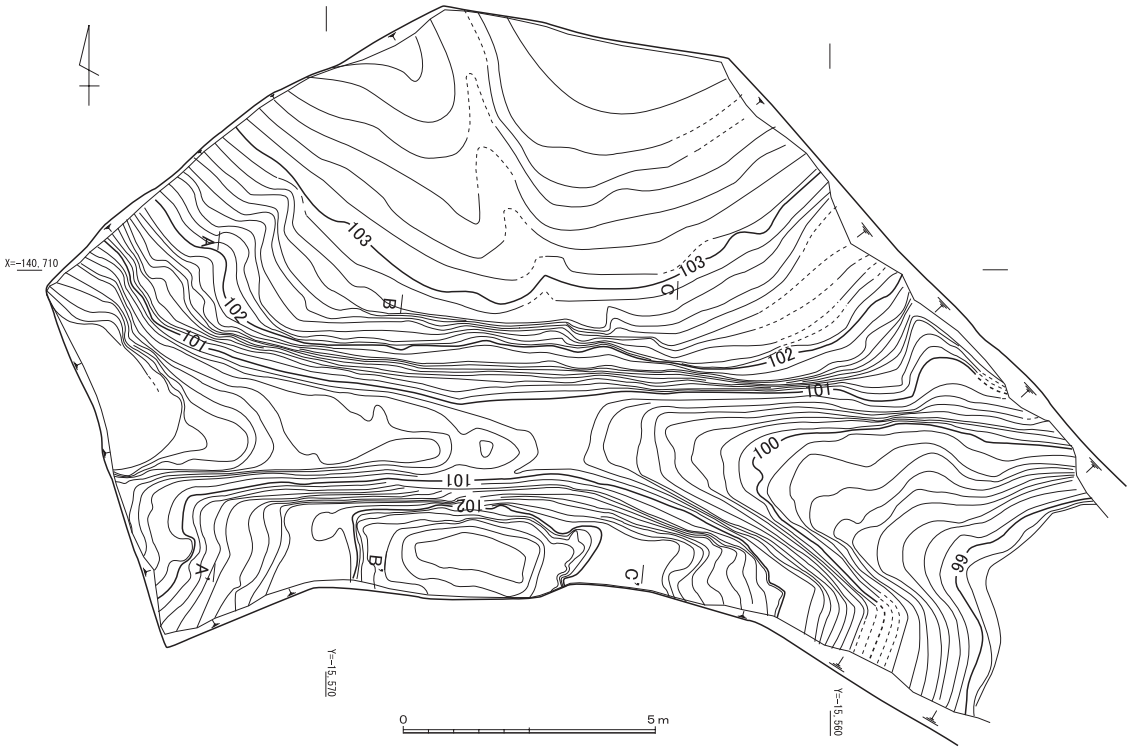
堀の中央部では、堀底から約1.2mの高さまで約45°で立ち上がるが、それより上はさらに傾斜を強め、約65°で上端に至る。一方、西壁は約40°の傾斜のまま上端まで立ち上がる。堀底幅は最も狭い所で約50cmであるが、北へ向かって広くなり、約２ｍとなる。

堀切は、土層の堆積状況から複数回の掘り直しが確認できる（第128図）。埋土には、表土から60～70cmのあたりに焼土混じりの旧表土（第６層）が認められることから、堀の使用時期については大きく分けて２時期あると考えられる。ただし、B-２地区の堀からは木津城跡に関連する遺物が出土していないため、明確な時期については不明である。

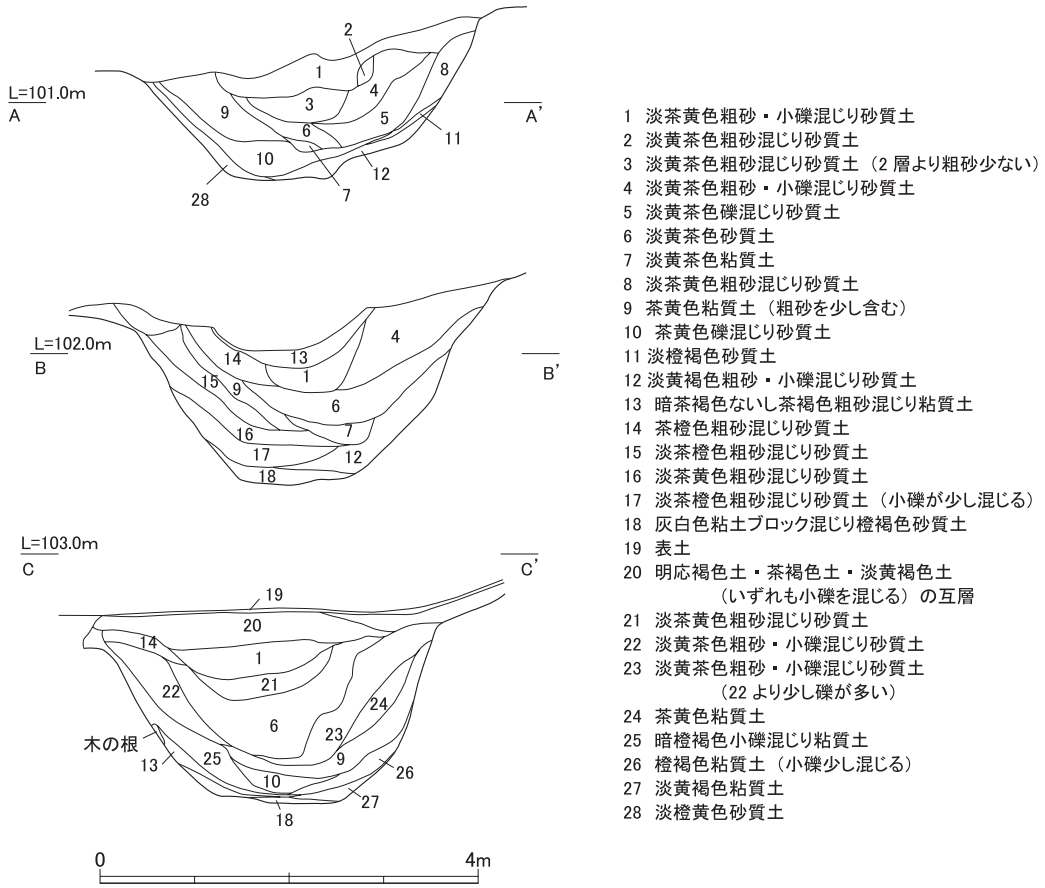
第６層より下層では堀の本来の形状を保つように掘り直しが行われているが、これより上層では城外側のみに掘り直しが行われる。

２）C地区

C地区は、木津城跡の南限に当たる。B-２地区と同様、調査前の地表面観察で幅約３ｍ、深



第129図　C地区地形測量図



第130図　C地区土層断面図

さ約50cmの堀状遺構に、その中央部に土橋を伴うことが確認できた。木津城跡としては最大規模の堀で、尾根を断ち切るように設置されていることが地表面の観察からもうかがうことができた。

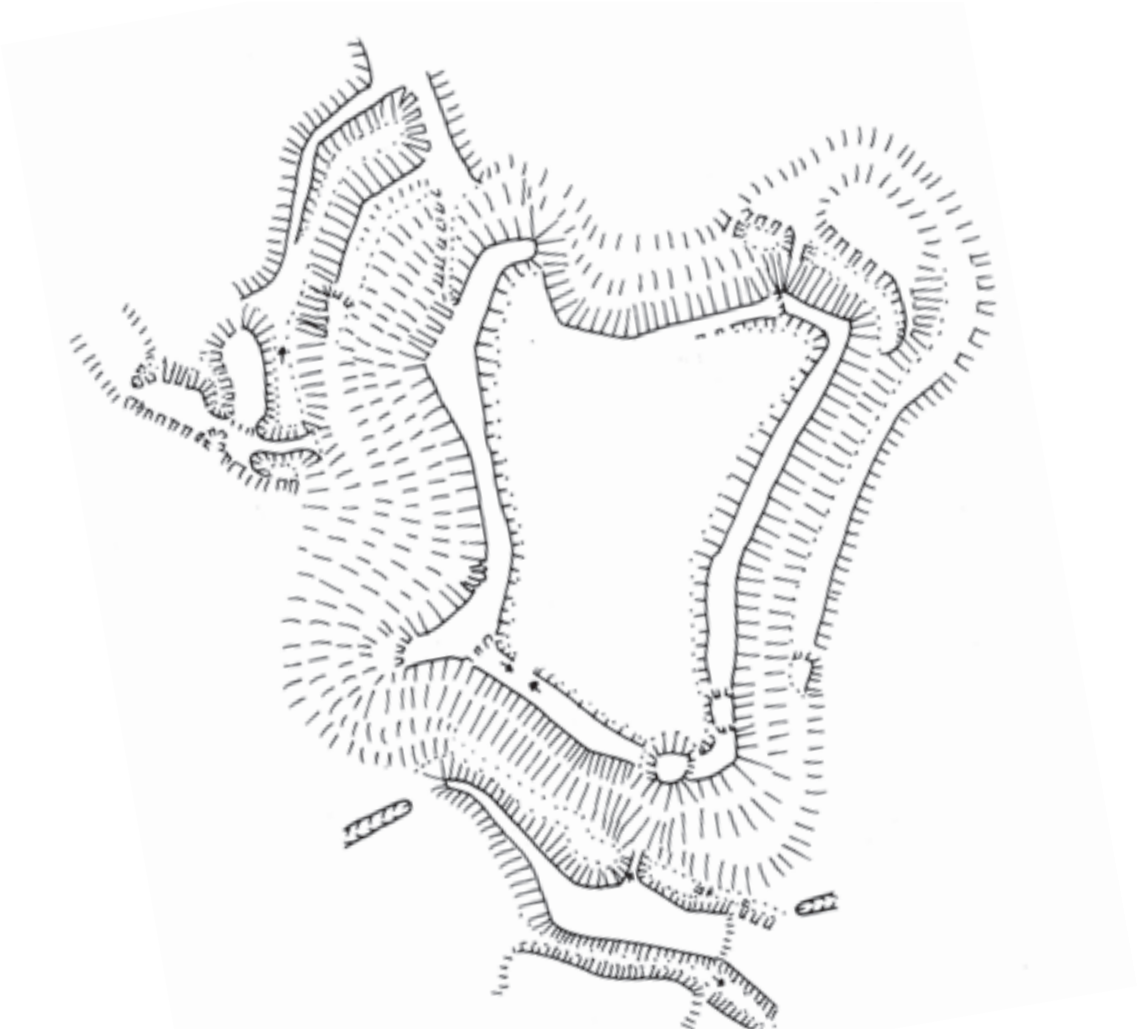
調査の結果、幅約3.5m、深さ約２mの規模を測ることが明らかになった（第129図）。堀切の検出長は18.4mである。堀底の幅は約１mであり、断面形は逆台形状を呈する。堀の両端は、やや広がりながらも上述の堀幅を維持して、竪堀となって尾根裾へと降る。

Ｃ地区の堀にも、複数回の掘り直しが認められる（第130図）。木津城跡に関連する遺物が出土していないため、時期は不明である。ただ21層（Ｃ－Ｃ’断面）が旧表土であることから、B-２地区と同じく使用時期については大きく分けて２時期あると考えられる。

21層より下層で本来の堀の形状を維持するように掘り直しが行われるが、上層では規模が縮小し、城外側へと掘り直しの位置が移動する。

また、土橋の成立時期を知るために断ち割りを行った。地表面の観察では、土橋は木津城跡に伴うものと考えられていた。しかし、調査の結果、堀の堆積土が土橋の下に認められたことから、土橋は堀が埋没した後に、植林等を目的として設けられたと考えられ、木津城に伴うものではないと判断した。

３）木津城跡の検討



第131図　木津城跡縄張り図

今回の調査では、木津城跡の城域を区画する堀を発掘した。堀の埋土の堆積状況から、掘り直しがあったと考えられ、少なくとも２時期あることが分かった。しかし、いずれの堀の埋土からも、城跡に伴う遺物が出土しておらず、堀の掘削時期や補修時期を特定するには至らなかった。また、今回の調査では木津城跡主郭部分の発掘調査は行われていないため、木津城自体の構築年代も不明である。ここでは､主として地表面観察の結果からわかる木津城の構造について検討し、現状における理解を示したい。

木津城跡は、奈良と京都の結節点に位置する。北側には木津川が流れ、他の三方には丘陵が囲む。北東部には谷を挟んで、松永久秀の築城と考えられる鹿背山城が存在している。木津城の北西側には現在でも集落があり、これまで一定の関連性が考えられてきた(注68)。しかし、近年の地籍図による景観復原では、かつては木津川がＪＲ木津駅付近まで南に蛇行しており、集落と木津城は分断されていたことが明らかにされている(注69)。

木津城跡は、周辺の丘陵の最高所に主郭を設ける単郭の城である。この最高所から北東･北西･西・南に向かって支尾根が延びるが、これらに対しては堀切を設けて遮断している。堀切よりも外側では、いずれの尾根も明確な削平地や防御施設を持たないことから、各尾根の堀切の内側ま

でが主たる城域(城内)と考えられる。

主郭の周囲には土塁がめぐる。土塁の高さは、1～1.5mと比較的高く、土塁頂部の幅も大きい。堀切に面を合せるように各部の土塁が屈曲し、南側では櫓台状の高まりも確認できる。また、東南隅では、主郭を巡る土塁が外側へ向かって突出し、張り出しを形成する。ただし、この張り出しに伴う虎口や下位の曲輪などが確認できないことから、一種の見張り台及び射撃台のような施設を想定したい。

主郭南側では、二重の堀が確認できる。内側の堀は横堀で、主郭南側に接して位置している。また、主郭の櫓台状の高まりに対応して、中央部には土橋が設置されている。この土橋の西側の堀が主郭から外へ張りだすように屈曲しており、非常に特徴的な縄張である。ただ、織豊系城郭に見られるような「積極的」な屈曲ではない(注70)。外側の堀が今回調査を行った堀切に当たり、その詳細は先に報告したとおりである。

主郭北西部は、２つの尾根とそれらによって形成された谷地形である。各尾根は谷を横断する横堀によって遮断され、西部の尾根では、さらに前面に堀切を設けて遮断性を高めている。この横堀の直上には、幅２～３mの帯曲輪が設けられている(注71)。北西部の２本の尾根は、南側の尾根に比べてやせており、大きく谷が広がっている。そこからの主郭への直接登攀を避けるために横堀を谷部に設けて２つの尾根と谷を遮断したのであろう。

以上のことから、木津城にとっての防御正面は北西側と考えられる。ただ、堀に屈曲を設け、城内最大の堀切を設ける点から、南側への警戒も怠ってはいない。城そのものの形態は尾根の最高所に単郭を配置するのみといった単純なものであるが、非常に技巧的な城であると言えよう。

（永惠裕和）

４）小結

木津城跡の調査としては、今回初めて発掘調査を実施した。これまで土塁や堀など遺存する地形でしか城の様相をうかがうことはできなかったが、今回の調査で城の防御施設である堀を２条確認し、南山城の要衝である木津城の一端が解明されたことは間違いない。

（筒井崇史・永惠裕和）

（３）鹿背山瓦窯跡第２次

１．これまでの調査

鹿背山瓦窯跡では、過去に重圏文軒丸瓦や焼土が採取されており、瓦窯跡の存在が推定されていたところである。平成18年度の調査（第１次調査）で、ＪＲ西日本軌道地以南の微高地に11か所、微高地端と大井手川間の水田部11か所の合計22か所の試掘トレンチを設けて調査を行った。この結果、微高地端の斜面から１号窯・２号窯の２基の瓦窯を検出したほか、灰原も確認した。

平成19年度の発掘調査（第２次調査）では、１号窯と２号窯を調査した。調査途中で貴重な瓦窯跡であることから、保存の協議がなされたため、上面輪郭を確認したのみである。１号窯は平窯である。２号窯は検出面で確認した焼成室の改築状況から、窖窯から平窯に作り変えているようである。出土した瓦は複弁蓮華文軒丸瓦は平城宮瓦分類6313型式と、均整唐草文軒平瓦で平城宮瓦分類6685型式である。奈良時代中ごろと考えられる。

このほか、微高地上で瓦工房に伴う掘立柱建物跡・道路遺構・粘土採掘跡などを検出したほか、奈良時代のもっこや多量の須恵器の出土など、多くの成果があった。また、微高地上から北西方向に２本の通路を確認した。さらに、平安時代の木炭木槨墓も確認した。

２．平成20年度の調査

平安時代の木炭木槨墓（ＳＸ18）を完掘した。ほとんどは平成19年度調査で確認されており、特にその成果に変更はない。第２次調査の成果を引用すると、この遺構は微高地上にあり、その地点に立つと田辺方面を遠望することができる。墓の主軸は等高線に直交して、ほぼ北を向いている（N11°E）。墓壙掘り方規模は3.0×1.4m、木炭床規模は2.35×0.75m、木炭の厚さは５cmである。木槨規模は2.3×0.65m、深さ0.4mである。鉄釘に木質が遺存しており、この状態から木材の厚さは3.5cm程度である。頭部近くと思われる箇所には灰釉陶器２点が置かれていた。平安時代前期のものである。

古代の文献には橘清友の相楽郡加勢山墓があったことが書かれている。長岡京段階に死亡しているが、墓が築かれたのは平安時代になってからである。なお、清友は嵯峨天皇の皇后橘朝臣嘉智子の父である。このように、相楽郡は橘氏の影響が平安時代にもあったことが知られる。調査地のある丘陵は鹿背山（加勢山）の一角であり、今回出土した墓の主も橘氏である可能性が高い。

現地説明会を平成20年12月21日に実施し、314名の参加があった。平成21年２月に埋め戻し作業を行い調査は終了した。

（伊野近富）

まとめ

馬場南遺跡、木津城山遺跡・木津城跡および鹿背山瓦窯跡の遺跡調査について報告した。

馬場南遺跡は２次にわたる調査で、奈良時代の平城宮や京と関係の深い新発見の寺跡であることが判明した。ここでは、奈良時代中期から後期にかけて、多量の灯明皿を使った法会が何度も行われていたことが確認された。さらに、遺構と遺物の関係、特に墨書土器や木簡から、この遺跡の経営者は国と関係の深い貴族や天皇など､当時のトップクラスが関与したことも想定される。また、一時期は離宮として使用されたことも考えられる。ここでは、万葉集に記載された歌を詠む法会が営まれたことも想像できる。以上、多岐にわたる成果があった。

鹿背山瓦窯跡は、平城京や平城宮に瓦を供給した奈良山瓦窯跡群の東北部に位置する。ここでは、奈良時代中期の瓦窯２基が確認された。さらに、瓦工房に伴う掘立柱建物跡・道路遺構・粘土採掘跡などが検出され、奈良時代の瓦工房の様相を知る上で、重要な調査成果があった。また、平安時代前期の木炭木槨墓（SX18）が検出され、鹿背山が官人の墓地として使用されていたことが判明した。位置から橘氏との関係が窺われる。

木津城山遺跡･木津城跡のうち、木津城山遺跡では６回目の調査で、弥生時代後期の集落跡と、墳墓が確認された。高地性集落の北端が確認できたことと、尾根を１つ隔てたところに墳墓を築いていたことで、集落域と墓域との位置関係が確認できた。木津城跡は初めての調査である。城山の頂上には木津城跡の主郭がある。今回は、もっとも外側の堀２か所を調査した。特に、南側の堀は深く、より主郭に近いところでは、防御を固めていたことが判明した。

以上、今回の調査は多岐にわたる成果があった。今後、この成果を出発点として各方面で活用されることを望む。

（伊野近富）

注１　竹原一彦「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成19年度発掘調査報告　（２）馬場南遺跡」（『京都府遺跡調査報告集』第131冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2009

注２　竹原一彦・柴暁彦「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成19年度発掘調査報告　（１）鹿背山瓦窯跡第２次調査」（『京都府遺跡調査報告集』第131冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2009

注３　伊野近富・戸原和人・伊賀高弘・筒井崇史・山内元基『木津城山遺跡』（『京都府遺跡調査報告書』第32冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003

注４　調査補助員：渡辺理気、大谷博則、兼子拓也、金原裕美子、喜多萌夏、大江克己、鈴井宣雄、中居和志、川原惇司、松元章徳、矢野智史、丸山香代、永恵裕和、山本亜夢、大向智子、中西沙織、土肥香央里、宮澤まなか、原田昌浩

整理員：寺尾貴美子、山田三喜子、長尾美恵子、村上優美子、茶園矢壽子、岡野奈智子、藤井聖名子、川端美恵、徳田智恵子、羽根舞

注５　個々の参考文献・報告書については省略する。

注６　長谷川達「日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-1）』京都府教育委員会）　1982

注７　注１文献では「大溝」として報告したが、遺構の性格を鑑み、本報告では「川跡」とする。

注８　注１文献に同じ

注９　型式名・器種名は以下の文献を参照。

軒瓦

毛利光俊彦「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」（『平城宮発掘調査報告XIII　－内裏の調査Ⅱ－　奈良国立文化財研究所学報』第50冊　奈良国立文化財研究所）　1991

『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』　奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編　奈良市教育委員会　1996

土師器・須恵器

小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」（『平城宮発掘調査報告Ⅶ　奈良国立文化財研究所学報』第26冊　奈良国立文化財研究所）　1976

安田竜太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」（『平城宮発掘調査報告Ⅺ　－第１次大極殿地域の調査－　奈良国立文化財研究所学報』第40冊　奈良国立文化財研究所）　1981

神野恵「土器類」（『平城宮発掘調査報告XVI　－兵部省地区の調査－　奈良文化財研究所学報』第70冊　奈良文化財研究所）　2005

注10　ＳＰ01の柱材については、第１次調査の重機掘削の際に出土したため、第６図には反映されていない。

注11　年輪年代測定は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター大河内隆之氏による。

注12　巽淳一郎「平城京土器の大別」（『平城宮発掘調査報告XIII　－内裏の調査Ⅱ－　奈良国立文化財研究所学報』第50冊　奈良国立文化財研究所）　1991

注13　奈良時代中期に多量に灯明皿を使用した記事がある。天平16（744）年12月８日条「燃燈一万坏」、天平18（746）年10月６日「燈火一万五千七百余坏」など、『続日本紀』に例がある。

注14　土師器供膳具の調整手法は、奈良文化財研究所の報告に準じて以下のような記号を組み合わせて使用する。

①調整手法

・ａ手法　口縁部外面をヨコナデし、底部は未調整のもの

・ｂ手法　口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもの

・ｃ手法　口縁部以下の外面全体をヘラケズリするもの

・ｅ手法　口縁端部を幅狭くヨコナデし、それより下は未調整のもの

②器表面の調整手法

・０手法　ミガキ調整を施さないもの

・１手法　口縁部のみミガキを加えるもの

・２手法　底部のみミガキを加えるもの

・３手法　口縁部から底部にかけてミガキを施すもの

注15　注12文献所載のTab.17を参照。この表から皿Ｅは平城宮土器Ⅰ・Ⅱに盛行すると読み取れる。

注16　注12文献に同じ。

注17　馬場南遺跡で出土した土師器・須恵器の供膳具については、法量による分類が可能である。ただし、これはあくまでも馬場南遺跡における分類であり、必ずしも平城宮・京の調査成果とは対応しない。なお、現時点における所見として、須恵器供膳具における器高の高低による法量の違いはあまり認められない。したがって、法量による分類はすべて口径の違いによる。

注18　馬場南遺跡出土土器の胎土を、平城宮・京出土土器の胎土と同じ群別に分類できる可能性は高いが、比較検討が十分ではないため、本報告では特徴的なものに限って記述することにし、奈良文化財研究所の分類は使用しないこととする。

注19　「奈良県一条高校出土品」（『奈良国立博物館蔵品図版目録』　奈良国立博物館）　1993

注20　墨書土器については、奈良文化財研究所文献資料室の渡辺晃宏氏、山本崇氏、馬場智宏氏に赤外線写真の撮影及び判読等の御協力を得た。

注21　鼓胴:「奈良三彩関係文献目録」（『埋蔵文化財ニュース』106　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）　2002

腰鼓:渡辺信一郎「平等院鳳凰堂と音楽遺産－諸菩薩･諸尊は如何なる音楽を演奏しているか－」（『南山城・宇治地域を中心とする歴史遺産・文化的景観の研究』　京都府立大学）　2009

注22　陝西省考古研究所編『唐李憲墓発掘報告』（「陝西省考古研究所　田野考古報告」第29号　科学出版社）　2005

注23　『史跡　土塔－文字瓦聚成－』　堺市教育委員会　2004

注24　以下の成果は、奈良文化財研究所との共同研究（馬場南遺跡の総合的研究）で、検討会を実施し判読した結果である。特に、渡辺晃宏・馬場基・山本崇の３氏のご協力を得た。

注25　木製品については、以下の文献を参照した。

『木器集成図録　近畿古代編　奈良国立文化財研究所史料』第27冊　奈良国立文化財研究所　1984

注26　墨書については奈良文化財研究所の赤外線写真の判定によるものが多い。

注27　「法隆寺から薬師寺へ」（『日本美術全集』第２巻　講談社）　1990

注28　玉田芳英「平城宮土器編年の細分」（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告　－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－　奈良国立文化財研究所学報』第54冊　奈良国立文化財研究所）　1995

注29　注28文献に同じ

注30　『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』　独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所　2007

注31　奈良文化財研究所客員研究員　川越俊一氏のご教示による。

注32　『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成13年度』　奈良市埋蔵文化財調査センター　2004

注33　注30文献に同じ

注34　巽淳一郎「ＳＤ5100木屑層の土器組成の特質」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告　－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－　奈良国立文化財研究所学報』第54冊　奈良国立文化財研究所)1995

注35　奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI　－兵部省地区の調査－　奈良文化財研究所学報』第70冊　2005　の120頁所載の表７における須恵器壺Mの器種説明による。

注36　巽淳一郎「平城京土器の大別」(『平城宮発掘調査報告XIII　－内裏の調査Ⅱ－　奈良国立文化財研究所学報』第50冊　奈良国立文化財研究所)1991

注37　注36文献に同じ。

注38　底部の破片が多いため、外面ケズリのものはｂ・ｃのいずれか判断しがたい現実があるが、ａ手法でも暗文の無いものがほとんどであることから、相対的に平城宮土器Ⅲより新しい資料であると考えられる。

注39　『続日本紀』天平11(739)年７月14日条、天平16(744)年12月４日･８日条、天平17(745)年９月19日条、天平18(746)年10月６日条。天平17・18年の記事は聖武天皇の不予に関するものである。

注40　鷺森浩幸「建物「殿」についてのノート」(『続日本紀の時代』　続日本紀研究会編　塙書房)　1994

注41　出土部材については、奈良文化財研究所建造物研究室島田敏男、同遺構調査室箱崎和久・大林潤、京都府文化財保護課建造物係鶴岡典慶・中尾正治・菅澤茂・奈良裕美、京都府山城郷土資料館福田敏朗各氏に実見していただき、ご教示いただいた。記して感謝したい。

注42　『小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―　図録』第12冊　奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館　1984

注43　高橋照彦「緑釉水波紋塼の美術考古学的研究―白鳳～奈良時代における浄土の一表現―」(『鹿島美術研究　年報』第19号　財団法人　鹿島美術財団)　2002

注44　『日本の三彩と緑釉』　愛知県陶磁資料館ほか　1998

注45　『都の緑釉瓦』　京都市・帝塚山大学　2007。なお、現物は興福寺森谷執事長・藪中五百樹氏の配慮により実見した。

注46　注43文献と同じ

注47　『特別陳列お水取り　展覧会図録』　奈良国立博物館　2009

注48　注43文献と同じ

注49　注44文献と同じ

注50　注19文献と同じ。現物は奈良国立博物館で実見した。

注51　『展覧会図録　寧楽地寶』　奈良市埋蔵文化財センター　2009

注52　倉田直純他「伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか」(『三重県埋蔵文化財調査報告』92-２　三重県埋蔵文化財センター)　1990、『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館ほか　1998

注53　栄原永遠男「あさかやま歌木簡の発見とその意味　(付)『歌一首』墨書土器」　第30回木簡学会研究集会　2008

注54　森岡隆「万葉歌を記した７世紀後半の木簡の出現」　第30回木簡学会研究集会　2008

注55　栄原永遠男「木簡として見た歌木簡」(『美夫君志』第75号　美夫君志會)　2007

注56　犬養隆「木簡から万葉集を見る」(『墨』202号　芸術新聞社)　2010

注57　注56文献に同じ

注58　平城宮式瓦の同定にあたっては、奈良文化財研究所考古第３研究室今井晃輝・林正憲両氏に実見していただき、多くのご教示を得た。

注59　「武智麻呂伝」(『藤氏家伝』)に邸宅内で仏を拝む表現がある。

注60　注23文献に同じ

注61　注34文献に同じ

注62　現地説明会資料には須弥山様陶器として報告したが、この用語では須弥山を中心とした仏教的世界だけに限定することになる。高橋照彦氏は、これらの製品を文献に見える阿弥陀浄土変を想像して建造された宝塔内部を飾る瑠璃地や池敷とする意見である（注43文献）。そこで、今回は山や水をイメージした製品では多くの人の意見は一致しており、思想的に限定しない彩釉山水陶器として報告した。

注63　上原真人「神雄寺と古代仏教－三彩山水陶器の謎を解く－」（『第114回埋蔵文化財セミナー資料』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2009

注64　注40文献に同じ

注65　注55・56文献に同じ

注66　藤田三郎・松本洋明「大和地域」（『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社）　1989

注67　深江英憲『表山遺跡・池ノ内群集墳』（『兵庫県文化財調査報告』第202冊　兵庫県教育委員会）　2000

注68　中井均「南山城地方の中世城郭跡」（『城』113　関西城郭研究会）　1982

注69　福島克彦『畿内近国の戦国合戦』（吉川弘文館）　2009

注70　織豊系城郭の横堀では、屈曲に伴って虎口が突出する場合や、前後の土塁が屈曲する場合が多い。木津城では、あくまで堀が屈曲するのみであることから、織豊系城郭とは考えがたい。

注71　尾根頂部が狭いため、城内からも曲輪を設けるなどの積極的な防御が行いにくい。むしろ横堀を谷に設けることで、谷から侵入されるのを防いでいると考えられる。また、横堀直上の曲輪が射撃陣地のように機能して、横堀へと侵入した敵兵に対処するものと想定できる。

付編　自然科学的方法による分析結果

１．京都府馬場南遺跡における花粉分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。ここでは、馬場南遺跡における植生および堆積環境を検討する目的で花粉分析を行った。

２．試料

分析試料は、ＳＲ01西端より採取された試料①（万葉歌木簡出土層：暗茶褐色粘質土層、奈良時代）、試料②（万葉歌木簡出土層の下層：暗灰色粘土層、奈良時代）、ＳＲ01中央部（断ち割り７西壁）より採取された試料③（灰色粘性砂質土層、奈良時代）、ＳＲ01北部より採取された試料④（暗灰色粘質土層、奈良時代）、SD2002北東部より採取された試料⑤（暗灰褐色粘性砂質土、彩釉山水陶器「左五」出土層）の計５点である。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3を秤量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、

亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

４．結果

(１)分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの６、草本花粉17、シダ植物胞子２形態の計55である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、２分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、グミ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、クサギ属、ツツジ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵、不明虫卵

(２)花粉群集の特徴

１)ＳＲ01西端(試料①、試料②)：奈良時代

試料①と試料②では出現傾向が類似する。樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く約55％を占める。試料②ではシダ植物胞子が約25％を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、ツガ属

などが出現する。草本花粉ではイネ科を主に、ヨモギ属、セリ亜科、オオバコ属などが出現する。

２）ＳＲ01中央部（断ち割り７西壁）（試料③）：奈良時代

樹木花粉が約85％を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優占し、次いでマツ属複維管束亜属が多い。コナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが低率に出現する。不明虫卵がわずかに検出される。

３）ＳＲ01北部（試料④）・SD2002北部（試料⑤：彩釉山水陶器「左五」出土層）：奈良時代

試料④と試料⑤では出現傾向が類似する。樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約65～70％を占める。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属を主に、シイ属、コナラ属コナラ亜属がやや多く、モミ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが出現する。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）がやや多く出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現する。試料⑤では鞭虫卵がわずかに検出される。

５．花粉分析から推定される植生と環境

１）ＳＲ01西端（試料①、試料②）

堆積地周辺は、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹と、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、ツガ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が分布していたと考えられ、周辺はやや森林の多い環境であった。林縁ないし林床にはシダ植物、イネ科、ヨモギ属、セリ亜科、オオバコ属などが生育していたと思われる。

参考のため行った珪藻分析（表２参照）では、試料①、試料②ともPinnularia subcapitata、Navicula mutica、Navicura contenta、Hantzschia amphioxysを主とする陸生珪藻で占められ、湿った土壌の環境であったと考えられる。常時流れがあったり、滞水したりする河川ではなかった可能性が示唆される。

２）ＳＲ01中央部（試料③）

堆積地周辺は、コナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とする照葉樹林とマツ属複維管束亜属からアカマツ二次林の分布が示唆され、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹およびコナラ属コナラ亜属も分布しており、森林の多い環境であった。林縁には、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などの草本も生育していた。

珪藻は、湿原、池沼、湖沼に広く分布する流水不定性種のGyrosigma ssp.、好止水性種のEunotia minor、流水不定性種で好塩性種のRhopalodia gibberulaが優占種で、流水不定性種が多様に出現する。このことから止水性の滞水域を含む不安定な水域であったと考えられる。

３）ＳＲ01北部（試料④）・SD2002北東部（試料⑤）

堆積地周辺には、マツ属複維管束亜属が多くアカマツ二次林とコナラ属アカガシ亜属を主要とする森林が分布し、シイ属、コナラ属コナラ亜属の広葉樹、モミ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹も分布しており、森林の多い環境であった。わずかではあるがイネ属

型が出現し、近隣に水田の分布が示唆される。試料⑤では生活汚染程度の鞭虫卵が検出され、近接して生活域があったと考えられる。

珪藻分析では、珪藻密度が極めて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した堆積環境であったと推定される。

６．まとめ

ＳＲ01西端の暗茶褐色粘質土層（木簡出土層：奈良時代）では、コナラ属アカガシ亜属とスギを主とする森林が分布し、イネ科を主に草本がやや多く、下部より森林が減少していた。暗灰色粘土層（木簡出土層の下層：奈良時代）、ＳＲ01中央部より採取された灰色粘性砂質土層（奈良時代）、ＳＲ01北部より採取された暗灰色粘質土層（奈良時代）、SD2002北東部より採取された暗灰褐色粘性砂質土（彩釉山水陶器「左五」出土層）では、いずれもマツ属複維管束亜属が多く、アカマツ二次林が上部より多い。ＳＲ01は全体的に著しく流れる環境ではなく、上部では湿地、下部では止水域であった。

参考文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

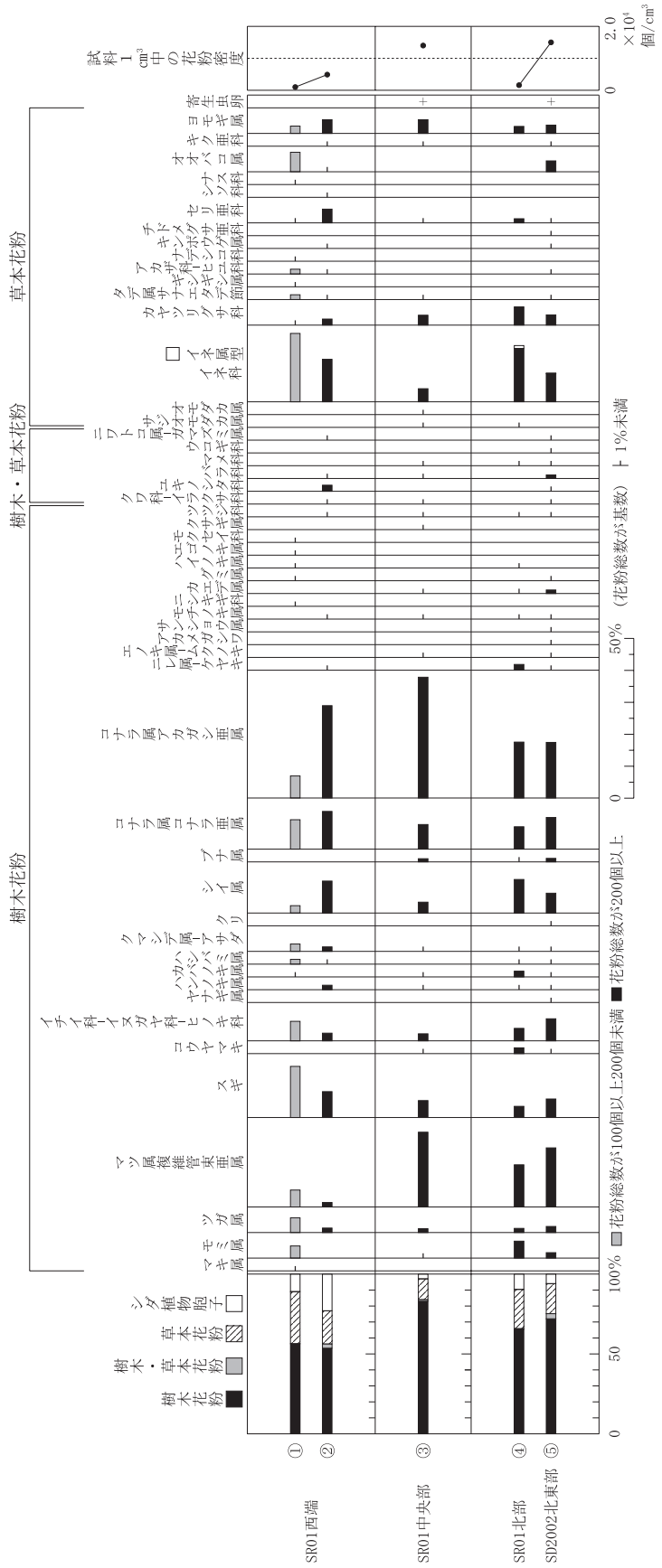
中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13,p.187-193.

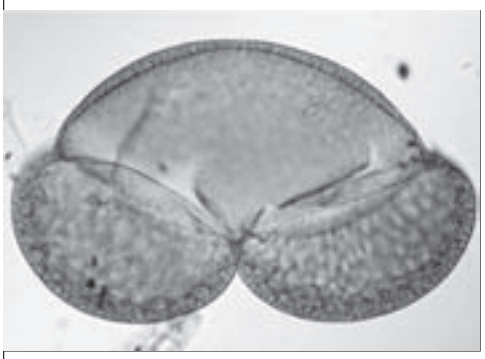
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

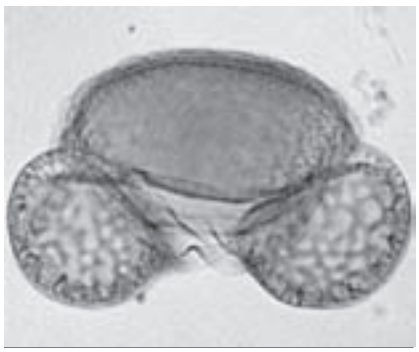
分類群		SR01西端		SR01中央部	SR01北部	SD2002北東部
学名	和名	①	②	③	④	⑤
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属	1				
Abies	モミ属	5		2	12	8
Tsuga	ツガ属	6	3	5	3	9
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	7	3	97	30	86
Cryptomeria japonica	スギ	21	17	22	8	27
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ			1	4	1
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	8	5	9	9	32
Salix	ヤナギ属					1
Alnus	ハンノキ属		3	2	2	4
Betula	カバノキ属	1		1	4	4
Corylus	ハシバミ属	2	2		1	2
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ	3	3	2	2	1
Castanea crenata	クリ					3
Castanopsis	シイ属	3	21	14	24	29
Fagus	ブナ属			4	2	5
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	12	25	32	16	46
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	9	61	157	40	81
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ		2		4	4
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ			1		2
Mallotus japonicus	アカメガシワ					1
Zanthoxylum	サンショウ属					1
Ilex	モチノキ属		1	1	1	1
Celastraceae	ニシキギ科	1				
Acer	カエデ属			3	1	5
Elaeagnus	グミ属	1				1
Symplocos	ハイノキ属	1			1	
Styrax	エゴノキ属	1				
Oleaceae	モクセイ科	1				
Clerodendrum	クサギ属			1		
Ericaceae	ツツジ科		1	1	1	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科		1	2		3
Saxifragaceae	ユキノシタ科		4			1
Rosaceae	バラ科		1	1		5
Leguminosae	マメ科			1	1	2
Araliaceae	ウコギ科					1
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属−ガマズミ属		1			4
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Alisma	サジオモダカ属			1	1	
Sagittaria	オモダカ属			3		
Gramineae	イネ科	28	28	17	38	41
Oryza type	イネ属型				2	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	4	13	13	15
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	2	2	2		1
Rumex	ギシギシ属	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	2	1			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1				
Ranunculus	キンポウゲ属		1			1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科					1
Apioideae	セリ亜科	1	9	1	3	2
Labiatae	シソ科		1			
Solanaceae	ナス科	1				
Plantago	オオバコ属	8	1			16
Asteroideae	キク亜科		1	1		2
Artemisia	ヨモギ属	3	9	18	5	12
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	12	48	8	15	17
Trilate type spore	三条溝胞子	4	15	5	9	13
Arboreal pollen	樹木花粉	83	147	355	165	356
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	7	4	1	16
Nonarboreal pollen	草本花粉	48	57	56	62	93
Total pollen	花粉総数	131	211	415	228	465
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	1.0 ×10^3	4.9 ×10^3	1.4 ×10^4	1.6 ×10^3	1.5 ×10^4
Unknown pollen	未同定花粉	13	14	8	7	20
Fern spore	シダ植物胞子	16	63	13	24	30
Helminth eggs	寄生虫卵					
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵					1
Unknown eggs	不明虫卵			1		
Total	計	0	0	1	0	1
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	6.0	0.0	7.0
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物		(+)			


樹木花粉
樹木・草本花粉
草本花粉
樹木花粉
樹木・草本花粉
草本花粉
シダ植物胞子
マキ属
モミ属
ツガ属
マツ属複維管束亜属
スギ
コウヤマキ科
ヒノキ科
イチイ科－イヌガヤ科
ヤナギ属
ナンキンハゼ属
ハンノキ属
ハコヤナギ属
クマシデ属
アサダ属
クリ属
シイ属
ブナ属
コナラ属コナラ亜属
コナラ属アカガシ亜属
エノキ属－ムクノキ属
ニレ属－ケヤキ属
アサ
カンモミジ
チシャノキ属
ハエモモ
イヌビワ属
クワ科
ヤエムグラ属
ヤブムラサキ属
ヤブコウジ属
ヤブツバキ属
ヤブニッケイ属
ヤブミョウガ属
ヤブラン属
ヤマノイモ属
ヤマブキ属
ヤマボウシ属
ヤマモガシ属
ヤマユリ属
ヤマヨモギ属
ヤマリンゴ属
ヤムシロ属
ヤリイカ属
ヤリスゲ属
ヤワラシダ属
ユキノシタ属
ユズリハ属
ユズリハ属
ユリ科
ユリ属
ユリ属
ユリ属

分類群	SR01西端 ①	SR01西端 ②	SR01中央部 ③	SR01北部 ④	SD2002北東部 ⑤
貧塩性種（淡水生種）					
Achnanthes exigua		1			
Amphora montana	6	13			
Amphora spp.		1			
Cocconeis placentula			1		
Cymbella gracilis			8		
Cymbella naviculiformis			2		
Cymbella silesiaca		2	17		
Denticula spp.		1			
Diatomella balfouriana			1		
Diploneis elliptica		2	2		
Diploneis spp.		2	2		
Eunotia bilunaris			1		
Eunotia minor		2	62		
Eunotia praerupta		1	1		
Fragilaria construens	1		1		
Frustulia rhomboides v. *saxonica*			2		
Frustulia vulgaris	1		8		
Gomphonema augur			2		
Gomphonema clevei			1		
Gomphonema gracile		2	10		
Gomphonema minutum			15		
Gomphonema parvulum	1		3		
Gyrosigma spp.			55		
Hantzschia amphioxys	29	23	3		
Navicula confervacea		1			
Navicula contenta	29	15	1		
Navicula cryptocephala			1		
Navicula elginensis	1	1			
Navicula goeppertiana		1	2		
Navicula kotschyi	1	1			
Navicula laevissima		1	1		
Navicula menisculus	2	6			
Navicula mutica	48	54	3		
Navicula spp.	5				
Neidium ampliatum		2	5		
Nitzschia palea	20	14	13		
Pinnularia appendiculata	19	4	2		
Pinnularia borealis	5	10			
Pinnularia gibba			22		
Pinnularia microstauron	8	9	4		
Pinnularia schroederii	3	1	1		
Pinnularia spp.	3	2			
Pinnularia subcapitata	134	32	5		
Pinnularia viridis			18		
Stauroneis phoenicenteron			5		
Stauroneis smithii			3		
Surirella tenera			4		
Synedra ulna			2		
Tabellaria fenestrata-flocculosa	1		7		
中−貧塩性種（汽−淡水生種）					
Rhopalodia gibberula			35		
合　計	317	204	331	0	0
未同定	7	6	6	0	0
破片	87	57	107	2	0
試料1cm^{3}中の殻数密度	2.9 ×10^5	7.7 ×10^4	2.3 ×10^5	0.0	0.0
完形殻保存率（%）	78.8	78.7	75.9	−	−



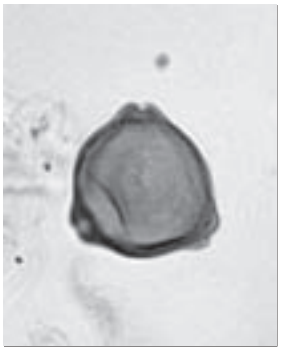
1　モミ属



2　マツ属複維管束亜属

3　スギ

4　イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科



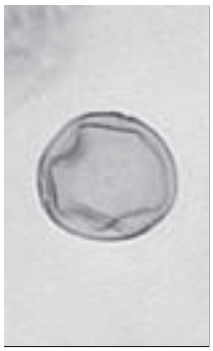
5　カバノキ属

6　シイ属

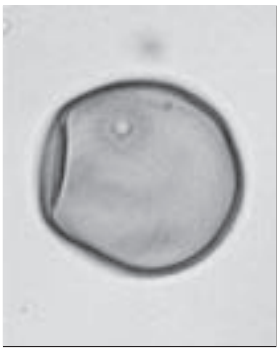
7　コナラ属コナラ亜属

8　コナラ属
アカガシ亜属

9　モチノキ属



10　クワ科
-イラクサ科



11　イネ科

12　カヤツリグサ科

13　オオバコ属

14　ヨモギ属

15　シダ植物単条溝胞子

16　鞭虫卵

1 ━ 10μm、 2-16 ━ 10μm

２．京都府馬場南遺跡出土漆器の塗膜構造調査

㈱吉田生物研究所

１．はじめに

京都府に所在する馬場南遺跡から出土した漆器（ＳＤ2002北部：第66図850）について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

２．調査資料

調査した資料は、表１に示す奈良時代の黒色の漆器１点である。

表１　調査資料

No.	保存処理 No.	品名	樹種＊	概　　要
1	1	漆蓋	アスナロ属	一辺約 15cm、高さ約２cm の平面正方形の蓋。内外両面ともに黒色の漆膜が全面に観察される。

＊：樹種については、別稿の樹種同定報告書を参照のこと。

３．調査方法

表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

４．断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表２に示す。

表２　断面観察結果表

No.	器種	部位	写真 No.	塗膜構造（下層から）		
				下　地		漆　層　構　造
				膠着剤	混和材	
1	漆蓋	内面	２・３	漆	地の粉	透明漆１層（精製度低い）／透明漆１層
		外面	５・６	漆	地の粉	透明漆１層（精製度低い）／透明漆１層

塗膜構造：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地：内外両面とも木胎の上に黄褐色の漆に地の粉を混和した地の粉漆下地がみられた。

漆層： 下地の上に２層の漆層が観察された。内外両面とも下層から、精製度が低く細かな気泡を多数含む透明漆、その上に比較的精製された透明漆が重なる。この上層の透明漆の表面部分は褐色に変色し、さらに層方向と垂直方向に亀裂が多数走る。

５．摘要

京都府に所在する馬場南遺跡から出土した、奈良時代の漆蓋の塗膜構造を調査した。内外面と

も同様の層構造を呈していた。漆に地の粉を混和した地の粉漆下地の上に２層の漆層の塗り重ねが認められた。そのうち下層には精製度の低い漆、上層には比較的精製された漆が用いられていた。

これまでに調査された奈良時代の漆器の塗膜構造*と比較すると、漆層の塗り重ねが少ない、漆層に黒色顔料の油煙が混和されていない、木胎の上に布着せが施されていない、などの相違点が認められ、今回調査した蓋の塗膜構造は、比較的簡素な様相を呈しているといえる。

＊：成瀬正和（平成14年）「古櫃の漆塗膜構造調査」『正倉院紀要』第24号

写真１　No.1 内面

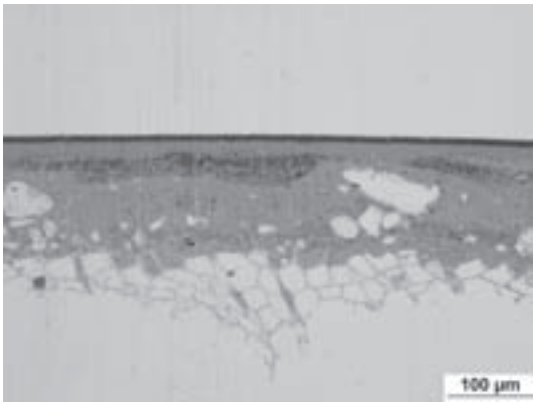


写真２　No.1 内面の断面写真

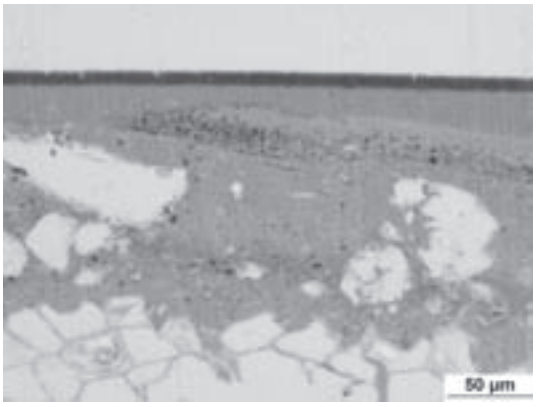


写真３　No.1 内面の断面写真

写真４　No.1 外面

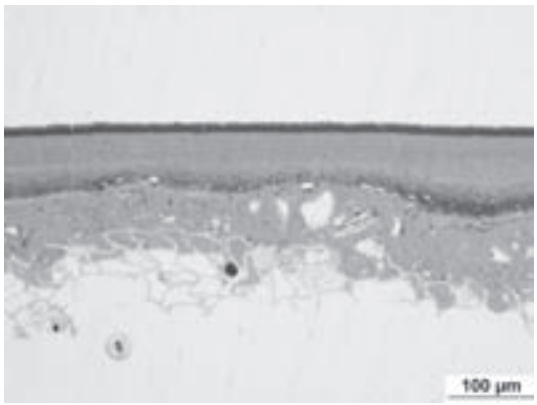


写真５　No.1 外面の断面写真

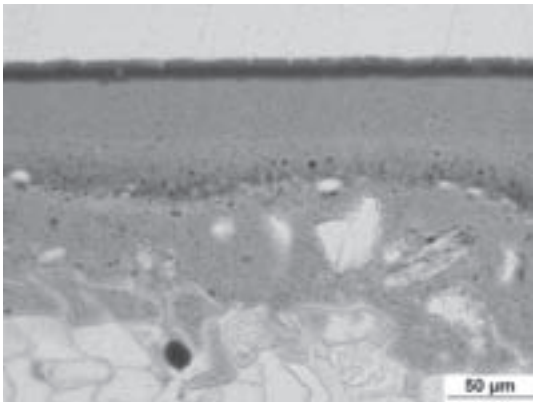


写真６　No.1 外面の断面写真

３．京都府馬場南遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

１．試料

試料は京都府馬場南遺跡から出土した容器１点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）

（遺物No.1A,1B）

（写真No.1A,1B）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社 （1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

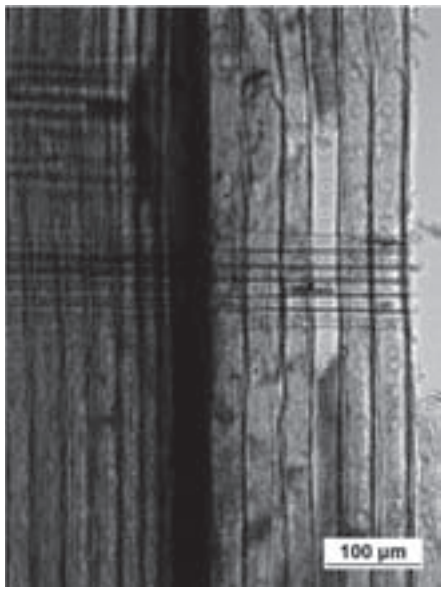
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

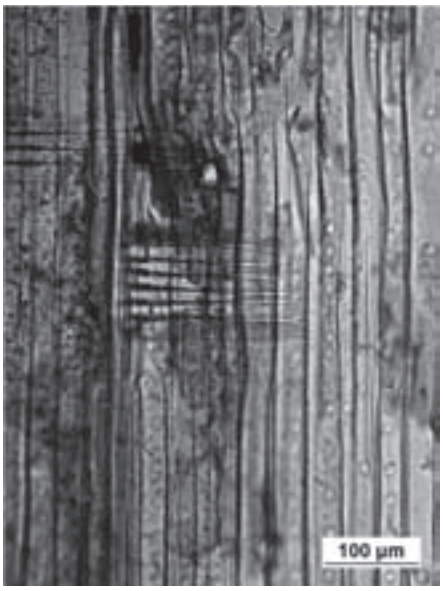
京都府馬場南遺跡出土木製品同定表

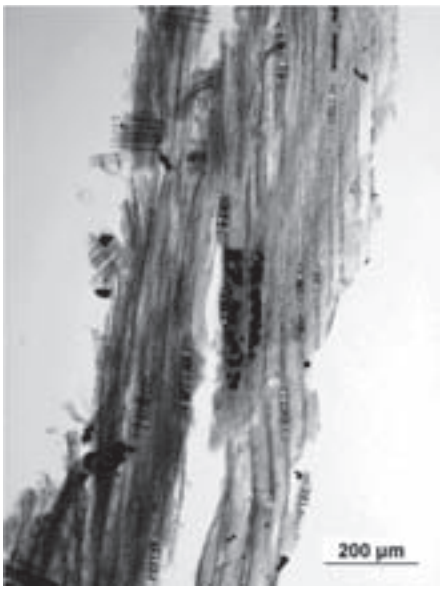
No.	品　名	樹　種
1	A 漆器蓋（底板）	ヒノキ科アスナロ属
	B　〃（側板）	ヒノキ科アスナロ属



柾目　　板目

No-1A　ヒノキ科アスナロ属





柾目　　板目

No-1B　ヒノキ科アスナロ属

付表14　緑釉・三彩陶器一覧表

番号	報告番号	器　形	出　土　遺　構	
1	675	蓋	SR01	10区
2	676	塔鋺蓋	SR01	3区
3	677	小壺	SR01	10区（断ち割り19）
4	678	壺頸部	SR01	5区
5	679	壺高台	SR01	7区
6	680	壺高台	SR01	10区
7	681	壺底部	遺物包含層	
8	682	壺高台	SR01	8～9区
9	683	蓋	SR01	7区（断ち割り15）
10	684	浄瓶頸部	SR01	8区
11	685	多口瓶／浄瓶脚	SR01	7区
12	686	托	SR01	3区
13	687	香炉	SD2002	
14	688	杯高台	SR01	4区（断ち割り10の西）
15	689	香炉片	SR01	5区
16	690	香炉	SR01	5区　北肩
17	691	香炉片	SR01	5区
18	692	獣脚	SR01	3区
19	693	火舎型香炉	SR01	8区
20	－	杯蓋	SR01	3区　北肩
21	－	壺口縁か	SR01	4区（断ち割り10）
22	－	香炉片（小）	SR01	4区（断ち割り4）
23	－	壺体部	SR01	4区
24	－	不明（細片）	SR01	5区
25	－	壺／鉢	SR01	8区
26	－	蓋か	SR01	8区
27	－	不明	SR01	8区
28	－	蓋	SR01	8区
29	－	杯か	SR01	8区（断ち割り16～17）
30	－	不明	SR01	9区
31	－	供膳具	SR01	10区
32	－	不明	SR01	10区
33	－	香炉片か	SR01	10区（断ち割り19）
34	－	壺か	SR01	11区
35	－	不明（細片）	遺物包含層	

付表15　彩釉山水陶器一覧表

番号	報告番号	種　類	出　土　遺　構	
1	694	山・水波紋	SD2002	北端上層
2	695	水波紋	SR01	10区（断ち割り19）
3	696	山・水波紋	SX2020	
4	697	山（洞窟か）	SX2020	
5	698	山	SR01	4区（断ち割り10）
6	699	山	SX2020	
7	700	山	SD2002	北部
8	701	山・水波紋	SD2002	北部
9	702	水波紋	SR01	3区（断ち割り4）
10	703	水波紋	SD2002	南部
11	704	水波紋＋魚	SR01	5区（断ち割り7北肩）
12	705	水波紋	SR01	5区
13	706	水波紋	SR01	5区
14	707	水波紋	SD2054	東肩
15	708	水波紋	SX2020	
16	709	水波紋	SR01	7区上層重機掘削
17	－	山	SD2002	北部
19	－	水波紋	SD2002	北部（灰褐色粘質土）
21	－	水波紋	SR01	1区南部
22	－	水波紋	SR01	1区南部
23	－	水波紋	SR01	3区
24	－	山	SR01	3区
25	－	池か	SR01	3区
26	－	山か	SR01	3区
27	－	山	SR01	4区
28	－	水波紋	SR01	4区（断ち割り10～11）
29	－	水波紋	SR01	5区北肩
30	－	水波紋・不明	SR01	5区（断ち割り7の東）
32	－	水波紋	SR01	5区
33	－	裏面	SR01	5区
34	－	山か	SR01	5区
35	－	山	SR01	5区
36	－	不明	SR01	7区（断ち割り14～15）
37	－	山か	SR01	7区（断ち割り15～16）
38	－	水波紋	SR01	⑧区
39	－	水波紋	SR01	⑧区
40	－	水波紋	SR01	10区
43	－	山か	SX2020	
46	－	山裾か	SX2020	
47	－	山	SX2020	
48	－	水波紋	SX2020	
49	－	山か	SX2020	
50	－	不明	SX2020	
51	－	山か	SX2020	
52	－	不明	SX2020	
53	－	不明	SX2020	
54	－	山裾か	SX2020	
55	－	山か	SX2020	
56	－	不明	SX2020	
57	－	山か	SX2020	
58	－	山	SX2020	

付表16　墨書土器一覧表

番号	報告番号	出　土　遺　構		釈　　文	種　類	器　種	墨書部位
1	710	SR01	10 区	「神寺」「粟」	土師器	杯 / 皿	底部外面
2	711	遺物包含層		「神□〔雄ヵ〕」	土師器	杯 / 皿	外面
3	712	SR01	7 区　南肩	「神寺」	土師器	皿 A	底部外面
4	713	SR01	10 区	「神寺」	土師器	皿 A	底部外面
5	714	SR01	6 区	「神□」	土師器	皿	底部外面
6	715	SD2054		「□〔神ヵ〕□」	土師器	皿 A	底部外面
7	716	SR01	8 区　断 16 ～ 17	「神」	須恵器	杯 A	底部外面
8	717	SR01	10 区	「神ヵ」	土師器	杯 / 皿	底部外面
9	718	SR01	5 区	「神」	須恵器	皿 C	底部外面
10	719	SR01	9 区	「神ヵ」	土師器	杯 / 皿	底部外面
11	720	SR01	6 区	「神雄」/「神雄寺」	土師器	杯 / 皿	底部内外面
12	721	SR01	7 区	「神□〔雄ヵ〕」	須恵器	杯 A	底部外面
13	722	SR01	8 区　断 16	「神雄寺」	須恵器	杯	底部外面
14	723	遺物包含層		「神寺」	土師器	杯 / 皿	底部外面
15	724	SR01	8 区	「神寺」	土師器	杯 / 皿	底部外面
16	725	SR01	8 区	「神雄」	須恵器	杯 A	底部外面
17	726	SX2049		「神雄寺」	須恵器	杯 B	底部外面
18	727	SR01	7 区	「神尾」	土師器	蓋	つまみ頂部
19	728	SR01	4 区 - か	「神雄寺ヵ」	土師器	皿 A	底部外面
20	729	SR01	6 区	「寺」	土師器	皿 A	底部外面
21	730	SD2002		「寺寺」	須恵器	杯蓋	外面
22	731	SR01	6 区	「寺」	須恵器	盤	口縁内面
23	732	遺物包含層		「□〔寺ヵ〕」	土師器	皿	底部外面
24	733	SR01	7 区　断 14 西	「寺」	土師器？	杯 B	底部外面
25	734	SR01	10 区　断 19 南掘削	「□□ / □利諸 / □」「□ / 四升受」	須恵器	杯	底部外面
26	735	SR01	10 区　北半	「造瓦」	須恵器	杯 B	底部外面
27	736	SR01	10 区　断 19 南掘削	「本」	須恵器	杯	底部外面
28	737	SR01	10・11 区	「毛」	須恵器	蓋	外面
29	738	SD2002		「左木」	須恵器	杯 B	底部外面
30	739	SR01	8 区	「□橋寺」	須恵器	杯 B	底部外面
31	740	SR01	4 区	「黄葉」	須恵器	杯 B	底部外面
32	741	SR01	7 区	「黄」	須恵器	杯 A	底部外面
33	742	SR01	4 区	「□瑳田」	須恵器	杯蓋	外面
34	743	SR01	9 区　南半黒色系粘土	「□□〔悔過ヵ〕」	須恵器	杯 A	底部外面
35	744	SD2002		「角」	須恵器	杯 A	底部外面
36	745	SR01	4 区　断 10 東	「大」	須恵器	杯 B	底部外面
37	746	SR01	7 区　断 14 西	「□」寺ヵ	須恵器	蓋	外面
38	747	SR01	6 区	「北」	須恵器	蓋	外面
39	748	SR01	5 区	「□」	須恵器	杯 A	底部外面
40	749	SR01	11 区	「乙」	須恵器	杯 B	口縁外面
41	750	SR01	5 区	「□」	須恵器	蓋	内外面
42	751	SR01	5 区	「□」	須恵器	皿 A	底部外面
43	752	SD2002		人面墨描	須恵器	蓋	外面
44	753	SR01	4 区 - の	「浄ヵ」	土師器	皿 C	底部外面
45	754	SR01	5 区	「浄」	土師器	皿 C	底部外面
46	755	SR01	11 区	絵（花ヵ）	土師器	皿 C	底部外面
47	756	SR01	10 区	「田」	土師器	椀 A	底部外面
48	757	SR01	10 区	「印ヵ」	土師器	杯	底部外面
49	758	SD2054		「□〔神ヵ〕」	土師器	皿 A	口縁内面
50	759	SD2002		「□」	土師器	皿 A	底部外面

番号	報告番号	出土遺構		釈文	種類	器種	墨書部位
51	760	遺物包含層		「□」	土師器	皿A	底部外面
52	761	SR01	10区　北半	「□」	土師器	皿A	底部外面
53	762	SR01	9区	「大殿」	土師器	杯／皿	底部外面
55	763・764	SR01	8区　断17	絵（蓮ヵ）	土師器	杯／皿	底部外面
56	765	SR01	8区　断18	絵（蓮ヵ）	土師器	杯／蓋	内外面
57	766	SR01	10区	「□」	土師器	杯A	底部外面
58	767	SR01	4区	記号ヵ「ℓ」	土師器	杯A	底部外面
59	768	SR01	5区	「□〔大ヵ〕」	土師器	皿A	底部外面
60	－	SR01（旧14tr）	1区	「□□」	土師器	皿A	底部外面
61	－	SR01	3区-こ	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
62	－	SR01	4区　断11	「□」	土師器	杯C	底部外面
63	－	SR01	4区	線画	土師器	盤	体部外面
64	－	SR01	4区-ね	「○」	土師器	皿C	口縁部外面
65	－	SR01	4区-へ	（線）	土師器	杯／皿	内面
66	－	SR01	6区　断13～14	「□〔神ヵ〕」	土師器	杯／皿	底部外面
67	－	SR01	6区　南肩	「神ヵ」	土師器	杯／皿	底部外面
68	－	SR01	6区	「□□」	土師器	杯／皿	底部外面
69	－	SR01	6区	「□」	土師器	杯／皿	内面
70	－	SR01	6区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
71	－	SR01	7区	「□□□〔神雄寺ヵ〕」	土師器	杯／皿	底部外面
72	－	SR01	7区　断14	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
73	－	SR01	7区　断15	「神ヵ」	土師器	杯／皿	底部外面
74	－	SR01	7区　断14	「□」	土師器	皿	底部外面
75	－	SR01	7区　断15西	「□者」	黒色土器	杯A	底部外面
76	－	SR01	7区　断15西	「神寺ヵ」	土師器	杯C	底部外面
77	－	SR01	7区　断15西	「□」	須恵器	杯／皿	底部外面
78	－	SR01	7区	「雄ヵ寺」	須恵器	不明	底部外面
79	－	SR01	7区　断14西	「□」	須恵器	杯B	底部外面
80	－	SR01	8～9区	「□」	須恵器	杯A	底部外面
81	－	SR01	8～9区	墨痕	土師器	皿A	底部外面
82	－	SR01	8～9区	「□□」	土師器	椀Cか	外面
83	－	SR01	9区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
84	－	SR01	9区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
85	－	SR01	9区	「○」	土師器	杯／皿	底部外面
86	－	SR01	9区	「□」	土師器	杯／皿	内面
87	－	SR01	9区	「□□〔神寺ヵ〕」	土師器	杯／皿	底部外面
88	－	SR01	9区	「□〔寺ヵ〕」	須恵器	杯	底部外面
89	－	SR01	10区	「神ヵ」	土師器	不明	底部外面
90	－	SR01	10区	「□」	土師器	皿A	底部外面
91	－	SR01	10区	「□」	土師器	皿C	底部外面
92	－	SR01	10区　断19	（外）□□／（内）□	須恵器	不明	体部外面
93	－	SR01	10区	「神寺」	土師器	杯／皿	底部外面
94	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
95	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
96	－	SR01	10区	「□」／□／□」	須恵器	杯B	口縁外面・底部外面
97	－	SR01	10区	「□」	土師器	壺か	頸部外面
98	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
99	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
100	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
101	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
102	－	SR01	10区	「□」	土師器	杯／皿	底部外面

番号	報告番号	出　土　遺　構		釈　　文	種　類	器　種	墨書部位
103	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
104	－	SR01	10 区	「□」	土師器	不明	口縁外面
105	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
106	－	SR01	10 区	「□」	土師器	椀 A	底部外面
107	－	SR01	10 区	「□」	土師器	皿 A	底部外面
108	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
109	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
110	－	SR01	10 区	「□」	土師器	皿 A ?	底部外面
111	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
112	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
113	－	SR01	10 区	「□」	須恵器	杯 A	底部外面
114	－	SR01	10 区	「神寺ヵ」	土師器	杯 / 皿	底部外面
115	－	SR01	10 区	「□□」絵か ?	須恵器	杯 / 皿	底部外面
116	－	SR01	10 区	「□〔神ヵ〕」	土師器	杯 / 皿	底部外面
117	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
118	－	SR01	10 区　断 19	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
119	－	SR01	10 区　断 19	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
120	－	SR01	10 区　断 19	「□」	土師器	杯 / 皿	底部内面
121	－	SR01	10 区　断 19	「□」	須恵器	蓋	外面
122	－	SR01	10 区　断 19	「雄ヵ」	土師器	杯 / 皿	底部外面
123	－	SR01	10 区	「□」	土師器	皿 A	底部内面
124	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
125	－	SR01	10 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
126	－	SR01	10 区	墨痕	土師器	杯 / 皿	底部外面
127	－	SR01	10 区　北半	「□」	須恵器	不明	外面
128	－	SR01	10 区　北半	「□」	須恵器	不明	外面
129	－	SR01	10 区　北半	「□」	土師器	杯 C か	底部内面
130	－	SR01	10 区　北半	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
131	－	SR01	10 区	「□」	土師器	皿 A か杯 C	底部外面
132	－	SR01	10・11 区	「□」	須恵器	杯 A	底部外面
133	－	SR01	10・11 区	「□」	須恵器	不明	底部内面
134	－	SR01	10・11 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
135	－	SR01	10・11 区	「□」	土師器	不明	底部外面
136	－	SR01	10・11 区	「□」	製塩土器か		体部外面
137	－	SR01	10 区	「□」	土師器	鉢 B	体部外面
138	－	SR01	10・11 区	「□」	須恵器	蓋か	内面
139	－	SR01	11 区	「寺ヵ」	土師器	杯	底部外面
140	－	SR01	11 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
141	－	SR01	11 区	「□」	土師器	不明	底部外面
142	－	SR01	11 区	「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
143	－	SR01	11 区	「□」	須恵器	杯 B	底部外面
144	－	SR01	11 区	「□□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
145	－	SR01	11 区	墨痕	土師器	皿 A	口縁内外面
146	－	不明		「□」言ヵ	須恵器	不明	底部内面
147	－	SD2002		「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
148	－	SD2002		「□」	土師器	杯 / 皿	底部外面
149	－	SD2002		絵 ?	土師器	杯 / 皿	底部外面
150	－	SD2054		「神雄」	土師器	杯 / 皿	底部外面
151	－	SD2054		「□」	須恵器	不明	体部外面
152	－	SD2054		「寺」	須恵器	鉢ヵ	体部外面

付表17　軒瓦一覧表

	番号	報告番号	型式	出　土　遺　構	時　期
軒丸瓦	1	789	6012B	遺物包含層	第Ⅱ－２期
	2	－		SR01 上層（１区北）	
	3	－		SB03（SP2031 掘り形）	
	4	－		遺物包含層	
	5	790	6135C 系	SR01 上層（11 区）	
	6	－		SR01 上層（10 区）	
	7	791	6308C	遺物包含層	
	8	788	6311Aa	SR01 上層（７区）	第Ⅱ－１期
	9	792	6316Dc	SD2002 北部	第Ⅳ－１期
	10	－		SD2002 北部	
	11	－		SD2002 北部	
	12	－		SD2002 北部	
	13	－		SR01 上層（１区北）	
	14	－		SR01 上層３区・８区	
	15	－		SR01 上層（１区北）	
	16	－		SR01 上層（１区南）	
	17	－	薬師寺系	遺物包含層	奈良末以降
	18	793		SR01 上層（８区）	
	19	796	型式不明	堤 SX2053	不明
	20	795		SR01 上層（10 区）	
	21	794		SR01 上層（１区南）	
軒平瓦	22	797	6572A	SR01 上層（１区北）	第Ⅱ－２期
	23	－		SR01 上層（６区）	
	24	－		SD2002 北部	
	25	－		SR01 上層（３区）	
	26	－		SR01 上層（10 区）	
	27	－		SR01 上層（３区）	
	28	－		遺物包含層	
	29	－		SD2002 北部	
	30	－		１次８トレンチ	
	31	－	6572G	SR01 上層（７区）	
	32	－		SR01 上層（11 区）	
	33	－		SR01 上層（７区）	
	34	－		SD2002 南部	
	35	798		SR01 上層（10 区南岸）	
	36	－	6681F	SR01 上層（10 区）	
	37	799		SR01 上層（９区）	
	38	800	6768D	SR01 上層（７区）	第Ⅳ－１期
	39	－		SR01 上層（６区）	
	40	－		SR01 上層（７区）	
	41	801	型式不明	SR01 上層（７区）	不明
	42	802		SR01 上層（７区）	

時期は平城宮瓦編年による

付表18　緑釉・三彩陶器一覧表（１次調査分）

報告番号	器　形	遺　構・層　位	地　　区	備　　考
1205	杯蓋	SR01 肩部　暗灰色粘質土	10 トレンチ	１次 -101
1213	香炉口縁部	トレンチ東側　暗灰色粘砂質土	10 トレンチ	１次 -102
1207	壺頸部	暗灰色粘質土	7 トレンチ	１次 -103
1208	浄瓶	SE01 ①７層	5 トレンチ拡張部	１次 -104
1209	壺高台	SR01 灰緑色砂	10 トレンチ	１次 -105
1210	小壺	黒茶褐色有機物層	16 トレンチ	１次 -106
1211	小壺	SR01 下層　灰茶色腐植土	10 トレンチ	１次 -107
1212	香炉脚	SB01 ピット精査中	仮７トレンチ	１次 -108
1214	壺か香炉	SR01 灰緑色砂	10 トレンチ	１次 -110
1206	杯蓋	SR01 下層　灰茶褐色腐植土	10 トレンチ	１次 -111
1215	壺体部	トレンチ東側　暗灰色粘砂質土	10 トレンチ	１次 -112
－	小壺か		７トレンチ北東	
－	香炉か	SB01 ピット精査中	仮７トレンチ	
－	杯蓋	SR01 下層　灰茶色腐植土	10 トレンチ	
－	壺高台か	トレンチ東側　暗灰色粘砂質土	10 トレンチ	
－	杯蓋口縁部	SD04　灰色粘質砂	７トレンチ	
－	小破片	SD04　灰色粘質砂	７トレンチ	小破片１点
－	小破片	SD03 西部　溝底地山上	７トレンチ拡張部	小破片４点
－	鉢	SR01 崩落土内	10 トレンチ	

付表19　彩釉山水陶器一覧表（１次調査分）

報告番号	トレンチ	出　土　遺　構	種　　類	備　　考
1217	16 トレンチ	SR01　暗灰色粘砂シルト質	山水型	１次 -113
1218	10 トレンチ	SR01　崩落土内	水型	１次 -114
1219	10 トレンチ	東側　暗灰色粘砂質土	水型	１次 -115、SR01 と推定
1220	８トレンチ	SR01　北側断ち割り　灰色粗砂	山型	１次 -116
1221	10 トレンチ	灰黄色粘砂質土	山型	１次 -117、SR01 と推定
1222	16 トレンチ	SR01　黒茶褐色有機物層	山型	１次 -118
1223	７トレンチ	暗灰色粘砂質土	山型	１次 -119
－	７トレンチ	東端　暗灰茶色粘質土	裏面	布目あり、SD2002 と推定
－	８トレンチ	SR01　南肩部灰色粘質土断割	裏面	布目あり
－	７トレンチ	遺物包含層	不明	

付表20　墨書土器一覧表（１次調査分）

報告番号	トレンチ	遺構	出　土　層　位	釈　　文	種　類	器　種	墨書部位
(1091)	10 トレンチ	SR01	崩落土中	寺	土師器	壺Ｂ	底部外面
(1103)	10 トレンチ	東側	暗灰色粘砂質土	二□〔上ヵ〕	須恵器	蓋	天井外面
(1130)	16 トレンチ	SR01	中央部、灰色粘質土と砂のラミナ	□ 支ヵ	土師器	皿Ａ	底部外面
(1138)	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	神	土師器	杯Ａ	底部外面
(1142)	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	神	土師器	皿Ａ	底部外面
(1143)	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	墨痕	土師器	皿Ａ	底部外面
(1152)	16 トレンチ	SR01	暗茶灰色有機物層	墨痕	土師器	皿Ｃ	底部内面
(1193)	16 トレンチ	SR01	南岸部 13 層	□□ヵ	須恵器	杯Ｂ	底部外面
(1195)	16 トレンチ	SR01	黒茶灰色シルト（有機物含む）	□	須恵器	皿Ｃ	底部内面
(1197)	16 トレンチ	SR01	南岸部 13 層	神	須恵器	鉢Ａ	体部外面
1224	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物含む）	神ヵ	土師器	皿Ａ	口縁内面
1225	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト	神	土師器	皿	底部外面
1226	10 トレンチ	SR01	緑灰色粘質土	神□〔寺ヵ〕	土師器	皿	底部外面
1227	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	神ヵ□	土師器	皿か	底部外面
1228	10 トレンチ	SR01	灰緑色砂質土	神	土師器	杯／皿	底部外面
1229	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	神□	土師器	杯／皿	底部外面

報告番号	トレンチ	遺構	出土層位	釈文	種類	器種	墨書部位
1230	16 トレンチ	SR01	暗茶灰色有機物層	「神」	土師器	杯Aか	底部外面
1231	16 トレンチ	SR01	暗灰色粘質砂（有機物）	「□〔神ヵ〕」	土師器	杯か皿	底部外面
1232	16 トレンチ	SR01	暗茶灰色有機物層	「□」	土師器	皿	底部外面
1233	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物）	「□□」	土師器	皿か	底部外面
1234	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物）	「神□」	土師器	杯C	底部外面
1235	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物）	「神寺 □」	土師器	杯／皿	底部外面
1236	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「神寺」	土師器	皿	底部外面
1237	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□〔神ヵ〕寺」	土師器	皿か杯	底部外面
1238	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色シルト	「神寺」	土師器	杯／皿	底部外面
1239	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物含む）	「神□」	土師器	杯／皿	底部外面
1240	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	「神雄寺」	土師器	皿か	底部外面
1241	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルトほか	「神雄寺」	土師器	杯／皿	底部外面
1242	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「雄ヵ」	土師器	皿Cか	底部外面
1243	16 トレンチ	SR01		「神雄ヵ」	土師器	杯／皿	底部外面
1244	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色シルト（有機物含む）	「□□山寺」	土師器	杯／皿	底部外面
1245	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「寺」	土師器	杯／皿	底部外面
1246	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	「寺」	土師器	杯／皿	底部外面
1247	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト（有機物）	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
1248	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
1249	16 トレンチ	SR01	灰色粘質砂（有機物）シルト質	「□」	土師器	皿	底部外面
1250	16 トレンチ	SR01	暗灰色粘質砂（有機物）	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
1251	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
1252	16 トレンチ	SR01	南岸部 13 層	「黄ヵ葉」	土師器	杯／皿	底部外面
1253	16 トレンチ	SR01	暗灰色粘質砂（有機物）	「□」	土師器	皿A	底部外面
1254	16 トレンチ	SR01	暗灰色ｼﾙﾄ (有機物）	「□」	須恵器	蓋つまみ	天井内面
1255	16 トレンチ	SR01	有機物層	「大」	須恵器	蓋	天井内面
1256	16 トレンチ	SR01	南岸部 13 層	「神雄寺ヵ」	須恵器	杯B	底部外面
1257 (1192)	16 トレンチ	SR01	灰色粘質砂（有機物）シルト質	「神ヵ尾寺」	須恵器	杯B	底部外面
1258	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物シルト	「太」	須恵器	皿Aか杯	底部外面
1259	16 トレンチ	SR01	南岸部 13 層	「神□寺」	須恵器	鉢か	底部内面
−	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□□〔寺ヵ〕」	土師器	杯／皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	皿か杯A	口縁内面
−	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト	「□」	土師器	皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	暗灰色シルト	「□」	土師器	杯／皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	黒茶褐色有機物層	「□」	土師器	皿	底部外面
−	16 トレンチ	SR01	灰色粘質砂（有機物）シルト質	「□」	土師器	椀Aか	口縁内面

京都府遺跡調査報告集 第138冊

平成22年３月31日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141